鳥栖北部丘陵新都市関係
文化財調査報告書（1）

黒谷・水呑古墳群

1993年3月

佐賀県教育委員会

正　誤　表

頁	行	誤	正
20	20	後述す□□□区	後述するB地区
20	21	と、□□□つの	と、この２つの
73	図63	遺物番号欠如	16（平瓶）・17（長頸壺）
109	3	周溝が	周溝を
110	3	８基	６基
113	16	食前	食膳
113	27	広い□	広い邸
118	16	込めらる	込められる
120	18	装飾古墳とは、	装飾古墳と、
120	19	ないとは	ないのは

佐賀県文化財調査報告書第１１８集
鳥栖北部丘陵新都市関係文化財調査報告書（１）

黒谷（くろたに）・水呑（みずのみ）古墳群

黒谷（くろたに）古墳群

水呑（みずのみ）古墳群

浦田（うらた）遺跡

１９９３年3月
佐賀県教育委員会

黒谷・水呑古墳群全景および浦田遺跡調査地点（南上空から）

黒谷２号墳玄室奥壁の同心円文様

序

本書は、地域振興整備公団の委託により、佐賀県教育委員会、鳥栖市教育委員会および基山町教育委員会が協力して平成３年度に実施した、鳥栖北部丘陵新都市開発整備事業基山工区内に係る埋蔵文化財発掘調査の本報告であります。

調査の結果、基山町において最も早い時期の群集墳である黒谷古墳群や、隣接する水呑古墳群のほぼ全容を明らかにすることができました。とりわけ黒谷２号墳の石室内に描かれた同心円文様は、県内23例目の装飾古墳として注目を集めました。

発掘調査の記録としては十分満足のゆくものではありませんが、その内容を通して郷土の埋蔵文化財に対する一層のご理解をいただき、また今後の学術文化の向上に幾分とも寄与するものであれば幸いと思います。

最後に、鳥栖北部丘陵新都市開発整備事業と文化財保護との調整にご理解とご協力をいただきました地域振興整備公団鳥栖都市開発事務所、県土木部開発局新都市開発課、北部丘陵新都市開発事務所、基山町企画課の担当各位、調査に関し指導・助言をいただきました多くの研究者の方々、ならびに調査作業に従事していただきました地元の方々のご協力により、ここに「鳥栖北部丘陵新都市関係文化財調査報告書」の第１集として、本書を発刊するはこびとなりましたことを、心から厚く御礼申し上げます。

平成５年３月30日

佐賀県教育委員会

教育長　堤　清行

例　　言

1．本書は鳥栖北部丘陵新都市整備事業の基山工区造成に伴い、平成３年度および一部平成４年度にかけて実施した、三養基郡基山町に所在する黒谷古墳群・水呑古墳群並びに浦田遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は地域振興整備公団の委託を受け、佐賀県教育委員会が鳥栖市教育委員会および基山町教育委員会の協力を受けて実施した。

3．発掘調査にあたっては、地域振興整備公団鳥栖都市開発事務所、佐賀県土木部開発局新都市開発課、北部丘陵新都市開発事務所、基山町教育委員会、基山町企画課、並びに地元の方々の協力を得た。

4．発掘調査作業は佐賀県教育委員会が主体となり、鳥栖市教育委員会と基山町教育委員会の調査員が実施した。

・遺構実測および地形測量は、その大部分を㈲埋蔵文化財サポートシステムに委託し、一部について久山高史・飛松広美・市川浩文・原田範昭・花田京子・藤田暁子が行った。

・遺構写真は久山・飛松が撮影した。

・空中写真は壇　睦夫（㈲空中写真企画）が撮影した。

5．出土遺物の整理を含む報告書作成作業は鳥栖北部丘陵文化財調査事務所で行った。

・遺物整理は花田・藤田・佐藤ヨシエ・高田加世子・佐田谷昌子・渋田信子・高嶋カオル・井上トヨ子が行った。

・遺物実測は久山・市川・原田・飯田考俊・槇林啓介・緒方恭子・松野富子・横枕栄子・中島佐知子が行った。

・図面トレースは光石逸子・末吉由紀子・吉田雅子・天本早佳・緒方・久山が行った。

・遺物写真は久山が撮影した。

・写真現像焼付は江島紀子・黒木優子・古賀栄子が行った。

7．本書の執筆と編集は久山が担当し、飛松が協力した。

6．発掘調査および報告書作成に際して、下記の方々から指導・助言をいただいた。

小松　壌・蒲原宏行・前田達男・小田富士雄・石山　勲・牛嶋　茂・高橋　学・外山秀一

本　文　目　次

第１章　調査の概要
Ⅰ．調査の経過…… 1
Ⅱ．調査の組織…… 2
第２章　地理的・歴史的環境
Ⅰ．地理的環境…… 3
Ⅱ．歴史的環境…… 4
第３章　黒谷古墳群の調査
Ⅰ．遺跡の概要…… 8
Ⅱ．Ａ地区の調査……10
　１．１号墳……10
　２．２号墳……14
　３．３号墳……20
　４．４号墳……22
　５．５号墳……34
　６．６号墳……45
　７．７号墳……49
　８．８号墳……54
　９．その他の遺構……55
Ⅲ．Ｂ地区の調査……56
　１．９号墳……57
第４章　水呑古墳群の調査
Ⅰ．遺跡の概要……60
Ⅱ．Ａ地区の調査……63
　１．１号墳……63
　２．全壊古墳……65
Ⅲ．Ｂ地区の調査……65
　１．２号墳……65
Ⅳ．Ｃ地区の調査……69
　１．３号墳……69
　２．４号墳……74
　３．５号墳……84

4．全壊古墳……90
Ⅴ．D地区の調査……90
1．6号墳……91
2．7号墳……96
3．8号墳……98
4．9号墳……100
第5章　浦田遺跡の調査
Ⅰ．遺跡の概要……102
Ⅱ．1区の調査……102
Ⅲ．2区の調査……103
Ⅳ．出土遺物……104
第6章　まとめ
Ⅰ．墳丘と外部施設
1．墳丘・周溝……108
2．地山整形……109
3．墳丘列石……109
Ⅱ．埋葬施設
1．石室形態……110
2．閉塞施設……111
3．追葬と“床上げ”……111
Ⅲ．副葬品
1．土器……112
2．金属製品・装身具……113
3．ヘラ記号について……114
Ⅳ．黒谷2号墳の同心円文様について……118
Ⅴ．黒谷・水呑古墳群の形成……122
＜付表＞出土遺物一覧表

挿　図　目　次

図１　調査区位置図(1/2,000) ……折り込み
図２　周辺地形図(1/100,000) ……折り込み
図３　周辺遺跡分布図(1/25,000)…… 8
黒谷古墳群
図４　Ａ地区調査後地形図(1/400) ……折り込み
図５　１号墳墳丘(1/200) および石室(1/60)……折り込み
図６　１号墳出土土器１(1/4) ……12
図７　１号墳出土土器２(1/4) ……13
図８　１号墳出土金属製品・装身具(1/2) ……14
図９　２号墳墳丘(1/200) ……15
図10　２号墳石室閉塞施設残存状況および天井石(1/60)……16
図11　２号墳石室(1/60)……17
図12　２号墳出土土器(1/4) および金属製品(1/2) ……19
図13　３号墳石室堀方および墓道残存状況(1/100) ……21
図14　３号墳出土土器(1/4) ……22
図15　４号墳墳丘(1/200) ……24
図16　４号墳墳丘土層図(1/100) ……25
図17　４号墳石室(1/60)……26
図18　４号墳墓道遺物出土状況(1/40)……27
図19　４号墳出土土器１(1/4) ……29
図20　４号墳出土土器２(1/4) ……30
図21　４号墳出土土器３(1/4) および装身具・金属製品１(1/2) ……31
図22　４号墳出土金属製品２(1/2) ……32
図23　４号墳出土金属製品３(1/2) ……33
図24　５号墳墳丘(1/200) ……34
図25　５号墳墳丘（封土除去後）(1/200) ……35
図26　５号墳墳丘土層図(1/80)……折り込み
図27　５号墳石室・石室閉塞施設残存状況および石室堀方・天井石(1/60)……折り込み
図28　５号墳墓道遺物出土状況(1/40)……37
図29　５号墳出土土器１(1/4) ……39
図30　５号墳出土土器２(1/4) ……40

図31　5号墳出土土器3（1/4）……41
図32　5号墳出土土器4（1/4）……42
図33　5号墳出土土器5（1/4,325•326は1/6）……43
図34　5号墳出土土器6（1/4）および装身具・金属製品1（1/2）……44
図35　6号墳墳丘（1/200）……45
図36　6号墳石室（1/60）……46
図37　6号墳石室閉塞施設残存状況および墓道遺物出土状況（1/60）……47
図38　6号墳出土土器（1/4）および金属製品（1/2）……48
図39　7号墳墳丘（1/200）……50
図40　7号墳墳丘土層図（1/80）……折り込み
図41　7号墳石室・石室閉塞施設残存状況・墓道遺物出土状況
　　および石室堀方・天井石（1/60）……折り込み
図42　7号墳出土土器1（1/4）……52
図43　7号墳出土土器2（1/4）および金属製品（1/2）……53
図44　8号墳石室（1/40）……55
図45　A地区南裾部平坦面遺構配置図（1/200）……55
図46　A地区南裾部出土土器（1/4）……56
図47　B地区調査後地形図（1/250）……58
図48　9号墳石室（1/60）……59
水呑古墳群
図49　A地区調査後地形図（1/200）……62
図50　1号墳出土土器（1/4）……63
図51　1号墳石室（1/60）……64
図52　B地区調査後地形図（1/200）……66
図53　2号墳石室（1/60）……67
図54　2号墳石室閉塞施設残存状況（1/60）……68
図55　2号墳玄室遺物出土状況（1/30）……68
図56　2号墳出土土器（1/4）……68
図57　C地区調査後地形図（1/400）……折り込み
図58　3号墳墳丘（1/200）および墳丘土層図（1/80）……折り込み
図59　3号墳石室石室掘方・天井石および墳丘外護列石（1/60）……71
図60　3号墳石室（1/60）……72
図61　3号墳石室閉塞施設残存状況（1/60）……73

図62　3号墳玄室遺物出土状況(1/20)……73
図63　3号墳出土土器(1/4)……73
図64　4号墳墳丘(1/200)……74
図65　4号墳墳丘土層図(1/80)……76
図66　4号墳石室閉塞施設残存状況・墓道、擬前室部遺物出土状況
　　および天井石(1/60)……78
図67　4号墳石室(1/60)……79
図68　4号墳出土土器1(1/4)……80
図69　4号墳出土土器2(1/4)……81
図70　4号墳出土土器3(1/4,87•88は1/6)……82
図71　4号墳出土土器4(1/4)および金属製品・装身具(1/2)……83
図72　5号墳墳丘(1/200)……84
図73　5号墳墳丘土層図(1/80)……85
図74　5号墳石室……86
図75　5号墳石室閉塞施設残存状況・墓道遺物出土状況および石室掘方・天井石(1/60)…87
図76　5号墳出土土器(1/4)および金属製品(1/2)……89
図77　C地区出土押型文土器(1/3)……90
図78　D地区調査後地形図(1/400)……折り込み
図79　6号墳石室・石室閉塞施設残存状況および石室堀方・天井石(1/60)……折り込み
図80　6号墳墳丘および墳丘外護列石(1/100)……92
図81　6号墳墳丘土層図(1/80)……93
図82　6号墳出土土器(1/4)および装身具・金属製品(1/2)……95
図83　7．8．9号墳位置図(1/200)……96
図84　7号墳石室(1/40)……97
図85　8号墳石室(1/40)……99
図86　9号墳石室(1/40)および出土土器(1/4)……101

浦田遺跡

図87　1区調査位置(1/1,000)および基本土層図(1/50)……折り込み
図88　2区調査後地形図(1/600)および土層図(1/150•部分1/40)……折り込み
図89　2区SK01土坑(1/20)および出土遺物(1/4)……103
図90　1区出土土器(1/4)……105
図91　1区出土瓦(1/4)……106
図92　2区出土土器(1/4)および石器(2/3)……107

まとめ

図93　各古墳石室平面図(1/100) ……折り込み
図94　各古墳の築造時期と追葬期間……折り込み
図95　追葬と“床上げ”状況模式図……折り込み
図96　ヘラ記号１(1/4)……115
図97　ヘラ記号２(1/4)……116
図98　ヘラ記号３(1/4)……117
図99　黒谷２号墳同心円文様拓影(1/5) …… 118

表　目　次

表１　黒谷古墳群調査古墳一覧表…… 9
表２　水呑古墳群調査古墳一覧表……61
表３　佐賀県内の装飾古墳一覧表…… 121
表４　叩き窪めの手法による同心円文様をもつ装飾古墳一覧表…… 121

図　版　目　次

図版１　調査地区周辺航空写真（上が北）、調査地区遠景（南から）
黒谷古墳群
図版２　古墳群全景（南上空から）・Ａ地区（南上空から）
図版３　１号墳全景（上空から・南から）
図版４　２号墳全景（斜め上空より）・羨門閉塞状況・石室前面（閉塞施設除去後）
図版５　２号墳擬前室部床上面・擬前室部床下面・玄室床上面・玄室床下面
羨門より奥を見る・玄室奥壁
図版６．７　２号墳石室内部展開：天井石・左側壁（上、下部）・奥壁（上、下部）・前壁
右側壁（上、下部）
図版８　３号墳全景（上空から）・検出状況（北から・南から）
図版９　４号墳全景（上空から・南上空から・北東から）・墓道遺物出土状況（南から）
図版10．11　４号墳擬前室部遺物出土状況（玄室から）・擬前室部（玄室から）・前門部
玄室床面検出状況・玄室床面・玄門部
石室内部展開：玄室左側壁・玄室奥壁・玄室前壁・玄室右側壁

図版12　5号墳全景（上空から・南上空から）・墓道遺物出土状況（南から）
墳丘盛土除去後全景（上空から・南上空から・東上空から）

図版13　5号墳前門部閉塞状況・前門部閉塞板石・玄門部閉塞板石残存状況・前門部
前室遺物出土状況（玄室から）・玄室床下面

図版14．15　5号墳石室内部展開：天井石・左側壁（上、下段）・奥壁（上、下段）
前壁（上、下段）・右側壁（上、下段）

図版16　6号墳全景（南から）・石室（上空から）・墓道遺物出土状況（南から）
石室（西から）・石室閉塞状況（玄室から）

図版17　7号墳全景（上空から・南上空から）・石室閉塞状況（南から・玄室から）
墓道遺物出土状況（南から）

図版18　7号墳閉塞板石据立状況・閉塞施設除去後石室全面・擬前室部床上面
擬前室部床下面・玄室床上面残存状況・玄室床下面・玄室奥壁

図版19　8号墳小石室（南から）
A地区南裾平坦部遺構検出状況・遺構集中部・ＳＫ０１廃棄土坑
B地区全景（南から）・9号墳全景（南上空から）・石室（西上空から・南から）

図版20　1・2号墳出土遺物

図版21　3・4号墳出土遺物

図版22　4号墳出土遺物

図版23　5号墳出土遺物

図版24　5号墳出土遺物

図版25　6・7号墳出土遺物

水呑古墳群・浦田遺跡

図版26　全景（南上空から・B地区上空より南方向を眺める）

図版27　A地区全景（北から・上空から）
1号墳玄室床面残存状況（南から）・石室（南から）・玄室右側壁
玄室床地山掘り込み面（東から）

図版28　B地区2号墳石室（南から・閉塞施設除去後）・玄室（西から）
供献土器出土状況

図版29　C地区全景（東南上空から）・古墳立地状況（東南上空から）
3号墳全景（上空から・東南上空から）
石室前面（東南から・閉塞施設および墳丘盛土除去後）

図版30．31　3号墳石室内部展開：天井石・左側壁（上、下段）・奥壁（上、下段）
右側壁（上、下段）・奥壁より石室入り口をみる

図版32　3号墳石室閉塞状況・石室入り口より奥を見る・玄室床面・供献土器出土状況
墳丘盛土状況（石室左側）・墳丘右側列石

図版33　4号墳全景（上空から）・墳丘周溝（南西から）・石室閉塞状況
閉塞施設除去後石室前面・墳丘盛土状況（石室左側・後側）

図版34　4号墳石室内部展開：石室床面検出状況・玄室床面・左側壁（上、下段）
奥壁（上、下段）・前壁（上、下段）・右側壁（上、下段）

図版36　5号墳（南東上空から・上空から）・墳丘周溝（南西から）

図版37　5号墳墓道検出状況・石室前面（閉塞施設除去後）・前室床面・玄室床面
墳丘盛土状況（東側・右側）
全壊古墳痕跡（北東から）

図版38．39　5号墳石室内部展開：左側壁（上、下段）・奥壁（上、下段）・前室部右側壁
奥壁より石室入り口をみる・右側壁（上、下段）

図版40　D地区全景（南西上空から・上空から・南上空から）
6号墳調査前の状況・石室前面（閉塞施設除去前・後）

図版41　6号墳墳丘および列石（南東から・右側）・墳丘盛土状況（左側・後側）
玄室床面検出状況（奥壁から）・玄門より前室をみる・玄室土器出土状況

図版42．43　6号墳石室内部展開：天井石・左側壁（上、下段）・奥壁（上、下段）
前壁（上、下段）・右側壁（上、下段）

図版44　D地区小石室墳立地状況（南から）
7号墳石室（上空から・南から）・8号墳石室（上空から・南から）

図版45　9号墳石室（上空から・南から）・石室遺物出土状況
浦田遺跡1区全景（南から）
2区全景（南から・上部を東から）・ＳＫ０１土坑（西から）

図版46　1・2・3号墳出土遺物

図版47　3・4号墳出土遺物

図版48　4号墳出土遺物

図版49　4・5号墳出土遺物

図版50　6・9号墳、浦田遺跡2区SK01土坑出土遺物

図版51．52　叩き窪めの手法による同心円文様類例：
楯古墳（福岡県浮羽町）・倉永古墳（福岡県大牟田市）・穴観音古墳（大分県日田市）

報告書の記述について

1．遺跡の略号は次のとおりである。

・黒谷古墳群　ＫＴＮ　・水呑古墳群　ＭＺＮ　・浦田遺跡　ＳＵＴ

2．遺構図に用いた方位は、すべて真北（座標北）である。

3．石室の主軸方位を求めるにあたって、分以下の単位については、測定位置の微妙な差によって生ずる誤差の許容範囲と理解した上で、省略している。

4．石室の「床面標高」は、初葬当時の敷石面を復元した上でのおおよその数値である。

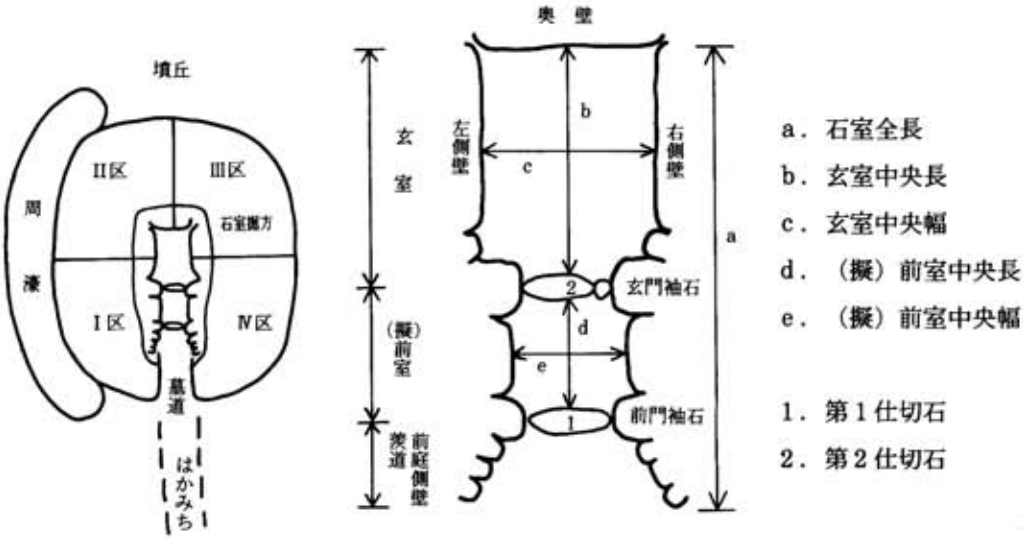
5．古墳の各部名称と計測方法については次のとおりである。

・「石室主軸」は玄室床面部の中軸値から求める。

・「石室全長」は玄室奥壁床面部から前庭側壁の最も手前に張り出した部分までの長さ。

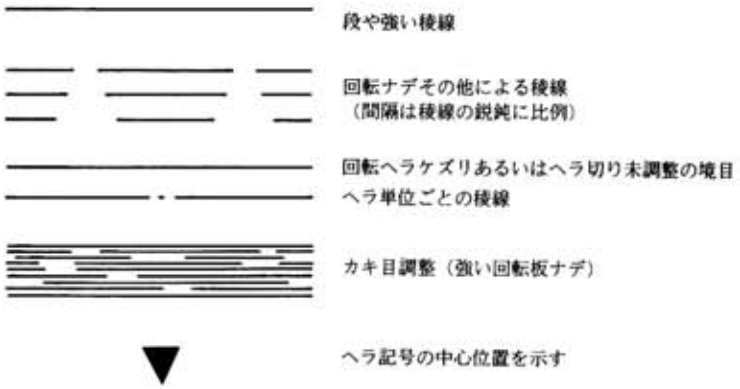
・「中央長」「中央幅」は、ともに復元した初葬時の床面で計測するが、仕切石は含めず、仕切石端部からの長さとする。

・「羨道」と「前庭側壁」の区別は天井石架構の有無で区別する。



6．本報告書中の遺物図番号は、各遺跡ごとに遺物の種別に関係なく一連番号とし、また写真図版中の遺物の番号をこれに共通させている。

7．出土土器実測図（主として須恵器）の調整表記については次のとおりである。



8．出土土器の写真図版は須恵器大甕以外はすべてほぼ縮尺1／3大である。

9．出土遺物のうち鉄鏃の分類については、後藤守一の分類をもとにした「都谷遺跡」（小松壌編　九州横断自動車道関係文化財調査報告書14　佐賀県教育委員会　1991）のそれに拠っている。

10．本報告書における須恵器の時期については、基本的に７世紀末までは田辺昭三による大阪府陶邑古窯址群の、それ以降は一部について奈良国立文化財研究所による平城京出土土器の編年に拠っている。これは、最近九州においても須恵器生産の地域性が示されており、九州の古墳出土須恵器の時期をそのまま畿内編年から求めることに疑問視する意見も多いが、「地方窯」による「地域差」を考える必要があることは当然としても、蓋坏に代表される主要な須恵器の形態変遷はあくまでも陶邑におけるそれに「連動」あるいは「追従」したものであったことは疑いようのない事実であり、実年代の比定においては確かに「ズレ」の問題を残すものの、追葬期間を含めた相対年代幅としての古墳の時期を求めるについてはむしろ須恵器生産の「元締め」であった陶邑の編年に拠ることがより適当と考えるからである。なお、本文中には小田富士雄の一連の業績による北部九州須恵器の編年による当該時期も（　）内に併記している。

第１章　調査の概要

Ⅰ．調査の経過

鳥栖北部丘陵新都市整備事業が平成３年度より本格的に始動したのに伴い、予定されていた事前の埋蔵文化財調査も同年度から具体化されることになった。このうち開発面積約36haにおよぶ基山工区の事業範囲内については、昭和60年度に基山町教育委員会が実施した遺跡詳細分布調査、および平成２年度の県文化財課による遺跡確認調査の結果、丘陵部には後期古墳が点在し、水田部には遺物が散布していることが確認されていた。このため、事業主体である地域振興整備公団との協議を重ねた結果、浦田遺跡１～２区、黒谷古墳群Ａ～Ｂ地区、水呑古墳群Ａ～Ｄ地区の計８地点、約20,000m²の本調査地区を設定し、地域振興整備公団の委託事業として、鳥栖市と基山町の各教育委員会の協力のもとに佐賀県教育委員会が調査主体となり、造成工事に先行して記録保存を目的とした緊急発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は平成３年６月26日、浦田遺跡１区2,300m²の重機による表土除去作業から始まった（９月３日調査終了）。７月３日からは浦田遺跡２区 2,200m²（９月９日調査終了）と水呑古墳群Ａ地区500m²（10月９日調査終了）にほぼ同時に着手し、このあと10月３日から水呑古墳群Ｂ地区400m²（11月20日調査終了）、続いて11月１日から黒谷古墳群Ａ地区8,900m²（平成４年３月31日調査終了）、さらに平成４年１月30日より水呑古墳群Ｃ地区4,300m²（５月19日調査終了）、３月９日から黒谷古墳群Ｂ地区1,300m²（３月31日調査終了）、そして最後に着手した水呑古墳群Ｄ地区3,500m²は５月11日より調査開始というように、各地区を並行して、時には断続的に調査を実施した。最終的に調査がすべて終了したのは平成４年８月10日である。実質調査総面積は22,100m²となった。

黒谷、水呑両古墳群はいずれもすでに数基の石室が露出、開口しており、以前より周知の遺跡として認識されていたが、実際に古墳群全体の樹木を伐採し、表土を除去してみると、その規模、数、遺存状態は、確認調査の結果にもとずく当初の予想をはるかに越えるものであった。さらに事業地内の用地問題等が完全に解決をみないままに調査に着手したために、各調査地区への計画的、スムーズな移行ができないまま、前述のような断続的な調査となってしまい、こうしたことから調査日程は当初予定していた期間の大幅な延長を余儀なくされた。反面、浦田遺跡については、ごく一部を除いて、遺跡全体が流れ込みによる堆積、ないしは遺物包含層にすぎないことが判明したために、実質的な調査期間を比較的早く切り上げることができた。

出土遺物の整理作業および調査報告書の作成は、引き続き平成４年度に実施した。

II．調査の組織

鳥栖北部丘陵新都市整備事業に伴う文化財調査は、鳥栖市と基山町にまたがる大規模でかつ10数年に及ぶ長期の作業となることから、佐賀県教育委員会、鳥栖市教育委員会、基山町教育委員会の３者による合同調査体制を組むことで協議が進められ、佐賀県３名、鳥栖市３名、基山町１名の計７名の人員構成で、調整担当に調査員１名をおき、各班調査員２名からなる３班の体制で調査にあたることになった。平成３・４年度の調査組織は以下の通りである。

調査主体	佐賀県教育委員会		
調査協力	鳥栖市教育委員会・基山町教育委員会		
総　括	堤　清行	佐賀県教育長	
	高島忠平	佐賀県教育委員会文化財課長	
	中牟田賢治	〃	文化財課長補佐
	西村貞幸	〃	文化財課長補佐（平成３年度）
	瀬戸明廣	〃	文化財課長補佐（平成４年度）
庶　務	永松和久	〃	文化課庶務企画係長
	濱野清子	〃	文化課庶務企画係主査
	小林宣洋	〃	文化課庶務企画係主査
	松瀬　弘	〃	文化課庶務企画係主事（平成３年度）
	池田　学	〃	文化課庶務企画係主事（平成４年度）
	武次多美子	〃	文化課庶務企画係嘱託（平成３年度）
	岸川向祥子	〃	文化課庶務企画係嘱託（平成４年度）
調　査（鳥栖北部丘陵文化財調査事務所）			
調査主任	高瀬哲郎	〃	文化財課調査係長
調査員	樋口秀信	〃	文化財課調査係文化財保護主事
	徳永貞紹	〃	文化財課調査係文化財保護主事
	渋谷　格	〃	文化財課調査係文化財保護主事（平成４年度）
	森本陽二郎	〃	文化財課調査係嘱託（平成３年度）
	鹿田昌宏	鳥栖市教育委員会社会教育課文化財係事務吏員	
	湯浅満暢	〃	社会教育課文化財係事務吏員
	久山高史	〃	社会教育課文化財係事務吏員（基山工区調査担当）
	飛松広美	基山町教育委員会教育課文化財係文化財保護主事（基山工区調査担当）	

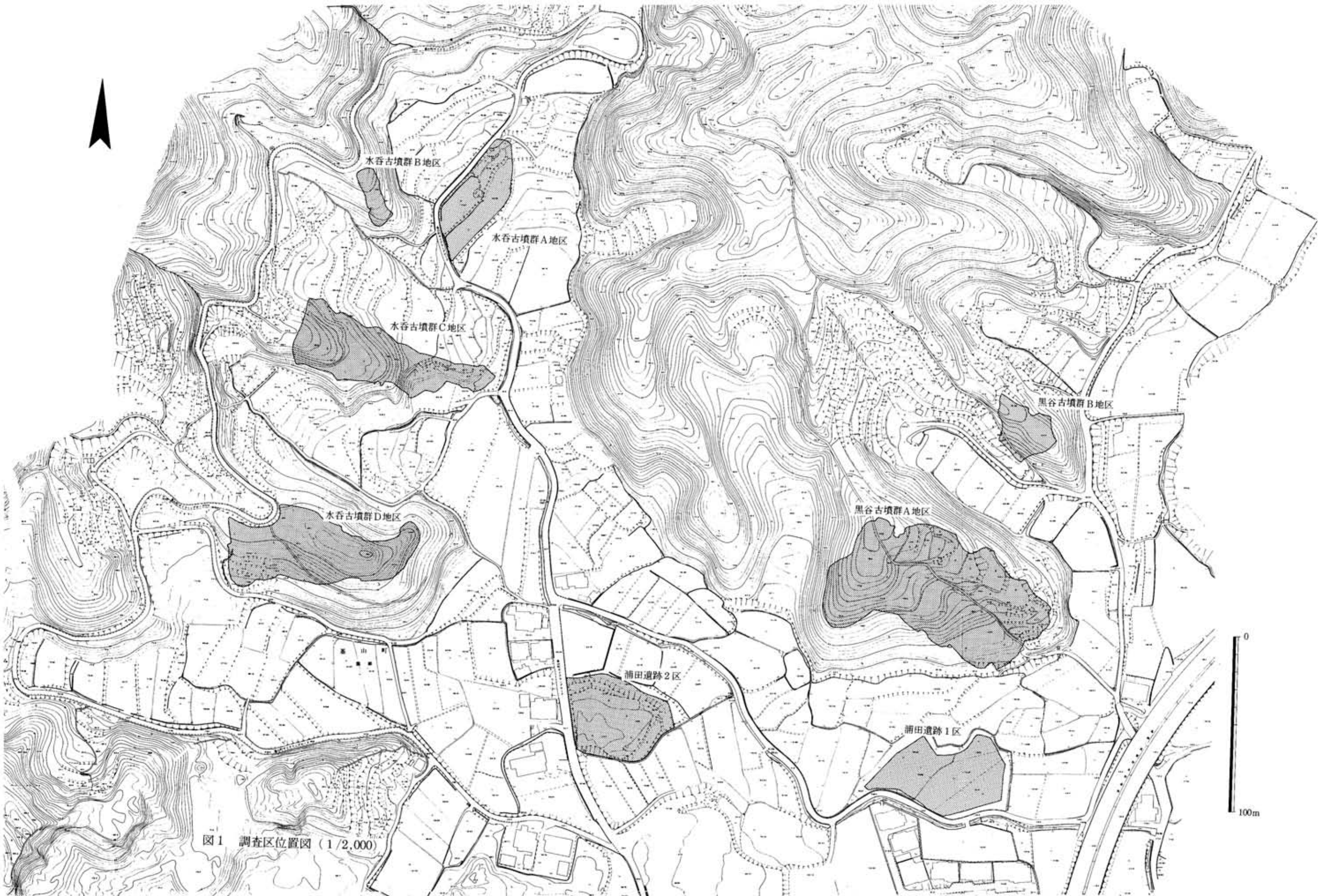


図1　調査区位置図（1/2,000）

図２　周辺地形図（１/100,000）

0　5 km

第２章　地理的・歴史的環境

Ⅰ．地理的環境

黒谷・水呑古墳群および浦田遺跡の所在する佐賀県三養基郡基山町は、県内最東端に位置するが、この地域は筑後川流域に展開する広義の筑紫平野の東北端であるとともに、狭義の筑後平野の西北端の一角をも占める位置にある。西部は筑紫山地に限られ、東北部は福岡県筑紫野市一帯の地峡を経て福岡平野へ通じる。また福岡県小郡市と接する東部は、甘木・朝倉方面へと広がる平野に連続し、南部は鳥栖市を介して、筑後川、あるいは佐賀平野に通じる。

町域全体の約３分の２が丘陵地帯で占められる。地勢は脊振山塊の契山（412.0m）・基山（404.5m）のいわゆる基肄連峰、ならびに権現山（626.7m）を主峰として南東方向に伸びてきた支嶺群が、洪積段丘を経て扇状地を形成しつつ、ついで狭少な平坦地となって秋光川に至る。これらの支嶺群は、南東方向に延びる支嶺と北東方向に延びる支嶺とに大きく分けられる。一方の南東方向に延びる支脈は、杓子ヶ峰（247.0m）を経て、金丸地区一帯の高位段丘に通じ、長の原付近で先端となる。この支脈は鳥栖市と境をなす。もう一方の福岡県筑紫野市と境をなす北東方向に延びる支嶺は、契山から基山を経て、筑紫野市原田付近まで延びる高位段丘となる。この２つの支嶺間は、舌状丘陵を数多く派生させ、また北より城戸谷・宮浦谷・園部谷の扇状地を形成し、筑紫平野へと広がるが、黒谷・水呑古墳群および浦田遺跡はこのうちの園部谷に南面した丘陵および小扇状地上に立地する。権現山・契山・基山とその支脈に源を発する数多くの小渓流は、それぞれ複合して山下川・秋光川・実松川・城戸川・関屋川を形成している。秋光川は実松川を合流し、城戸川と関屋川は合流して高原川となり、それぞれ宝満川へと流れ込み、筑後川へと至る。

古代以降、肥前国基肄郡に属したこの地域は、筑前国、筑後国との接点であり、大宰府から南下して基山の麓をめぐり肥前国府・筑後国府へと通じる官道（城の山道）が通る交通要衝の地であった。北部には大宰府の防衛ラインとして基肄城が設置され、軍団が置かれた時期もある。近世以降は長崎街道が通り、そして現在では町の中央付近を鳥栖筑紫野有料道路が南北に抜け、東側をＪＲ鹿児島本線と国道３号線、さらに九州縦貫自動車道が並行して通過している。

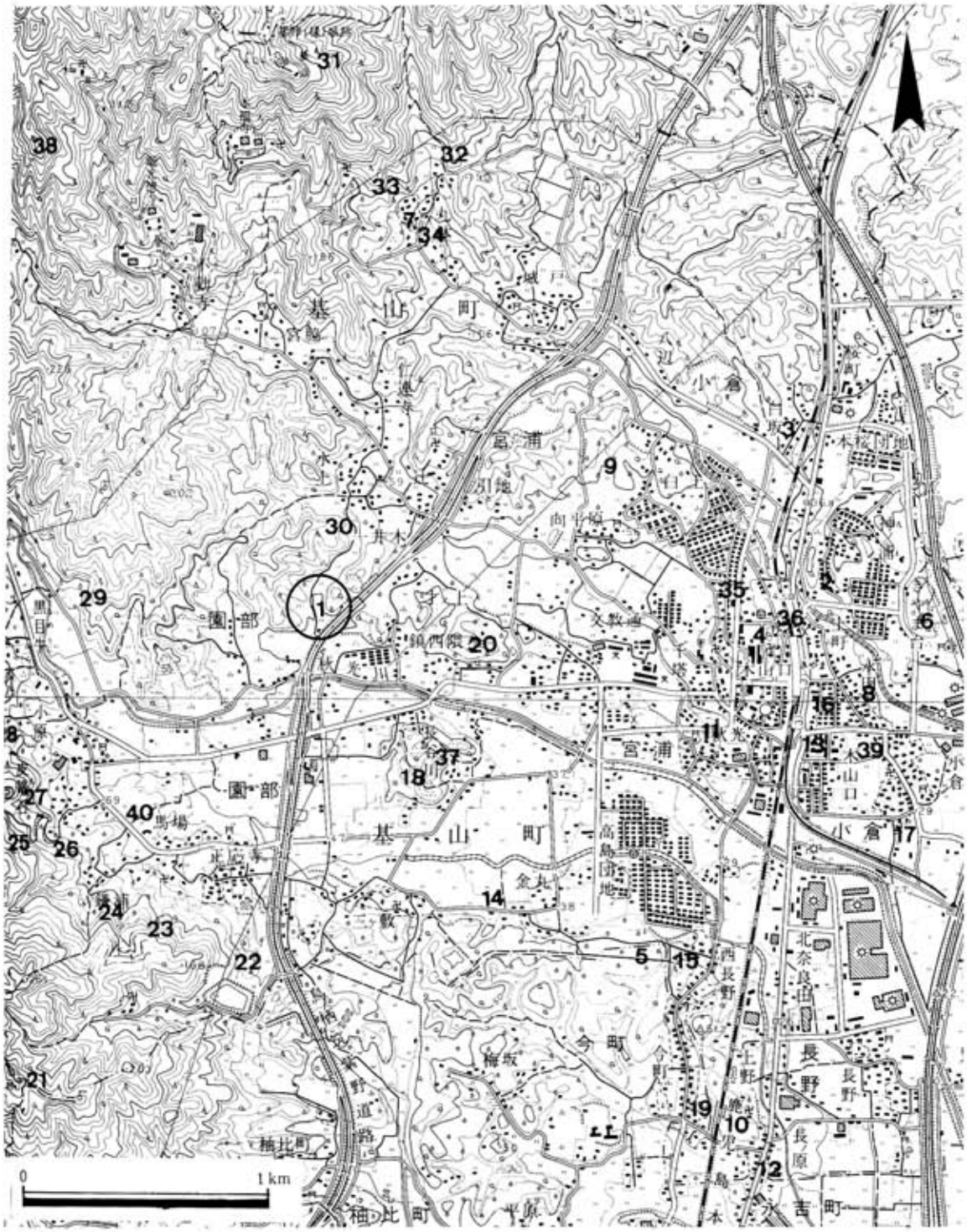
II．歴史的環境

ここでは原始・古代より近世に至る基山町域全体の歴史的環境を、主として現在までの埋蔵文化財調査の成果を踏まえた考古学的側面から、時代を追って概観したい。

基山町域の旧石器時代の状況は、隣接する鳥栖市や福岡県筑紫野市、小郡市におけるそれと同様、いくつかの丘陵上の遺跡から石器類が他時代の遺構・遺物包含層の混入として若干みられるものの、遺構や遺物包含層は確認されておらず、未だその実態が把握できていない。城ノ上遺跡[1]、白坂遺跡[2]、秋光遺跡[3]で黒曜石製ナイフ形石器、千塔山遺跡[4]で黒曜石やサヌカイト製のナイフ形石器、台形石器、細石刃、石核や剥片が出土しているほか、金丸遺跡[5]や伊勢山遺跡[6]で若干の後期旧石器時代に属する可能性がある石器類が採集されている。

縄文時代になると、大部分が遺物包含層ながら、少なからず遺跡を見い出せるようになる。この時代の遺跡はいずれも丘陵上に立地している。千塔山遺跡で早期の押型文土器、中期の阿高式土器、晩期の条痕文土器や石器類[4]が、伊勢山遺跡で押型文土器や晩期の夜臼式土器[6]などが出土している。また、金丸遺跡[5]、城ノ上遺跡[1]から石鏃、石匙などの石器類が出土し、白坂遺跡[2]や立花遺跡では、晩期を主体とした遺構、遺物が検出されている。このほか遺物散布地として丸林遺跡、天神山遺跡、玉虫遺跡、一庵山遺跡などが挙げられる。

弥生時代の遺跡の分布は、各支嶺から八つ手状に派生して伸びる洪積丘陵の先端付近や、それらの丘陵の間、秋光川流域に形成される扇状地上に集中する傾向が窺える。現在までのところ、甕棺墓等が密集する墳墓遺跡の調査事例が比較的少なく、金丸遺跡[5]、城ノ上遺跡[1]、千塔山遺跡[4]、玉ノ井B遺跡[8]、箱町遺跡[9]、長ノ原遺跡[10]など、ほとんどが後期を中心とした集落遺跡で占められる。前期の遺跡は現在のところ希薄で、前期末の遺構が検出された柚比遺跡群の八ッ並遺跡に隣接する金丸遺跡から土器を数点確認しているぐらいで、遺構の検出までに至るものはない。中期になると、長ノ原遺跡、金丸遺跡、野入遺跡[11]、千塔山遺跡、玉ノ井・玉ノ井B遺跡[12]、高下遺跡、本竿遺跡[13]など、遺跡数は飛躍的に増加する。長ノ原遺跡では、鳥栖市域内の調査で中期初頭の大規模な環濠の一部が確認されている。野入遺跡は中期後半の時期を主体とする集落遺跡で、多数の住居跡に伴って掘立柱建物跡が検出されている。千塔山遺跡は、後期から終末にかけての大規模な環濠を持ち、この時期の拠点集落に位置付けられる。この丘陵の周辺部には、派生的にいくつかの集落遺跡が存在している。墳墓遺跡としては、本竿遺跡、金丸遺跡、一庵山遺跡、会田遺跡[14]、久保田遺跡[15]、割田遺跡[16]、鈴町遺跡[17]などで甕棺墓や土壙墓、石棺墓が確認されている。このうち久保田遺跡では中期から後期にかけての甕棺墓が26基検出されているが、うち1基から鉄剣が出土しており、近年には鉄戈が副葬されていた中期末の甕棺墓1基が別に発見されている[18]。本竿遺跡では前期末から中期初頭にかけての甕棺墓が、また、野入遺跡からは墳墓儀礼に伴う祭祀土器の大型廃棄土坑が検出されている。



1. 本調査地区　2. 城ノ上遺跡　3. 白板遺跡　4. 千塔山遺跡　5. 金丸遺跡　6. 伊勢山遺跡　7. 丸林遺跡　8. 天神山遺跡
9. 玉虫遺跡　10. 一庵山遺跡　11. 玉ノ井B遺跡　12. 長ノ原遺跡　13. 高下遺跡　14. 本竿遺跡　15. 久保田遺跡　16. 割田遺跡
17. 野入遺跡　18. 中隈山遺跡　19. 上野古墳　20. 御仮田遺跡　21. 杓子ヶ峰古墳群　22. 亀ノ甲古墳群　23. 馬場古墳群
24. 鎌浦古墳群　25. 塚ン峠古墳群　26. 皮籠石古墳群　27. 一の坂古墳群　28. 小林古墳群　29. 黒岩古墳群　30. 一井木古墳群
31. 基肄城　32. 丸林瓦窯跡　33. 仁谷寺瓦窯跡　34. こうらざき瓦窯跡　35. とうれぎ土塁　36. 関屋土塁　37. 園部城
38. 宮浦城　39. 古寺遺跡　40. 立花西遺跡

図3　周辺遺跡分布図（1/25,000）

古墳時代にはいると、低丘陵上や平野部に集落遺跡が広く分布し、平野部を囲む舌状台地や山麓部の尾根上に古墳が築造される。園部谷の開口部に形成された独立丘陵上に立地する中隈山遺跡[29]からは、古墳時代初頭の方形周溝墓5基と壺棺墓1基が検出された。方形周溝墓はいずれも粘土槨あるいは礫槨の割竹形木棺を内部主体とし、うち2基からは小型鏡が出土している。千塔山丘陵上には千塔山1号墳、大行神古墳、大塚古墳、八幡古墳などの5世紀末～6世紀中頃の古墳が立地[4][30]するが、このうち八幡古墳からは円筒埴輪が出土している。また、金丸丘陵の先端付近に位置する上野古墳[31]は、墳丘形態は不明だが、単室両袖型の横穴式石室から多くの副葬品を伴って4体分の人骨が合葬されたままの状態で発見された。6世紀前半代の築造と考えられ、付近には同時期の規模を同じくする古墳がもう1基あり、過去に出土した須恵器が報告されている[32]。なお、宮浦谷には水田の地割があるいは全長約100mを測る南に向いた大型前方後円墳の墳丘・周溝の痕跡を示すようにみえる、塚原という小字のつく場所があり、将来の確認調査が注目される[4]。山麓部には後期群集墳が各支脈、尾根ごとに多数分布するが、とくに園部谷を挟んだ東西の丘陵上には数多くの群集墳がベルト上に連なって造営されている。御仮田遺跡では群集墳の中では比較的初期の古墳が検出されたが、杓子が峰古墳群、亀の甲古墳群、馬場古墳群、鎌浦古墳群[26]、塚ン峠古墳群、皮篭石古墳群、一の坂古墳群、小林古墳群、黒岩古墳群など、ほとんどが6世紀後半以降に造営が開始された群集墳である[25]。集落遺跡としては、伊勢山遺跡[6]、白坂遺跡[2]、城ノ上遺跡[1]、千塔山遺跡[4]、玉ノ井遺跡[13]などが知られる。このうち伊勢山遺跡では、5世紀前半代を中心とする時期の住居跡、貯蔵穴、祭祠遺構が検出されており、とくにミニチュア土器や土製、滑石製の模造品が多数出土した祭祠遺構が注目される。白坂遺跡では6～7世紀にかけての住居跡や大型土坑などが、玉ノ井遺跡では6世紀前半の大型土坑が検出されている。また、東福寺遺跡[26]では6世紀後半の用水路状遺構が確認されている。

古代律令国家体制のもと、基山町域は肥前国基肄郡となる。隣接する養父郡とは大木川（鳥栖市）を境としている。基肄郡は「肥前国風土記」に「郷陸（六）所、里十七、駅壱所小路」とあり、「和名類聚抄」には姫社・山田・基肄・川上・長谷の五郷を挙げているが、欠落の一郷として永吉郷が推定されている。郡衙の位置は現在のところ不明であるが、駅家は基肄郷である木山口付近とおもわれる。基山山麓の荒穂神社は肥前風土記に記載された永世社と姫社社ともに現存する。また、条里制の遺構は現在岩坪・八の坪などの地名として名残を止めている。663年の白村江会戦の敗北をうけて、665年基山に朝鮮式山城の基肄城が大野城とともに大宰府防衛を目的として築かれる。現在、（大型倉庫跡）礎石群、水門跡、門跡および約4kmにおよぶ土塁線が良好な状態で遺存しており[27][28]、国の特別史跡に指定されている。基肄城から出土する瓦は百済系のものであるが、南麓には丸林瓦窯跡、仁谷寺瓦窯跡、こうらざぎ瓦窯跡など古代の瓦窯跡が集中して分布しており、関連が注目される。さらに、基山より南東方向に伸びる丘陵の先端部付近は、とうれぎ土塁[4]、関谷土塁が築かれている。関谷土塁は時期の特定ができ

ないものの、一部に版築状の遺構が高さ1.5km程度残存していることが確認されている。[29]

中世の遺跡としては、杓子が峰中腹および中隈山一帯に園部城が、契山の中腹には宮浦城がどの山城が存在している。なお、一時的であるが基肄城も山城として使用されたものと考えられている。この時期の集落遺跡の調査はあまり行われていないか、古寺遺跡では多数の柱穴に伴って溝や井戸跡が検出され、輸入陶磁類も多数出土している。[29] そのほか立花西遺跡[33]、玉ノ井遺跡[32]、鈴町遺跡[31]、千塔山遺跡[4]などからも中世の遺構が検出されている。

近世以降基山町域（基肄郡）は、養父郡の東半部とともに対馬藩の飛地領（１万６千余石）となり、田代宿に設置された代官所の統治下におかれた。長崎街道が整備され、1645年には、現在の基山町中心部の原形となる、木山口の小町場が街道沿いに新たに開かれている。

註

1. 松尾吉高　1977　『城ノ上遺跡』基山町文化財調査報告書第１集　基山町遺跡発掘調査団
2. 田中正弘　1988　『白坂遺跡』基山町文化財調査報告書第11集　基山町教育委員会
3. 田中正弘　1989　『秋光遺跡』基山町文化財調査報告書第14集　基山町教育委員会
4. 中牟田賢治編　1978　『千塔山遺跡』基山町文化財調査報告書第３集　基山町遺跡発掘調査団
5. 山田正　1985　『金丸遺跡群』基山町文化財調査報告書第６集　基山町教育委員会
6. 木下之治　1970　『基山町伊勢山・鳥栖市永吉遺跡』　佐賀県教育委員会
7. 基山町史編纂委員会編　1971　『基山町史』　基山町役場
8. 山田正　1984　『玉の井Ｂ遺跡』基山町文化財調査報告書第５集　基山町教育委員会
9. 山田正・田中正弘　1987　『箱町遺跡』基山町文化財調査報告書第10集　基山町教育委員会
10. 藤瀬禎博編　1979　『長ノ原遺跡調査概報』鳥栖市文化財調査報告書第５集　鳥栖市教育委員会
11. 田中正弘　1991　「野入遺跡」『弥生時代の掘立柱建物跡・資料編』埋蔵文化財研究会
12. 田中正弘・山田正　1988　『玉の井遺跡』基山町文化財調査報告書第12集　基山町教育委員会
13. 田中正弘・山田正　1990　『本竿遺跡・立花西遺跡』基山町文化財調査報告書第17集　基山町教育委員会
14. 小田富士雄・松隈嶌　1959　「佐賀県基山町甕棺遺跡調査概報」『九州考古学』７・８
15. 榮元静雄　1971　「久保田遺跡出土の鉄剣について」『新郷土』267
16. 山田正　1986　『割田遺跡』基山町文化財調査報告書第７集　基山町教育委員会
17. 田中正弘・山田正　1991　『鈴町遺跡』基山町文化財調査報告書第19集　基山町教育委員会
18. 1990年に造成中に発見され、基山町教育委員会が緊急調査を実施。
19. 山田正・田中正弘　1990　『中隈山遺跡概報』基山町文化財調査報告書第18集　基山町教育委員会
20. 中村勝　1991　「佐賀県基山町伊勢浦池西岸の出土遺物」『古文化談叢』25　九州古文化研究会
21. 鏡山猛　1954　「基山町上野古墳」『佐賀県文化財調査報告書』３　佐賀県教育委員会
22. 小田富士雄　1959　「九州古式須恵器集成（一）」『九州考古学』７・８
23. 1991年に基山町教育委員会が調査。
24. 山田正　1988　『鎌浦古墳群』基山町文化財調査報告書第13集　基山町教育委員会
25. その他、調査の実施された後期群集墳に大塚古墳群などがある。（山田正　1986　『大塚古墳群』　基山町文化財調査報告書第９集　基山町教育委員会）
26. 田中正弘・山田正　1989　『東福寺遺跡』基山町文化財調査報告書第15集　基山町教育委員会
27. 久保山善映　1938　「基山と基肄城跡」『佐賀県文化財調査報告書』６　佐賀県教育委員会
28. 基山町教育委員会編　1976　『特別史跡基肄城跡発掘調査報告書』基山町文化財調査報告書第２集　基山町教育委員会
29. 1991年に基山町教育委員会が調査。

第３章　黒谷古墳群の調査

Ⅰ．遺跡の概要

黒谷古墳群は佐賀県三養基郡基山町大字園部字浦田および大字宮浦字黒谷に所在する。脊振山系の契山から南東方向に伸びる支嶺から派生した標高約60～80ｍの丘陵上に立地し、東西に広がる園部谷と呼ばれる地勢の北側丘陵部の一端を占める位置になる。この園部谷を挟んで北側の丘陵上には一井木古墳群、黒岩古墳群など、南側丘陵上には亀ノ甲古墳群、馬場古墳群、鎌浦古墳群、塚ン峠古墳群、小林古墳群など数多くの後期群集墳が分布しており、黒谷古墳群は園部谷の北側丘陵に連なる古墳群では最も入り口ともいうべき東側に営まれている。

黒谷古墳群は開析作用で形成されたいくつもの入り組んだ谷によって舌状に張り出した２つの丘陵から構成されており、調査前は果樹園や茶畑として利用されていた。今回の調査は古墳群全域にわたることになる。半ば独立的な小丘陵になっている大きい南側をＡ地区、北側の痩せ尾根をＢ地区とした。

Ａ地区からは古墳８基（うち１基は小石室墳）、Ｂ地区からは古墳１基が検出された。ここは以前より古墳４基の存在が確認されており、そのうち２基（Ａ地区２・４号墳）は開口しており、１基（Ａ地区７号墳）は天井石の一部を露出させており、もう１基（Ｂ地区９号墳）は腰石の一部を残したのみの状態であることが知られていたが、これ以外の５基については調査を開始し、樹木の伐採、表土除去を経てはじめてその存在が判明したものである。石室はいずれも南側に開口する。Ａ地区の中央には主墓道（はかみち）と考えられる谷状の細い窪みがあり、ここから１～７号墳それぞれに枝状に派生した道が接続することが復元できる。なおＡ地区の南裾部は僅かながら平坦面となっており、ここから小土坑やピット群が検出された。

小石室墳の８号墳以外は、いずれも複室両袖型あるいは羨道部に擬前室構造部をもつ単室両袖型の横穴式石室を内部主体としている。羨道の玄門よりの部分を両側から仕切石で区画し、副室と同様の使用が考えられる擬前室構造部をもつ横穴式石室は、６世紀後半の副室を持つ古墳の盛行ならびに副室のいわゆる「退化・形骸化」にいたる過程を探る上で興味深い。また、２号墳の玄室奥壁中央から叩き窪めの技法による同心円文様が発見された。これは県内23例目の装飾古墳として、あるいは筑後川流域に分布する同心円文様の使用例として、特異な技法の問題も合わせて重要な資料である。

検出された９基の古墳はいずれも盗掘あるいは撹乱を受けていた。４号墳と５号墳の墓道からはまとまった量の土器類が出土したが、古墳群全体としては出土遺物は比較的少なく、石室内で原位置を保っていたと考えられる遺物はほとんどなかった。２号墳から１点出土した馬具の飾りとおもわれる金銅製鈴や、４号墳から出土した金製の耳環や金銅製馬具の残欠などから、

かろうじて被葬者層は一般的な後期群集墳でイメージされるそれよりは、ある程度のクラスに属したであろうということが彷彿される。

古墳群の造営時期であるが、4号墳および5号墳の墳丘内部から築造時の祭祠行為に伴うと考えられる土器が出土しており、この2基については正確な築造時期が押さえられるものの、これ以外はいずれの古墳も追葬時に取り片付けされている例が多く、また盗掘・撹乱などで僅かしか遺物が残されていないために、出土遺物から築造時期をはじめ、追葬時期も含めて古墳が機能していた時期を推定することは難しい。石室型式や古墳群内での位置関係なども合わせて考慮すると、概ね6世紀の第3四半期に1～5号墳と9号墳が比較的短期間の間に造営され、最後に6号墳および7号墳が6世紀末に築造されたと考えられる。追葬は一部7世紀末まで行われたようである。なお、調査地区内からはわずか1基（8号墳）の残欠の検出にとどまったが、8世紀にはいるとこの地区の周辺で小石室墳の造営が開始される。なお、この古墳群は、園部谷一帯に分布する後期群集墳としては最も早い時期に造営が開始されているようである。

表 1　黒谷古墳群調査古墳一覧表

A地区

古墳	石室残存状況	石室形態	主軸方位	床面標高（m）	石室長（m）	規模（m）玄室中央長×中央幅	備考
1号墳	玄室腰石のみ	両袖型	N 6°W	78.7	5.5	2.8 ×1.98	
2号墳	完存	単室両袖型	N 24°W	73.1	4.56	2.33×1.96	羨道に擬前室構造
3号墳	全壊	（単室両袖？）	N14～16°W	(68)	－	－	9号墳と同規模か
4号墳	玄室天井崩落	単室両袖型	N 26°W	64.2	7.2	2.8 ×2.66	羨道に擬前室構造
5号墳	完存	複室両袖型	N 19°W	76.2	5.78	2.78×2.2	
6号墳	腰石部分	単室両袖型	N 26°W	70.5	3.84	1.75×1.77	羨道に擬前室構造
7号墳	ほぼ完存	単室両袖型	N 37°W	66.5	5.36	2.24×1.68	羨道に擬前室構造
8号墳	腰石一部のみ	横口小石室	N 35°W	76.9	－	1前後か	

B地区

古墳	石室残存状況	石室形態	主軸方位	床面標高（m）	石室長（m）	規模（m）玄室中央長×中央幅	備考
9号墳	玄室腰石のみ	単室両袖型	N 33°W	69.5	(5.5)	(2.8)×1.86	

II．A地区の調査

本調査区は契山から園部谷に向かって東南方向に派生する丘陵地帯の東端部に位置する。この部分は両側から開析谷が深く入り込んでいるために独立丘陵のような形状となっている。この丘陵のほぼ中心部を南東方向にかけて細い窪みが谷状に走り、一つの丘陵がさらに２つの尾根に分割された格好となっているが、現状の山道とも大部分が重なっているこの窪みを古墳群の主墓道（はかみち）として利用したと考えられる。

それぞれの尾根に沿って北側列に４基、南側列に３基のいずれも横穴式石室を内部主体とする古墳が計７基、および小石室墳１基が検出された。石室はいずれも南側に開口するが、興味深いことに１号墳と５号墳以外は、南側列の古墳が北側列古墳の開口方向の視界を妨げないように、あるいは南方向から古墳群を眺望する場合に古墳が重ならないように配慮した並列関係となっている。また、丘陵南裾部のわずかに平坦面となったところから小土坑やピット群が検出された。

なお、出土遺物は大部分が概ね６世紀後半から７世紀初めまでの時期幅で捉えられるが、これは即、築造時期～使用時期にはならない。それは、後述するように追葬時あるいは盗掘その他の攪乱により築造当時の遺物が一部を除いて失われてしまっているためで、墳丘盛土中より土器が出土した４・５号墳を除いて、各古墳の築造時期については石室形態あるいは古墳群の位置関係から相対的に推測するしかないが、これについてはＢ地区および水呑古墳群とあわせて第６章－Ｖで詳述することにして、各項では出土遺物（主として須恵器の蓋坏）の時期幅のみの報告にとどめる。

１．１号墳

（１）位置と現状

Ａ地区の２列に並んだ古墳群の、北側尾根列の最上部に築造される。Ａ地区全体でも最上部の立地となるが、丘陵の頂部よりは少し下がった位置になり、南側尾根列最上部の５号墳のすぐ背後となる。玄室床面の標高は78.7mである。調査時点では完全に埋没しており、平坦な竹林となっていた。また東側は果樹園の造成の際に削られている。

（２）墳丘・外部施設

墳丘は完全に失われているが、玄室中心から墓道の端部までの距離から推定して径15m前後の円墳が考えられる。墳丘基底面は東側が大きく削平されて段となっているものの石室掘方掘削面の周辺は残存しており、ほぼ南北に緩やかに傾斜している。石室はこの斜面の等高線にほぼ直交して築かれる。周溝等は確認できなかったが、おそらく５号墳のように西側、つまり丘陵の上方側に尾根に直交して排水目的の弧状の溝が設けられていたとおもわれる。

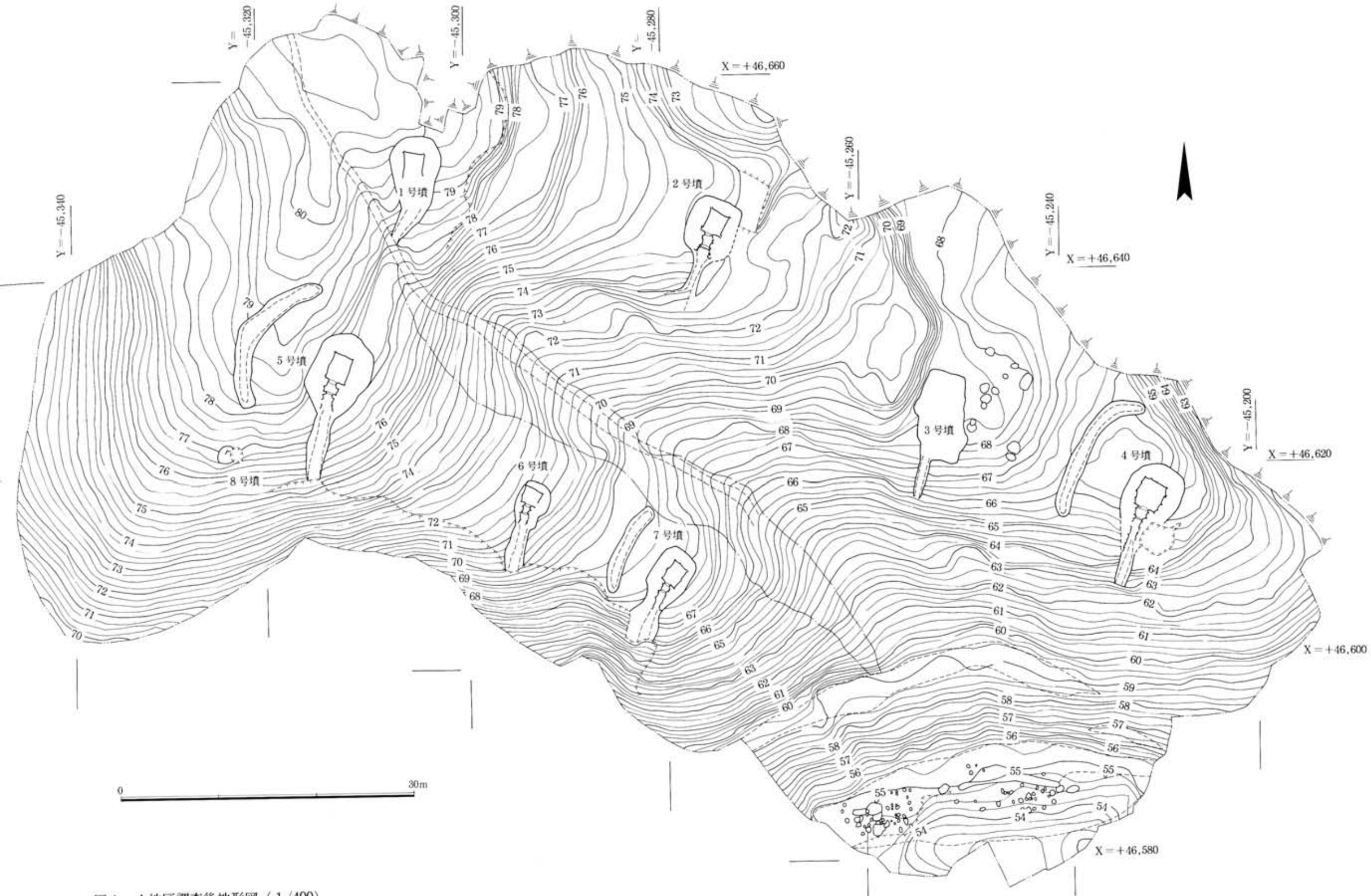


図4　A地区調査後地形図（1/400）

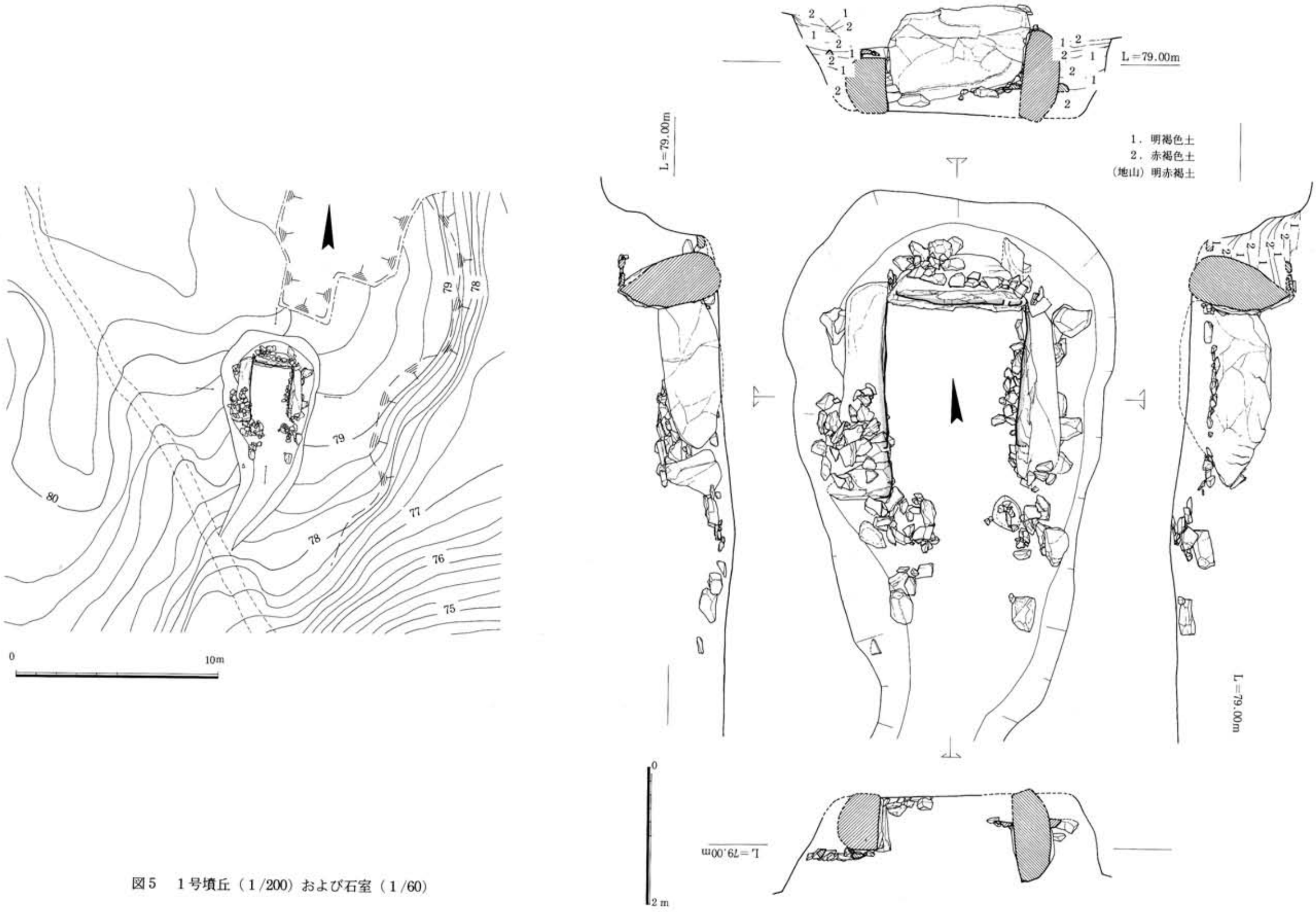


図5　1号墳丘（1/200）および石室（1/60）

（３）埋葬施設

南側に開口し、主軸をＮ６°Ｗにとる横穴式石室を内部主体とするが、石室は玄室部分の腰石を残すのみの状態で破壊され、これ以外の主要石材はすべて持ち去られていた。根石の残存状況からおそらく南に隣接する５号墳の石室に近いものが想定できる。もっとも、石室型式は前室を明確に張り出して構築したものか（複室両袖型）、あるいは羨道の玄門よりをいわゆる擬前室構造としたものなのか（単室両袖型）どうかは断定できない。石室掘方は９×５ｍ程の長楕円形で30°くらいの傾斜で掘削され、墓道も一つに囲む。右腰石に沿って僅かに現位置を保っていた床敷石から推定すると床面は掘方底面より30～40cm上に設定している。切通し状の墓道は石室主軸から西に30°程屈折しているが、これは古墳群の主墓道である細い谷状の窪みにほぼ直角に連結させるためであろう。

石材は花崗岩の転石を用いる。規模は石室全長5.5m、玄室中央長は約2.8m、玄室中央幅は1.98mで、玄室平面形態は長方形である。玄室の奥壁および左右側壁の腰石は大型の石材を用い、それぞれ１石からなる。奥壁は腰石に２×1.3m程の角のとれた平面方形の偏平石１石をたて左右隅には転石を詰めるが、上方の目地を水平に持ってくるため右下隅はより多くの石を詰めている。上面は２段目の石を据えやすくするため背後に石を積め平坦な面を作り出している。左右腰石はいずれも似たような石材を横位に配するが、左腰石は右側壁に長さを合わせるためさらに手前に0.8×0.7mの台形面の石を立てている。腰石上端はいずれも玄門方向に斜め下方に走るが、左腰石はこれにあわせて目地が通るように石を積んで平らな面を作り出している。袖石は左右共に欠失するが、左側は柱状の袖石を立てるために内径0.5m程に礫を環状に配して根石としている。

（４）出土遺物

出土状態

遺物は埋葬当時の原位置を保っていたものは全く無い。玄室や墓道部から少量の土器片や金属製品の残欠が出土したほかは、大部分が墓道東側の斜面に、石室を破壊し石材を持ち出す時に投げ込まれたとおもわれる小塊石や小礫に混在していたものである。

須恵器

１～11は杯蓋、12～14は蓋。10．11のみ天井部が残存し、ヘラ記号がある。10はいわゆる赤焼き。9～11は口縁端部をやや外につまみだす。12はかえりが直に立ち、壺蓋の可能性がある。15～22は杯身、23～26は坏。いずれも底部を欠く。26は口縁が直に立ち、体部が屈曲する。27～34は高坏。27は坏部片、段を持つ。28は脚上部、３方透かし。29～34は脚裾部片。35～37は平瓶。35．36は口頸部、37は体部。38・39は脚付壺。38は口縁部、39は脚部の破片、段を持つ。

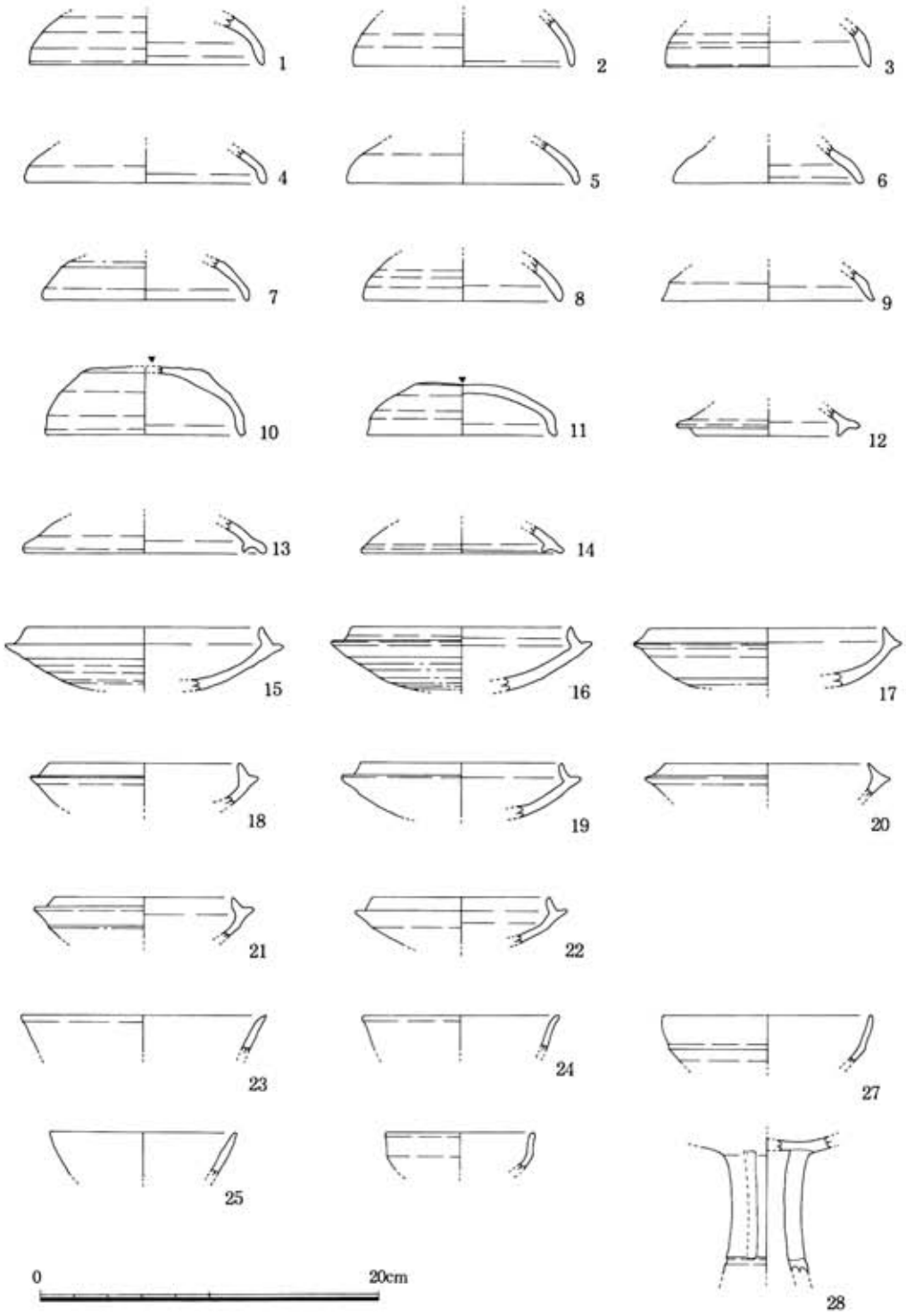


図6　1号墳出土土器1（1/4）

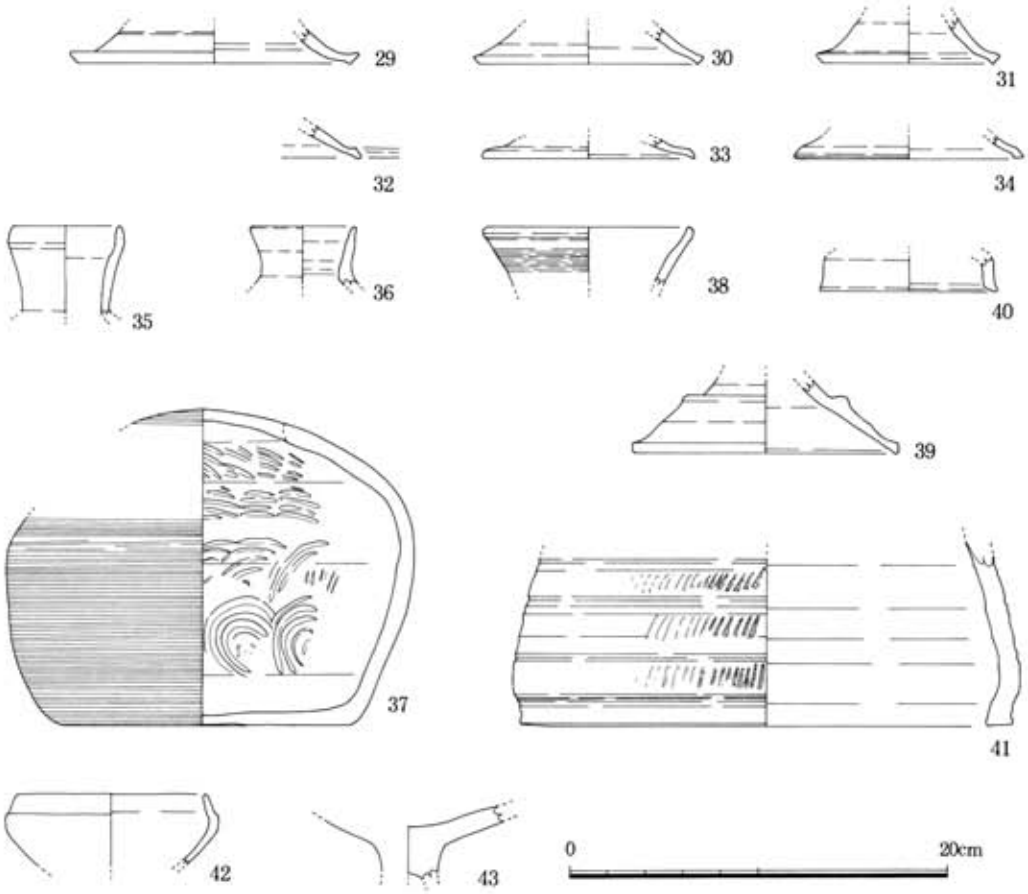


図７　１号墳出土土器２（１/４）

40は壺蓋。41は器台の端部片。口縁は内に曲り、端部はやや斜めに面を持つ。３条の櫛描列点文を挟んで沈線がはいる。

これらはＴＫ43～ＴＫ46型式（ⅢＢ新～Ⅴ期）に相当する。

土師器

42は杯。僅かにたちあがりの段が残る。43は高坏の坏底部。

金属製品・装身具

44は鉄鏃の頸部。45は刀装具。把元金具の部分で、端部を鍔側は外に、柄側は内にそれぞれ折り曲げる。46は鉄鑿（のみ）。小型の突き鑿で刃部幅1.0cm。穂先が内に折れ曲がる。47は鉄斧。有袋鉄斧で有肩式。両刃で全長9.5cm、刃部幅5.1cm、袋部は内口径2.8×1.0cmの長方形で長さは4.0cm程である。48は鉄楔。両刃で全長10.1cm、刃部幅1.8cm、基部の幅2.5cm。49～51は馬具の残欠。玄室より出土。47、48は留金具で鉄地金銅張り。49は鞍か鐙具の破片。52は耳環。玄室より出土。銅地金張りで、横幅３cm、径0.6cm、重さ10.5ｇ。

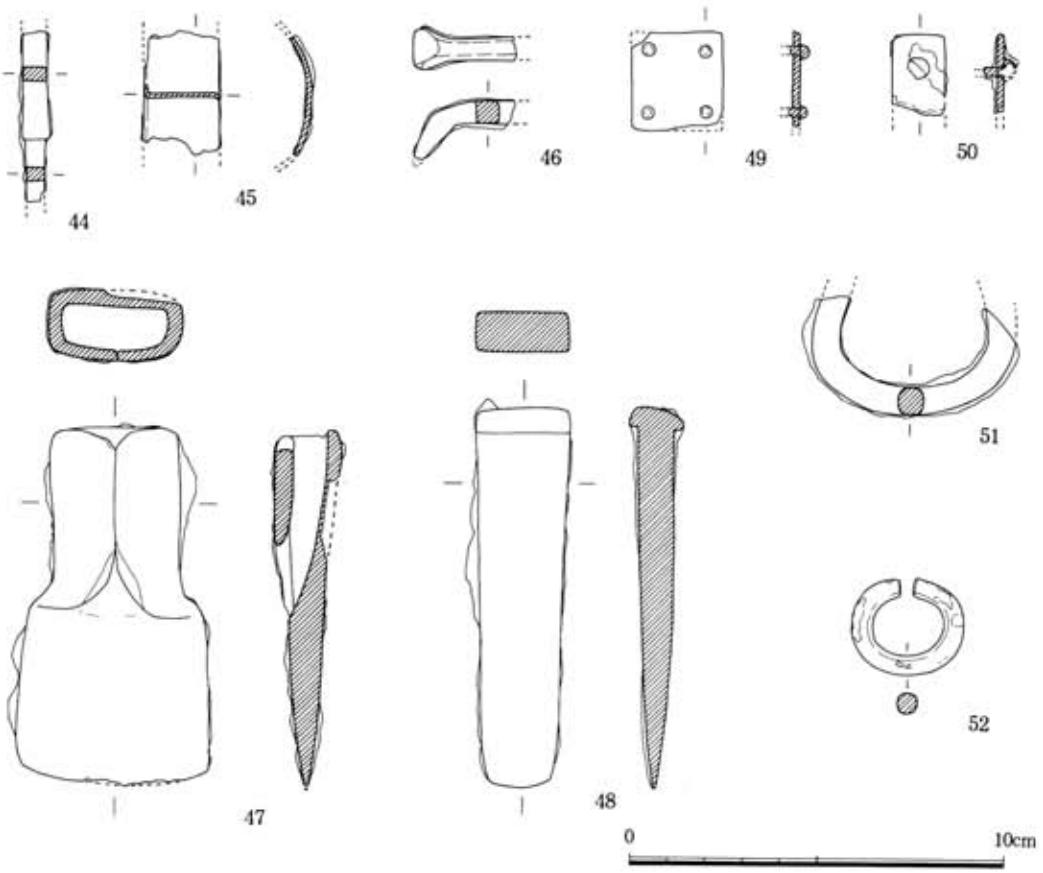


図８　１号墳出土金属製品・装身具（１/２）

２．２号墳

（１）位置と現状

調査区北側尾根列の１号墳に次いで２番目に位置する。玄室床面の標高は73.1mである。同列の西側、上方約30mに１号墳が、東側、下方約25mには３号墳とほぼ同間隔で築造されている。調査前は周囲一帯が果樹園になっていた。墳丘は大幅な削平と攪乱で全く原形をとどめていないが、石室は右側が削平で石材を露呈していたものの、完存しており、羨門部は人がかろうじて出入りできる程の幅で開口していた。旧地権者からの聞き取りによると、一時期石室をみかんの仮保管庫として利用していたそうである。石室頂部に松と山桃の木が植えられていた。

（2）墳丘・外部施設

石室天井石の上は0.7m程の土が載っているが、石室掘方内の裏ごめが僅かに看取されるほかは、植生による土壌変質も含めて、もともとの墳丘盛土は全く残存していない。墳丘基底面や周溝も削平と撹乱が深くにわたっているために確認できない。かろうじて地山整形は尾根の等高線に直交して下方を平坦に削り出していることがわかる程度である。

（3）埋葬施設

南西方向に開口し、主軸をN24°Wにとる単室両袖型の横穴式石室を内部主体とする。石室型式は単室両袖型であるが、羨道の玄門よりのところは前後を仕切石で区画して敷石を敷いた擬前室構造となっている。石室の保存状態は良好で完存していたが、すでに羨門上部が開口していた。内部は撹乱がひどい状態で、ベルト観察による床面の層位的な検出は断念せざるを得なかった。調査当初、玄室内は人頭大の塊石が相当数散乱しており、その20～25cm下に玉砂利敷きが僅かに残る最終検出床面が現れた。これは追葬時に敷石を新たに持ち込んでの“床上げ”を行った痕跡と考えられ、同様な状況は５、７号墳や水呑６号墳の玄室でもみられる。ただ、擬前室部の場合は板礫の上に玉砂利が敷かれていた。あるいは７号墳のように玉砂利が追葬時に持ち込まれたのかもしれない。この“床上げ”については第６章－IIで触れる。石室掘方は地山残存面から計測して６×５m程の隅丸長方形であるが、２段掘りで0.2m程ゆるやか

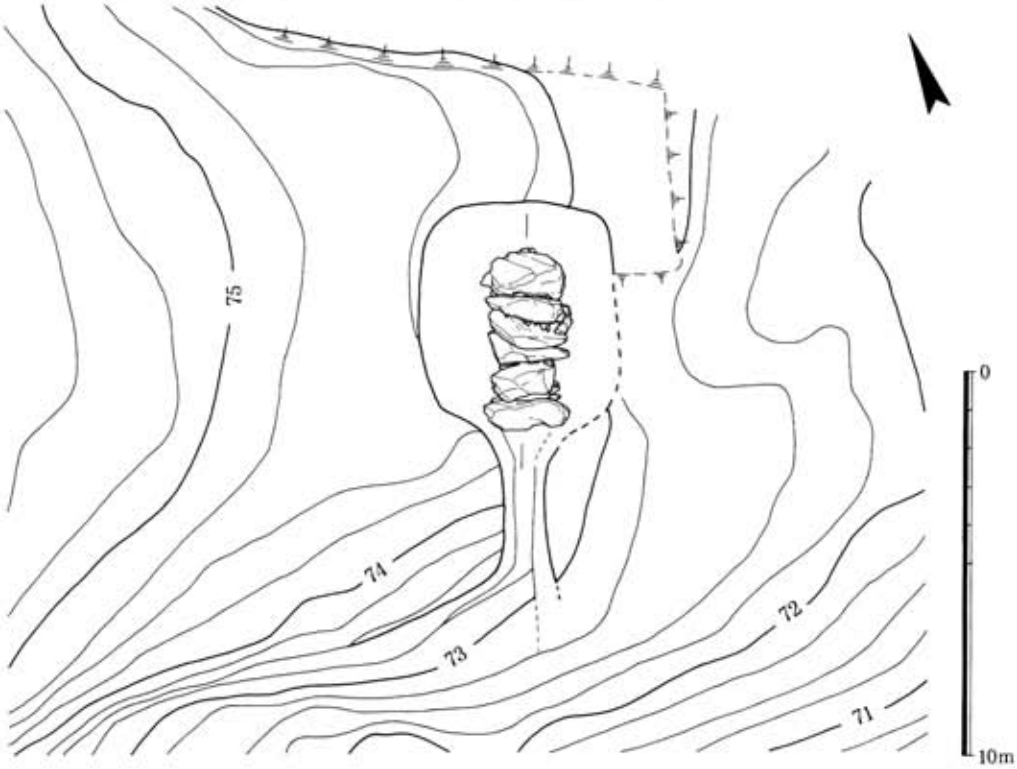


図９　２号墳墳丘（１/200）

に下がると屈曲し、ここから5.4×４m程になって10～20°の傾斜で掘削され、切通し状になった墓道を連接する。墓道の先は谷状の主墓道におそらく直角に連結していたものとおもわれる。

規模は石室全長4.56m、玄室中央長2.33m、羨道長2.0mで、第２仕切石を含めると玄室と羨道の比率は2.5：2.1とほぼ等しくなる。また、玄室平面形態は4.5：4の長方形であるが、袖石の平面が丸まっていることを考慮すれば、むしろ正方形に近い。玄室中央幅1.96m、天井高2.1mを測る。また、玄門手前の擬前室部は中央長0.85m、中央幅0.82m、天井高1.4mである。第１仕切石は板石を床面から40cm程横位に立てて跨ぎ石とするが、擬前室部手前は玄室袖石と同規模の柱状石をたて、第１仕切石とあわせ前門状となる。

石材は全て花崗岩を用いる。奥壁は腰石に1.9×0.7m程の石材を横位に据え、２段目からは10°程の傾斜を持たせて、1.4×0.5m程の石を横位に積み、その上に1.2×0.5m程の横長の５角形に近い面をもつ石材を載せる。特筆すべきは玄室奥壁中央のこの石に叩き窪めの技法による外径約25cmの２重の円文様（同心円文）が描かれていることである。その位置は羨門から見てちょうど中心でかつ目の高さにくるように計算されている。これについては第６章－Ⅳで詳述したい。この上４段は40～50cm角の石を小口に積み上げて天井に持ち送っている。側壁は左右とも同様の状況で、左側壁は腰石から、右側壁は２段目からそれぞれ15°程の傾斜で天井石に至る。腰石に2.1×0.7m程の横長石材を横位に据え、その上に1.6×0.3m程の横長の石材を積み、角石を積めて補塡して目地を通している。３段目からは40～50cm角の石を積み上

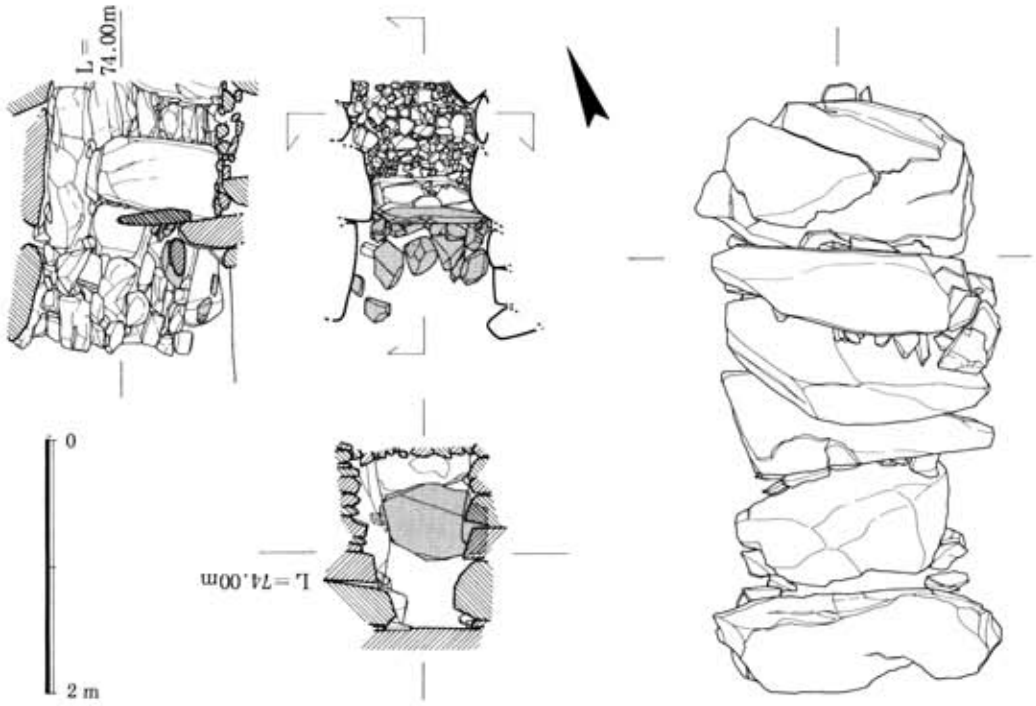


図10　２号墳石室閉塞施設残存状況および天井石（１/60）

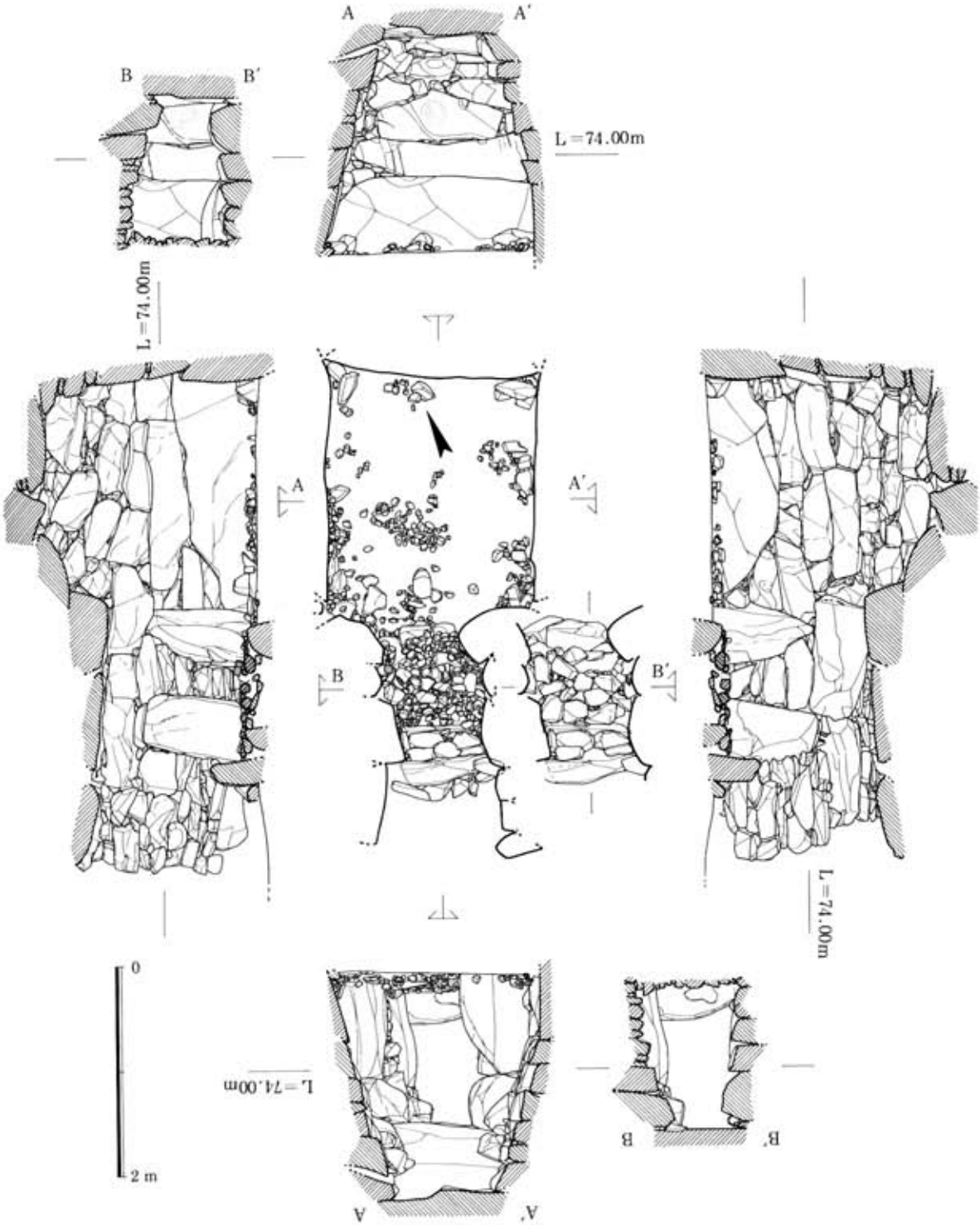


図11　2号墳石室（1/60）

げて天井に持ち送る。擬前室構造部の側壁も左右同様の構造で、玄門および前門状の袖石の間はそれぞれの間隔に合った石材を横積みにして玄室２段目上の目地に合わせる。この上は左右それぞれ1.3×0.3m、1.1×0.5m程の横長石材を横位に積み天井石を架構する。羨道手前の側壁は小型の石材を下部は平積み、上部は横積みに雑に積んでいる。この部分は通常天井石を架構せずに前庭側壁とする例が多いが、本墳はこの上にも天井石を載せる。天井石は玄室部３枚、羨道部３枚の６石を架構する。玄門上の１枚は前壁と楣石を兼ねる。

閉塞施設は擬前門上にある。第１仕切石内側から0.9×0.6mの板石を立てかけ、手前に礫を１段つめるが、40cm程堆積した上に設けられるのは、追葬時に再構築されたためであろう。

（４）出土遺物

出土状態

擬前室部より完形の小型提瓶と刀子や鉄鏃などの金属製品が出土した。後者は敷石上に撒かれた玉砂利の下から検出され、提瓶は玉砂利の上から検出された。この提瓶は追葬時のものであろうが、最終追葬に伴うものではないだろう。玄室最終検出床面からは金銅製の鈴が１点出土したが、これ以外は盗掘あるいは追葬時の取り片付けにより遺物は全く残されていなかった。墓道も同様の状況で上部より須恵器と土師器の小破片が全部で４点出土したにすぎない。

須恵器

53は杯蓋、54は杯身。底部、天井部回転ヘラケズリ。55は小型の提瓶。完形で擬前室部出土。口頸部～肩部カキ目調整、胴部回転ヘラケズリあと部分ナデ。肩部にヘラ記号あり。56・57は高坏。胎土や焼成の具合からみておそらく同一個体であろう。56は坏部。段を持つ。57は脚裾部。３方透かしがあり、下部に沈線を巡らす。ヘラ記号を刻む。

これらはＴＫ209～ＴＫ217型式（Ⅳ期）に相当する。

土師器

58は小型の高坏の脚部。内外面ともナデ仕上げで外面に丹塗りを施す。

金属製品

鉄鏃（59～66）擬前室部出土。59～61は尖根式の小型柳葉型。鏃身断面は片丸。62は平根式の圭頭型。菱形の透かしが入る。鏃身縦断面両丸造。63・64は平根式の斧箭型で鏃身縦断面は両丸造。65・66は平根式鏃の頸部。65の関は不明瞭で、椿葉型の鏃身とおもわれる。

刀子（67．68）擬前室部出土。平造。両関だが不明瞭で曲線をなして切り込む。把元金具が残り、茎部に木質が残存する。67はほぼ完存で全長13.8cm、把元金具から先の刃部長9.0cm、元幅1.3cm、棟厚0.3cmを測る。68は刃部の中ほどから先を欠失するがほぼ同様である。

金銅製鈴（69）玄室床面出土。全長3.4cm、幅2.4cm。半球状の体部を上下別々に鋳出し、天辺に内側から1.4cmの吊金具を取り付け、中に0.4cm程の鉄粒の丸（がん）をいれたあと、体部を接合し、鍍金して仕上げる。下部の孔は鋳上りが悪く不明瞭である。馬具の飾りとおもわれるが、比較的小型の造りであるため別の用途も考えられる。

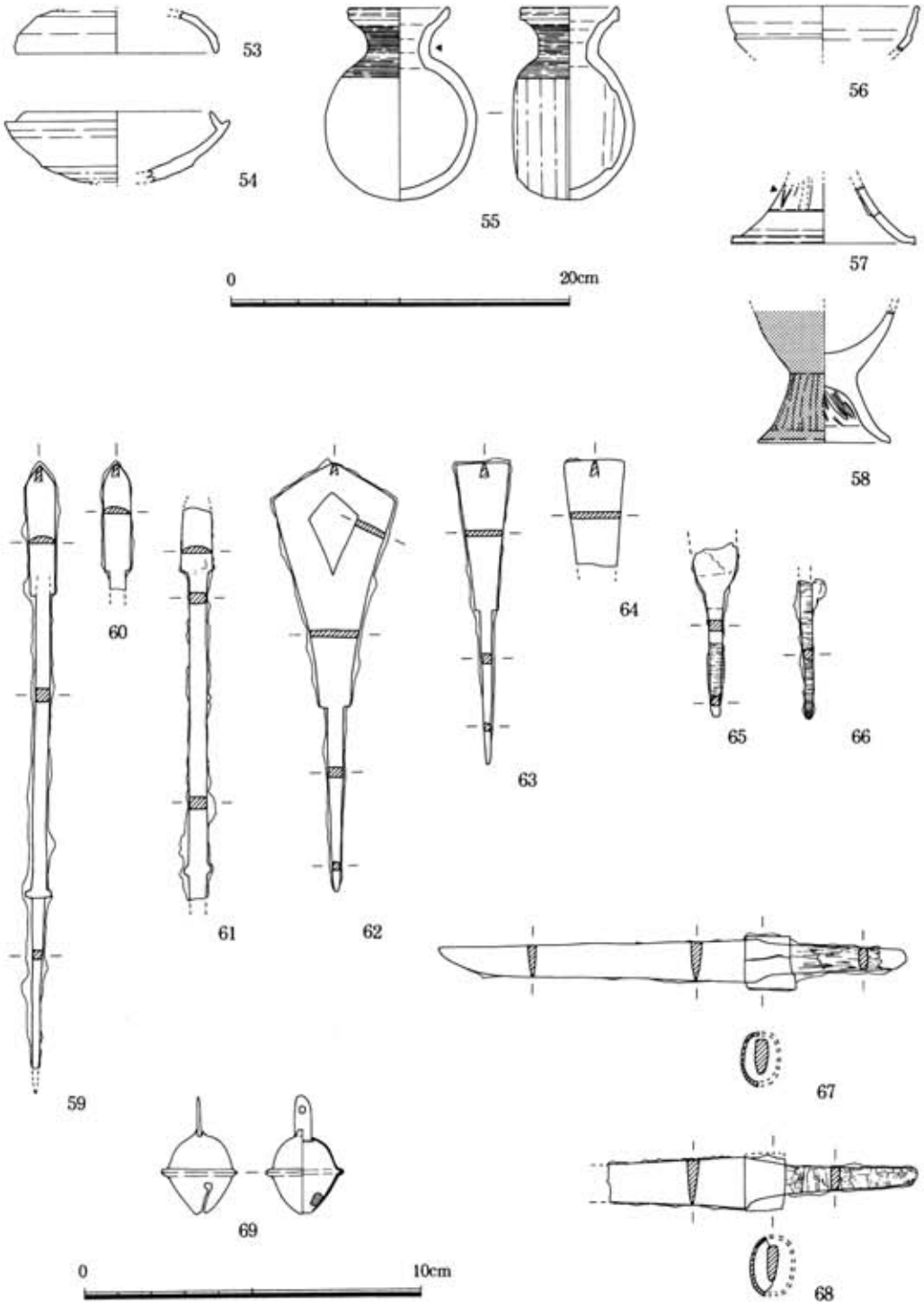


図12　2号墳出土土器（1/4）および金属製品（1/2）

３．３号墳

（１）位置と現状

調査区北側尾根列の３番目に築造される。東側上方約25mに２号墳が位置し１・２・３号墳とほぼ等間隔に並ぶものの、東側は石室中心部から約15m先が４号墳の周溝となり、４号墳とは近接した位置関係になる。現状はいかにも尾根を削って平坦にしたという状態で、調査前は果樹園として利用されていた。旧地権者からの聞き取りでは、太平洋戦争末期にＡ地区の丘陵の北斜面には軍の弾薬庫壕が多数掘られたが、関連施設を建てるためにこの場所を大きく削平して整地したそうで、この時に古墳が破壊されたらしい。玄室床面の推定標高は68m程である。

（２）墳丘・外部施設

墳丘、石室は完全に破壊され、地山整形面も大きく削平されている。ただ現状で西側は石室掘方底面から２ｍ以上も段差があり、尾根に直交して下方を平坦に削り出して石室右側を中心に墳丘盛土を行ったことがわかる。径15m前後の円墳と推定できる。

（３）埋葬施設

石室を構築する主要な石材はすべて持ち去られており、小礫や小塊石が石室掘方面一杯に散乱した状況で検出された。状況から南側へ開口し、主軸をＮ14～16°Ｗにとる横穴式石室を内部主体としていることがわかる。石室掘方は底面９×3.2mの長楕円形で手前がすぼまって墓道に接続する、いわゆる羽子板形に復元できる。等高線に直交する墓道は底面幅１ｍで約５ｍが23°程の傾斜で残存するが、もともとは切通し状であったものとおもわれる。北側尾根列の他の古墳と同様に主墓道から枝状に墓道が直角に連接していたようである。なお、この石室掘方や墓道の形状や規模がＢ地区の後述す　　る９号墳に酷似しており、９号墳は本墳のすぐ背後となる位置関係をも考慮すると、　　つの古墳は同時期同規模のものと考えていいだろう。

（４）出土遺物

出土状態

石室掘方内に散乱した小礫や小塊石に混在した状態で少量の須恵器片が出土した。

須恵器

70・71は杯蓋。天井部回転ヘラケズリ。70は口縁端部を外につまみ出し、71は口縁全体をやや内に丸める。72は椀の口縁部。73・74は小型の高坏の脚部。73は沈線を持ち、端部を下方へ屈曲させ段をなす。75～77は甕の口頸部。75は櫛描波状文を３条施す。76・78にヘラ記号あり。

これらはＴＫ209～ＴＫ217型式（Ⅳ期）に相当する。

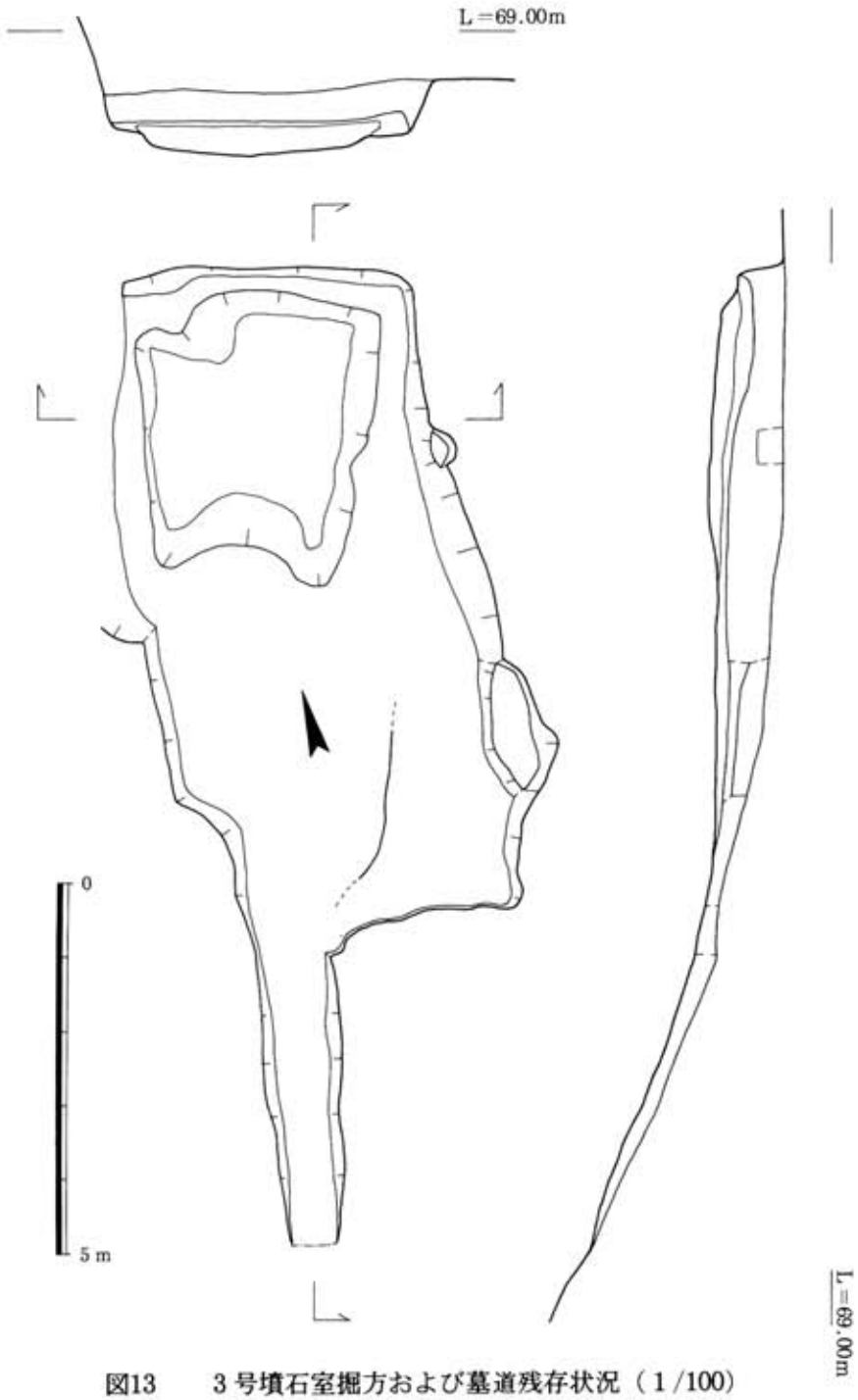


図13　　3号墳石室掘方および墓道残存状況（1/100）

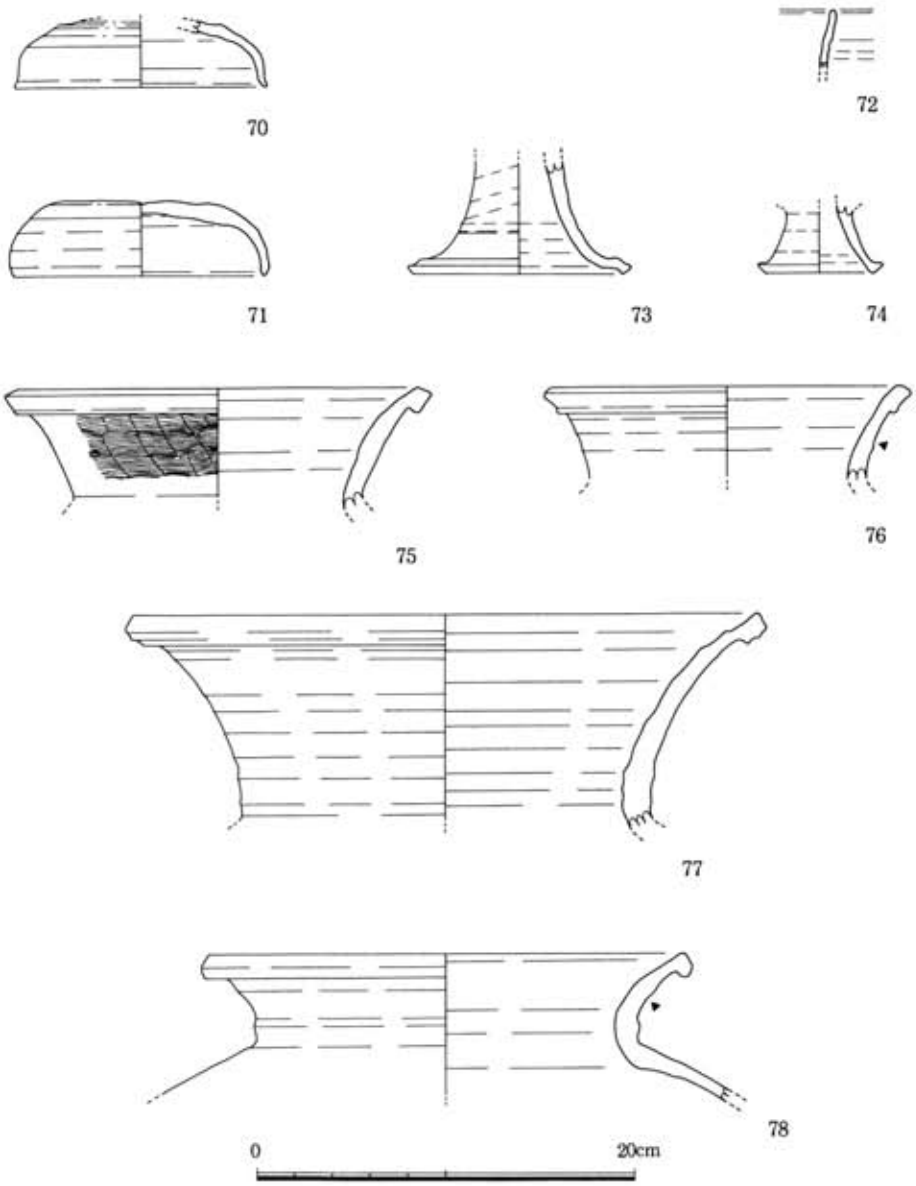


図14　3号墳出土土器（1/4）

4．4号墳

（1）位置と現状

北側尾根列に並ぶ1～4号墳の中で東端の最下部に位置する。玄室床面の標高は64.2mである。もともとは石室がほぼ完存しており、墳丘も良好な保存状態にあったようだが、昭和57～58年頃に、開墾のため墳丘の大部分と石室上部が破壊されて玄室内に石材を墳丘盛土もろとも

落とし込まれており、調査時は完全に埋没した状態であった。羨道部分の天井石は３枚とも残存していたが手前の１枚は崩れかかっていたために調査前に撤去した。

（２）墳丘・外部施設

近年の開墾で墳丘盛土の大部分が削平されてしまっていたが、聞き取りによると破壊前は天井石の上部で0.3～0.6mくらい盛土が残存していたようである。地山整形の状況は概ね把握できた。尾根に沿って墳丘基底面を平坦に、また端部を丸く削り出して地山整形を行っている。西側は尾根筋に直交して周溝を弧状に掘削する。幅は1.5～1.8m、深さは残りのいいところで0.6m程である。尾根上方からの排水目的で設けられたものであろう。周溝は両端が屈曲するものの中央部はほぼ直線的で、これから平面的墳丘規模を復元すると13.5（中軸側）×13m（尾根筋側）の、隅丸方形に近い楕円形の形状となる。

（３）埋葬施設

斜面に向かって南西方向に開口し、主軸をN26°Wにとる単室両袖型の横穴式石室を内部主体とする。玄室平面プランはいわゆる三味線胴張りの形状で、羨道の手前と前庭側壁が0.5～0.7m程の狭い幅で真っ直ぐに伸びている。ただ、羨道の大部分は多少の広がりをもち、前後を仕切石で区画して礫を敷いた擬前室構造となっている。石室掘方は右側手前が攪乱を受けているが、地山整形面で7.7×6.2m程の楕円形に掘削され、墓道部も同時に掘り込まれている。掘方掘削面は現状で石室左側（尾根上方）が右側より１m程高く、この段差分は２段の階段掘り状となっている。また石室後側は２段掘りとなっており、この面からの計測では6.2×５m程となる。切通し状となっていたと考えられる墓道は、等高線に直交して15°程の傾斜を持ちつつ直線的に主墓道に連結したようである。

石材は全て花崗岩の転石を用いる。規模は石室全長が前庭側壁も含めて7.2m、玄室は中央長2.8m、中央幅2.66mで、羨道長は約2mである。擬前室構造部分は中央長0.95m、中央幅1.14m、天井高1.3mを測る。羨門幅は0.7mで玄門幅は1.0mである。玄室天井部は破壊されているが、開墾者の聞き取りおよび玄室に落ち込んでいた石材の状況により、天井石１石のいわゆるドーム型に近い形状をしていたようである。腰石の上２～４段の壁体が残存していた。

玄室奥壁は中軸右よりに1.7×1.7mの三角形に近い石材を立てて鏡石状とし、右側の斜めに落ちる部分はそれぞれの大きさに合わせて10～50cmの角石を積める。左側は0.6×1.2m程の石材を縦位に据えて腰石とする。奥壁は85°程の傾斜で内傾しており、左右側壁もそれぞれ75～80°程の傾斜で内傾する。側壁の腰石は胴張りを意図してか、幅一杯の横長石材を用いるようなことはせずに、0.6～１×0.5～１m程の石材をそれぞれ４石ずつ縦位に据えている。この上は３～４段目まで残存していたが、２段目までは0.2～0.4×0.5～0.8m程の方形、長方形石材を横積みにし、３段目からは0.2～0.4×0.3～0.5m程の方形石材を小口に積み上げ天井部に

かけて持ち送っていたようである。床面は撹乱されているが、奥壁と左側壁縁に僅かに残存するような10～20cmの礫を敷きつめていたようである。

玄門部は左袖石に0.5×１m、右袖石に0.7×0.8m程の柱状石材を立て、この上に長方形石材を左側壁は１段、右側壁は２段を積んで玄門楣石を兼ねる天井石を架構する。左右両袖石の間は床に第２仕切石として横長の偏平石を据え、左側の隙間は石を挟んで補填する。

擬前室構造となった羨道は、手前両側に玄門袖石と同規模の柱状石材を立て前門状とし、床には横長偏平石と礫４個を組み合わせた第１仕切石を据える。玄門袖石との間は玄室側壁と同様に石材を縦位に据えた上に長方形石材を横積みにする。床も玄室同様10～20cmの礫を敷きつめる。前庭側壁は0.3～0.7×0.3～0.5m程の石材を横位に据え、この上は羨道手前部分が僅かに残存していただけであったが、小型の石材を乱雑に積み上げていたようである。

第１仕切石上から手前にかけて閉塞施設が僅かに残存していた。0.4×0.7mの板石が倒れ込

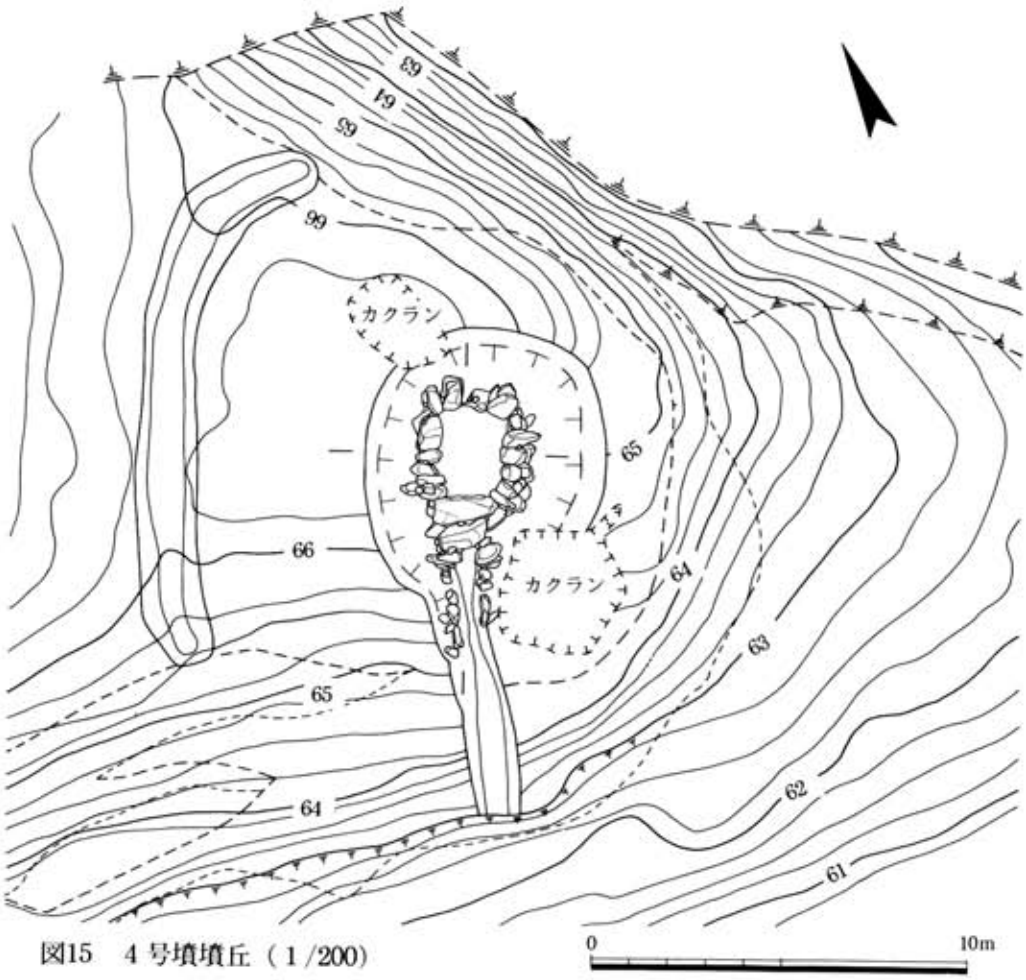
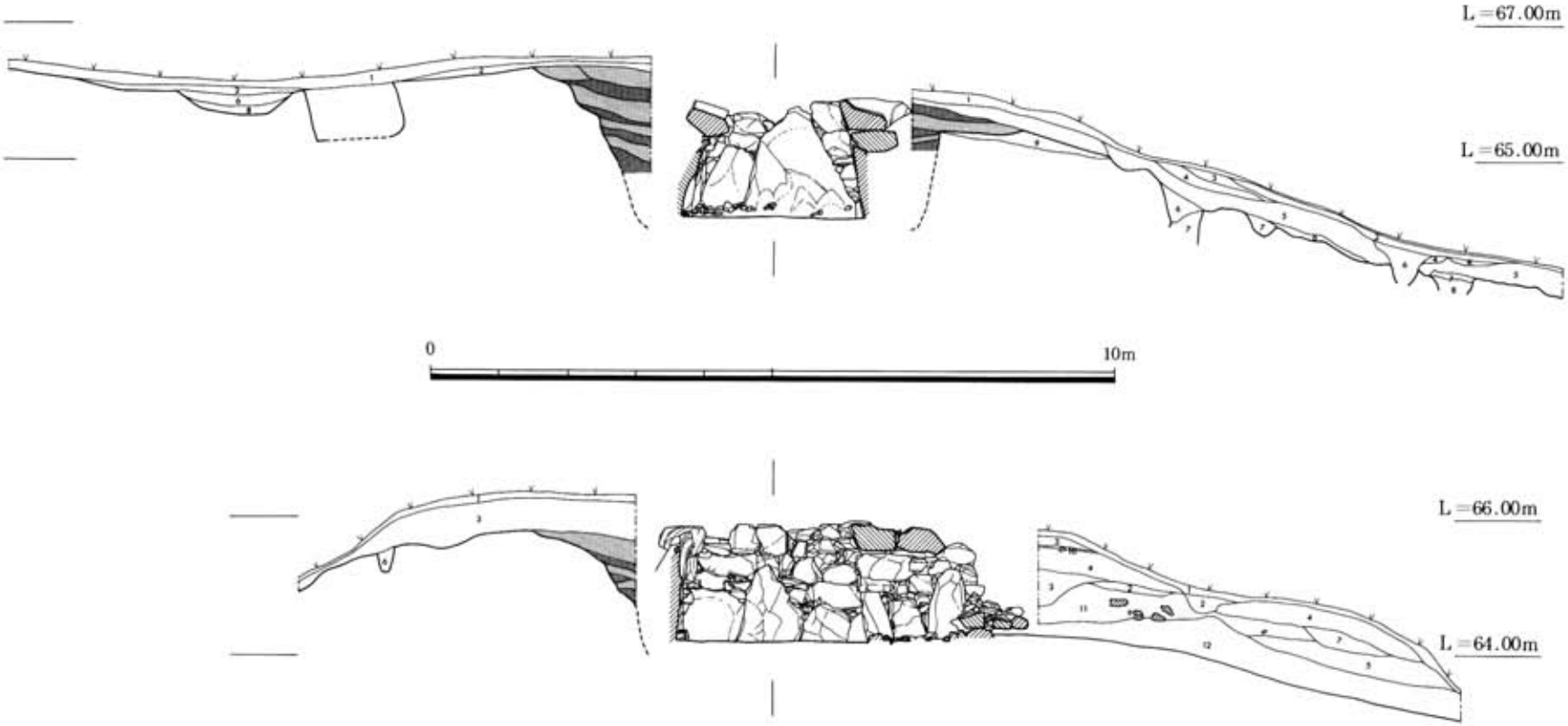


図15　４号墳墳丘（１/200）



黄褐色土
明褐色土

1．淡灰黒色腐植土
2．明黄褐色土
3．褐色土
4．灰褐色土
5．淡灰褐色土
6．淡灰黒色土
7．暗灰褐色土
8．黒灰色土
9．暗黄褐色土
10．黄灰色土
11．淡褐色土
12．淡黄褐色土

図16　4号墳墳丘土層図（1/100）

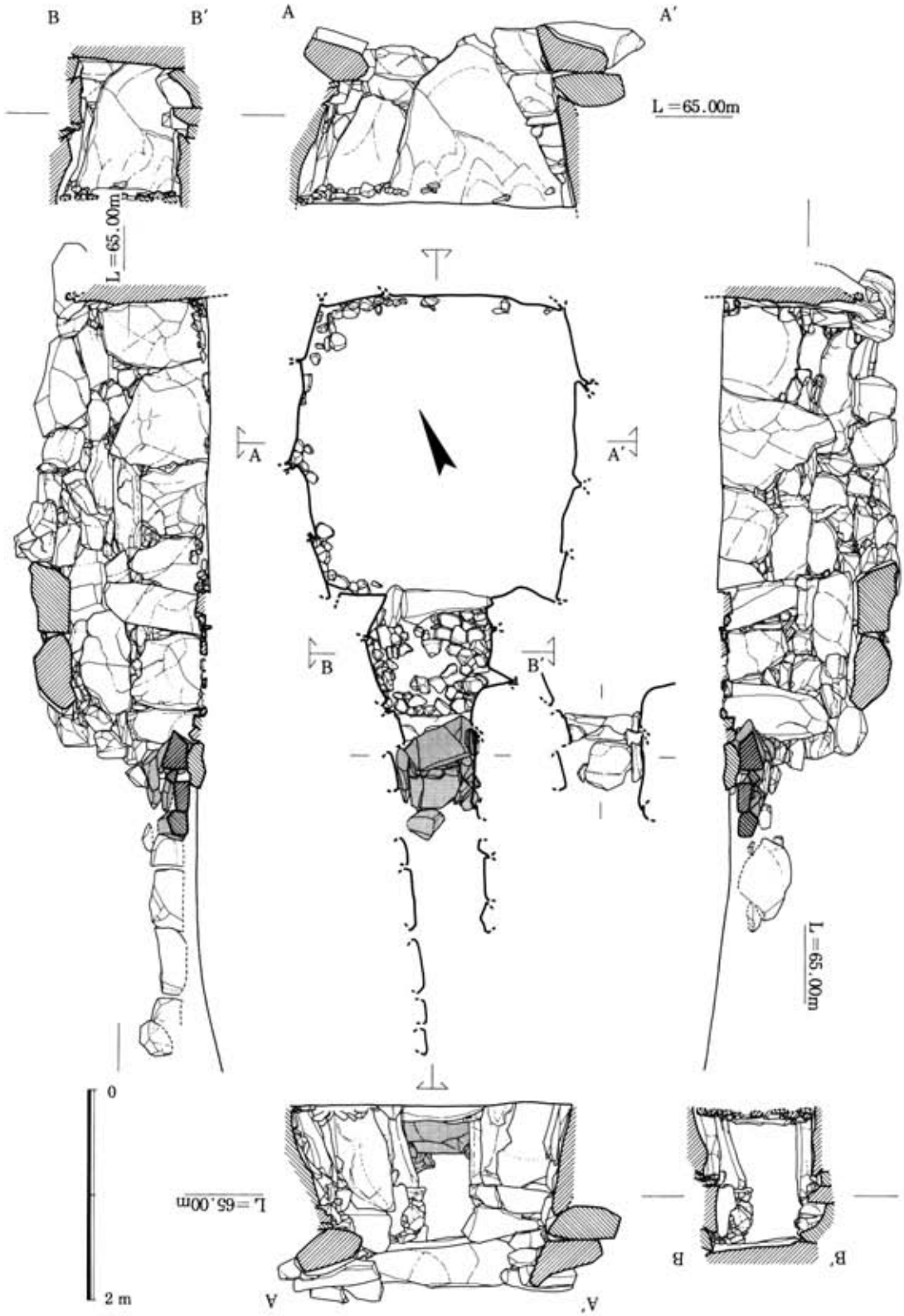


図17　4号墳石室（1/60）

んでおり、状況からこれを第１仕切石直上に立てたと考えられ、手前は0.4×0.7m程の石を２石平積みにして両脇の隙間は礫を詰めている。羨道～前庭幅が狭いためにこのような方法がとられたのであろう。

（４）出土遺物

出土状態

石室はもともとは開口していたために、玄室からは土器の細片と金属製品の残片が出土したにすぎず、原位置を保っていたのは擬前室構造部から出土した完形の無頸壺と若干の金属製品くらいである。墓道からは相当数の土器が出土したが、墳丘盛土中より蓋杯のセットが出土しており、この古墳の築造時期をおおよそ６世紀第３四半期に押さえることができる。

須恵器

79～84は杯蓋、95～115は杯身。底部、天井部回転ヘラケズリ。79と95は蓋坏の完形セットで、石室右側手前の墳丘盛土中よりかぶせた状態で出土した。79は天井端部に沈線に退化した稜が付く。95はたちあがりがやや内傾するものの口縁端部の段は明瞭に付く。96になると端部はもう丸くなっている。100・113はいわゆる赤焼き。80・95・97・98・100・102～104・110に

図18　４号墳墓道遺物出土状況（１/40）

ヘラ記号を刻む。85～93は蓋、116～124は坏。蓋は宝珠つまみを持つものと持たないものとがあり、坏はハの字形の高台を伴う。底部、天井部回転ヘラケズリ。91と123はセットで、87・88はいわゆる赤焼き。91は宝珠つまみをやや押し込む。119は坏部が椀のような形態で、口径に比してやや浅い。120は高台が直立気味にのびる。90・92～94・116・117・119・120にヘラ記号あり。125～132は高坏。125は有蓋高坏の様相をかすかに残し、坏部はたちあがり状に内傾して、受け部状のわずかな段が付く。125・126は長脚の2段3方透かしを持ち、坏部は段が2つある。128になると段が退化して沈線が2状巡り、脚部は透かしを持たずカキ目調整を施す。133は甕。焼成が甘く軟質である。ラッパ状に長く外反する口頸部にタテ方向の櫛描文、胴部には沈線に挟まれて櫛描列点文を施す。134・135は有蓋無頸壺。134は擬前室部出土。胴部半ばまで回転ヘラケズリ。底内面にヘラ記号。135は口頸部を欠く。胴中部に2条の沈線を持ち、底部にヘラ記号を刻む。

これらはMT85～TK48型式（ⅢA新～Ⅵ期）に相当する。

土師器

136は蓋。須恵器の蓋と同様の造りである。137～140は坏。かすかな段を残し口縁はほぼ直に立ち上がる。141は皿。内外面に丹塗りを施す。142は椀。143～146は高坏。143・144は体底部の境がかすかな段の痕跡をとどめる。145は底部カキ目調整。146は坏上部を欠くが台付きの椀のような形状で、短い脚に内湾した坏が付く。147は甑の把手部。

装身具・金属製品

148～152は耳環。148・150が墓道、あとは玄室床面より出土。148は中空の銅板造り金張り、4.4g。149はおそらく純金製であるいは垂飾が付いていたかもしれない。1.4g。150(6.4g)・152(7.1g)は鉄芯金銅張り。151は銅地金張り、2.4g。153は臼玉。玄室より出土。滑石製で径0.8cm。154～156は鉄刀の残欠。玄室より出土。154は刀身の脊部で155は茎の先端部。156は把元金具の一部であろう。157～161は刀子。擬前室部出土。157は刃部。158～160は刃部と茎の先端を欠失する。158・160は両角関で159は片関。161は刀子の金銅製の責金具。単なる工具に限らず装飾を施した刀子もあったようである。162～177は鉄鏃。擬前室部出土。162～164は平根式脹抉長三角形型で鏃身部全体に刃を付ける。鏃身断面両丸造。162は脹抉が大きく張り出す。165・166は平根式斧箭型で鋒先は丸みを持つ。鏃身断面両丸造。167～174は尖根式小型柳葉型。鏃身断面は167.168が両丸造で、あとは片丸造。175～177は尖根式鏃の頸部。178は弓付属金具。玄室出土。両端が円球状で中央部に木質が残存する。179～198は馬具の残欠。玄室より出土。179・180は1対の鞍(しおで)金具。181～183は轡の部分。184は部位不明。曲がった棒状の片端に別の金具が付く。185は飾り付きの鋲。186～189は鐙本体。190は雲珠。鉄地金銅張り。半球部の復元径5.5cm。191～195は留金具。鉄地金銅張り。196～198は対の心葉形杏葉。鉄地金銅張り。

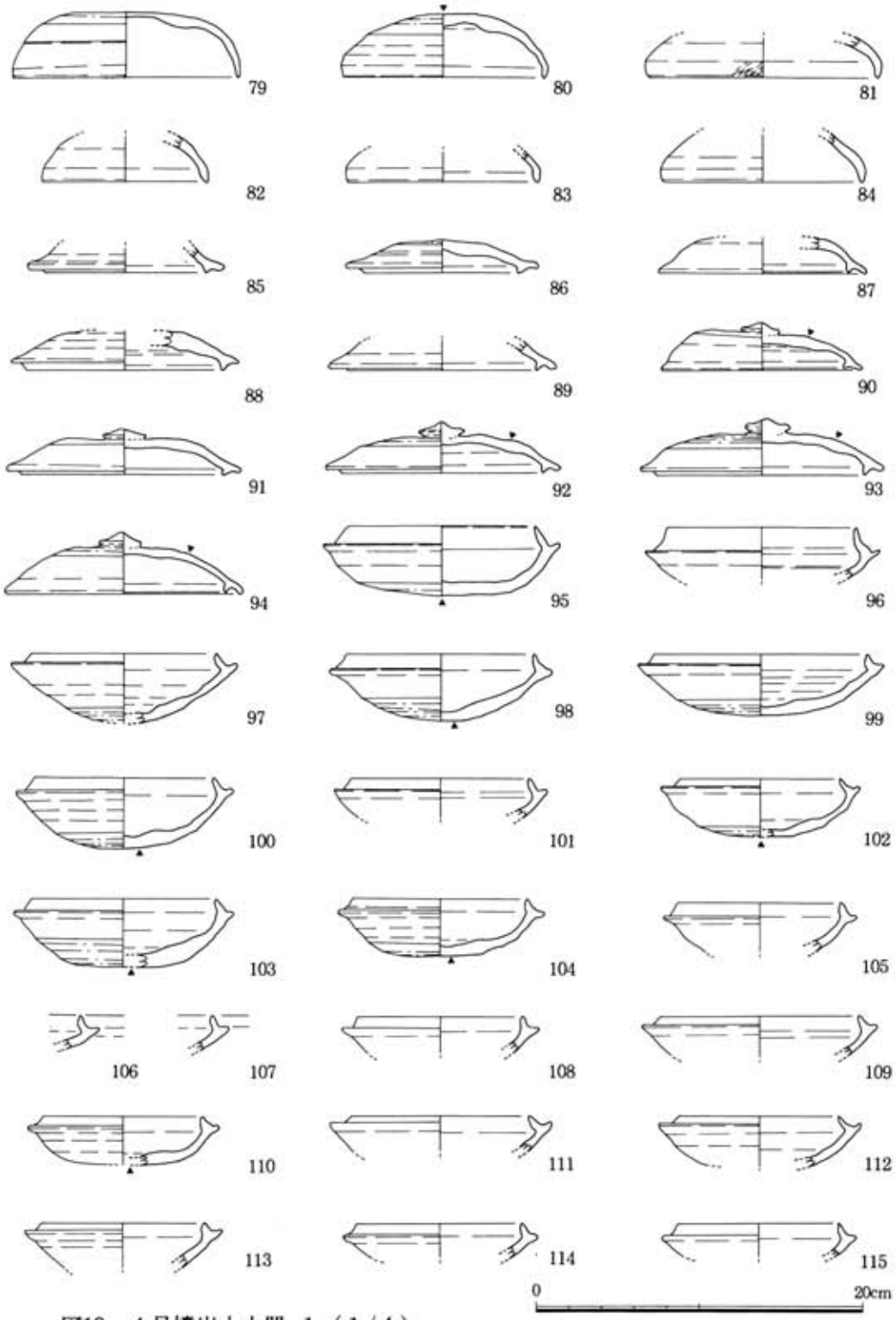


図19　4号墳出土土器 1（1/4）

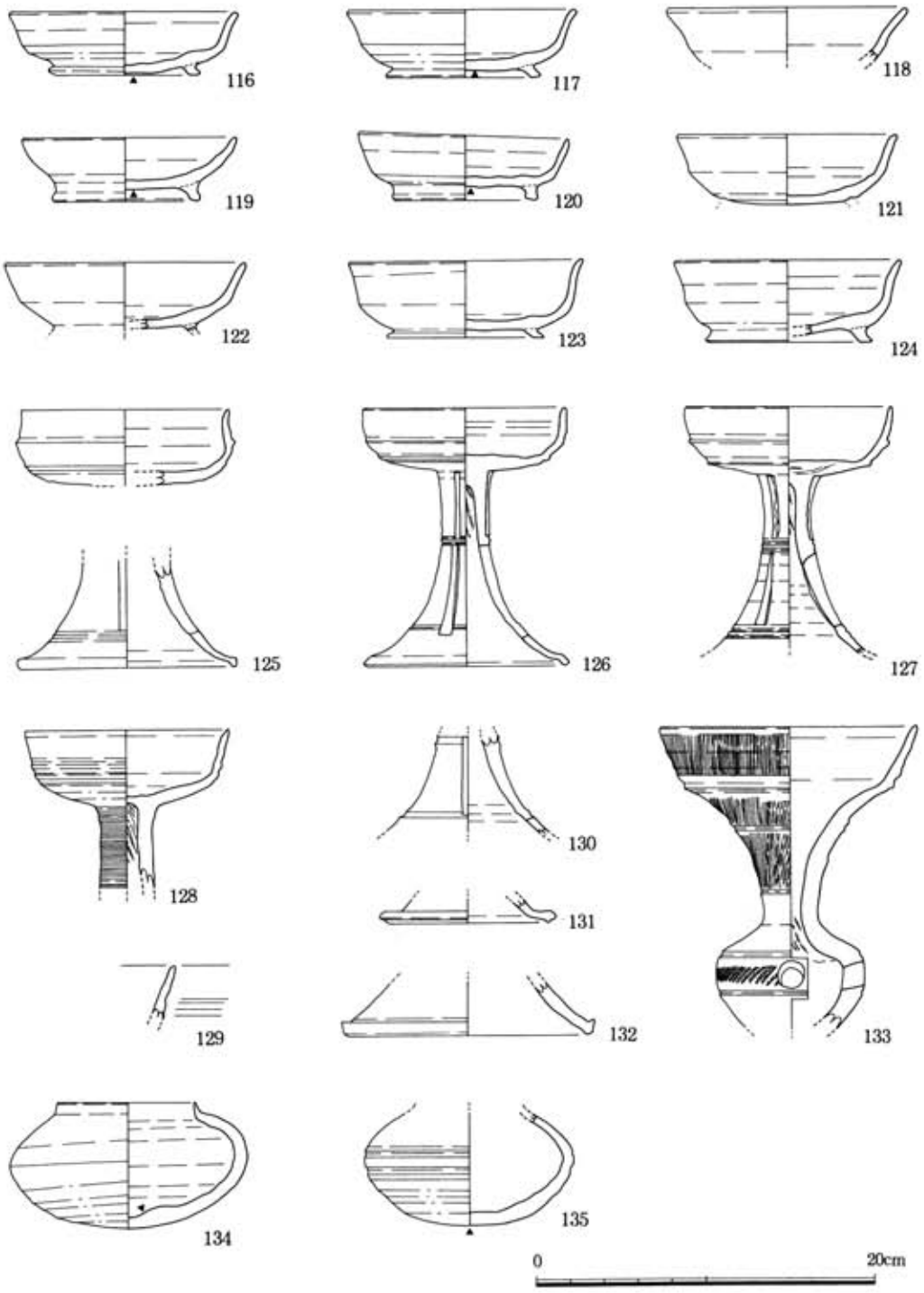


図20　4号墳出土土器 2（1/4）

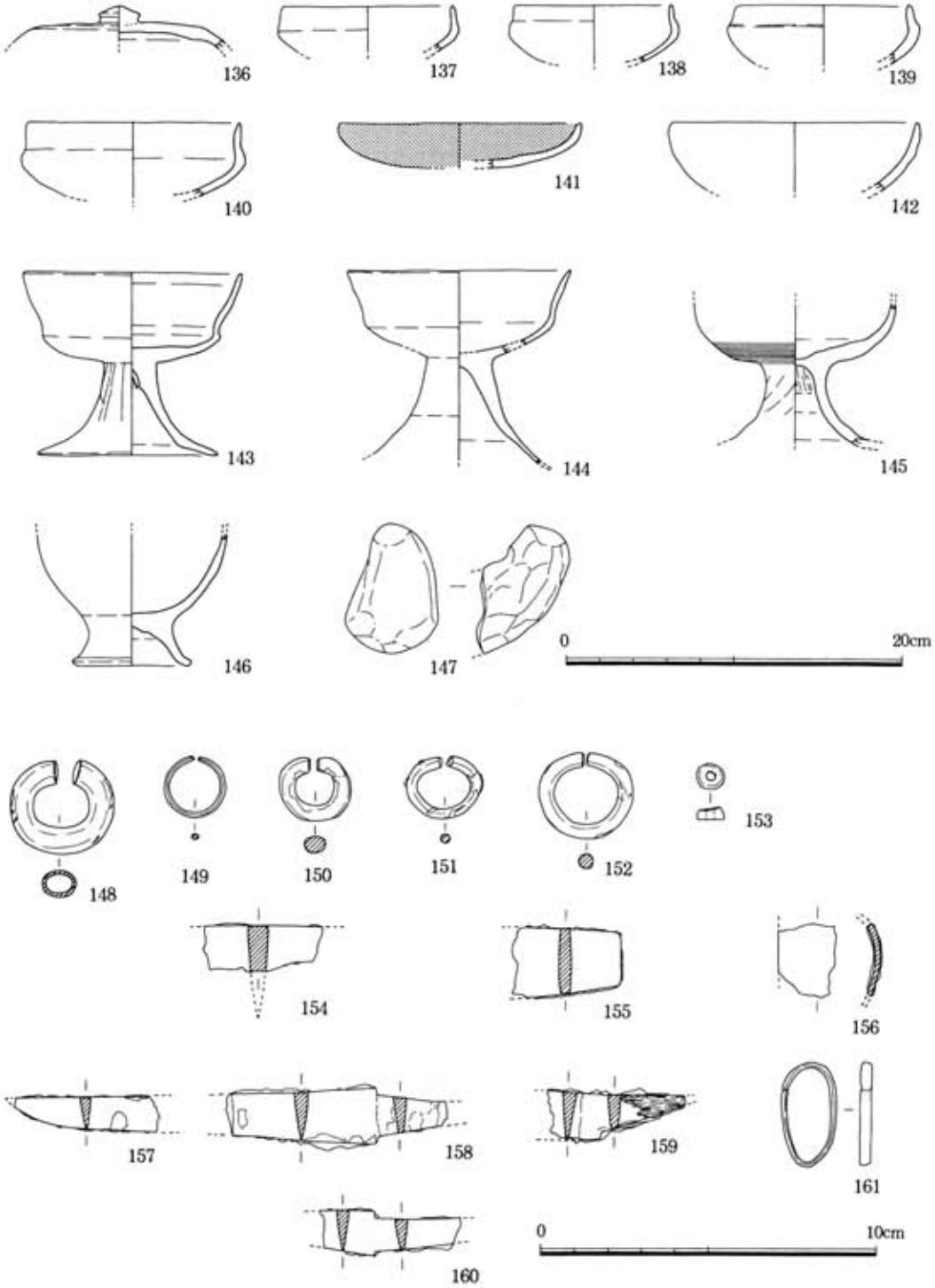


図21　4号墳出土土器 3（1/4）および装身具・金属製品 1（1/2）

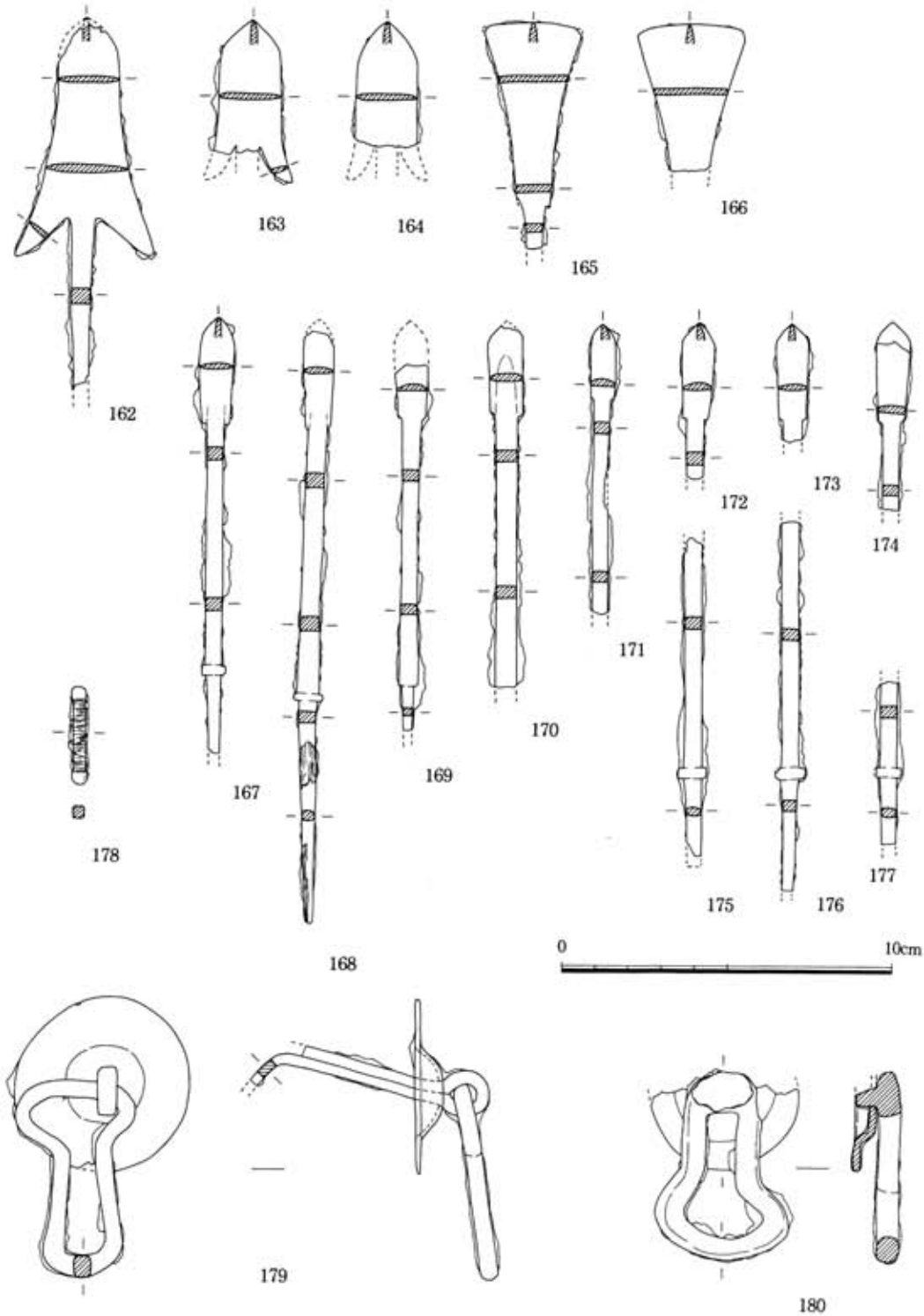


図22　4号墳出土金属製品 2（1/2）

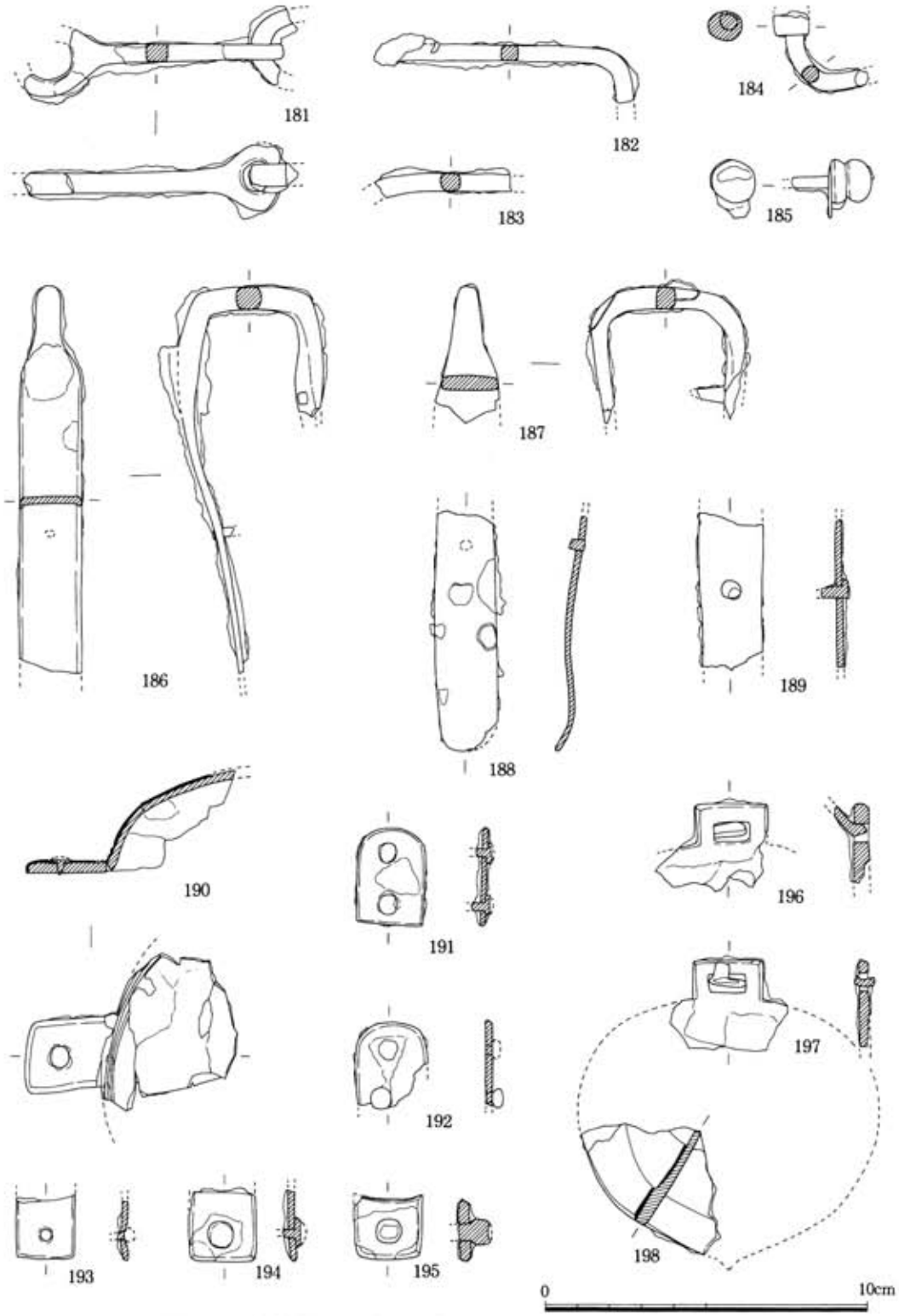


図23　4号墳出土金属製品 3（1/2）

5．5号墳

（1）位置と現状

南側尾根列の最上部に築造される。丘陵尾根頂部よりはやや下がった位置になり、すぐ背後には1号墳が主墓道を挟んで接している。玄室床面の標高は76.2mで、1号墳より2.5m程低くなる。1号墳は本墳の陰になる格好であるが、本墳築造時に墳丘が1号墳の開口部からの視界を遮らないように配慮した形跡がうかがえる。また東裾には小石室墳の8号墳が位置する。墓道の先は崩落して崖状になっているが、往時は東に回り込んで6号墳との間を通り谷状の主墓道に連接していたものとおもわれる。石室は完存し、墳丘もほぼ良好に残存していた。調査前は完全に埋没していて樹木が茂っており、樹木を伐採し表土を剝ぐまで存在が知られていなかった。

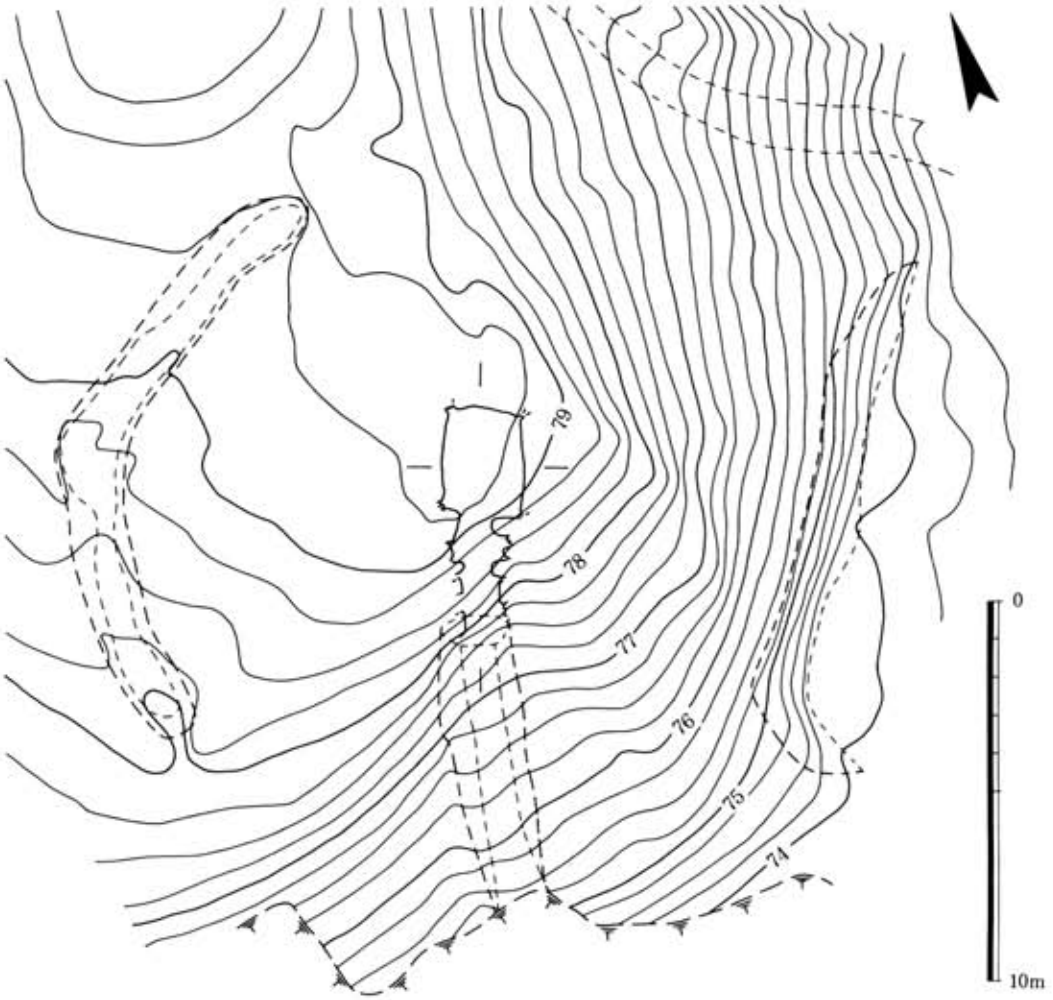


図24　5号墳墳丘（1/200）

（2）墳丘・外部施設

南側尾根に沿って墳丘基底面を地山整形するが、石室掘方部分にほぼ限定して削平しており、墳丘基底面はもともとの尾根斜面を大きく改変することなく整地している。墳丘は上部が植生で土壌変質していたものの概ね良好な遺存状態であった。平面的墳丘規模は径約18mの不整円形である。墳丘盛土は尾根の斜面に合わせて設定しているために、石室右側を中心に盛土している。地山整形面の石室掘方掘削面から高さ1.3～1.7mを測る。石室中心から9.2m程右側の斜面に段を削り出して墳丘裾としており、下から見上げた時に墳丘を大きく見せる工夫がなされている。このため墳丘裾は石室右側と左側とでは５m近い比高差がある。左側（西側）には丘陵頂部からの尾根線を断ち切るように、墳丘裾周1/4強程の弧状の溝が巡る。幅は1.5～2m、断面船底型で深さは残りのいいところで30cm程である。この溝は墳丘頂部からの排水目的で掘削されているようである。

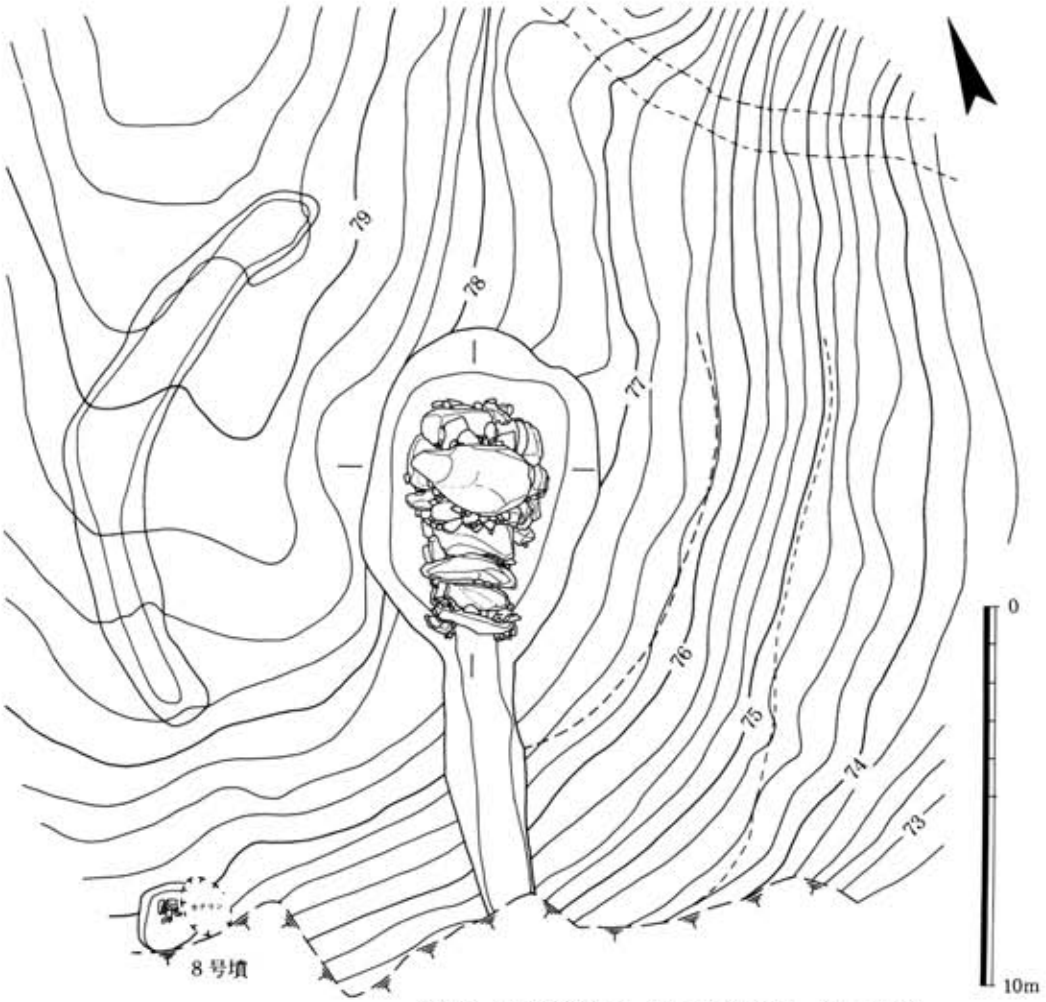


図25　５号墳墳丘（封土除去後）（１/200）

（3）埋葬施設

南西斜面に向かって開口し、主軸をN19°Wにとる複室両袖型の横穴式石室を内部主体とする。墳丘、石室共に遺存状態は良好で石室は天井部まで完存していた。開口部は埋没しており、あるいは未盗掘墳かと期待されたが、内部はすでに相当撹乱されていた。検出時、玄室内部は人頭大の塊石が多数散乱しており、この10～20cm下に前室床面とほぼ同じ高さになる最終検出床面が現れた。これは追葬時にいわゆる“床上げ”を行ったとみていい状況だが、当初の床面敷石はコーナー部分に僅かに小礫が残っていただけである。

玄室平面形態は長方形を意図し、奥壁、左右側壁とも腰石は巨石１石からなる。前室平面は幅広の長方形で、本古墳群では唯一前室として規定できる。もっとも、前門楣石は設けておらず、天井高は羨道と同じである。規模は石室全長5.78m、玄室中央長2.78m、中央幅2.2m、天井高2.4m、前室中央長0.84m、中央幅1.42m、天井高1.4m、羨門幅1.1m、前門幅0.68m、玄門幅0.82mを測る。羨道長は1.6mである。石室掘方は９×６m不整長楕円形で、切通し状の墓道を同時に掘り込む。墓道は石室中軸に対して10°程西に屈折するが、これは墳丘東側から回り込んだ主墓道の枝道が連接するためであろう。

石材はすべて花崗岩の転石を用いる。奥壁は腰石に15×2.3m程の巨石を横位に据え、この上に1.5×1.0m程の石材を横積みにし、左側の隙間に石材を充塡する。３段目からは方形・長方形石材を２段横積みにし、さらに側壁との段差を補塡する割石を平積みに挟んで天井石に持ち送る。奥壁腰石は巨石であるがその石面を巧みに利用して奥壁全体を20°～25°程の傾斜で内傾させている。また左側壁は20°、右側壁は15°程の傾斜でそれぞれ腰石上段から内傾する。左右両側壁ともに同様の構造で、腰石の上はそれぞれ長方形、方形の石材を４段横積みにして持ち送るが、右側壁がより大型の石材を用いている。

前壁は玄門袖石に左右それぞれ1.5×0.5m、1.4×0.7m、奥行き0.7～１m程の柱状石材を立て、玄門楣石は2.4×0.7m程の石面が20°程内傾する横長の巨石を架構し、この上は２～３段小板石を平積みにして持ち送る。コーナーの隙間は小型石材を積んで補塡する。玄門袖石の間には幅一杯に幅0.4m、厚さ0.3mの石を据えて第２仕切石とする。前門袖石は左右とも玄門袖石より一回り小さい柱状石材を立てるが、前室側壁はこの前後の袖石に挟まれて腰石に0.6×0.8m程の石材を縦位に据え、中段は石材を横積みにし、上段は前後の袖石から左は１石、右は２石の横長石材を渡して玄門楣石を含む天井石を架構する。前室床面は10～30cmの礫を敷く。前門部の第１仕切石は幅0.2m、厚さ0.3mの石を据える。羨道および前庭側壁は0.6～0.9×0.3～0.4m程の石材を横に据えてプランを設定し、この上は小型の不整石材を雑に積み上げる。前庭右側壁は0.6×0.3m程の石材を立てた上に小型石材を横積みにする。

天井石は全部で６枚を架構する。玄室は天井石１枚で径33×２m程の不整楕円形の偏平巨石１枚を載せる。前室と羨道には５枚を架構する。石材の裏側はところどころ青灰色粘土を漏水

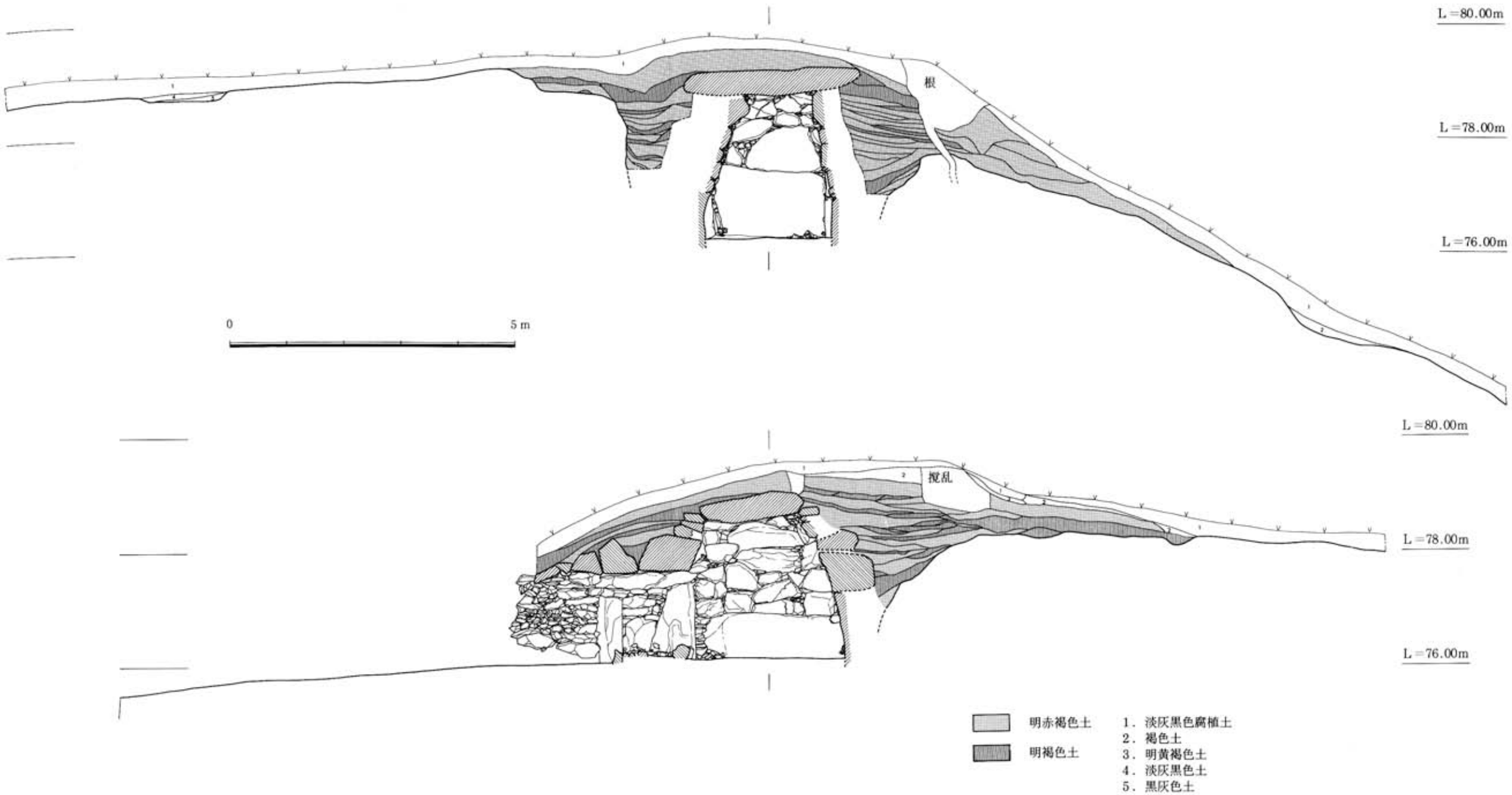


図26　5号墳墳丘土層図（1/80）

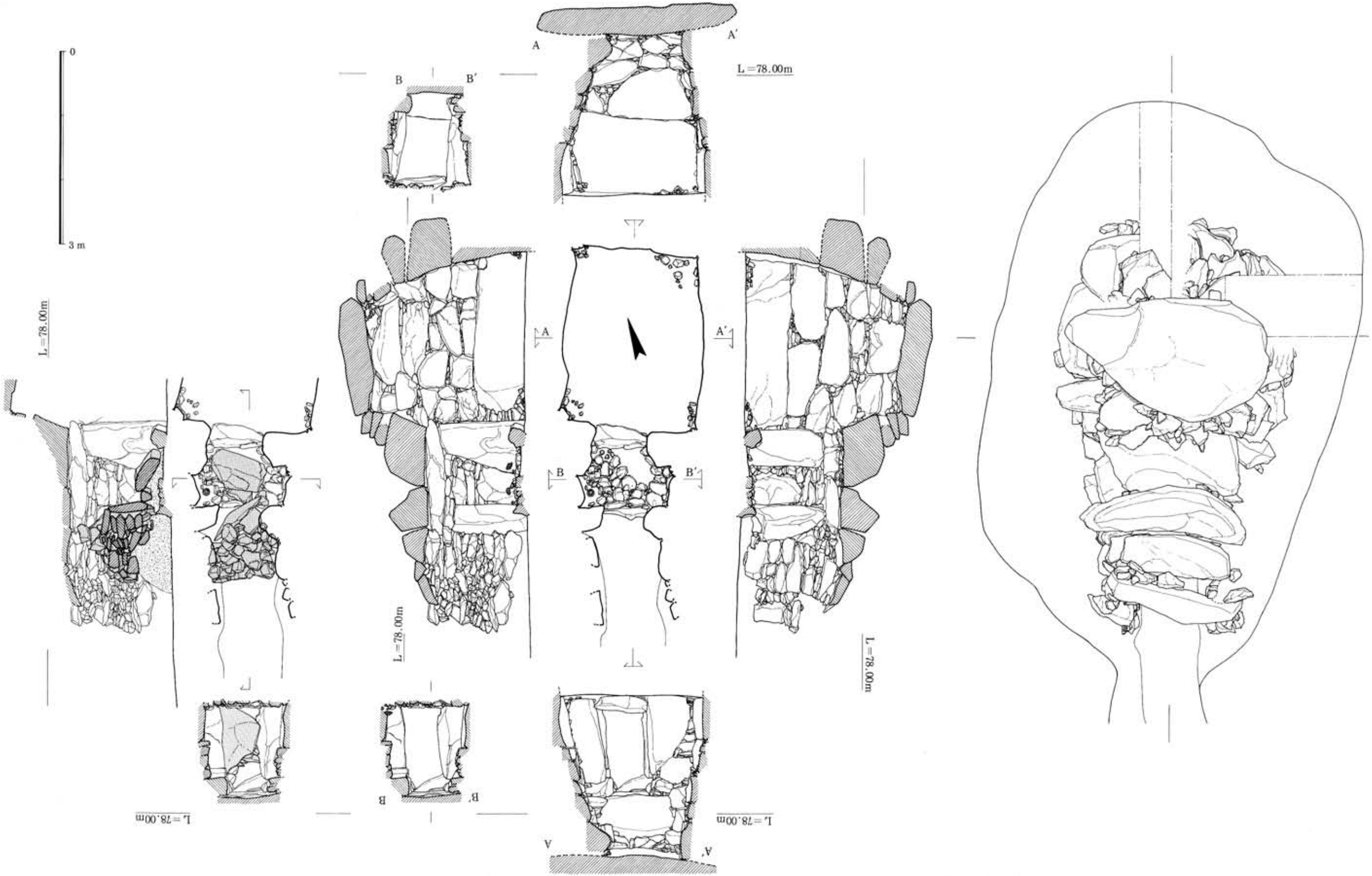


図27　5号墳石室・石室閉塞施設残存状況および石室掘方・天井石（1/60）

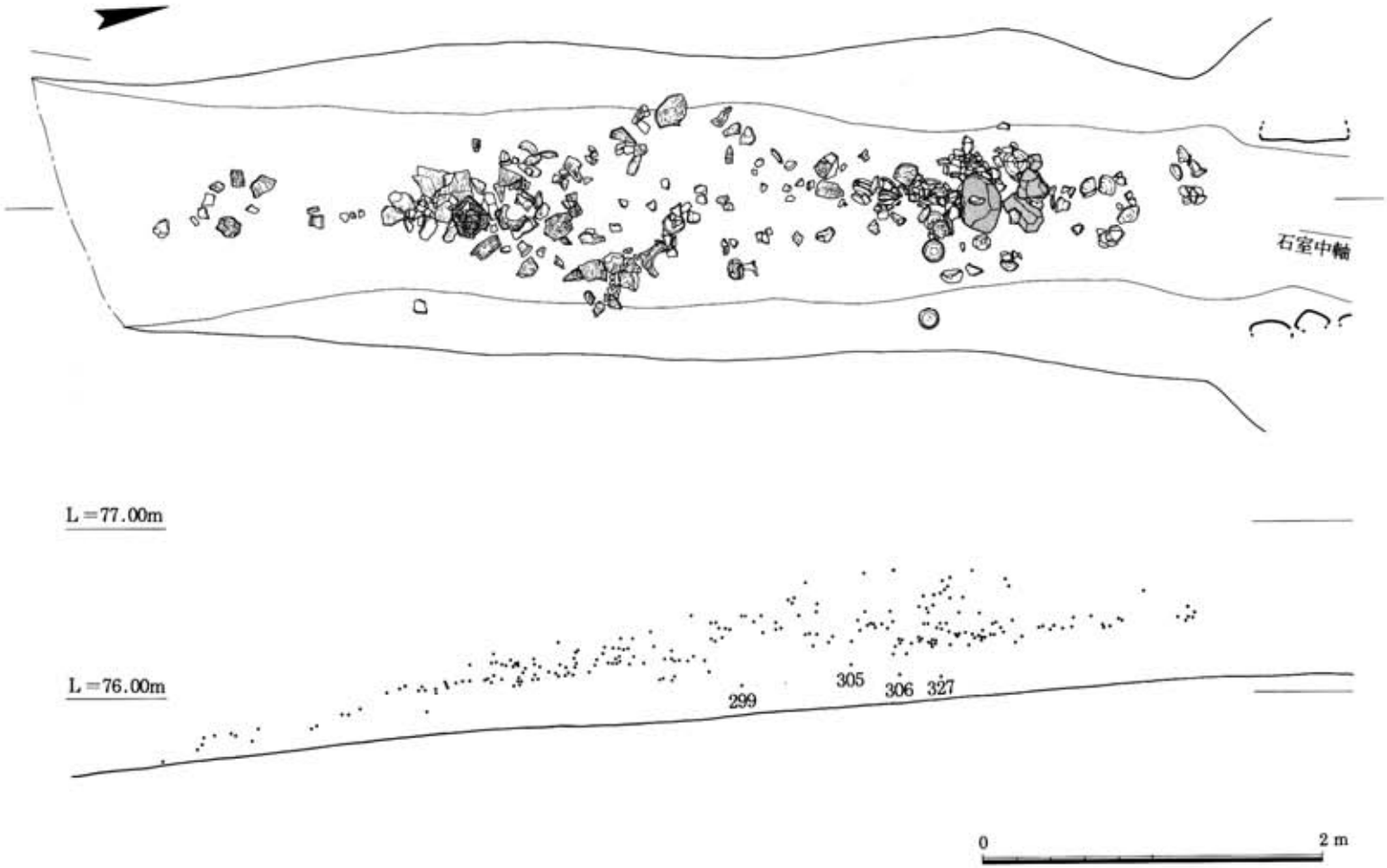


図28　5号墳墓道遺物出土状況（1/40）

防止に詰める。

閉塞施設は第１仕切石の手前にある。当初の羨道底面より40～60cm堆積した上に設けられており、追葬時に全てを再構築したものであることがわかる。盗掘時に多少ずらされていたが、0.8×1.2m程の板石を立て、手前に20～40cmの礫を５～６段雑に積む。もとは天井まで積み上げていたのであろう。ここで興味深いのは前室に0.8×1.2m程の板石が倒れた状態で検出されたことである。この板石は状況から当初は玄門に立てかけていたとみられるが、倒れた面は玄室床面で当初検出された人頭大の塊石が散乱していた面とほぼ同じレベルであり、“床上げ”時にはこの板石が前室「敷石」になっていたようである。この玄門板石閉塞は初葬時のものとおもわれ、状況から玄門、前門の同時閉塞である可能性が高い。いずれにせよ、この石室は前室としての「機能」が追葬時には忘れられて単なる羨道としていたことになる。

（４）出土遺物

出土状態

玄室から灯明皿に使用したと思われる室町期の土師皿が出土しており、この頃より盗掘・撹乱を受けていたようである。遺物は石室内からは数点が出土したのみで、大半が墓道からまとまって出土したものである。また、墳丘からも若干の土器片が出土した。盛土中から出土した蓋坏の破片から古墳築造時期をおおよそ６世紀第３四半期内に押さえることができる。

須恵器

198～239は杯蓋、240～293は杯身。202と250、208と256、224と262、239と284が蓋坏セットになる。202・226・233・248・250・255・291はいわゆる赤焼き。199～200の杯蓋と240の杯身は墳丘Ｉ区盛土中出土。199・200は天井端部に沈線を巡らして稜を浮かび上がらせるが、201になるともう沈線を巡らすだけである。ともに口縁端部内側に内傾しない段をヨコナデによって付ける。240はたちあがりが内傾し、口縁端部を丸く仕上げる。294～296は椀。294・295は平底で296は丸底。297～304は高坏。297は坏部に段を持つ。298の坏部は口縁直下までカキ目調整。298・299の坏底部には刻み目文を施す。300は小型の高坏。305は壺蓋。307に伴うものであろう。306～308は有蓋無頸壺。309・310は鞍。309は口頸部が短く外反し、穿孔部の周囲は粘土紐を巻くが、造りは311の長頸壺と同様である。311～313は長頸壺。313は底部３方向に同種のヘラ記号を刻む。314・315は台付長頸壺。315は脚裾部のみ。脚部の段は314は不明瞭だが、315は明瞭に付く。316～319は平瓶。316は口頸部が中央に付き、直口壺状となる。肩部に刻み目で綾杉文を巡らす。320は提瓶。口頸部を欠く。底部４ヶ所に粘土片を貼付して焼成時にすわりを良くしたのがそのまま癒着して残る。321～326は甕。

これらはＭＴ85～ＴＫ217型式（ⅢＡ新～Ⅳ期）に相当する。

土師器

327～331は高坏。332は短頸壺。333・334は椀。335は土師皿、底部糸切り離し。

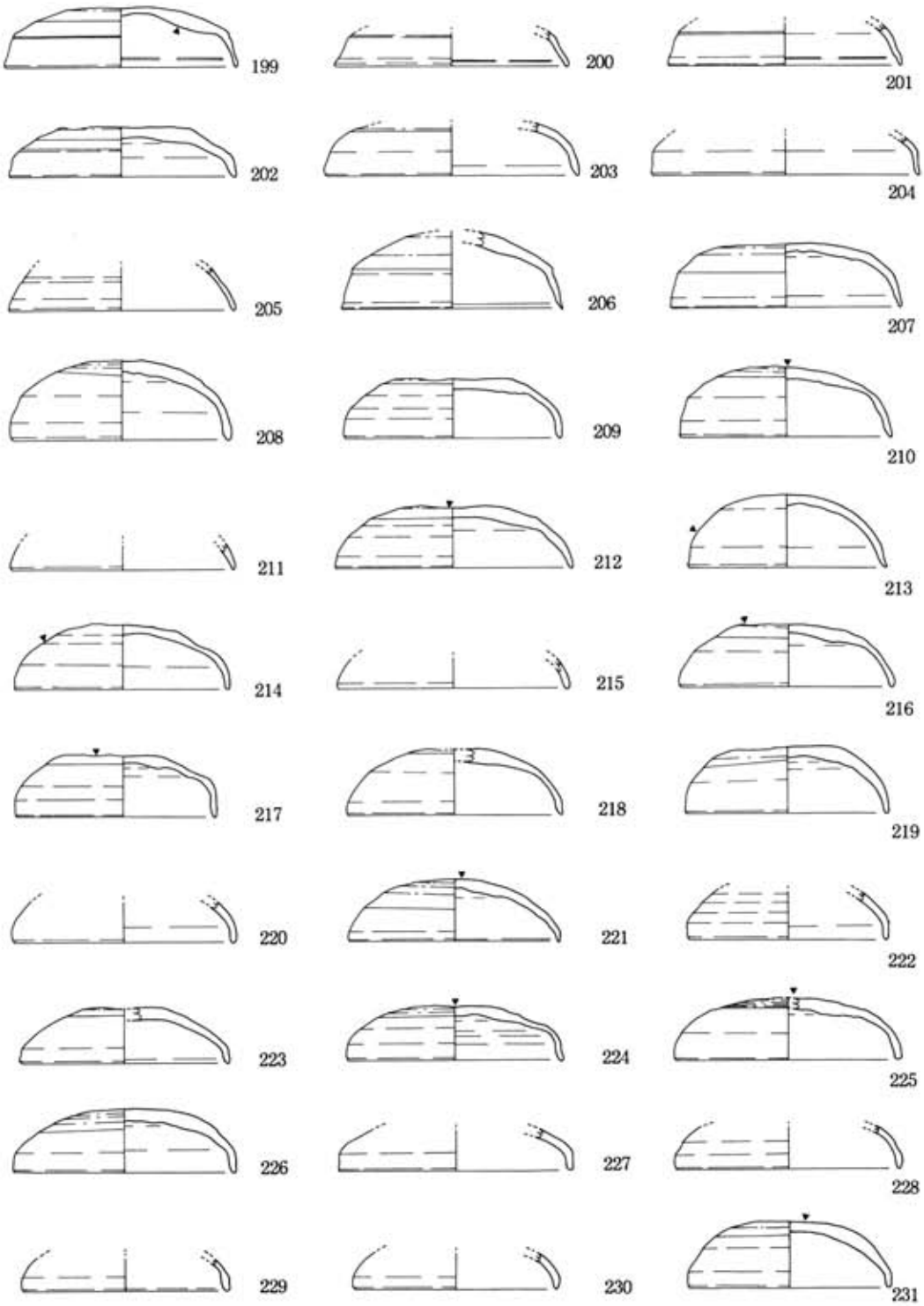


図29　5号墳出土土器 1（1/4）

0　20cm

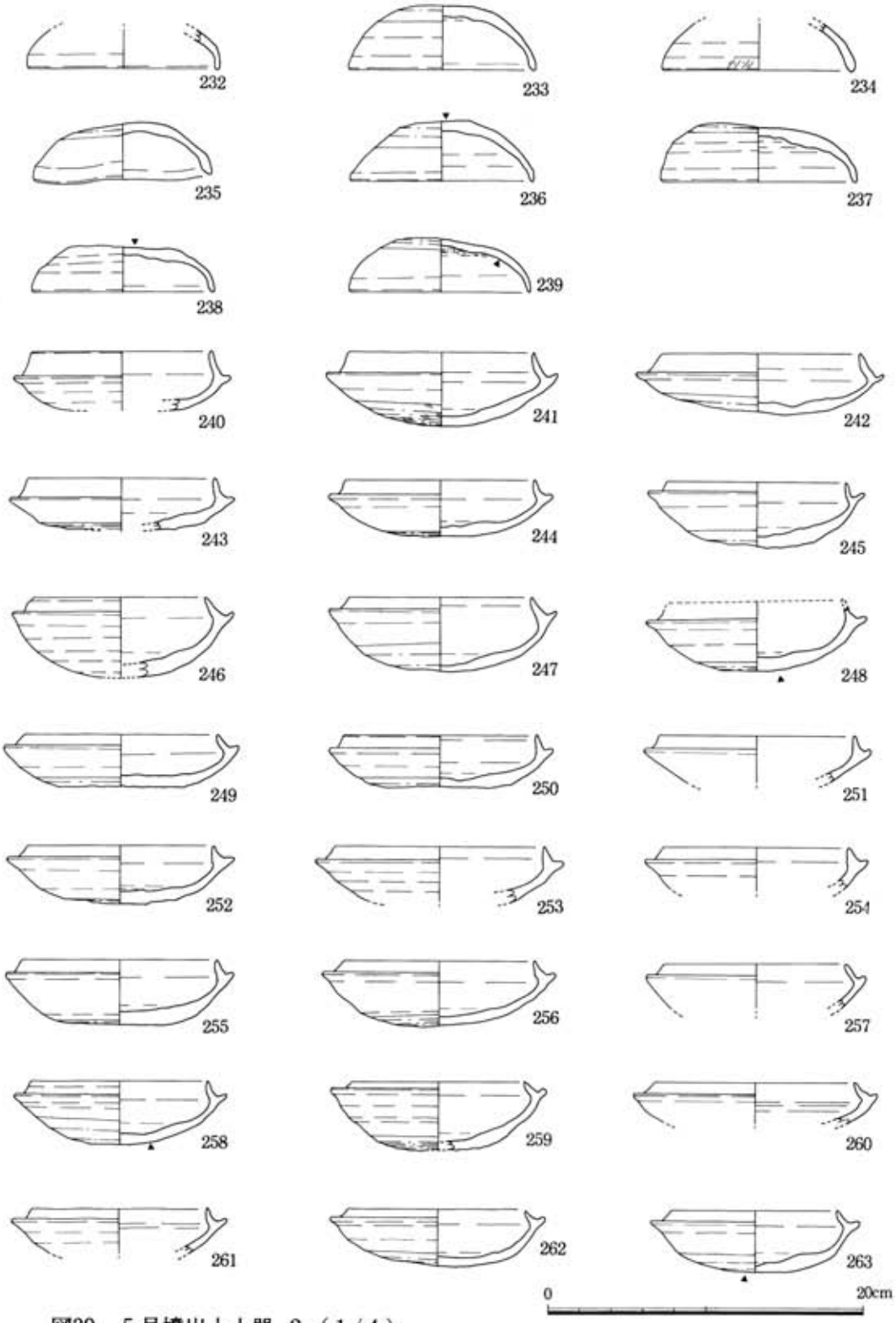


図30　5号墳出土土器 2（1/4）

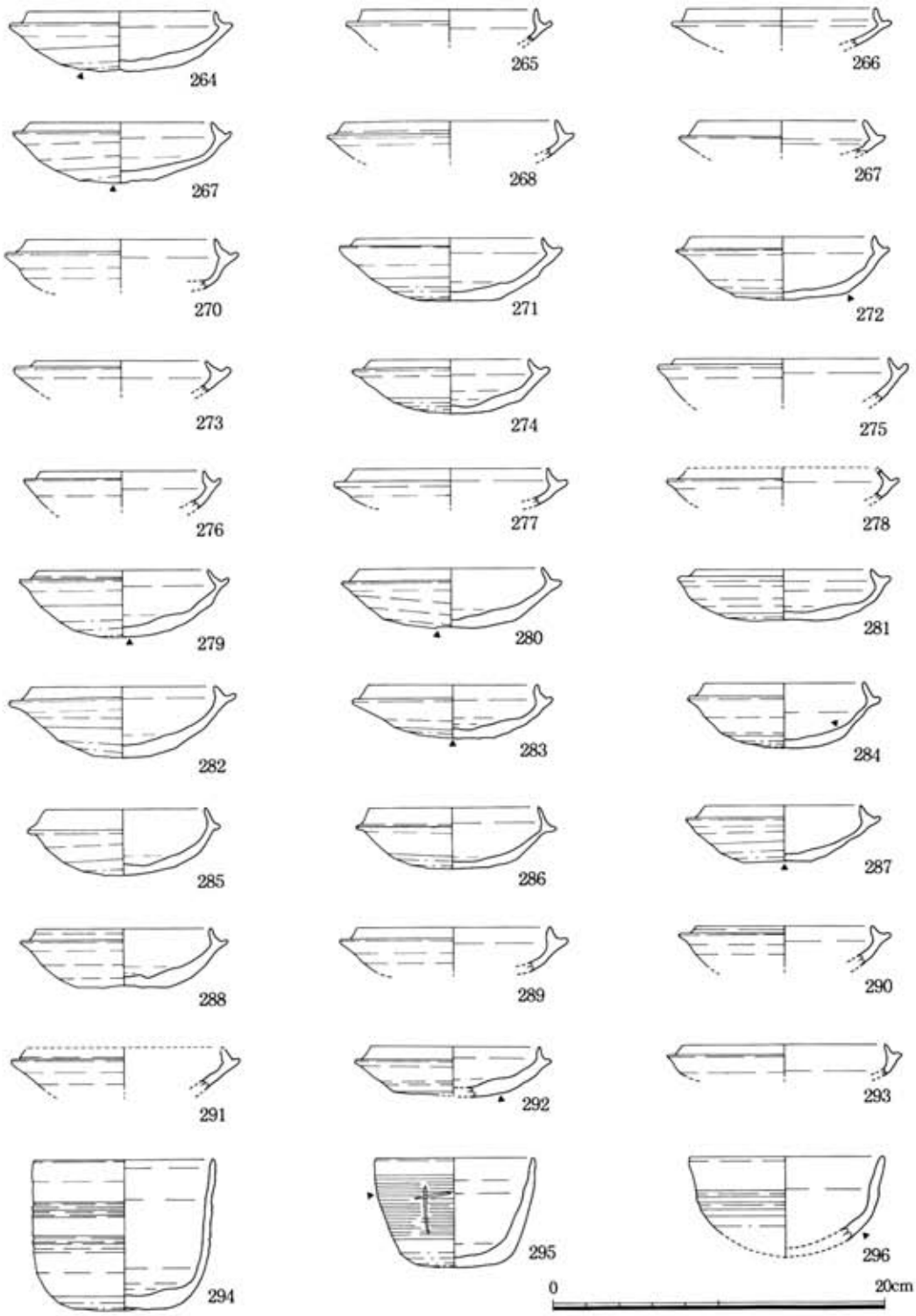


図31　5号墳出土土器 3（1/4）

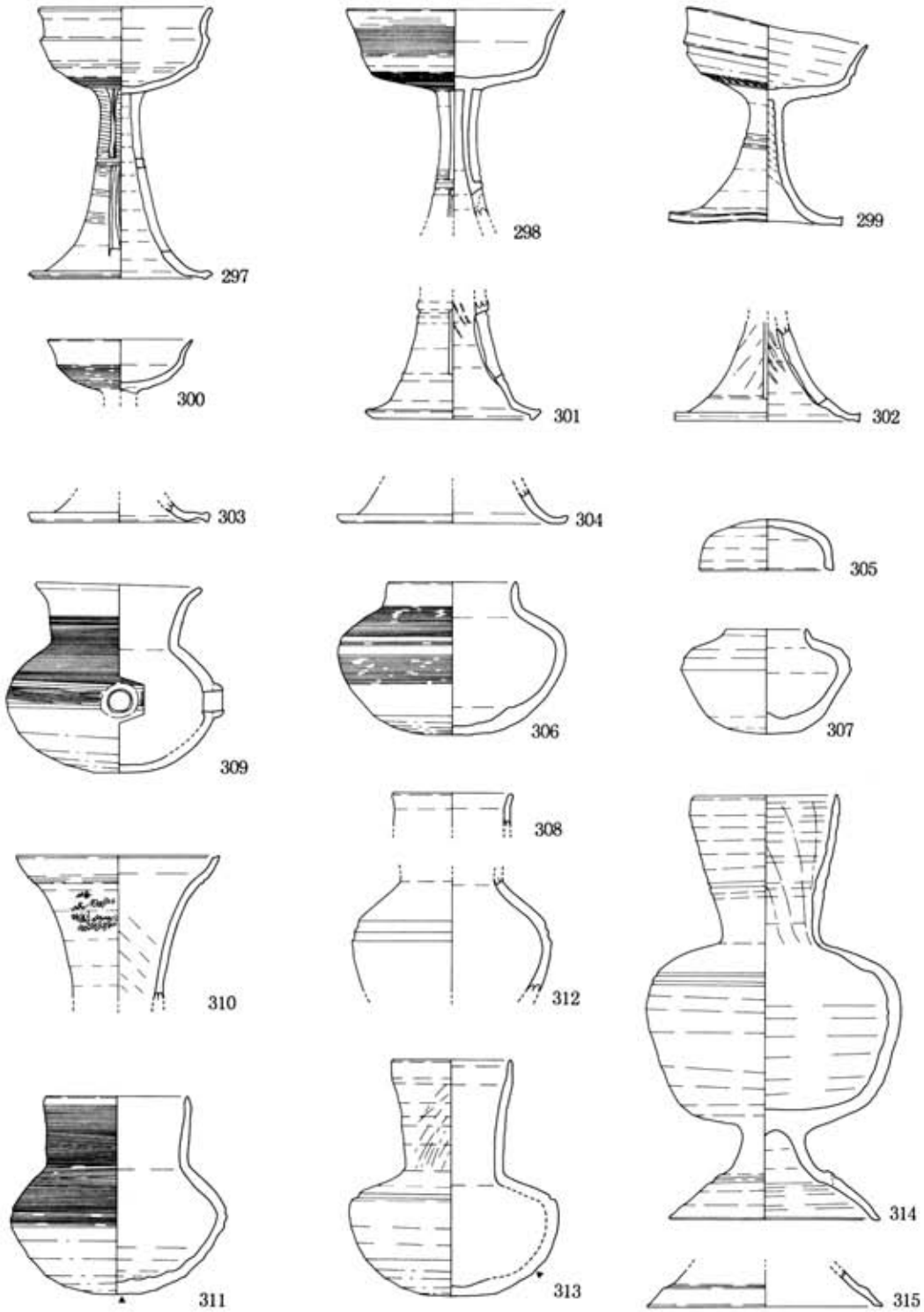


図32　5号墳出土土器 4（1/4）

0　20cm

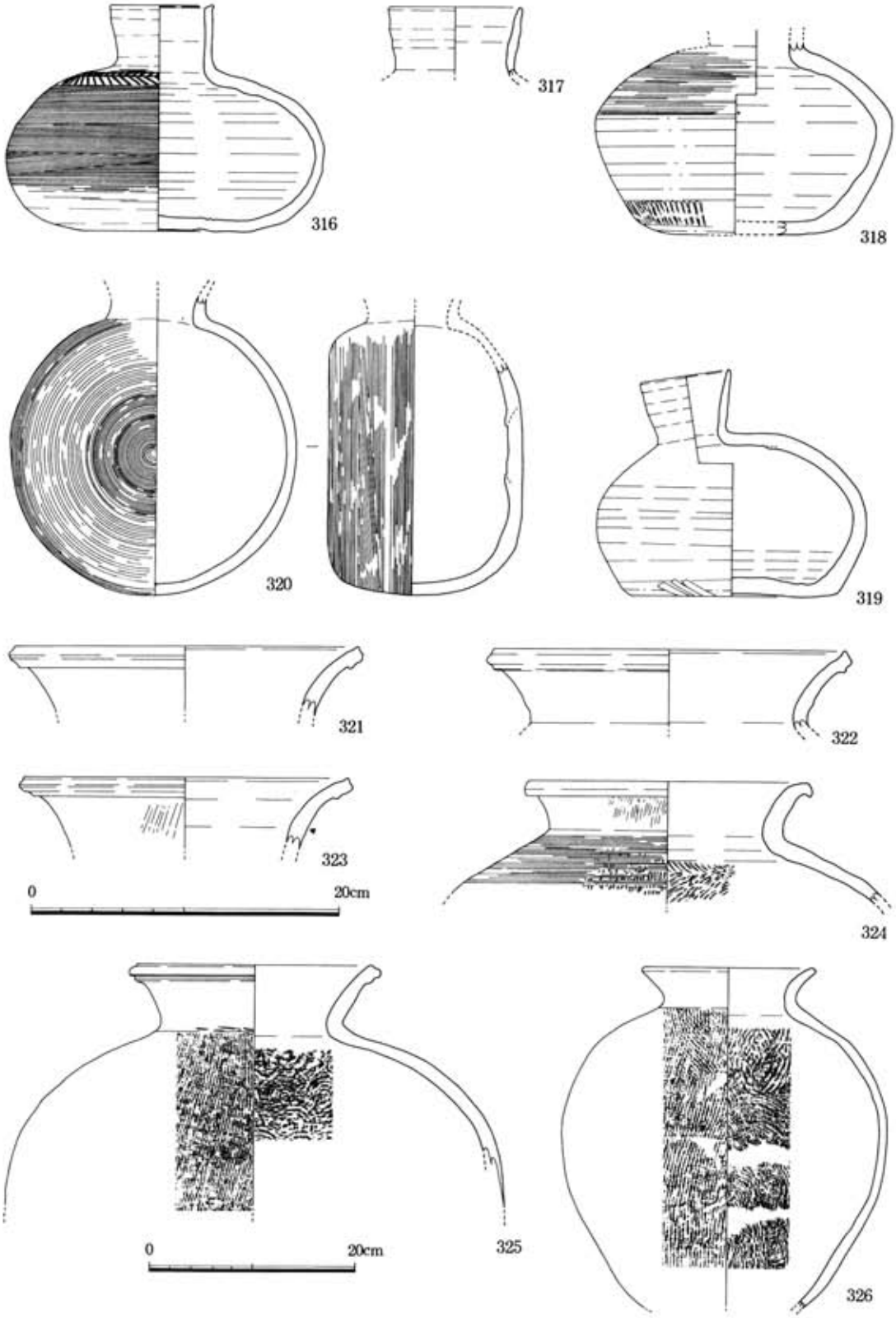


図33　5号墳出土土器 5（1/4，325・326は1/6）

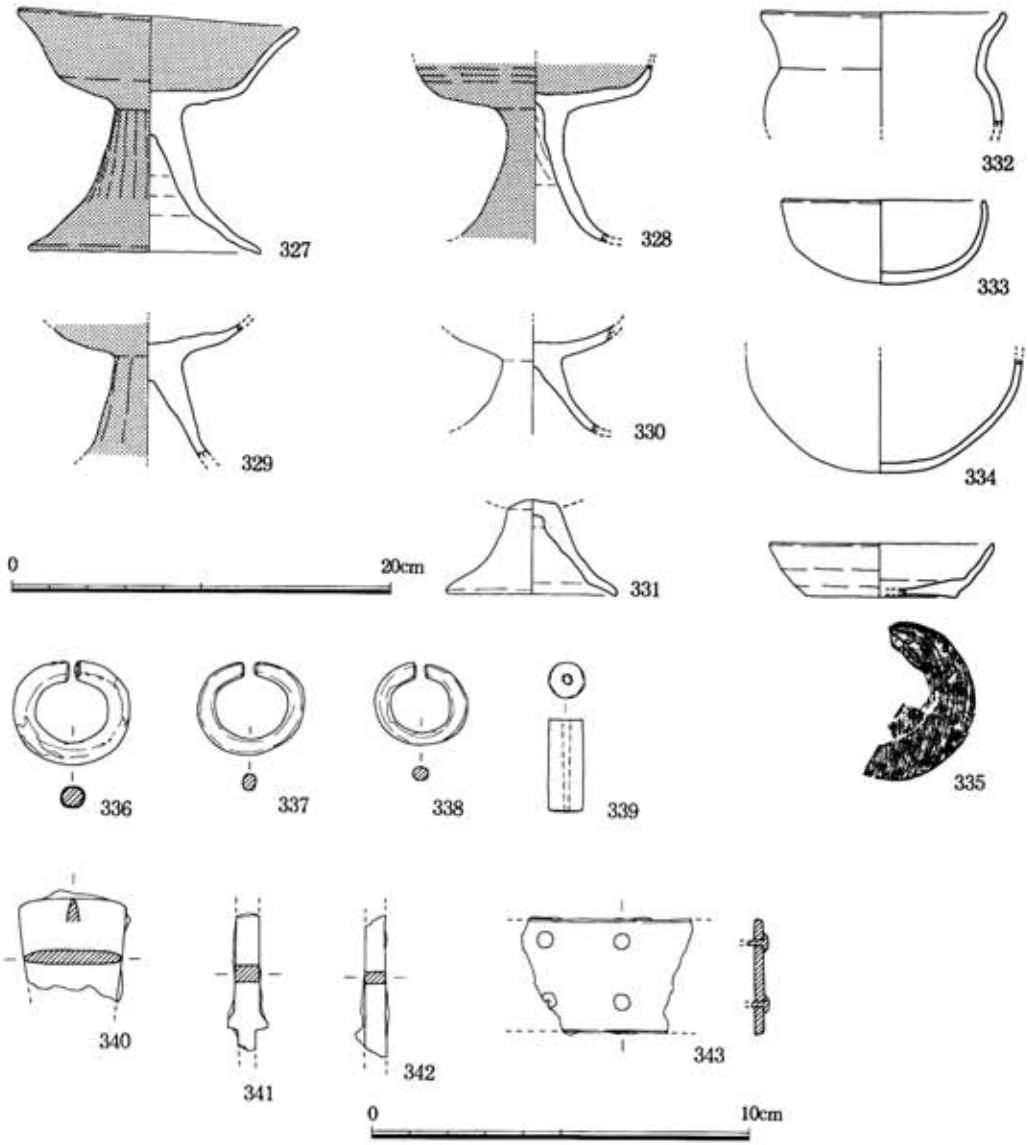


図34　5号墳出土土器 6（1/4）および装身具・金属製品（1/2）

装身具・金属製品

336～338は耳環。336は鉄地銀張り、12.6g。337は銅地金張り、5.2g。338は鉄地金銅張り、5.4g。339は管玉。碧玉製。片側穿孔で長さ2.5cm、幅0.9cm。340～342は鉄鏃。340は平根式斧箭型鏃の鏃身先端部で鏃身断面両丸造。341・342は尖根式鏃の頸部片。343は留金具。用途不明、両側を欠失する。幅3.0cm、鉄製で4ヶ所を小鋲で留める。

６．６号墳

（１）位置と現状

調査区南側尾根列の２番目に位置する。玄室床面の標高は70.5mである。石室中心から西側15mに５号墳の墳丘裾、東側は10mで７号墳の周溝にあたり、やや７号墳側に寄る。墳丘および石室上部構造を欠失し、完全に埋没していた。調査前は一帯が茶畑となっていたが、玄室の真上にあたる位置に古墳があったことの目印のためか一抱え程の塊石が置かれていた。墓道の先は崩落して崖状となっている。

（２）墳丘・外部施設

墳丘は完全に削平されて跡形もない。尾根に沿って石室掘方および切通し状の墓道を掘削しているが、地山整形は現状ではもともとの地形を大きく改変することなしに整地しているようである。墓道は羨道および前庭側壁も含めて、主軸から15°程右側（東）にそれるが、これは東に回り込んで７号墳との間を通る主墓道の枝道が連接するためであろう。

（３）埋葬施設

南側の緩斜面に向かって開口し、主軸をN26°Eにとる単室両袖型の横穴式石室を内部主体とする。腰石を主とした下段構造のみ残存する。玄室平面形態は奥にやや開くものの正方形を

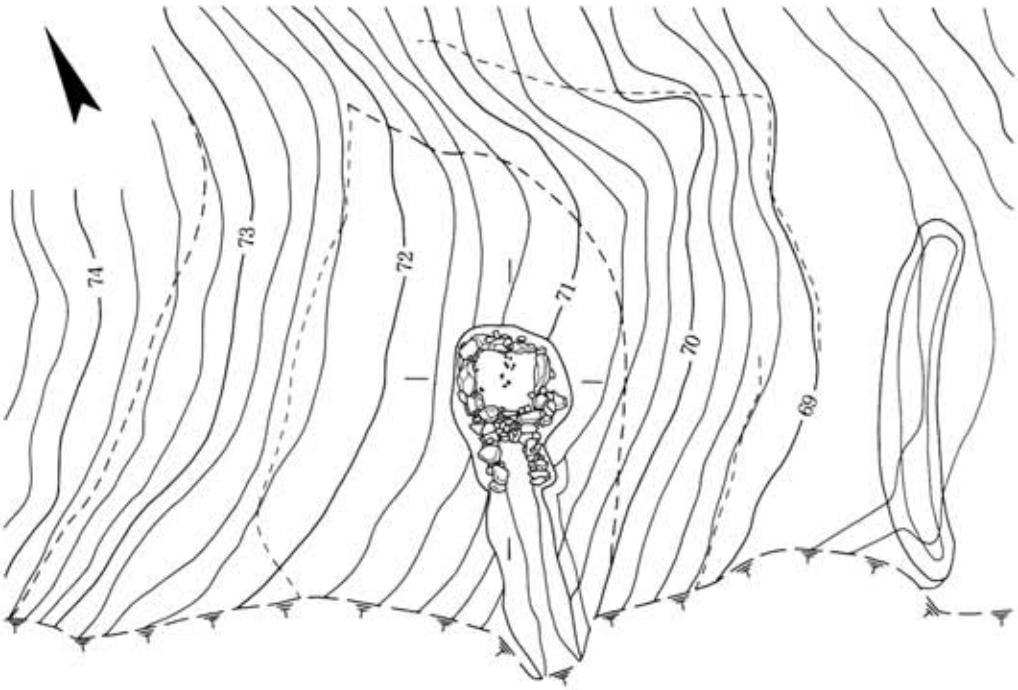


図35　６号墳墳丘（１/200）

意図している。羨道部は玄室主軸よりも15°右側（東）にそらして構築しており、玄門よりのところは前後を袖石と仕切石で区画して床石を敷いた擬前室構造となる。石室掘方は石室構築プランに沿って掘削される。4.5×3.2m程の不整楕円形で、切通し状の墓道を連接する。規模は石室全長3.84m、玄室中央長1.75m、中央幅1.77mで、擬前室部は中央長0.46m、中央幅0.64mを測る。

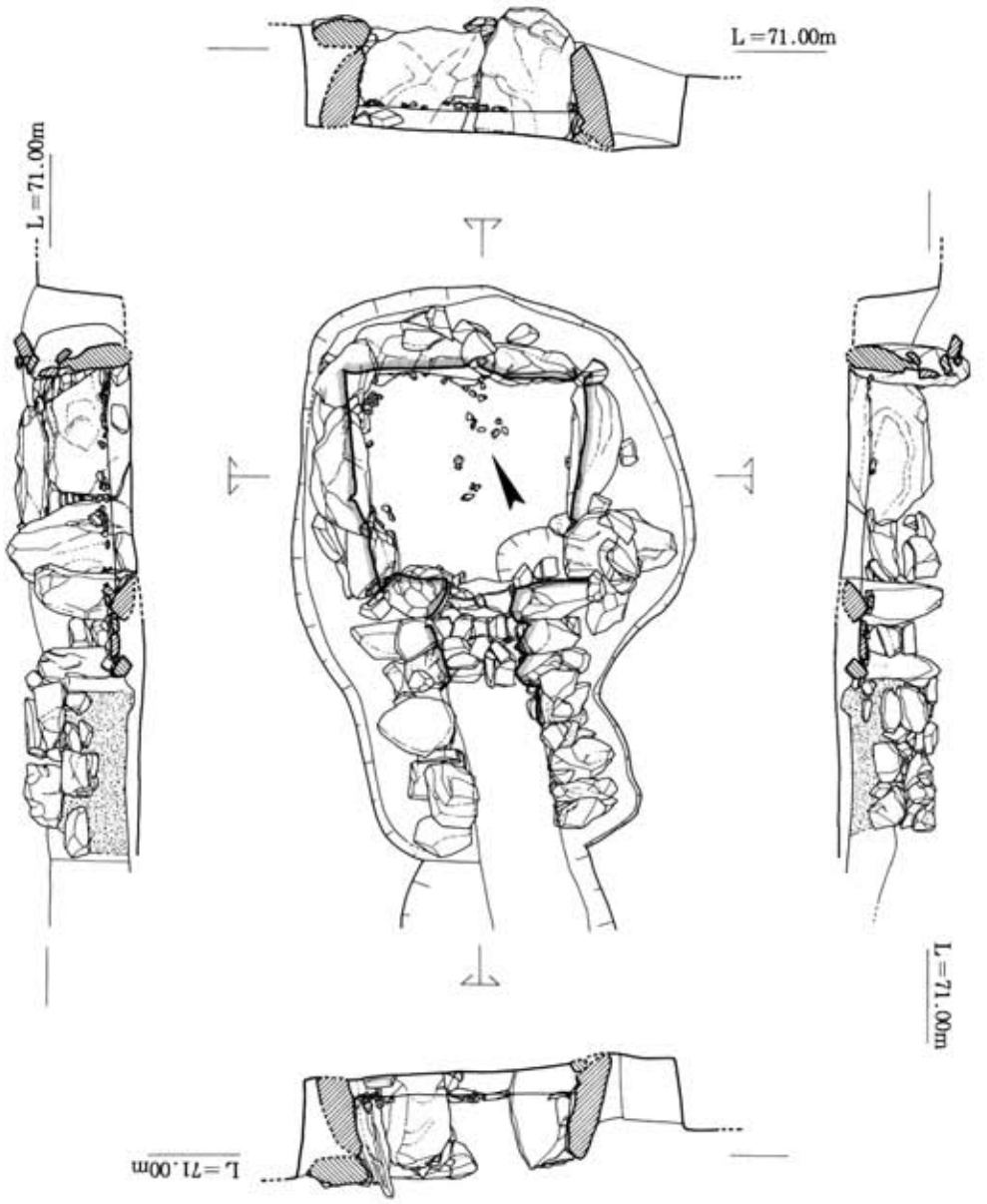


図36　6号墳石室（1/60）

0　3m

石材は全て花崗岩の転石を用いる。奥壁は腰石に0.9×0.8m、1.0×0.7m程の２石を据える。側壁の腰石は左右とも同様で２石よりなり、奥は1.0～1.2×0.7m程の石材を横位に、手前は0.5～0.7×1.0～1.2mの石材を縦位にそれぞれ据える。左側壁は奥の腰石の上に1.0×0.4m程の石材を横積みして目地を通す。玄室床面は掘方底面より９cm前後盛土した上に設定する。敷石は僅かに残存するのみであるが、10cm未満の小礫を敷き詰めていたようである。玄門部は左右袖石とも1.0×0.5m程の角張った柱状石材を立て、第２仕切石を配する。玄門幅は0.52mである。擬前室構造部は玄門袖石の手前に同規模面の柱状石材を立て前門袖石状として、第１仕切石を据える。前後の袖石の間は小石材を小口積みにし、床面に20～30cmの礫を敷く。擬前門幅は0.51mである。羨道および前庭側壁は玄室腰石中位くらいから0.1～0.5mの石材を雑に積み上げる。羨門幅は0.7mを測る。

閉塞施設は擬前門手前から羨道一杯に設ける。0.7×0.4m程の板石を擬前門に横位に立てかけ、この高さまで土を盛って板石を安定させて、上に0.2～0.4m程の石材を雑に積む。この盛土のセクションを観察すると、擬前室床面と同じレベルで小割石を散見し、初葬時はここから石を積んでいたのが、追葬時には盛土した上から積むようにしたことがわかる。もっとも、この状況は墓道にかきだされた遺物のレベルとも対応するため、むしろ追葬時にはこの高さまで墓道が堆積していたと捉えるべきかもしれない。この場合、擬前室部は追葬時には意味を失っていることになるが、いずれにせよ、追葬は２回以上行われていることが確認できる。

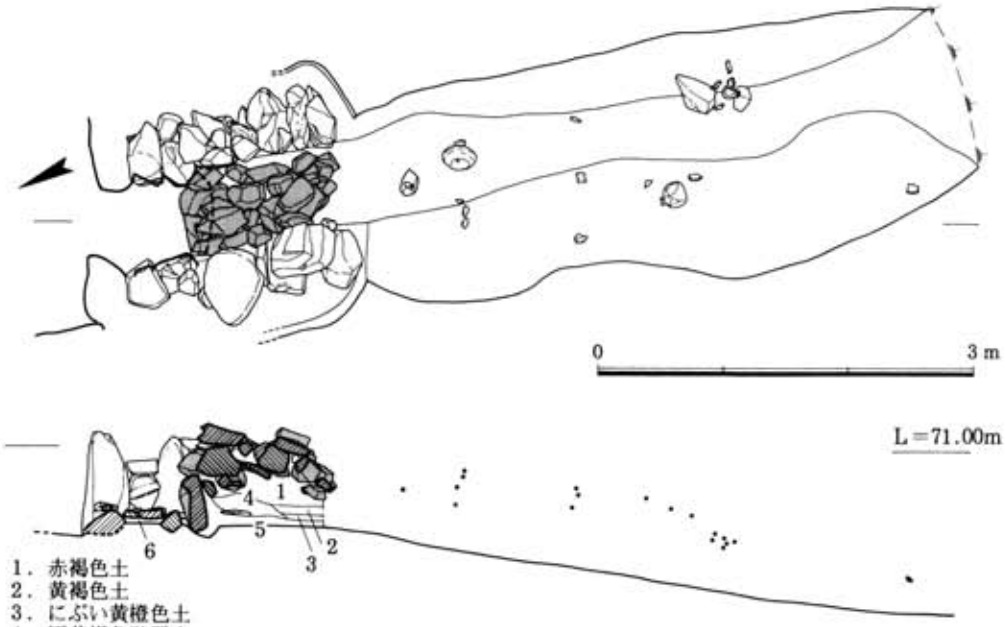


図37　６号墳石室閉塞施設残存状況および墓道遺物出土状況（１/60）

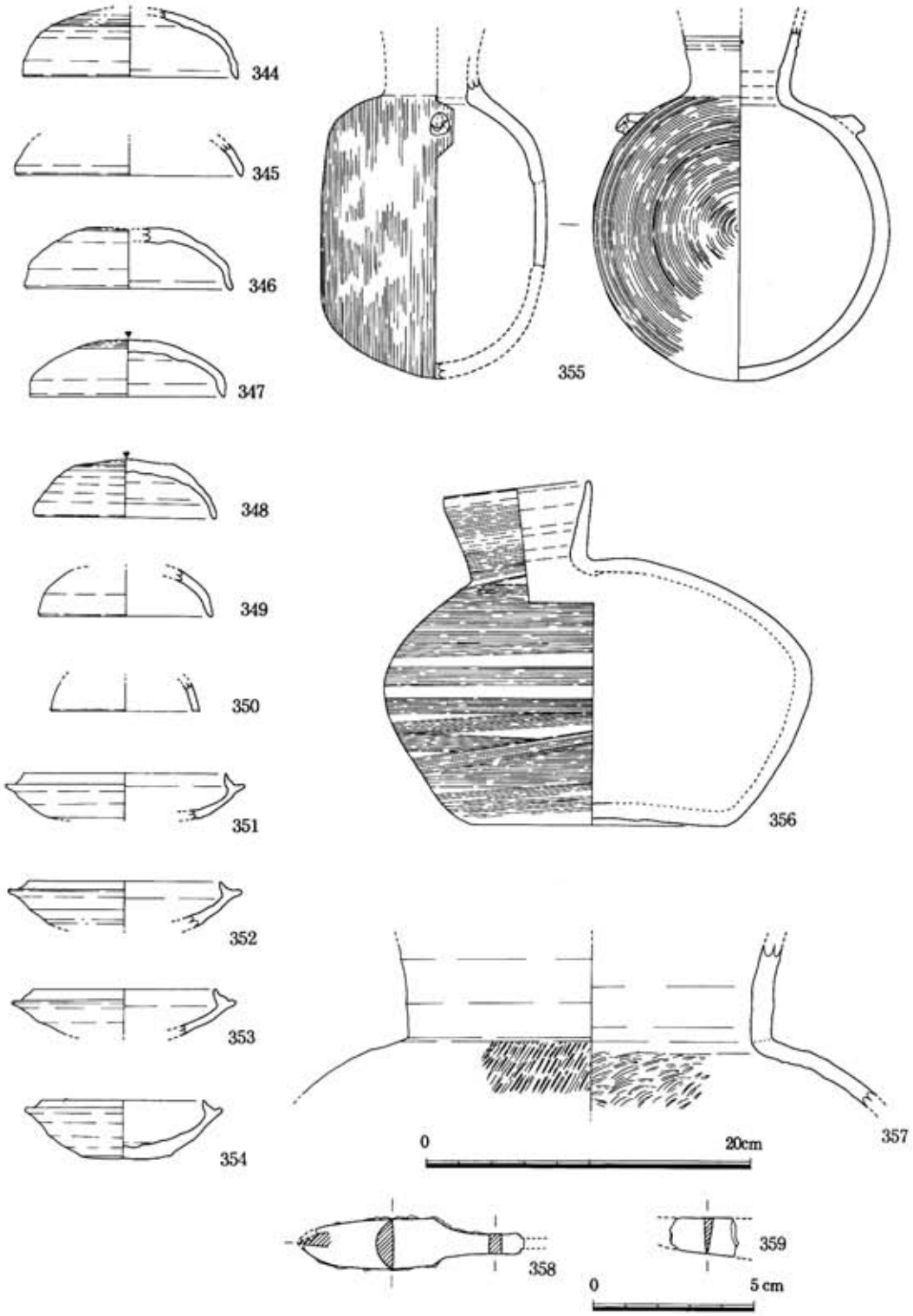


図38　6号墳出土土器（1/4）および金属製品（1/2）

（4）出土遺物

出土状態

墓道から検出したものと、墓道先の崖状に崩落した部分から採集したものとがあるが、いずれにせよ追葬時に石室からかきだされたものである。石室からは遺物が全く出土しなかった。

須恵器

344～350は杯蓋、351～354は杯身。348の天井部と354の底部は回転ヘラ切り未調整で、あとは底部、天井部回転ヘラケズリ。350の口縁端部はやや内傾する面を持ち、壺蓋の可能性がある。347・348の天井部にヘラ記号あり。355は提瓶。口縁を欠く。把手は微かにカギ形の突起に退化するが機能は残る。外面全体カキ目調整、頸部に２条の沈線を巡らす。356は大型の平瓶で、容量は約2.9ℓもある。外面全体カキ目調整。357は甕の頸基部。

これらはＴＫ209～217型式（Ⅳ期）に相当する。

金属製品

348は鉄鏃。平根式棒葉型で、鏃身断面は身の厚い片丸造。茎部を欠く。359は平造の刀子で、切先に近い部分の刃部片。

７．７号墳

（1）位置と現状

南側尾根列に並ぶ５～７号墳の中で東端の最下部に位置する。玄室床面の標高は66.5mである。石室はほぼ完存しており、調査前は玄室天井石の一部が地表にのぞいている状態であった。墳丘は後地の削平で多少変形しているものの、石室右側はなだらかな斜面となり、旧状の面影は残している。調査前は一帯が茶畑として利用されていた。羨門上の天井石１石は不安定であったため調査前に撤去した。

（2）墳丘・外部施設

尾根に沿って地山整形するが、尾根上方（石室左側）および中心部は石室掘方部分にほぼ限定して整地しており、もともとの地形を大きく改変しない。尾根に直交して弧状の溝を掘削している。排水目的とおもわれ、1.2～1.5m、断面船底型で深さ10～20cm程が残存する。墳丘裾部は地山を半円形に削り出して整形する。すなわち玄室中心から右側で5.2m、後側で6.7m程の斜面に、地山を整地した段を巡らして墳丘裾とし、下から見上げた時に墳丘を大きく見せる工夫がなされている。これらから平面的墳丘規模を復元すると、長軸（石室主軸側）12m、短軸10m程の不整楕円形となる。墳丘盛土は削平、流れ落ち、あるいは植生による土壌変質により、石室裏ごめ部分を除いて多くはもとの状態を失っていた。墳丘裾は石室右側と左側とでは2.3m程の比高差があり、右側を中心に盛土するが、現状から墳丘は石室部以外はそれほど盛土しないで、地山斜面を最大限に利用したようである。

（３）埋葬施設

南西方向に開口し、主軸をN37°Wにとる単室両袖型の横穴式石室を内部主体とする。羨道玄門よりは擬前室構造となる。玄室主軸に対し、擬前室部を含めた羨道主軸は10°、墓道部では20°右（東側）に屈折するが、これは５～６号墳同様に墓道の先を墳丘右裾に回り込ませて主墓道に連接させる意図が石室構築当初よりあったためであろう。玄室平面形態は長方形で、ほぼ同時期の築造ながら上方に隣接する６号墳が正方形プランであることを考えると興味深い。調査当初玄室内は人頭大の塊石が多数散乱し、その20～30cm下に部分的に10～30cmの偏平礫と玉砂利が混在して残る初葬時床面が現れた。これは追葬時にいわゆる“床上げ”を行ったと考え得る状況で、また、擬前室部は礫の上に玉砂利が載っており、“床上げ”前に一度追葬が行われ、玉砂利による敷石の貼り重ねがあったことが窺い知れる。規模は石室全長5.36m、玄

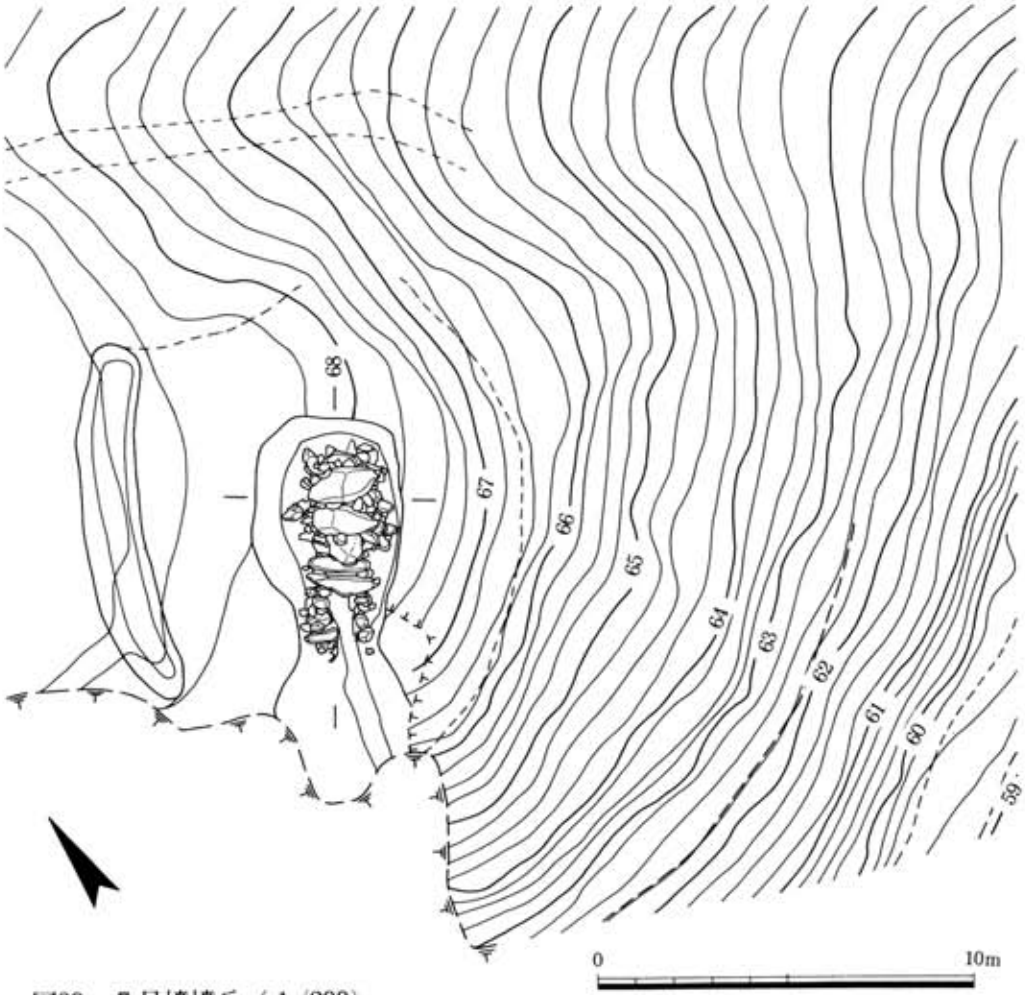


図39　７号墳墳丘（１/200）

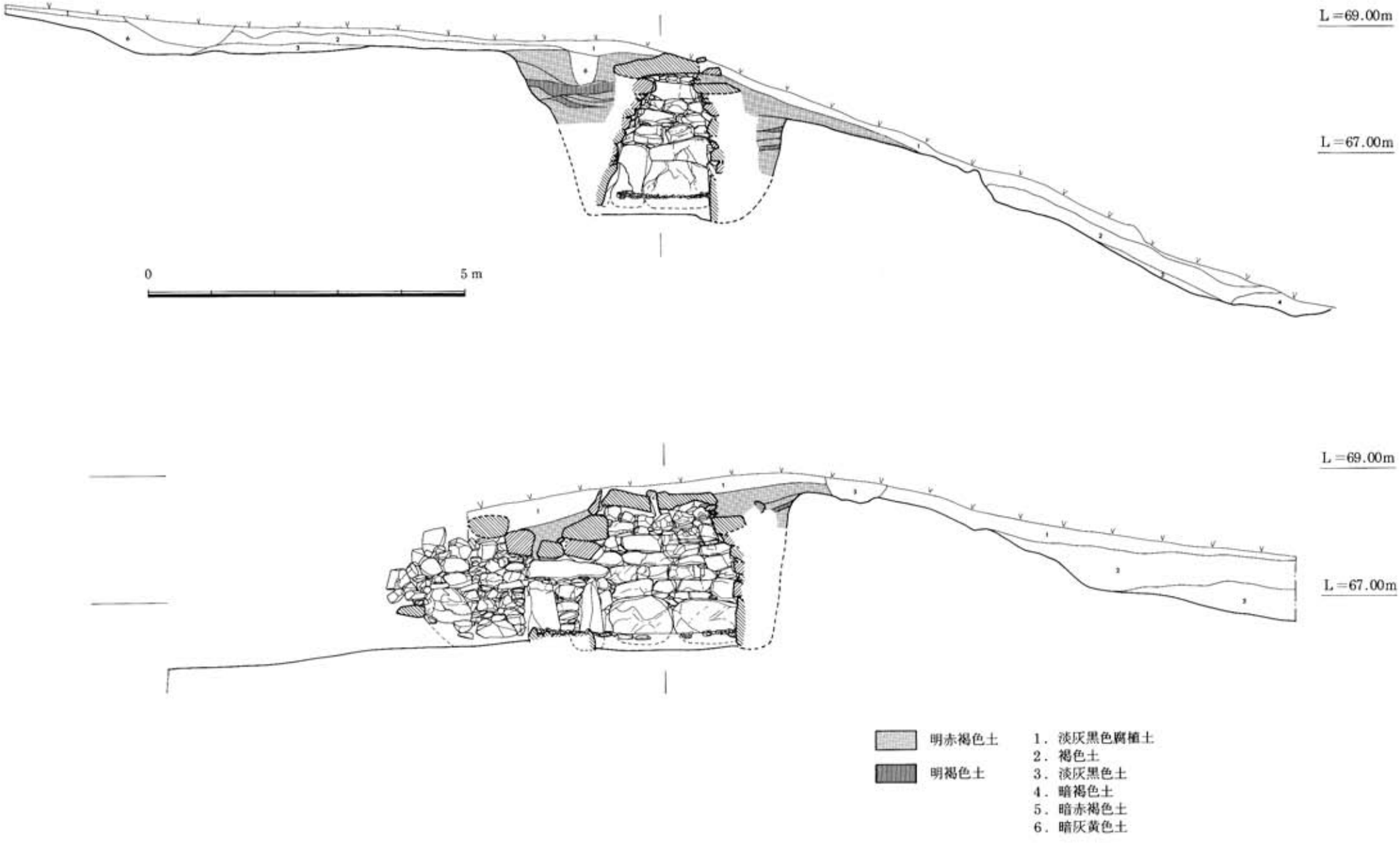


図40　7号墳墳丘土層図（1/80）

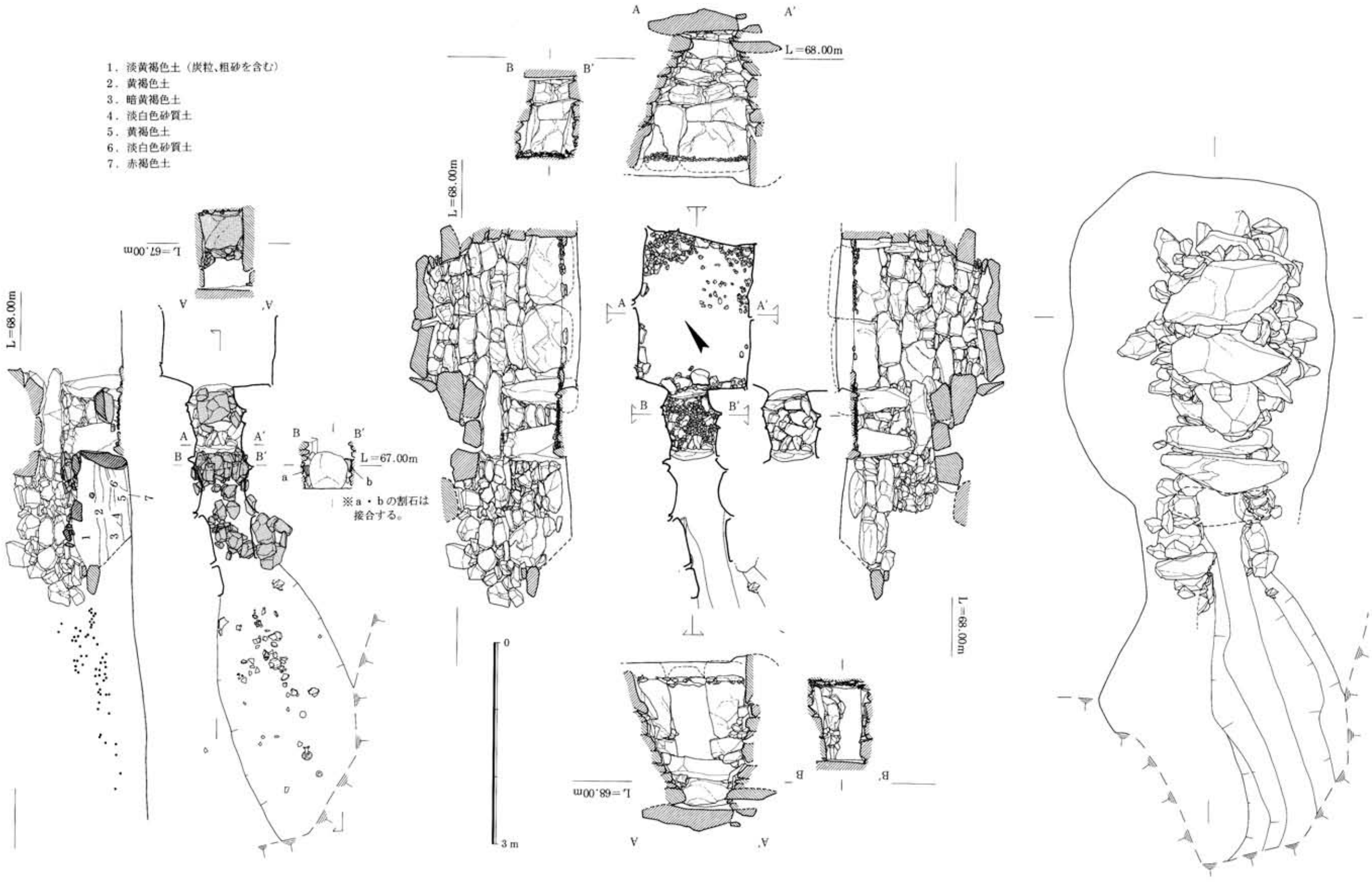


図41　7号墳石室・石室閉塞施設残存状況・墓道遺物出土状況および石室掘方・天井石（1/60）

室中央長2.24m、中央幅1.68m、天井高1.9mで、擬前室部は中央長0.74m、中央幅0.75m、天井高1.2mを測る。羨道長は2.9mである。石室掘方は6.5×4m程の不整隅丸方形で、前庭部は狭まり切通し状の墓道を同時に掘削する。石室床面は掘方底面より30cmほど上に設定する。

石材は全て花崗岩の転石を用いる。玄室奥壁は左側に1×0.5m程の石材を縦位に、右側に1×0.7m程の石材を横位にそれぞれ据えて腰石とする。右側はさらに横長石材を横積みして目地を揃えるが、この石材の右下部および腰石はうまく嚙み合うように多少の加工を施す。中段からは20°程の傾斜で内傾する。40～50cm角の石材を3段積み上げ、この上は横長石材を横積みにして持ち送り、最上段は割石を嚙ませて天井石を架構している。左右側壁は同様の構造を持ち、左側壁は25°、右側壁は10°程の傾斜でそれぞれ中段から内傾する。腰石は1×0.7m程の石を横位に2石づつ並べて据え、中段は長方形石材を4段横積み、上段は方形の小型石材を2段小口に積み上げて天井石に持ち送るが、同様の石材が揃わなかったのか、中段から上は目地も揃わず、とくに左側壁の積み方は粗雑な印象を受ける。

玄門部は左右袖石とも1×0.5m程の角張った柱状石材を立て、床面には第2仕切石を配する。玄門幅は0.58mである。擬前室構造部は玄門袖石の手前に同規模面の柱状石材を立てて前門状とし、第1仕切石を配する。前門幅は0.68mを測る。この前後の袖石の上に横長石材を渡し、割石を嚙ませて天井石を架構する。羨道および前庭側壁は、前庭右側壁が最下部を残して崩れていたものの、左右同様の構造で小石材を雑に積み上げて構築する。右側壁は下部に横長石材を2段積んでプランを設定するが、左側壁は下部から雑に積み上げている。ただ、両側とも羨道側壁と前庭側壁は積み方が相違しており、別個に積み上げたことがわかる。羨門幅は0.54mである。天井石は玄室部2枚、前壁および玄門楣石を兼ねる2枚、羨道部に3枚の7石を架構するが、いずれも比較的薄く小規模な石材を使用している。羨門上の一枚は一段上がる。

閉塞施設は擬前門部第1仕切石の手前にある。0.8×0.6m程の板石を立て、間に割石を詰めて安定をはかる。割石には同一石を割って両側に挟んだものがある。この手前に10～30cmの礫を天井まで積み上げたようである。現状は手前に崩されているものの、この礫積みの基底面は当初の羨道低面より70～90cm堆積した上にあり、この閉塞施設は追葬時に全てを再構築したことがわかるが、これは墓道にかきだされた遺物のレベルとも一致する。また、前室には1.1×0.5m程の板石が倒れ込んでいた。この状況は5号墳と同様で、玄室の“床上げ”後の床面高さにほぼ一致する。あるいは第1仕切石手前の閉塞施設の上部が落ち込んだものと考えられなくはないが、状況は間に詰めたと思われる礫が両脇に2個ずつ伴っており、玄門閉塞の板石が手前に倒されたものとみていいだろう。実際に玄門に立て掛けてみるとうまく合致した。おそらく最初の追葬時に玉砂利による敷石の貼り重ねを行い、2度目以降の追葬時の“床上げ”に伴ってこの板石を倒し、擬前室構造の羨道はその「機能」を失ったと考えられる。

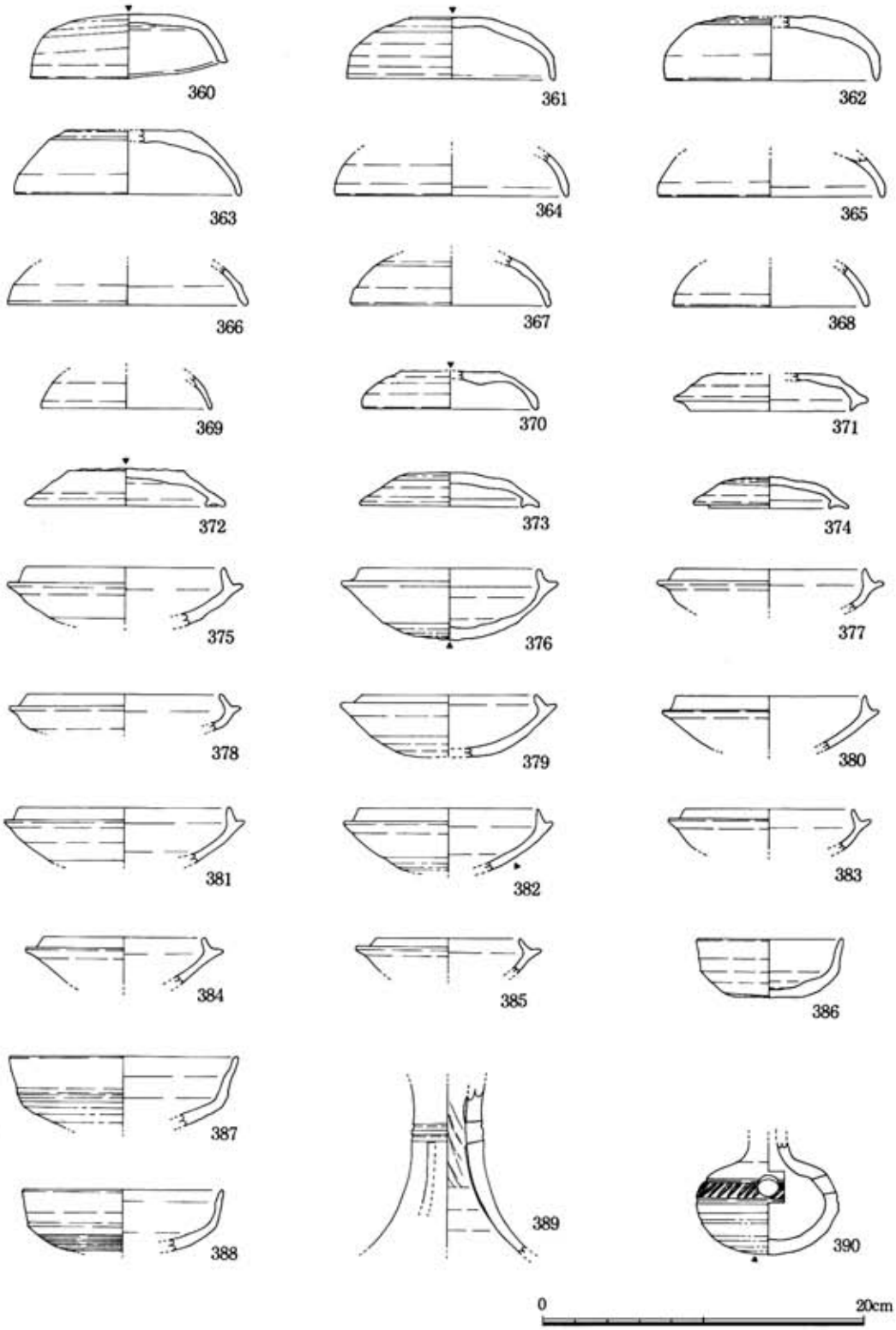


図42　7号墳出土土器 1（1/4）

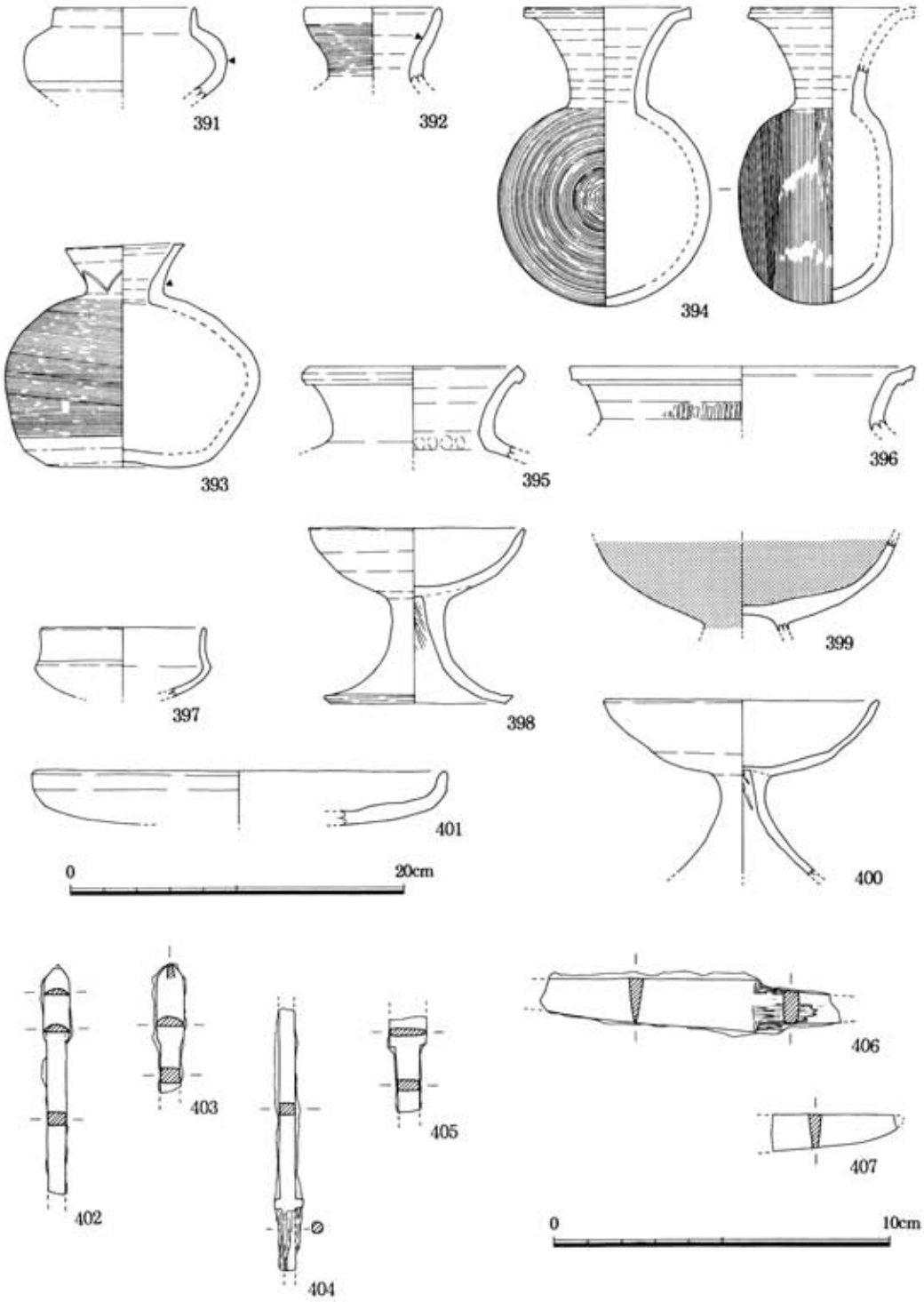


図43　7号墳出土土器 2（1/4）および金属製品（1/2）

（4）出土遺物

出土状態

墓道から石室内よりかきだされた土器が、擬前室部の貼り重ねた敷石上から金属製品の残欠が出土した。墳丘からも土器が若干出土しているが、墳丘盛土内の築造時に伴うようなものはなかった。なお、墓道部上層から出土した土器が中、下層出土の土器よりも古いという現象がみられたが、これは盗掘時に玄室から出された土器が混ざり込んだことにほかならない。

須恵器

360～370は杯蓋、375～385は杯身。371～374は蓋、386は坏。蓋はいずれも宝珠つまみが付かない。360・361・370・372・376にヘラ記号あり。387～389は高坏。387・388は坏部、389は脚中部片で、3方の2段透かしをいれる。390は鞍。口頸部を欠く。胴部に沈線に挟まれて櫛描列点文を施す。391は無頸壺。胴部にヘラ記号あり。392は平瓶の口頸部。内面にヘラ記号あり。393は瓶子。平瓶の胴中央に逆ハの字に外反する口頸部を付けたような造りである。底部回転ヘラケズリ、頸部にヘラ記号あり。394は提瓶。胴部に比して大きな口頸部が付く。395・396は甕。

これらはＴＫ209～ＴＫ46型式（ⅣＡ～Ⅴ期）に相当する。3時期にわかれるが、これは閉塞施設および玄室床面が初葬、追葬、再追葬の3次の埋葬状況を示すことと一致する。

土師器

397は坏。段の痕跡である緩やかに屈曲する。398～400は高坏。401は皿。縁が浅い。

金属製品

402～405は鉄鏃。402・403は尖根式の小型柳葉型で、鏃身断面は片丸造。404・405は尖根式鏃の頸部。406・407は刀子。406は刃部先端と茎端部を欠失する。平造、両角関で、茎部に木質が残存する。407は茎部、端部にかけて細くなる。

8．8号墳

（1）位置と現状

5号墳の墳丘南西裾に築造される。すでに大部分が破壊されており、左奥コーナー部分の腰石1石ずつと敷石の一部のみ残存する。石室床面の標高は76.9mである。本墳の立地する調査区南西の斜面には地形からみて同様な小石室墳がほかにも若干存在していたものとおもわれるが、崩落による丘陵の変形や植林等による削平により多くが失われ、1基のみが残欠ながらかろうじて残ったようである。出土遺物はなかった。

（2）埋葬施設

南西方向に向かって開口し、主軸をN35°Wにとる小石室墳である。等高線に直交して築造され、石室堀方は石室規模に比較して大きく隅丸方形に掘り込まれる。現状では全体の規模を

明らかにし得ないが、おそらく１辺が１ｍに満たない方形、あるいは横向き長方形プランで、羨道が付かない横口式の小石室であろう。奥壁は手前にやや倒れ込んでいるが、40cm角くらいで厚さ10cm前後、左側壁は20×50cm角くらいで厚さ８cm前後の板石を立てている。敷石には、25×15cmくらいの礫もみられるが、概ね10cm前後の玉砂利を使用する。

この小石室墳が造られた時期はおそらく８世紀代であろう。これは５号墳の最終追葬（７世紀前半）から大きく時を隔てることになるが、墳丘内を避けた立地からみて、５号墳は小石室墳が営まれた時期も墳墓としての機能を果たしていたものと考えられるし、また５号墳の墓道に至る主墓道の枝道がこの小石室墳の前まで伸びていたとおもわれ、周辺に営まれていたであろう小石室墳もまた「黒谷古墳群」として１つに捉えることができよう。被葬者層や葬制の変遷を考える上で興味深い。

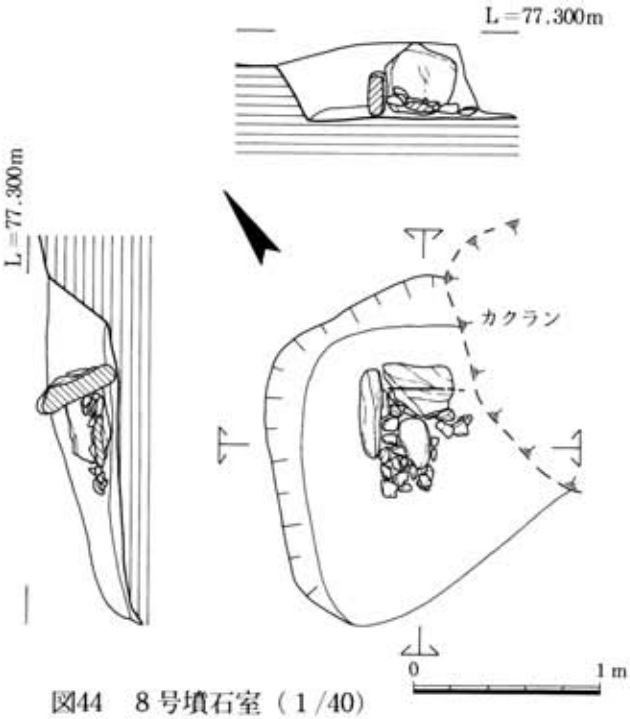


図44　８号墳石室（１/40）

９．その他の遺構

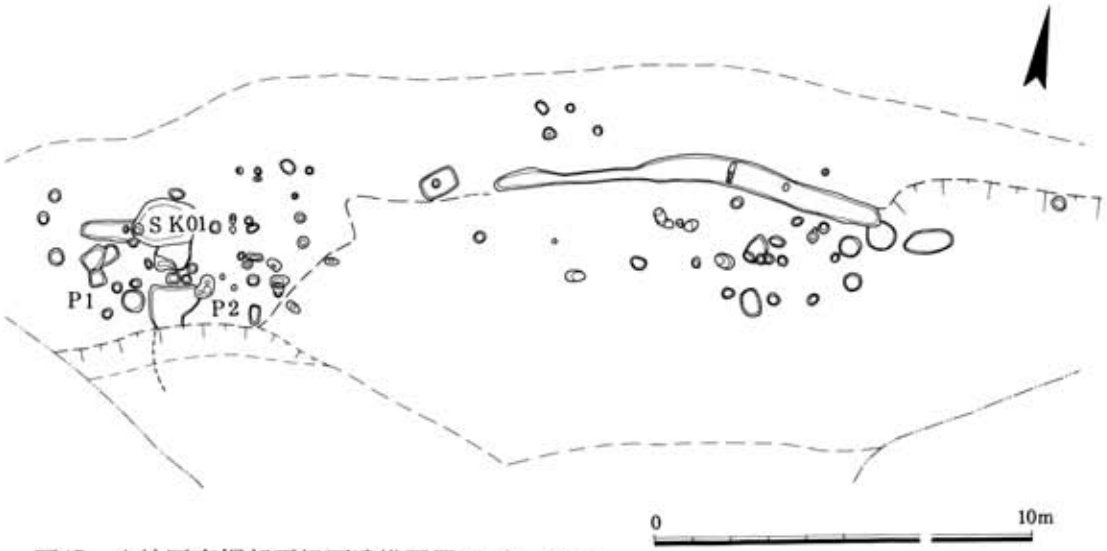


図45　Ａ地区南裾部平坦面遺構配置図（１/200）

A地区南裾は東西35m、南北５～８m程の平坦面となっており、ここからは基山町教育委員会による確認調査時に、炉跡状遺構や大小のピットが検出されている。今回の全面調査で、小土坑や小穴を多数検出し、焼土や灰・炭化物がみられたと報告されている0.9×0.5m、深さ0.5m程の「炉跡状」小穴も再確認した。ただ、検出面の大半が流出・削平で傾斜しており、周囲の状況からこれらの性格を明らかにすることはできない。ＳＫ０１土坑は1.5×1.3m、深さ30cm程の隅丸方形で、土師器の甕、甑（408～411・414・415）や須恵器の蓋（416）あるいは布目の平瓦小片が投棄された状態で出土した。これらを含め、ここから出土した遺物は全て８世紀以降のものである。確認調査時には弥生中期の甕が出土したとあるが、弥生時代の遺構・遺物は検出しなかった。ただ、４号墳の墳丘盛土の中から黒曜石の剥片や小型の磨製石斧が出土しており、A地区全体を含めて、縄文～弥生時代の遺構があった可能性は否定できない。また、太平洋戦争末期にここに軍の施設があり、検出した遺構の中にはこれに関連するものも含まれるだろう。なお、３号墳の南側で検出した小穴群もこれと同様の性格を持つものとおもわれる。

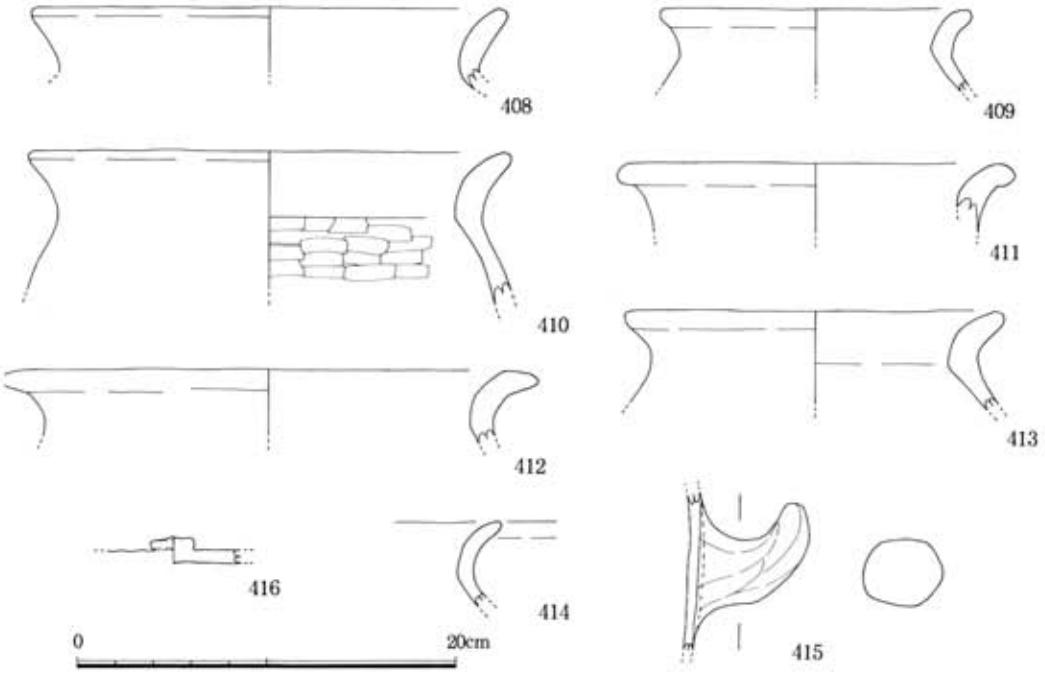


図46　A地区南裾部出土土器（１/４）

Ⅲ．Ｂ地区の調査

本調査地区は契山南部の山麓が開折されて舌状に伸びる丘陵尾根上に立地する。A地区とは狭い谷を挟んで北側に位置する。丘陵の現状はかなり急峻なやせ尾根である。遺構は玄室腰石

を僅かに残すばかりの古墳が１基検出された。本墳は昭和60年度の基山町教育委員会の遺跡詳細分布調査で玄室部分を確認したあと埋め戻されていた。

１．９号墳

（１）位置と現状

調査地区の丘陵尾根上にほぼ直交して築造される。玄室床面の標高は69.5mである。玄室奥壁、左右両壁の腰石を残して石材のほとんどが失われており、基山町教育委員会の確認調査前は腰石の上端を露呈するのみで大部分が埋没していた。周辺は果樹園として利用されていた。

（２）墳丘・外部施設

現状では石室左側に墳丘状の高まりがみられたが、おそらく石材の抜き取り、持ち去り時に全体を掘り下げたのであろうか、石室掘方掘削面の下深く削平を受けており、墳丘および地山整形の痕跡は全くみられない。周溝も検出されなかった。

（３）埋葬施設

玄室の腰石や根石の残存状況および石室掘方の形状から、内部主体は南西に向かって開口し、主軸をN33°Wにとる両袖型横穴式石室と考えられる。羨道部が比較的短く狭いことから単室構造であろう。もっとも、擬前室構造部を持つかどうかまではわからない。玄室平面形態は長方形を意図し、玄室長が奥壁幅の約1.3倍を示すが、前壁幅に比して奥壁幅が広い台形に近い形状となる。石室掘方は羨道部分で幅を狭めて墓道に連結するいわゆる羽子板形で、検出面の計測で６×3.5mを測る。床面は状況から掘方底面よりも30～50cm上に設定しているようである。墓道は石室主軸と同一方向に延び、等高線に直交する。底面幅は50～70cm程で、深さ10～15cm程が残存するが、もともとは切通し状であったと思われる。先端は崩落していたが、斜面に沿ってほぼ直角に谷筋へ向かっていたのであろう。

石材は花崗岩の転石を用いる。規模は玄室奥壁幅2.13m、中央幅1.86m、前壁幅1.76m、左側壁長2.68m、右側壁長2.68mを測り、石室全長は5.5m程、玄室中央長は2.8m程であろう。玄室奥壁は1.75×1.3mの大型石材を右側壁よりに横位に据えて腰石とし、左側の隙間にはすでに倒れていたものの、0.4×１m程の石材を立てる。側壁の腰石は左右同様の状況で、1.2～1.7×0.9～1.6m程のほぼ同規模の石材を２石ずつ横位に据えている。奥壁右側と右側壁奥の腰石は、目地を合わせるためか、石材底部を他よりも30cm程深く掘り込んで据える。また、各腰石の底辺は直線的でないため、玄室基底面あるいは腰石相互の隙間には砂混じりでやや粘質の褐色土を詰めている。腰石の内側からの根石は奥壁および左側壁に認められる。袖石はすでに抜き取られているものの、左右共に抜き穴が確認され、周囲には根石が据えられる。仕切石もすでに失われており、抜き穴も認められなかった。

出土遺物は石室および周辺からも全く出土しなかった。

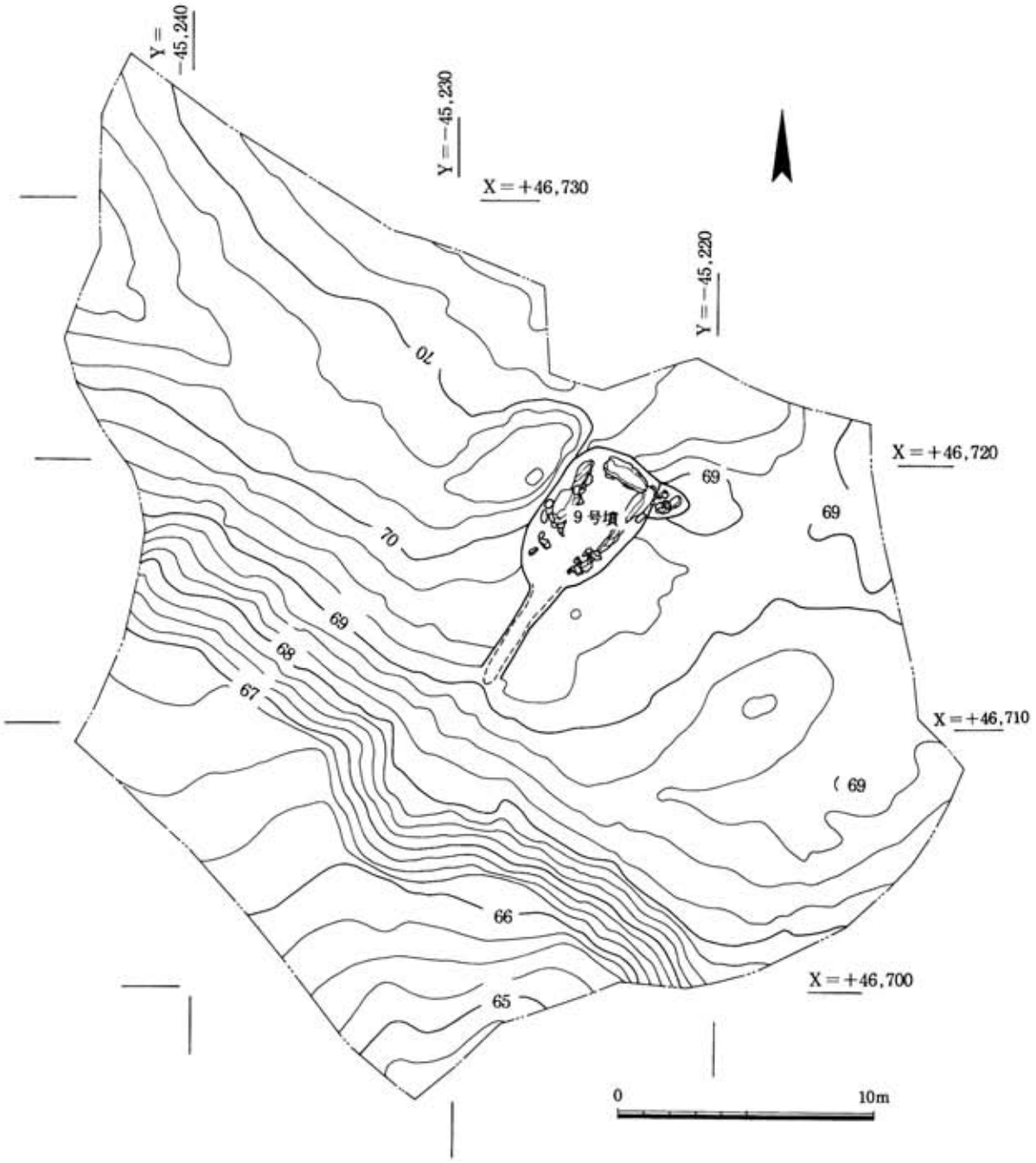


図47　B地区調査後地形図（1/250）

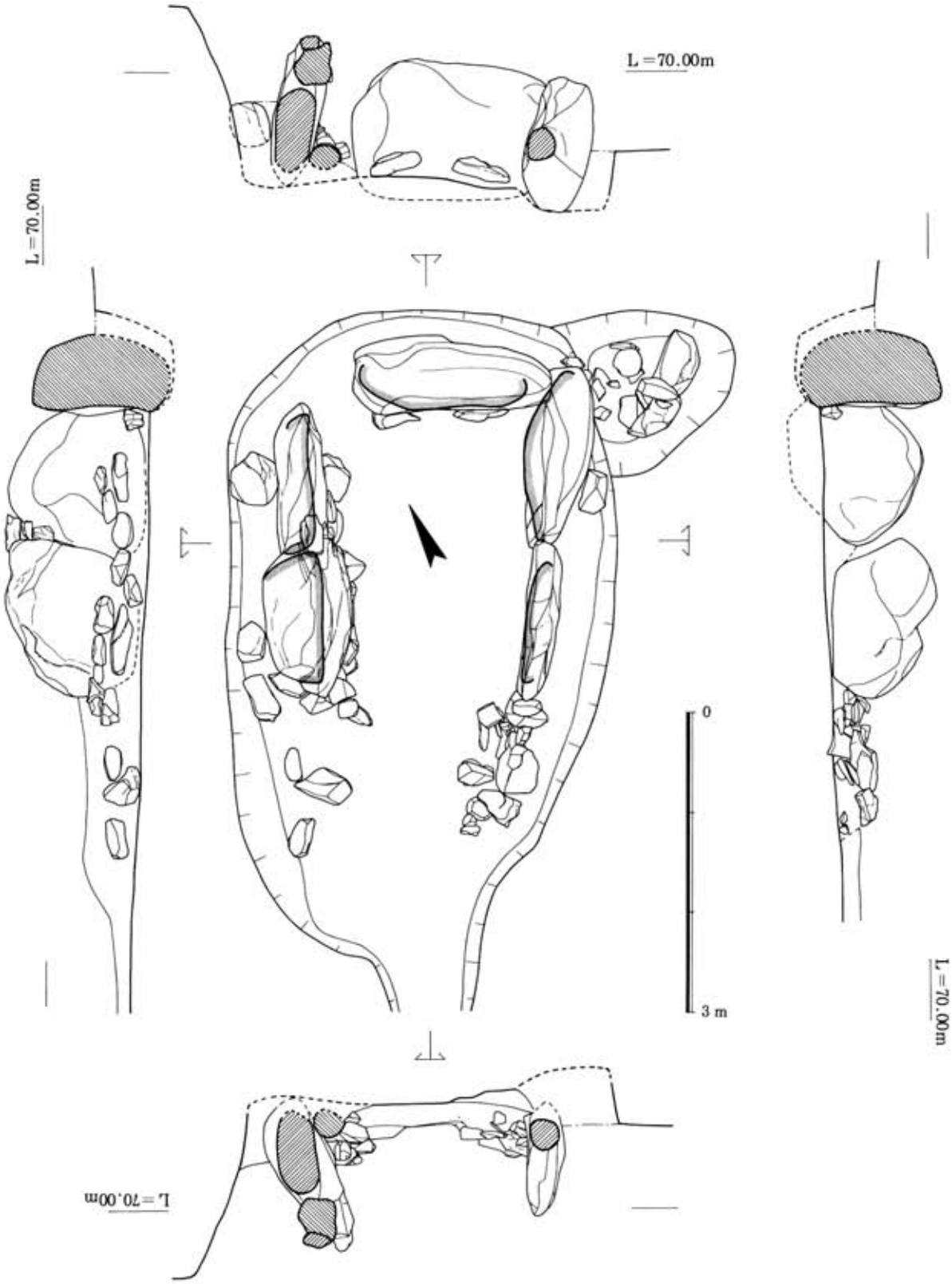


図48　9号墳石室（1/60）

第４章　水呑古墳群の調査

Ⅰ．遺跡の概要

水呑古墳群は佐賀県三養基郡基山町大字園部字水呑に所在する。脊振山系の契山から南東方向に伸びる支嶺から派生して東端の黒谷古墳群に至る丘陵の西北側に位置し、北西方向に深く入り組んで南は園部谷に開ける谷の奥部と、これを西側から挟む、両側に小規模な開折谷が入り込んで舌状に張り出したいくつもの丘陵上に古墳が点々と造営されている。

古墳群は谷の中央部、谷の最奥部の丘陵斜面、そして３ヶ所の舌状に突出した丘陵の尾根上あるいは斜面の、あわせて５つの支群より構成されており、この古墳群は地形的にみてもこの範囲内でひとつの墓域として完結したとみていい。このうち谷の中央部に石室が露出していた地点をＡ地区、谷に張り出した３カ所の丘陵を北からＢ地区、Ｃ地区、Ｄ地区として、それぞれ調査地区を設定した。今回の調査で谷最奥部の支群を除いて、内容的には本古墳群の大部分を把握しえたことになる。

調査の結果、Ａ地区から２基、Ｂ地区から１基、Ｃ地区から４基、Ｄ地区から４基（うち３基は小石室墳）の計11基の横穴式石室を内部主体とする古墳を検出した。Ｄ地区の３基の小石室墳を除いて、古墳は各々石室主軸を異にするものの、全て谷の入り口方向に向かって開口させている。調査地区外の谷最奥部には開口した古墳が１基あり、周辺にはあと数基が埋没していることが想定される。また、棚田の開墾時、あるいは近年のサイクリング道路建設の際にも古墳が数基破壊されたようで、谷の中央部には石室石材に用いられたものとおもわれる巨石の散乱が数ヵ所で認められる。こうしたことから水呑古墳群は小石室墳を除外すると大体12～15基で構成されていたようである。なお、Ａ、Ｃ地区で検出した古墳のうちそれぞれ１基ずつについては、石室石材の散乱した状況を検出したにとどまり、石室位置を特定できないばかりか遺物も全く出土しなかった。したがって、調査した古墳に通し番号をつけるにあたってはこの２基については除外し、調査区外の破壊古墳と同じ扱いにした。

検出した11基の古墳のうち、調査前に存在が確認されていたのは石室を露呈させていたＡ地区１号墳と、すでに開口していたＣ地区５号墳およびＤ地区６号墳の３基のみで、あとは調査前は完全に埋没していた。Ｃ地区の３、４、５号墳とＤ地区６号墳は石室がほぼ完存しており、とりわけ６号墳は墳丘、外部施設までもが良好な状態で残存していた。３号墳については閉塞施設も完存しており、未盗掘の状態での発見となった。また、Ｂ地区２号墳とＤ地区９号墳は、天井部が崩落していたものの、石室内部が荒らされておらず玄室を埋葬当時の状態のまま検出することができた。３号墳と同様にいずれも最終追葬時の供献土器（小石室墳の９号墳は骨蔵器か）が原位置で出土している。これ以外の古墳はいずれも石室内部が荒らされていた。

検出した古墳は未盗掘墳も含めて、いずれも追葬時に以前の副葬品等のとりかたづけを行っ

ており、築造当初に伴うと考えられる遺物はほとんど出土しなかった。墳丘盛土内からも築造時の祭祀行為に伴う土器などは見い出せなかったったため、墓道などから出土した遺物からは大方の追葬期間の幅を理解するにとどまり、確実な築造時期を押さえることはできない。こうしたことから古墳群の造営時期を考えるにあたっては、石室型式からのアプローチが不可欠となる。出土した土器の時期に最大公約数としての石室型式編年観を加味して判断すると次のようになる。6世紀後半にまず見晴らしのいい丘陵尾根上に6号墳が築造され、このあと6世紀末～7世紀初頭頃に丘陵斜面に4号墳が築かれる。引き続き7世紀前半には谷部や丘陵上に巨石で構築された1．5号墳が、丘陵の裏斜面には石室規模の小さい3号墳が営まれ、7世紀中頃になるとさらに小型石室の2号墳が丘陵尾根上に築かれる。1、4、5、6号墳は7世紀中頃～後半に、2号墳は7世紀末～8世紀初頭に最終追葬が行われている。このあと、8世紀にはいると丘陵の斜面に7、8、9号墳などの小石室墳が最後に点々と営まれるようになり、古墳群は終焉をむかえる。なお、本古墳群の石室はD地区6号墳を除いて、石室型式的にはいずれも黒谷古墳群に後出するタイプのものである。

表 2　水 呑 古 墳 群 調 査 古 墳 一 覧 表

A地区

古墳	石室残存状況	石室形態	主軸方位	床面標高（m）	石室長（m）	規模（m）玄室中央長×中央幅	備考
1号墳	玄室後部のみ	複室両袖型	N28°E	71	－	(2.6)×2.2	

B地区

古墳	石室残存状況	石室形態	主軸方位	床面標高（m）	石室長（m）	規模（m）玄室中央長×中央幅	備考
2号墳	天井部崩落	単室両袖型	N3°E	84.5	2.8	1.6×1.7	未盗掘状態で検出

C地区

古墳	石室残存状況	石室形態	主軸方位	床面標高（m）	石室長（m）	規模（m）玄室中央長×中央幅	備考
3号墳	完存	単室両袖型	N44°E	82.2	4.9	2.04×1.68	未盗掘状態で検出
4号墳	完存	複室両袖型	N73°E	75.5	6.73	2.08×1.85	
5号墳	完存	複室両袖型	N31°E	76	8	2.72×1.83	

D地区

古墳	石室残存状況	石室形態	主軸方位	床面標高（m）	石室長（m）	規模（m）玄室中央長×中央幅	備考
6号墳	完存	複室両袖型	N5°E	85.8	6.8	3.5 ×2.3	
7号墳	天井部崩落	横口小石室	N1°E	85.2	－	0.8 ×0.9	未盗掘状態で検出
8号墳	腰石部分	横口小石室	N2°E	84m	－	1.1 ×1.5	
9号墳	腰石一部	横口小石室	N9°E	79.3	－	(0.6)×1.4	未盗掘状態で検出

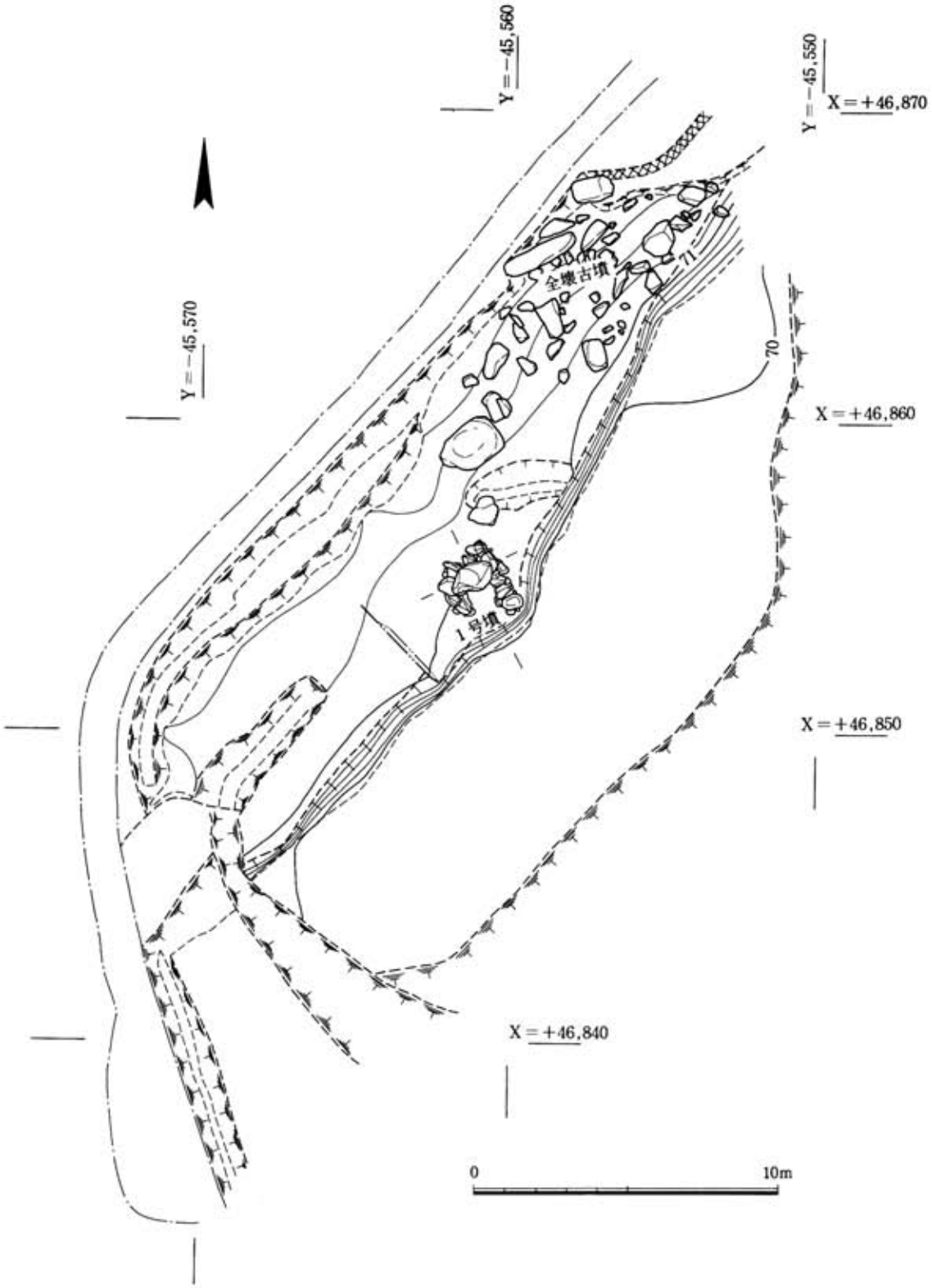


図49　A地区調査後地形図（1/200）

II．A地区の調査

本調査区は南へ開けた谷の奥部に位置する。調査前は水田として利用されていた。玄室後部のみ残存した古墳１基とその背後に原位置が確認できなかったものの確実に古墳築造に使用されたと判断できる巨石の散乱がみられた。

１．１号墳

（１）位置と現状

谷奥部に築造される。谷の中央からやや西に寄った位置になるのは開口部からの視界を考慮したにほかならない。この谷はもともとは緩やかな傾斜地であったようだが、棚田の耕作のために大きく地形を変えられており、墳丘はもちろん地山整形面の下深く耕されていて、とくに畔にかかる石室前半部分は大きく削平されて段になる。玄室の奥壁および左右側壁と玄門右袖石、奥壁側の天井石１石と玄門左袖石の根石が残存していた。玄室床面の標高は71mである。

（２）埋葬施設

谷入口方向の南東に開口し、主軸をN28°Eにとる複室両袖型の横穴式石室を内部主体とする。玄門手前は破壊されており、石室全体の規模は明らかにし得ない。玄室平面形態は長方形、前室は玄室幅とほぼ同じで、前室が退化、あるいは形骸化したタイプである。規模は玄室中央長2.6m程、中央幅2.2mで、天井高は掘方底面から2.1mを測るが、床面からの高さは1.8mくらいであろう。奥壁は２×1.8m、厚さ0.6m程の巨石を縦位に据えて鏡石とし、裾に根石として20～40cm角の平石を添える。この上に0.4×0.8mの長方形石材を横積みし、割石を噛ませて天井石を架構する。鏡石と両側壁との隙間には礫を詰める。側壁は左右同様の構造で、奥壁よりは1×1.5～1.8mの石材を横位に、玄門よりは0.9～1.2×0.6mの石材を縦位にそれぞれ据えて腰石とし、裾には20～40cm角の平石を根石に敷く。上面は目地を合わせており、この上は長方形石材を３段横積みにする。奥壁、側壁共にほとんど内傾しない。玄門袖石は根石に10～30cm角の平石を環状に敷き、残存する左側壁側は高さ1.2mの柱状石材を立てる。玄門幅は１m程である。仕切石は残存しない。前室部分は右側の腰石を１石残すのみであるが、手前に僅かに残る前門袖石の根石の状況から、前室長は1.2m程であることがわかる。

（３）出土遺物

当該期の遺物は撹乱土中より須恵器の小破片が数点出土したのみで、図化できたものは２点にとどまった。１は蓋の天井部片。つまみは上部を欠失する。２は坏。底部回転ヘラケズリで上部は回転ナデ。いずれもＴＫ48型式（Ⅵ期）に相当する。

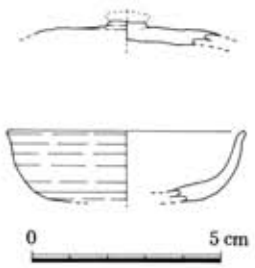


図50　１号墳出土土器（１/４）

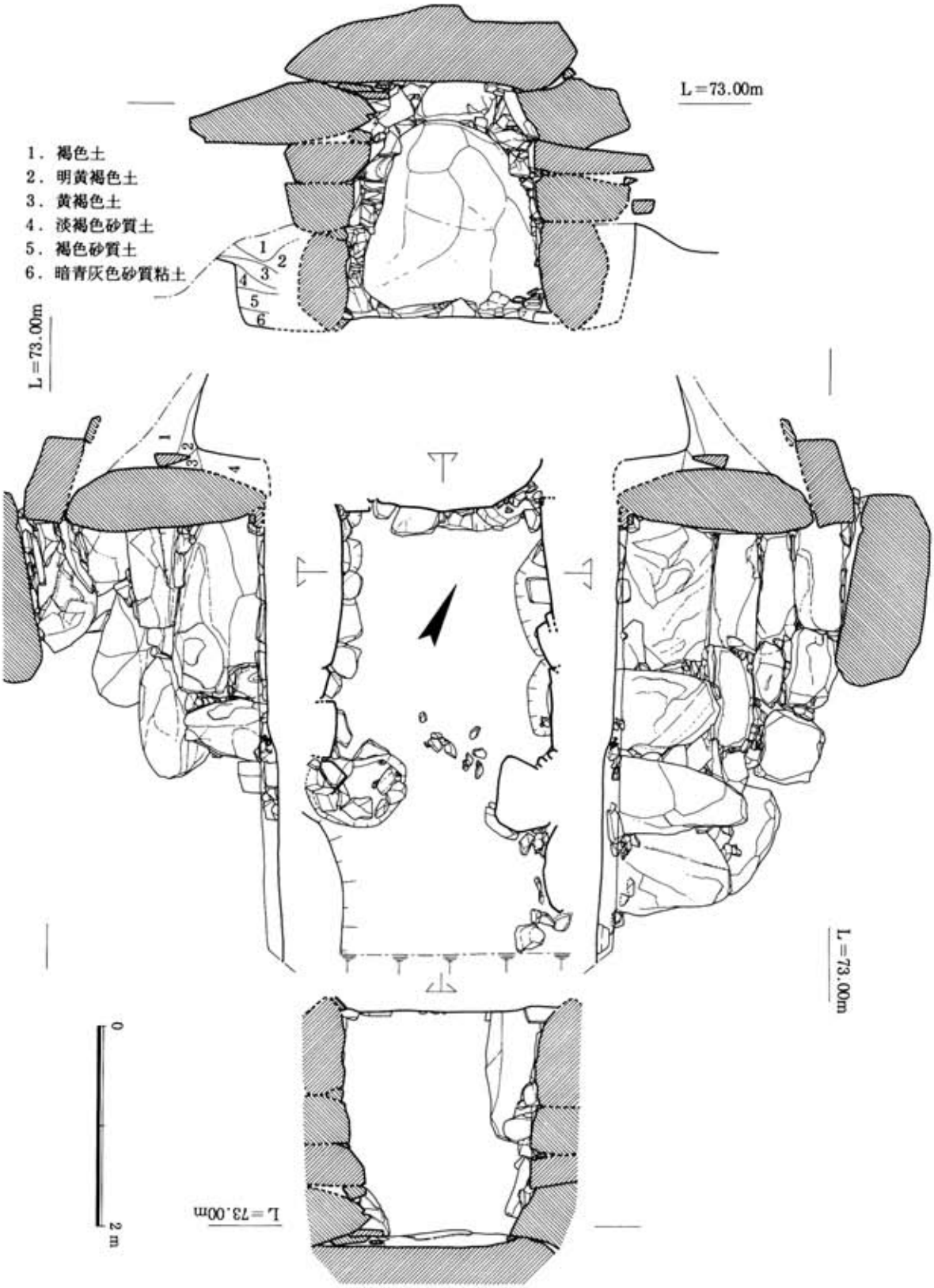


図51　1号墳石室（1/60）

2．全壊古墳

1号墳の背後、調査区の北側一帯に明らかに破壊された古墳の残骸と思われる石材が数多く散乱していた。中には天井石に使われたとおもわれる長さが2～3mもあるような巨石も数個ある。周辺を掘り下げてみたが、石室の原位置を特定できる痕跡は検出できなかった。また遺物も全く出土していない。おそらく1号墳の背後10数m程の位置に同規模の古墳が存在していたものとおもわれ、巨石を多く使用することからも1号墳とほぼ同時期と考えていいだろう。水呑古墳群の谷部には同様な場所が他にもあり、谷部にもあと数基は古墳が存在していたようである。

Ⅲ．B地区の調査

本調査区は水呑古墳群を構成する支群のうち、丘陵部の支群では最も奥の、南東方向に張り出した丘陵尾根上に位置する。尾根の端に近い地点で古墳を1基検出した。

1．2号墳

（1）位置と現状

現状では調査区丘陵の尾根端部近くに築造されるが、この丘陵の先端は削られているため、もともとは丘陵尾根の中位にあたる位置になる。玄室床面の標高は84.5mである。調査前この丘陵は杉の植林に使用されていた。石室は天井部分が崩落していた。

（2）墳丘・外部施設

古墳は僅かな高まりをみせて埋没していたが、墳丘は削平を受け、もとの盛土は全く遺存しない。地山整形の痕跡も確認できなかったが、現状からもともと大きな整地はなされていないようで、石室を覆うように不整円形の小規模な墳丘盛土を行ったのであろう。

（3）埋葬施設

ほぼ南に開口し、主軸をN3°Eにとる単室両袖型の横穴式石室を内部主体とする。天井部分は玄室内に崩落していたが、内部は未盗掘の状態で玄室床面に土器が供献された状態のままで残されていた。腰石の上2～3段の壁体が残存する。玄室平面形態は正方形で、羨道部を連接せずに玄門袖石の外がすぐ前庭側壁となり、したがって玄門閉塞となる。玄室床面は奥壁側半分程に10～40cmの礫を敷き詰めて屍床としている。玄門袖石から前庭側壁が1m程付き、墓道部も含めて底面に礫を敷いている。等高線にほぼ直交して設定される石室掘方は、石室構築プランに沿って3.3×3.8m程の隅丸方形に掘削し、墓道の大半を一つに囲む。墓道は前庭側

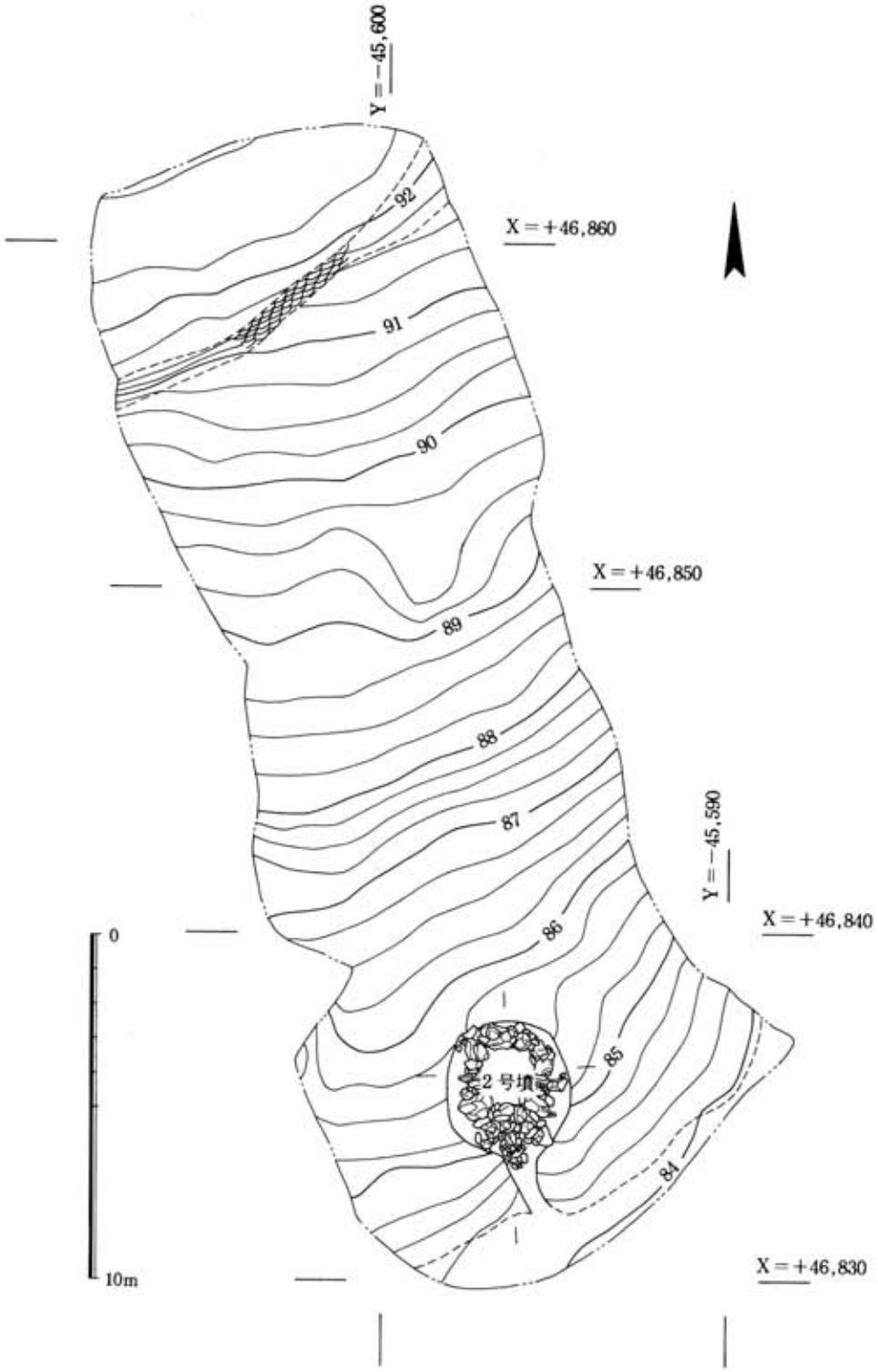


図52　B地区調査後地形図（1/200）

壁も含め、石室主軸に対し15°程東に屈折している。

石材は全て花崗岩の転石を用いる。規模は石室全長2.8m、玄室中央長1.6m、中央幅1.7mを測る。奥壁は腰石に1.4×0.7m程の横長石材を横位に据え、両端は小石材を載せて目地を合

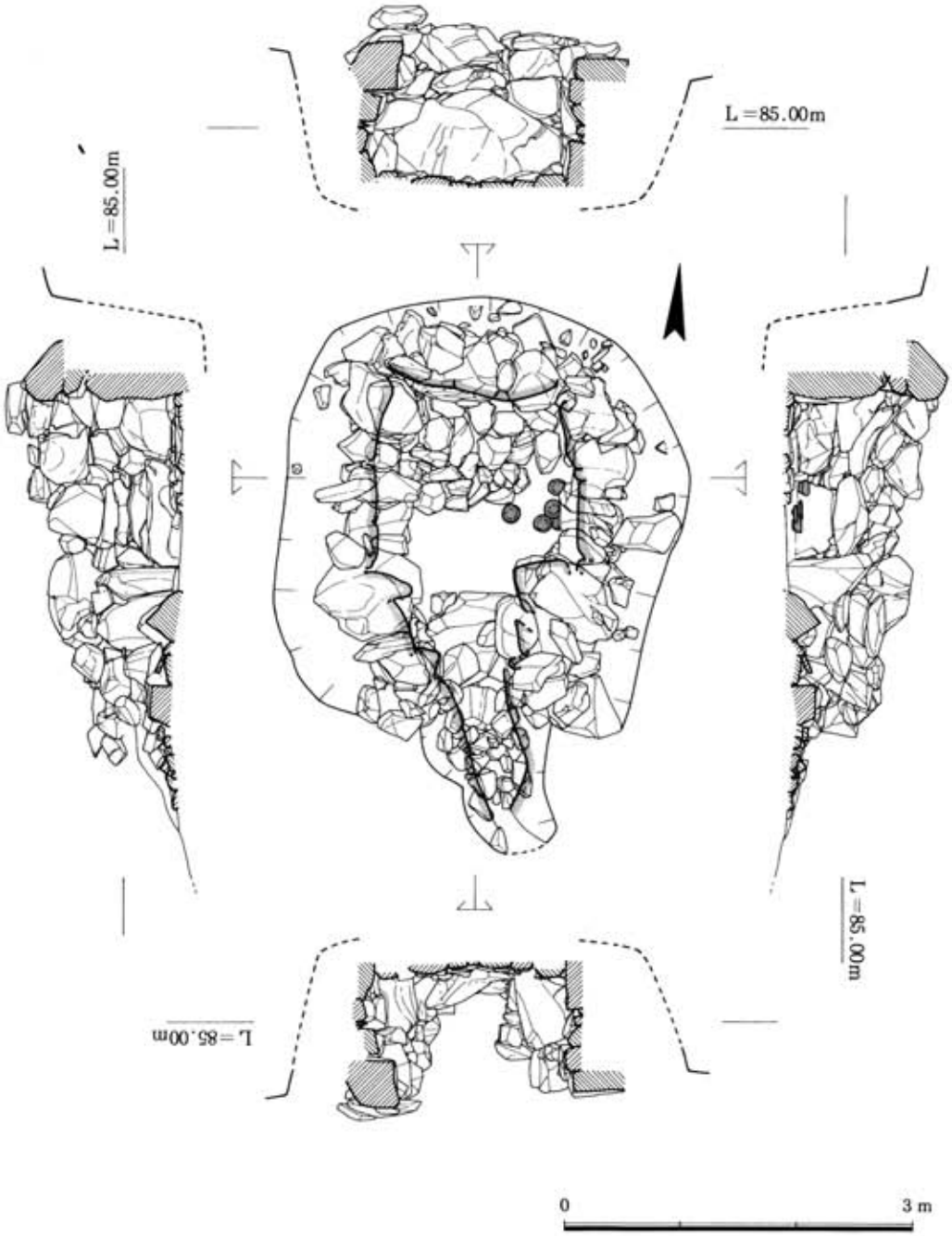


図53　2号墳石室（1/60）

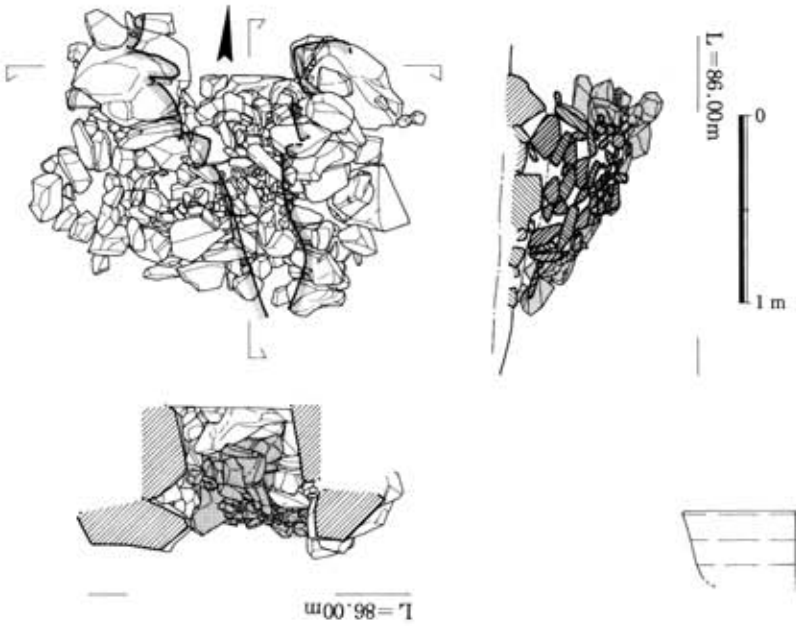


図54　2号墳石室閉塞施設残存状況（1/60）

図55　2号墳玄室遺物出土状況（1/30）

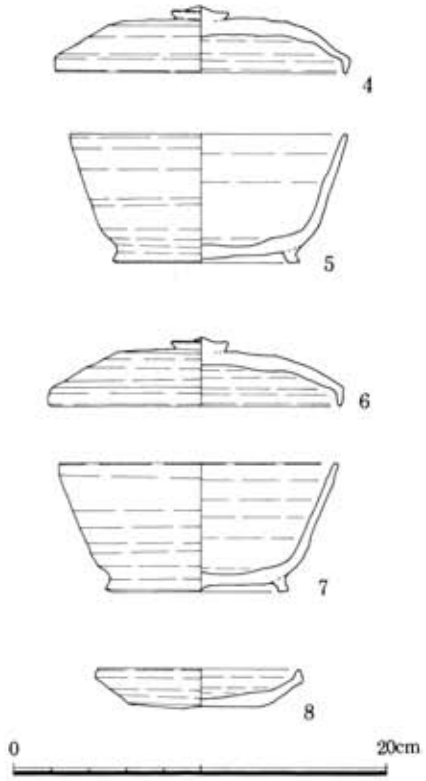


図56　2号墳出土土器（1/4）

る。この上は長方形石材を積み上げ、隙間には小礫を詰める。左側壁は腰石に0.5×0.5m、0.9×0.5m程の石材を横位に配し、上に横長石材を２～３段横積みにして、上段は方形石材を積み上げている。右側壁も同様で、0.6×0.4m程の石材２石を横位に置いて腰石とし、さらに長方形石材を１段横積みにして、小型石材を小口に積み上げる。左右側壁とも石材の積み方は雑で、目地の通りも不明瞭である。玄門部は左右袖石に0.6×0.4m程の柱状石材を立て、床面には２石からなる仕切石を配する。玄門幅は0.9mを測る。前庭側壁は左右同様で小石材を雑に積む。閉塞施設は玄門手前から前庭側壁幅一杯に礫を雑に積み上げる。

（４）出土遺物

出土状態

玄室右側壁の玄門袖石側に須恵器（４～８）が供献時の原位置のまま検出された。蓋はいずれも逆さにした状態で置かれていたがこれは蓋を皿として使用していたためと考えられ、まさに食膳を供した状況である。この状況から屍床には右側（東）を頭にして遺体を安置したことがわかる。また、墓道検出時に坏の破片が１点（３）のみ出土したが、石室内に以前供献されていたものが追葬時に取り片付けされた際にまぎれ込んだのであろう。

須恵器

３は坏の口縁部片。４～８の坏と蓋は4.5と6.7でそれぞれセットになる。偏平な宝珠つまみの付く蓋は口縁端部を直に折り曲げる。坏は高台を付し、口縁部が逆ハの字形にゆるやかに外反する。８は小皿。小型蓋の転用をおもわせるが、底部は平坦に仕上げてすわりがいい。

３はＴＫ48型式（Ⅵ期）に、４～８は平城Ⅰ式（Ⅶ期）にそれぞれ相当する。

Ⅳ．Ｃ地区の調査

本調査区は水呑古墳群を構成する丘陵部の支群のうち、Ｂ地区に次ぐ南東方向に張り出した丘陵上に位置する。尾根の北側斜面から墳丘・石室ともに残存状態の良好な古墳を３基検出した。また丘陵先端に近い部分から、位置の特定ができなかったが、古墳１基の痕跡を検出した。

１．３号墳

（１）位置と現状

丘陵尾根北側斜面の、Ｃ地区のなかでは最も高所に築造される。玄室床面の標高は82.2mで、石室は斜面の等高線に平行して築かれている。調査前は完全に埋没しており、樹木を伐採し表土を剝ぐまで存在が知られていなかった。未盗掘墳である。

（２）墳丘・外部施設

斜面に沿って地山整形を行うが、墳丘基底面は斜面のままで石室掘方掘削面以外は大きく削らない。墳丘平面形態は墳丘列石や周溝の状況からほぼ３×３ｍ程の隅丸方形に復元できる。もっとも、墳丘盛土の状況は上部が植生による土壌変質等により原形を失うものの、明瞭な方墳としてのそれではなく、むしろ円墳の様相を示す。前辺ラインは石室羨門部上にあたり、前庭側壁は外に張り出した状態となる。周溝は墳形の後辺および左辺をほぼ覆うように設けられる。最大幅1.2m、深さは残りのいいところで20cm程である。この周溝は墳丘を区画するとともに丘陵尾根からの排水を目的とするようである。周溝に対角して石室羨門部から前辺右側、および右辺の前半分、すなわち石室長部分まで墳丘外護列石が構築されている。列石は１段のみで40～90cmの転石を据えている。周溝および墳丘外護列石はいずれも盛土の上に設定される。

（３）埋葬施設

東南方向に開口し、主軸をＮ44°Ｅにとる単室両袖型の横穴式石室を内部主体とする。玄門袖石は両側壁を僅かに屈曲させるものの明瞭に張り出したものではなく、いわゆる無袖型石室に近い平面プランとなるが、玄門部に仕切石を配することや敷石の状況、また天井高も玄門楣石の架構により玄室が羨道部より１段高くなることから、玄室は明らかに羨道とは空間を画した意図で構築されている。玄室平面形態は長方形である。規模は石室全長4.9m、玄室中央長2.04m、玄室中央幅1.68m、玄室天井高1.8m、羨道長2.52m、羨門幅0.96m、玄門幅1.28mを測る。玄室より最終追葬時の供献土器が原位置のまま検出されたが、石室内は半分近くまで泥土が堆積しており、これ以外の埋葬状況を示す痕跡は残っていなかった。

石材は全て花崗岩を用いる。玄室奥壁は腰石に1.3×0.9mと0.9×0.5m程の石材をそれぞれ横位、縦位に据え、中段は30°程の傾斜をもたせて0.4×0.6m程の方形・長方形石材を３段横口積みにし、上段は横長小石材を小口積みにして天井石に至る。右側壁は0.9×0.4m程の石材２石を横位に、左側壁は1.2×0.6m、0.6×0.7m程の石材をそれぞれ横位、縦位に据えて腰石とする。右側壁の腰石の上に１段方形石材を積んだところで玄室３方の目地を通す。左右側壁ともこの上は20°程の傾斜をもたせて天井石に至るが、奥壁同様に中段の２～３段は横積み、上段は４～５段は小口積みにして構築する。玄室床面には小礫を敷き詰める。羨道部は0.5～0.8×0.7m程の石材を３石ずつ縦位に据えており、玄門袖石を含めてほぼ目地を通している。この上は横長石材を３～４段積み上げる。床面は玄室より３分の２程を仕切石で区画し、この間を玄室床敷石より一回り大きい礫を敷き詰めているが、４、５号墳の状況から、あるいは擬前室部としての意図があったとも考えられる。天井石は玄室２枚、羨道部３枚の全部で５枚を架構する。玄門上の一枚は玄門楣石を兼ねる。

閉塞施設は玄門仕切石の手前から羨道部のほぼ全体を覆っており、下部は人頭大の転石を、上部は小礫を積み上げる。羨門部直下は小礫がほぼ天井まで達していたようだが、奥の方は40～60cm程の空間を残している。

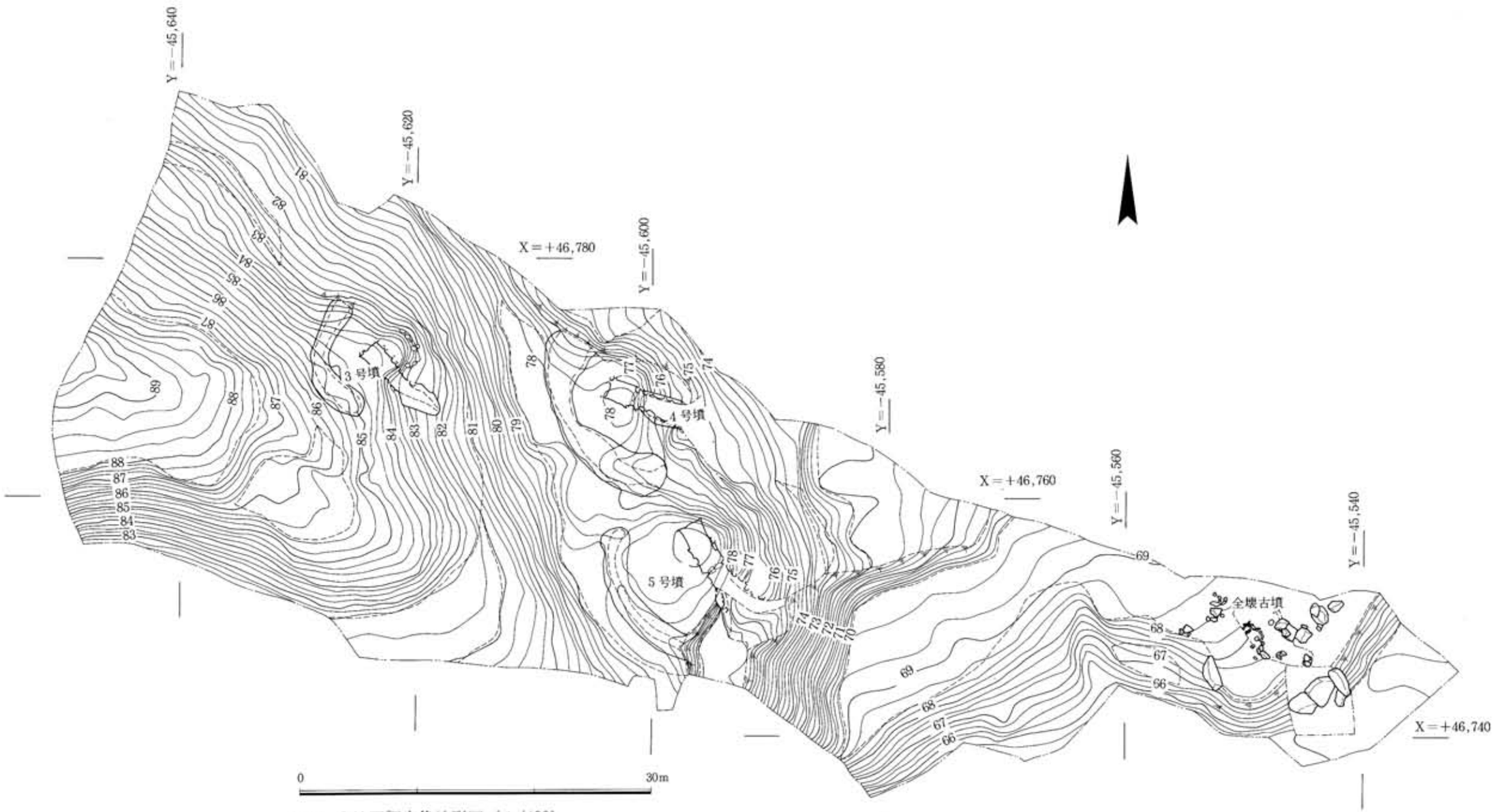
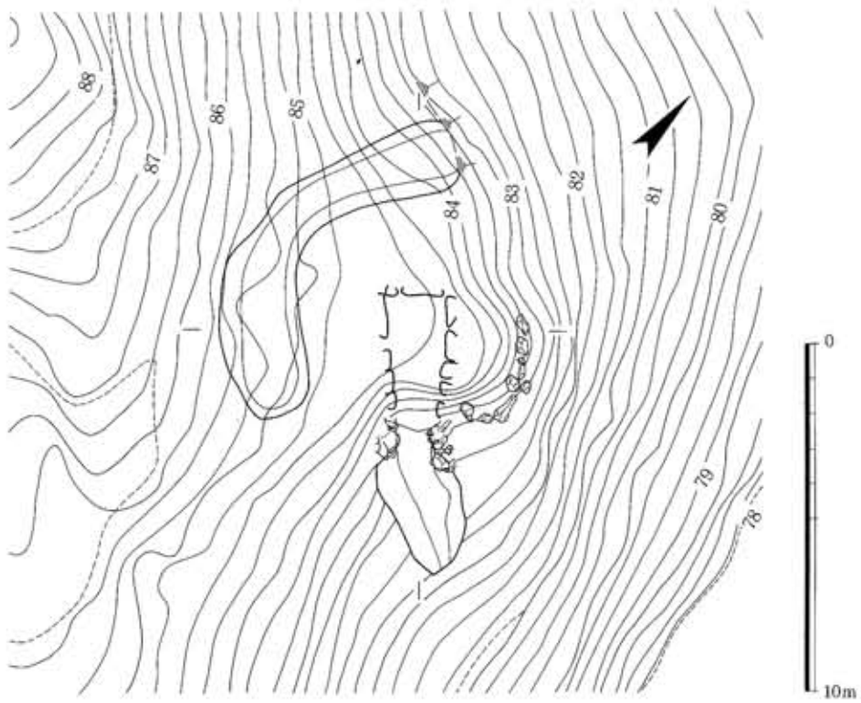
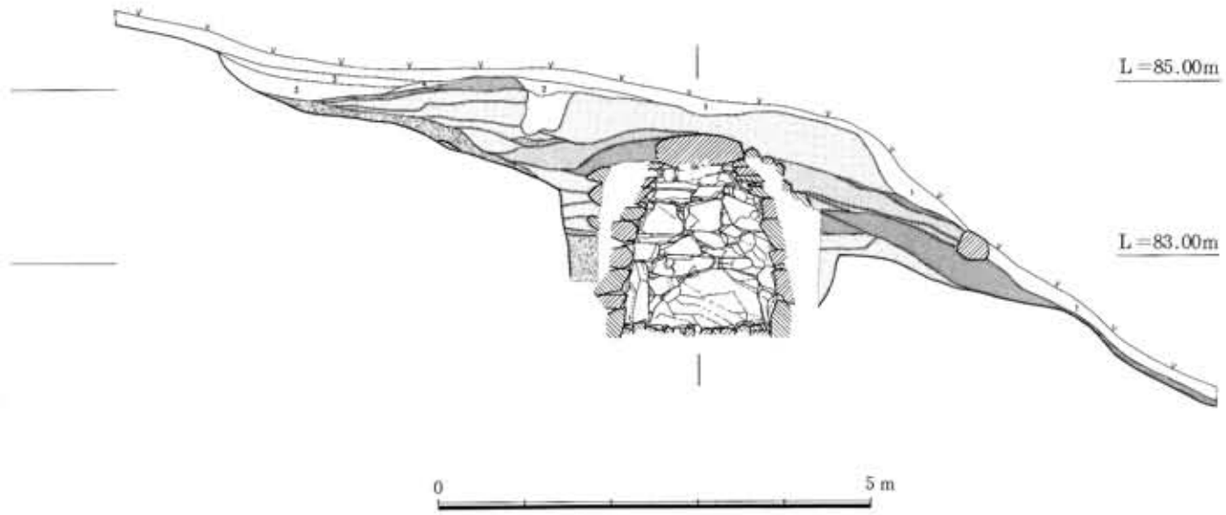
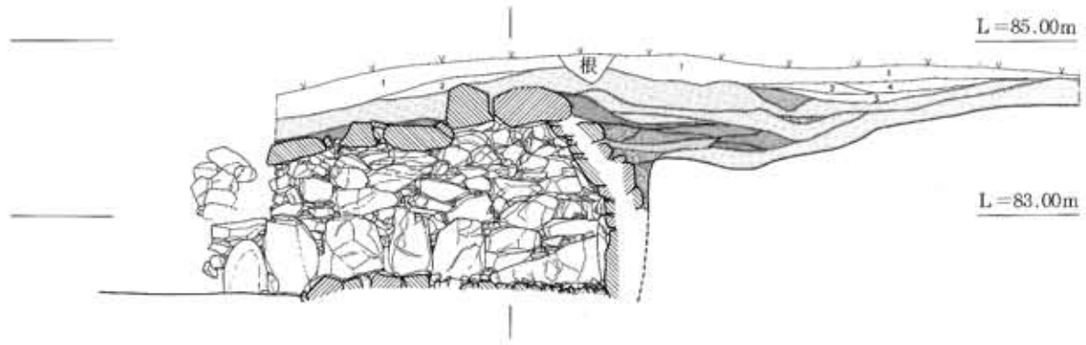


図57　C地区調査後地形図（1/400）







明黄褐色土
明褐色土
黄褐色土
橙色土

1．淡灰黒色腐植土
2．暗黄褐色土
3．灰黒色土
4．淡灰黒色土
5．褐灰色土

図58　3号墳墳丘（1/200）および墳丘土層図（1/80）

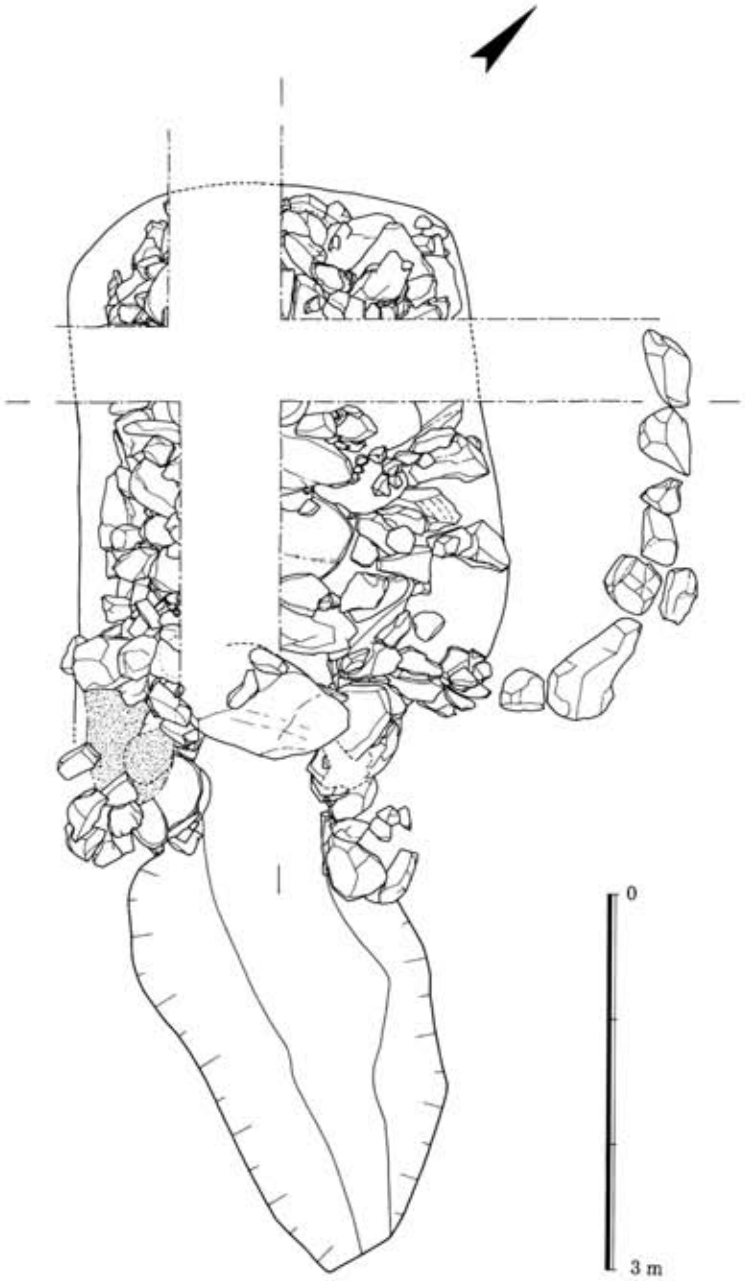


図59　3号墳石室掘方・天井石および墳丘外護列石（1/60）

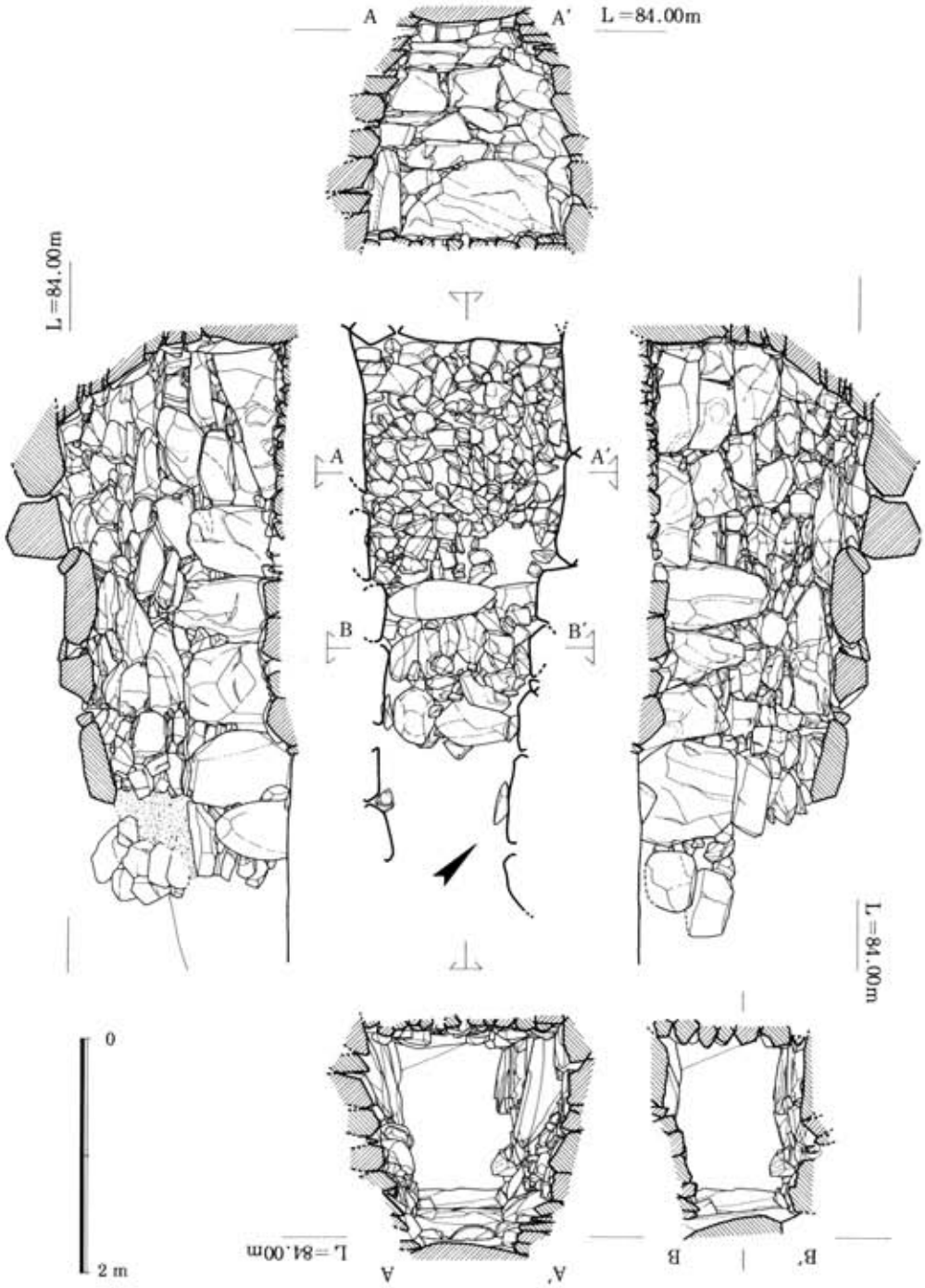


図60　3号墳石室（1/60）

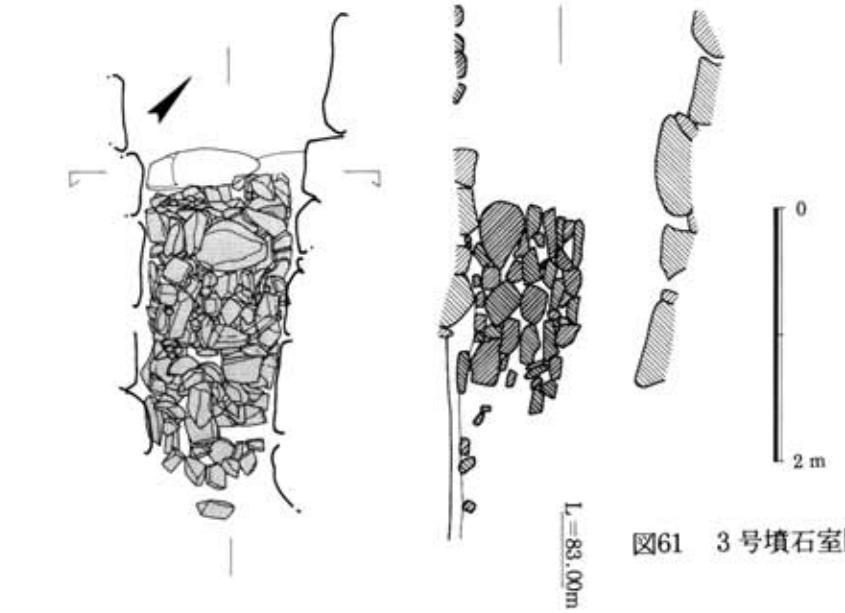


図61　3号墳石室閉塞施設残存状況（1/60）

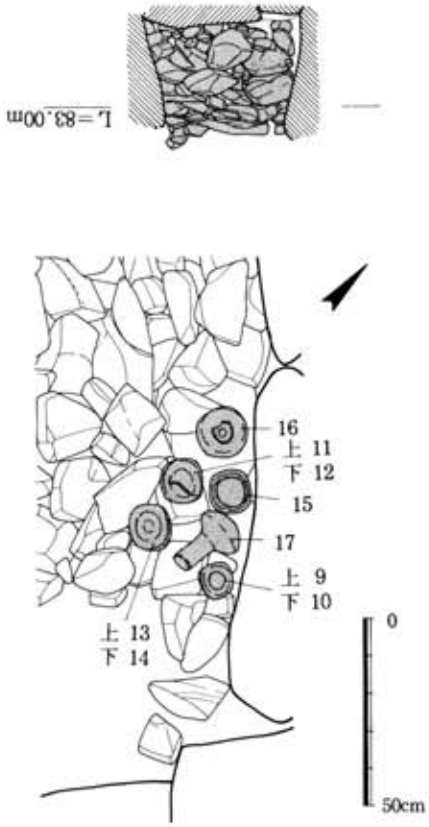


図62　3号墳玄室遺物出土状況（1/20）

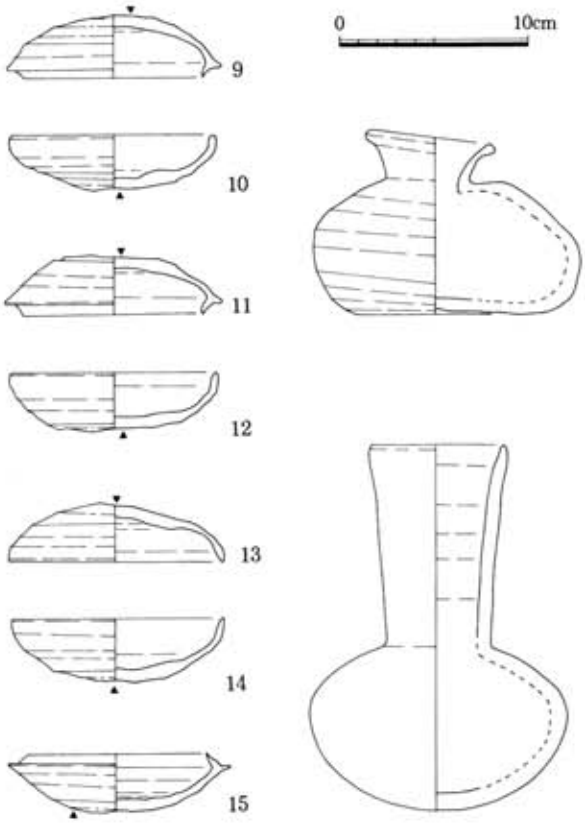


図63　3号墳出土遺物（1/4）

（4）出土遺物

出土状態

最終追葬時に玄室内に供献された土器が原位置のまま検出された。位置は玄室右側壁の玄門袖石よりの敷石上である。須恵器の蓋坏についてはこの時期の実際の使用の仕方を考える上で重要な資料となるため、出土状況すなわち使用状態に即して図示している。

須恵器

9・10と11・12はそれぞれ蓋坏のセットであるが、かえりの付いたほうが蓋になっている。13と14は杯蓋の口縁を重ねて蓋坏として使用している。15は杯身を単体で使用。いずれも天井部、底部は回転ヘラケズリで、比較的明瞭に残る。また、これらすべてに同じヘラ記号がそれぞれ天井部、底部に施され、同時期に同窯で焼かれたものであることがわかる。16は平瓶。口頸部が比較的中心に近い位置に付く。これらはＴＫ217型式（ⅣＢ期）に相当する。

土師器

17は長頸壺。丸底で、外面に丹塗りを施す。

２．４号墳

図64　４号墳墳丘（１/200）

（1）位置と現状

丘陵尾根北側斜面に築造される。西側上方約15mには３号墳が位置し、東南側は周溝が５号墳の墳丘に接する。玄室床面の標高は75.5mである。墳丘右側は崩落し周溝も一部切れるが、石室はほぼ完存していた。調査前は完全に埋没しており、一帯が竹林でこの位置は崖状になっていた。表土を除去する段階までこの古墳の存在が知られていなかったが、すでに石室内部は荒らされていた。

（2）墳丘・外部施設

斜面の等高線に対し石室主軸を45°程斜めに設定して地山整形を行うが、石室掘方掘削面以外は大きく削らず、墳丘基底面の整地は斜面に沿って最小限にとどめる。平面的墳丘規模は周溝から推測して10×８m程の隅丸長方形に復元できる。墳丘盛土は通常の円墳と同様の状況である。３号墳とは違い本墳は前庭側壁部分まで墳丘の中に取り込むようである。周溝は盛土の上から設定され、墳形の後辺および左辺をほぼ覆うように設けられる。最大幅3.2m、深さは残りのいいところで40cm程である。この周溝は墳丘を区画するとともに丘陵尾根からの排水を目的とするようで、これはＣ地区の他の古墳と同様である。

（3）埋葬施設

東南方向に開口し、主軸をN73°Eにとる複室両袖型の横穴式石室を内部主体とする。天井石を架構する羨道部は設置せず、前門楣石をそのまま墳丘に露出させている。もっとも、前庭側壁は比較的長く造られており、第１仕切石から玄室奥壁までの距離とほぼ同じとなるが、前庭側壁の前門手前部分は前門楣石と同じ高さまで石を積むことから、あるいは天井石を架構して羨道とする意図があったのかもしれない。玄室平面形態は第２仕切石を目安に計測すると中央長2.08m、中央幅1.85mで、長方形となるが、玄門袖石による区画、特に左側壁側が不明瞭なこともあり、むしろ正方形に近いプランである。玄室高は2.2m程あり、1.6m程の前室よりも0.6m程高くなる。前室は中央長0.69m、中央幅1.56mで横長の長方形プランとなる。なお、羨道の両側を仕切石で区画した単室両袖型平面プランと判断できなくもないが、前室の天井石は前門および玄門の楣石に載せる状態で架構しており、前室としての空間を明らかに意識しており、副室両袖型としたい。石室掘方は部分的にしか確認できなかったが、石室構築プランに沿って７×3.5m程の不整隅丸長方形に掘削し、墓道部に開く。

石材は全て花崗岩の転石を用いる。奥壁の腰石は1.7×1.2m程の転石１石よりなり、その上は35°程の傾斜を持たせて、0.7×0.3m程の長方形石材を３段横口積みにして天井石に至る。左右両側壁とも腰石はほぼプラン一杯の石材を横位に据え、玄室奥壁ともども脇に石材を補塡して目地を合わせており、とくに左側壁は1.5×0.5m程の横長石材を積んで合わせる。腰石の上は右側壁が20°左側壁は25°の傾斜で方形や長方形石材を３段横積みにする。天井石の直下は奥壁左右両側壁ともに小石材を１段小口に積む。玄門および前門はそれぞれ高さ1.2m、幅

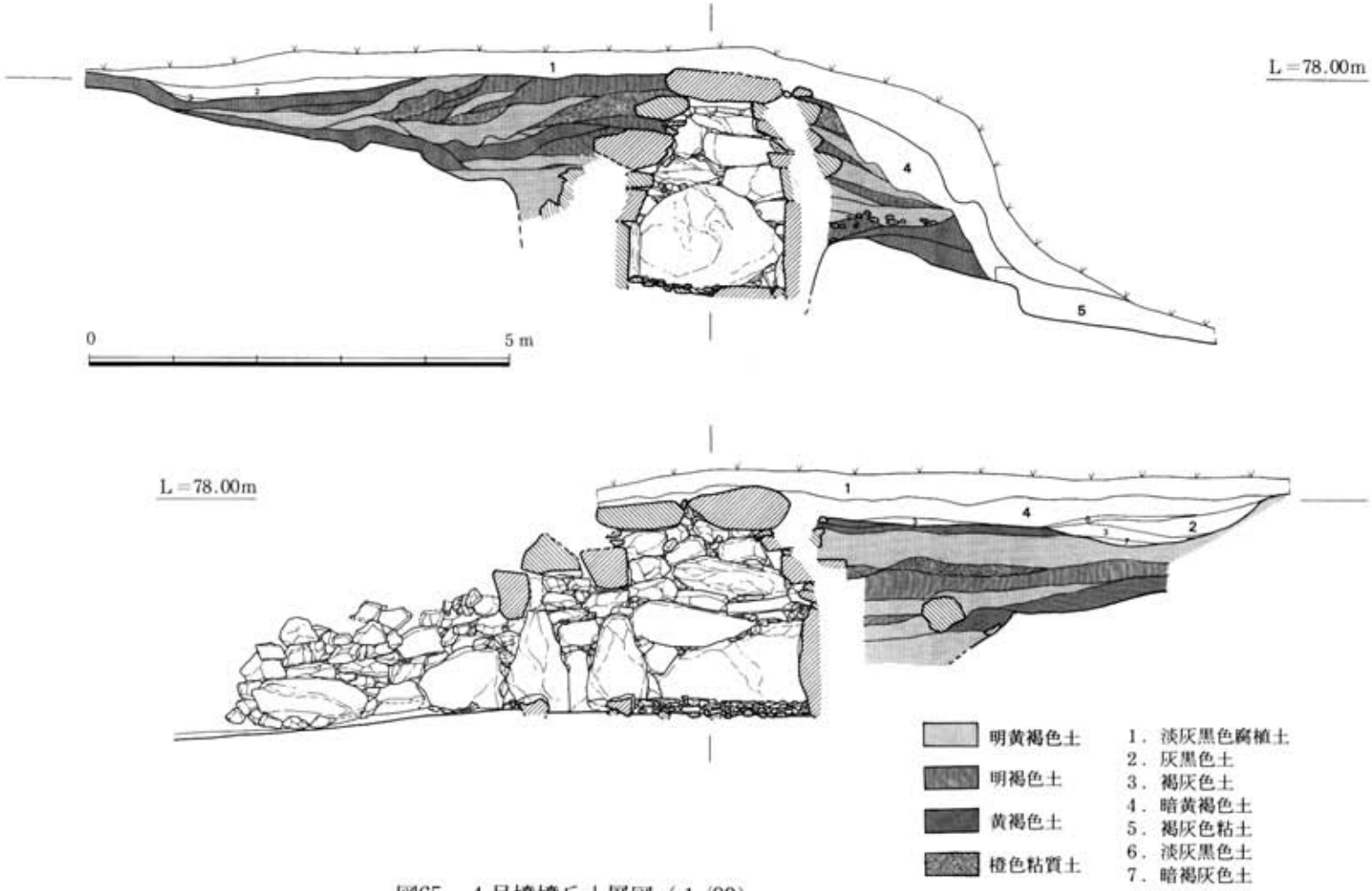


図65　4号墳墳丘土層図（1/80）

0.4～0.7m程の柱状石材を立て、この間には腰石を縦位に、さらに方形石材を１段詰めて目地を合わせ、この上は２～３段小口に積みあげる。天井石は全部で５枚を架構する。玄室が２枚、一段下がって玄門楣石を兼ねる１枚、前室部は一段上がり前門楣石を兼ねる一枚で再び一段下がる。玄室床面は地山掘削時に露呈した花崗岩を巧みに利用しており、不足部分は小礫を敷いて補塡する。前室床面は一枚のみを残して撹乱されていたが、玄室に敷いた小礫よりも一回り以上大きな礫を敷いている。前門、玄門共に仕切石を配する。

閉塞施設は第１仕切石から手前1.2m程に構築される。前門楣石直下は人が潜り抜けられるほどの高さが崩されていた。底面は当初の前庭床面より10～15cm上になるが、このレベルは墓道にかきだされていた遺物にほぼ対応することから、追葬時に全体を再構築したようである。１段目の奥は0.5m程の転石を規則的に並べるが、あとは10～40cmの礫を雑に積み上げる。

（４）出土遺物

出土状態

前室と墓道から土器が出土した。玄室からは耳環のほかは土器の小破片が僅かに出土したにすぎない。概して前室出土の土器が、墓道にかきだされたものよりも時期が古く、これらが最終追葬に伴うものと考えていいだろう。墓道上層からも新しい時期のものが若干出土したが、これは盗掘時に玄室内より持ち出されたものが散乱したものとおもわれる。

須恵器

18～22は杯蓋、38～58は杯身。23～37は蓋、59～74は坏。18と46、20と50はセット。20・21・41・47・50はいわゆる赤焼き。天井部、底部が残存するものには殆どにヘラ記号が付く。杯身の中には実際には蓋で使用した可能性のある、蓋と身の「逆転」移行期のものが含まれる。75～79は小型の高坏。75はほぼ完存し、76は坏部、77～79は脚裾部のみ。78の内面にヘラ記号、79は赤焼き。80は鼎の体部。81は赤焼きの高坏蓋。天井部カキ目調整でつまみを付す。82は壺蓋、83は有蓋短頸壺、84・85は平瓶。84は口頸部のみ。86～88は甕。87は頸部にヘラ記号あり。

これらはＴＫ209～ＴＫ46型式（Ⅳ～Ⅴ期）に相当する。

土師器

89は短頸壺。造りはむしろ坏に近い。90～94は坏。90・91は口縁が屈曲、外反して微かに段の形状をとどめる。92～94はむしろ椀あるいは鉢に近い造りで、92は底部をカキ目調整で仕上げる。95～101は高坏。95は長脚であとは短脚。99は脚中部を穿孔し、外面に丹塗りを施す。

金属製品・装身具

102～109は鉄鏃。102・103は尖根式小型柳葉型で鏃身断面は片丸造。104は尖根式鑿箭型で鋒断面は両丸造。106～109は尖根式鏃の頸部。110は刀子の身先端部。112は用途不明銅板。中央に穿孔があり、縁を僅かに折り曲げる。112は耳環。玄室より出土。鉄芯金銅張りで、径0.5cm、幅2.1cm、重さ6.3ｇ。

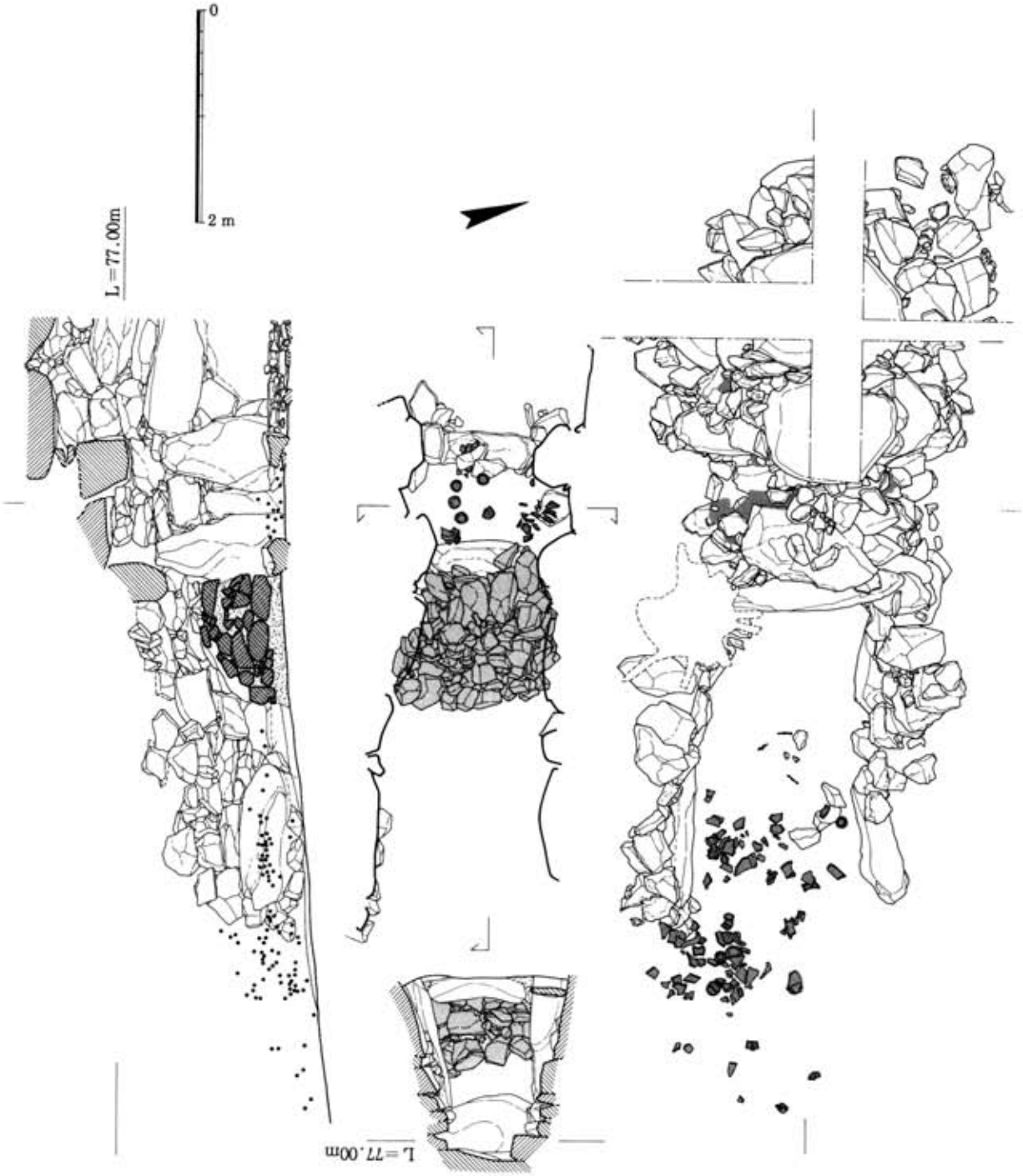


図66　4号墳石室閉塞施設残存状況・墓道、擬前室部遺物出土状況および天井石（1/60）

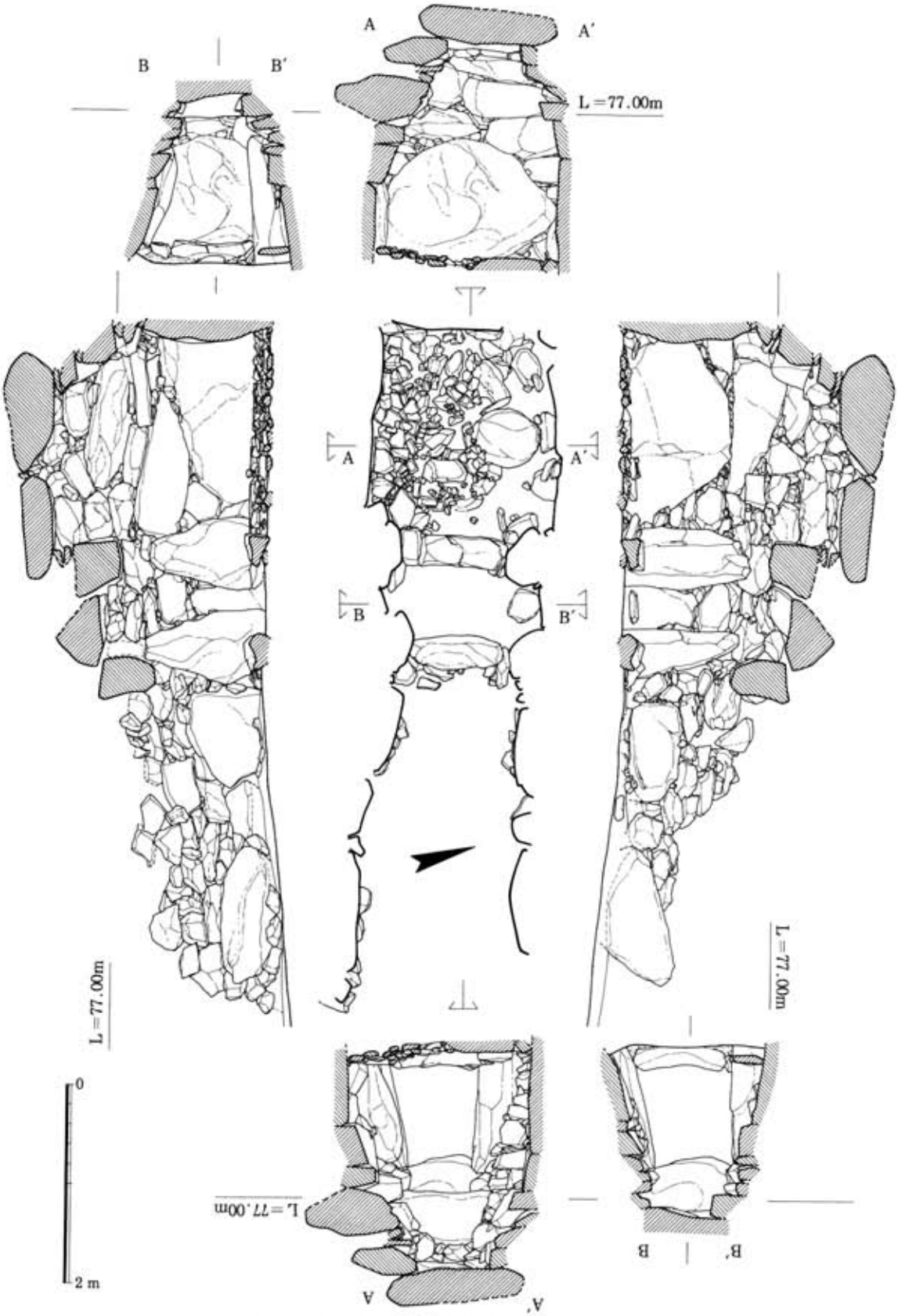


図67　4号墳石室（1/60）

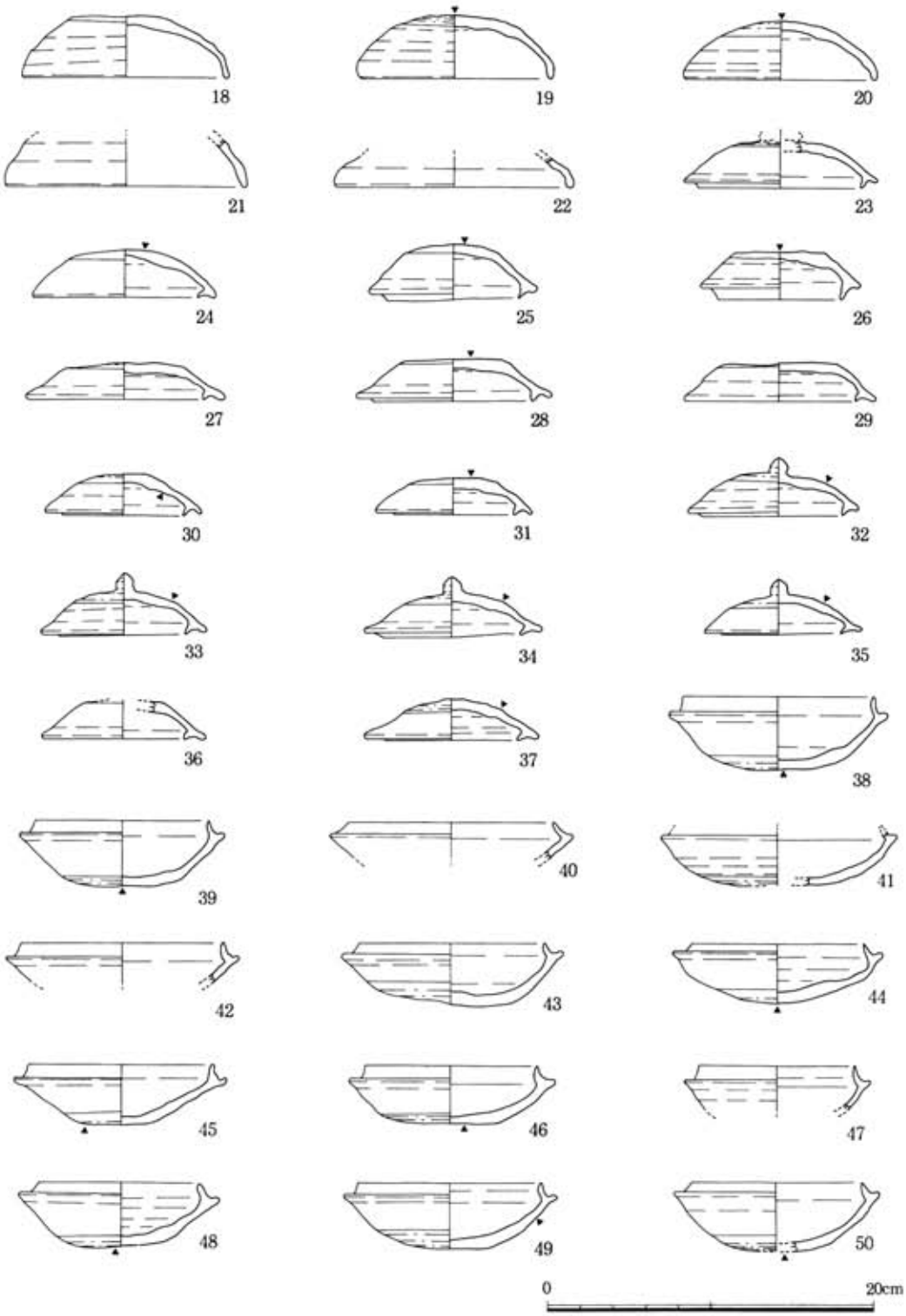


図68　4号墳出土土器 1（1/4）

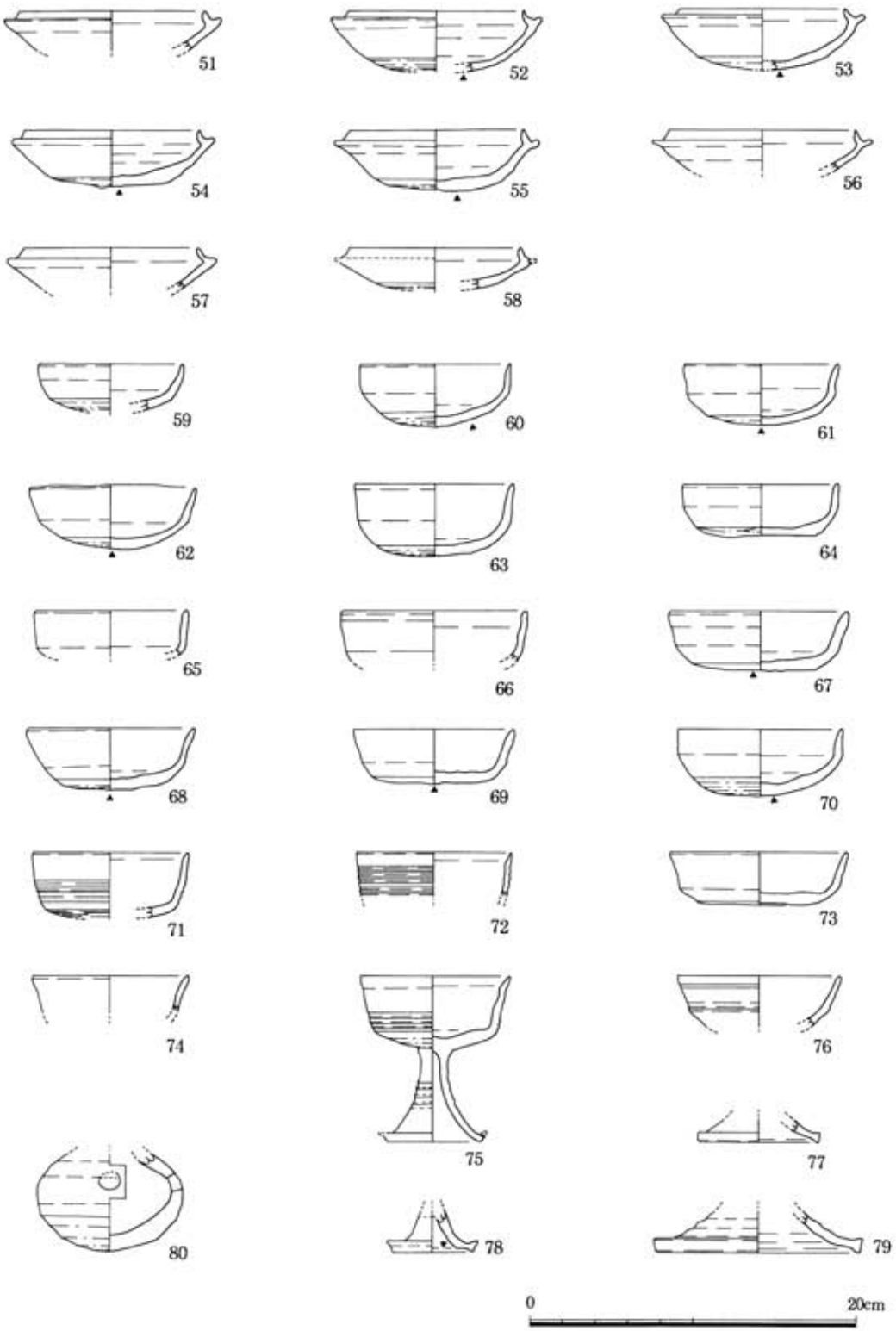


図69　4号墳出土土器 2（1/4）

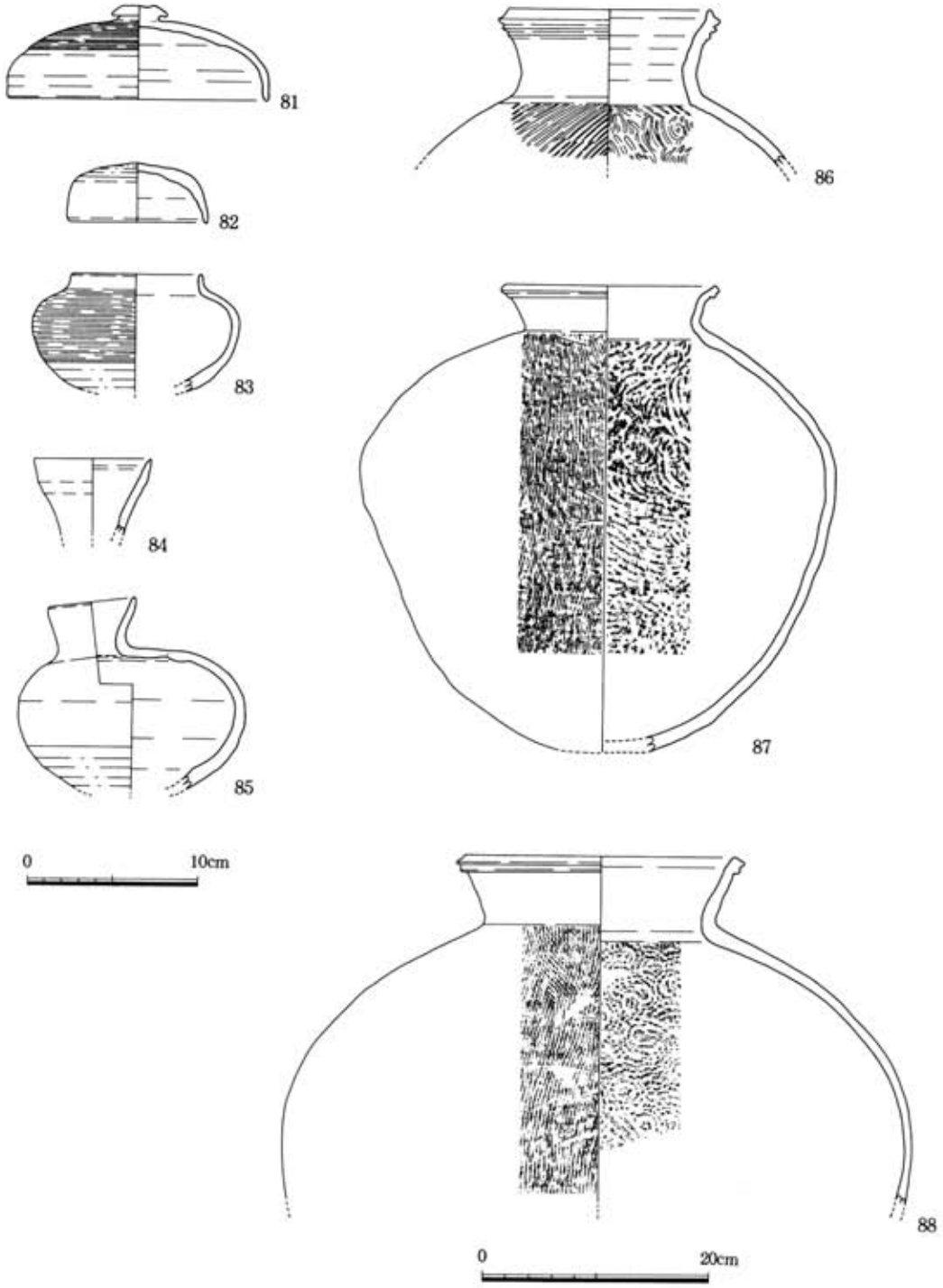


図70　4号墳出土土器 3（1/4, 87・88は1/6）

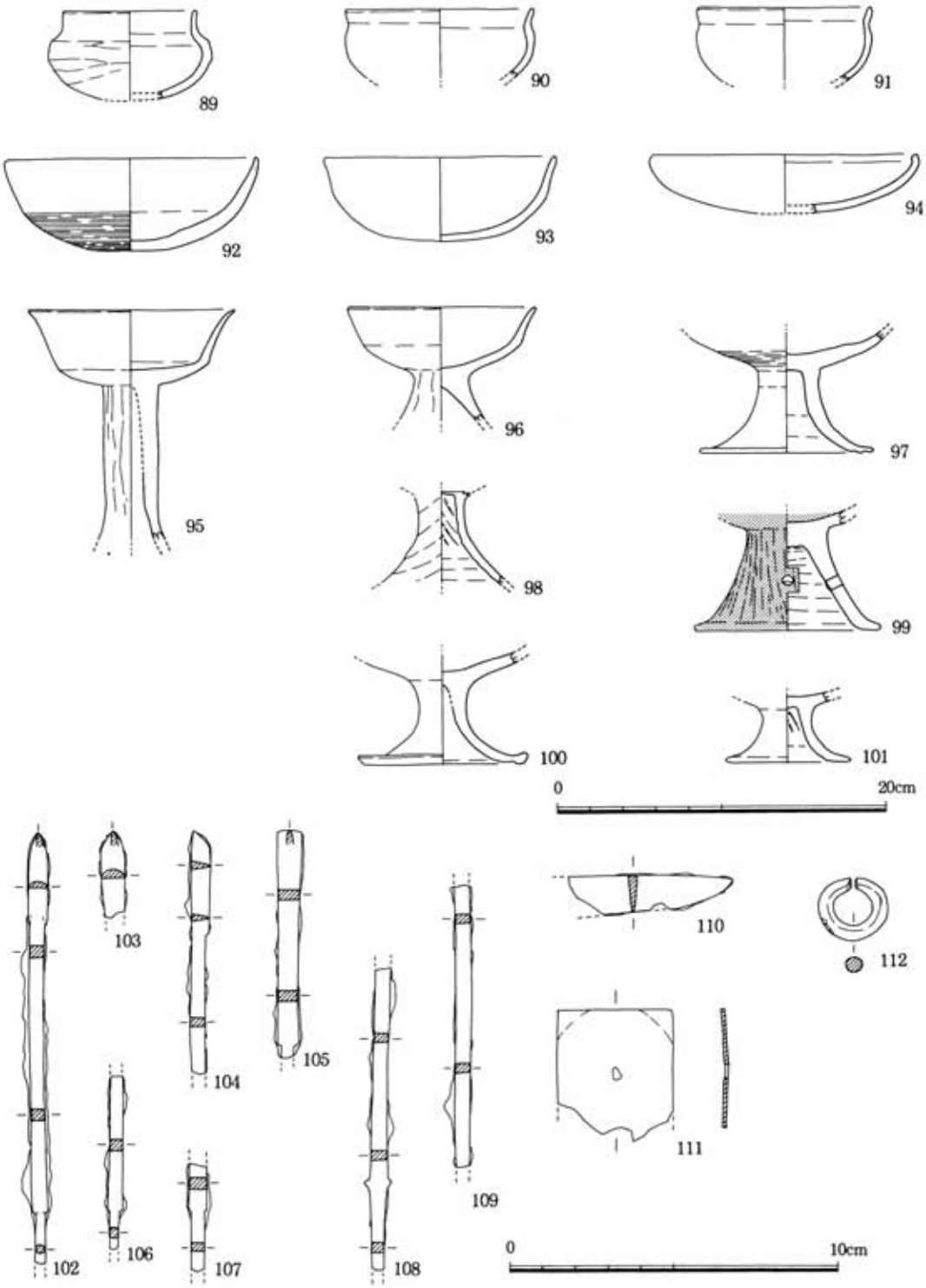


図71　4号墳出土土器 4（1/4）および金属製品・装身具（1/2）

３．５号墳

（１）位置と現状

丘陵尾根北側斜面に築造される。４号墳周溝の東南に墳丘が接するが、石室主軸の方位が違うので両墳の開口部は30m以上大きく回り込まなければならない。墳丘は石室右側と左側手前が崩落により多少変形しており、周溝も一部切れるが、石室はほぼ完全な状態で残っており、調査時にはすでに開口していた。玄室床面の標高は76mである。

（２）墳丘、外部施設

石室主軸を丘陵尾根斜面の等高線に平行して設定し、石室掘方を掘削する以外はもともとの地山は大きく改変されない。墳丘は平面形態を周溝の形状から径14m前後の不整円形に復元できるものの、右側が大きく崩れ、石室右側を中心に行っている墳丘盛土も上部が植生による土壌変質でもとの状態を失う。丘陵上方側に半円規模の周溝を排水目的で盛土の上に設ける。左側手前が崩落で切れるが、最大幅2.1m、深さは残りのいい所で0.4m程である。石室後側は４号墳を考慮して墳丘が接するところに流すようにしている。

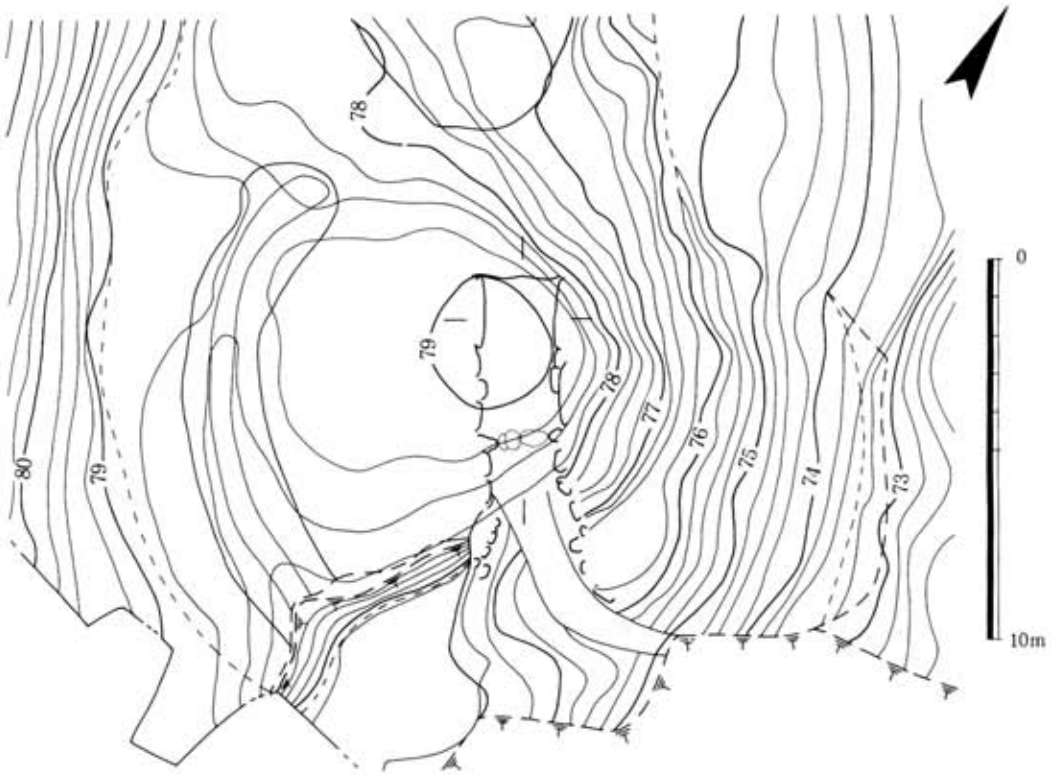


図72　５号墳墳丘（１/200）

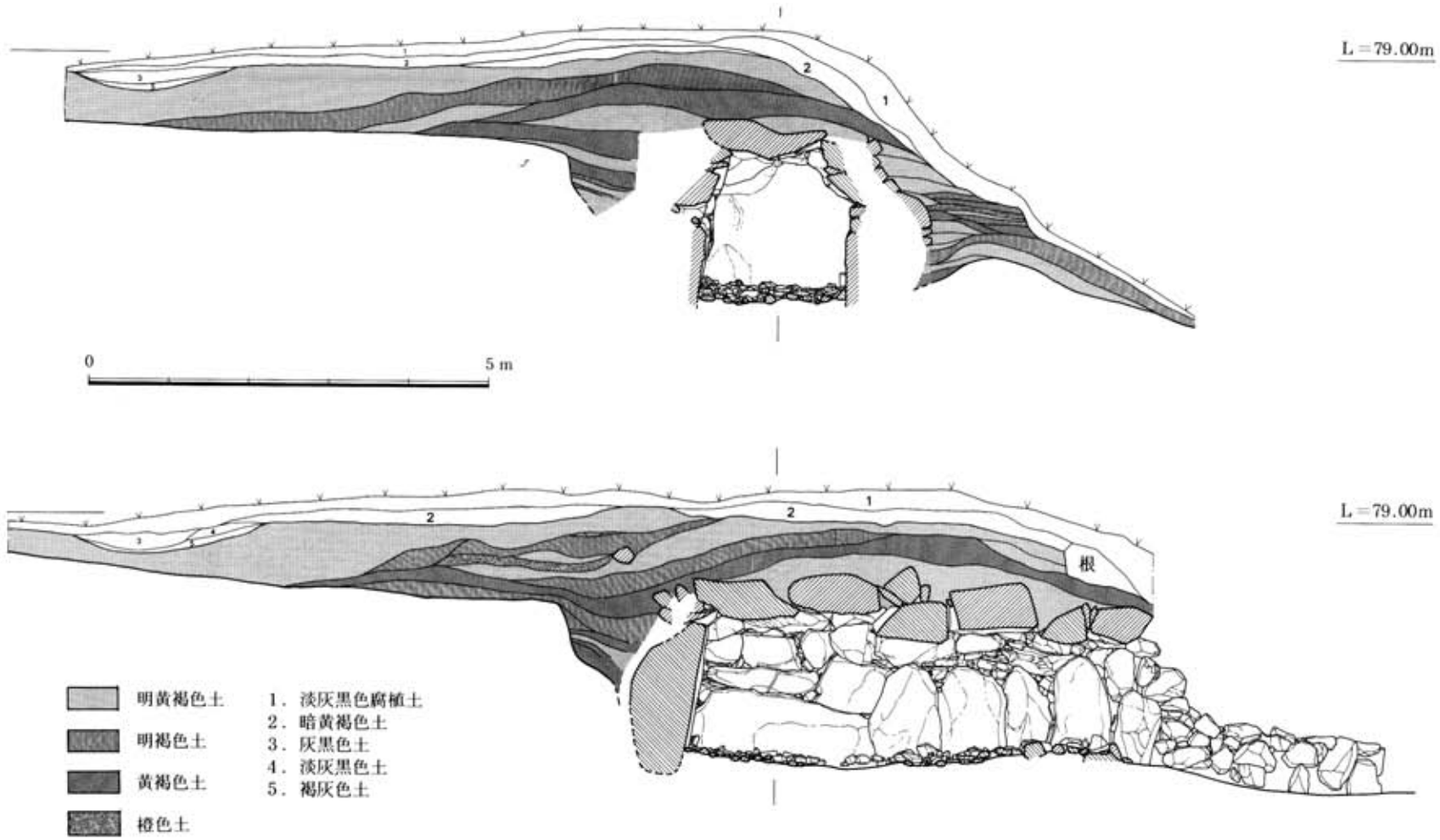


図73　5号墳墳丘土層図（1/80）

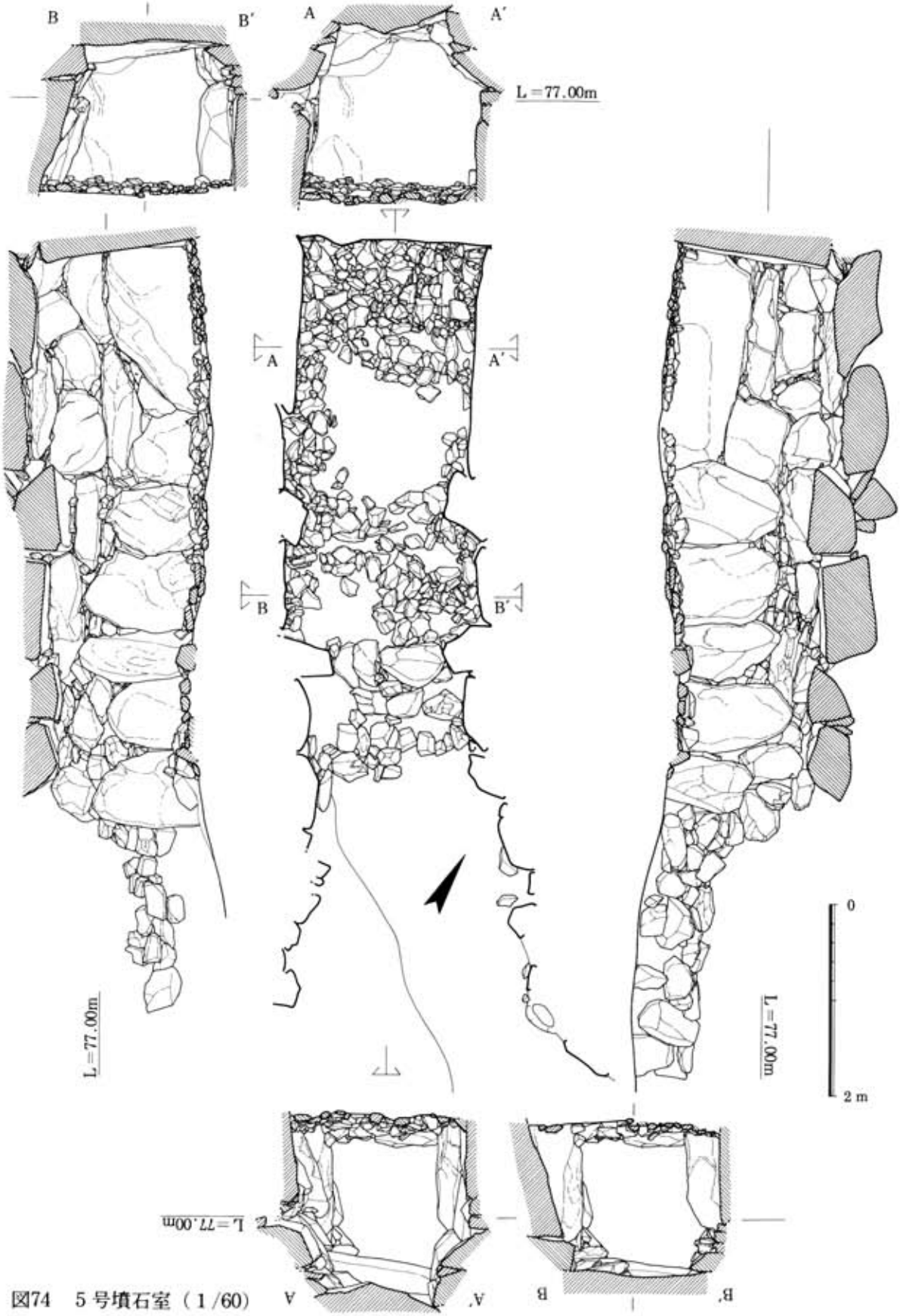


図74　5号墳石室（1/60）

図75　5号墳石室閉塞施設残存状況・墓道遺物出土状況および石室掘方・天井石（1/60）

（3）埋葬施設

東南方向に開口し、主軸をN31°Eにとる複室両袖型の横穴式石室を内部主体とする。石室幅は玄室、前室および羨道がほぼ同規模となり、副室は「退化あるいは形骸化した」タイプで、玄門、前門共に袖石の張りは狭小である。玄室上部は持ち送りの工法が取られないために、天井高が低く、前室や羨道と同じになる。ただ、玄門、前門上は楣石を架構することにより別個の空間に区画する意図は窺える。床面は若干の高低差がみられ、羨道部が高く、そこから前室、玄室と低くなる。石室腰石は玄室側壁部が横長石材を横位に据えるが、あとはいずれも縦位に立てている。規模は石室全長8.0m、玄室中央長2.72m、中央幅1.83m、天井高1.8m、前室中央長1.4m、中央幅2.0m、天井高1.5m、羨門幅1.9m、玄門幅1.4m、前門幅1.2m、羨道長1.5mを測る。前庭側壁は特に右側が長く外側に開く形となるが、この状況から主墓道はすでに崩落しているものの、東側から回り込むようにつけられていたことが考えられる。石室掘方は石室構築プランに沿って10×4.5mの不整隅丸長方形に掘削し、墓道部に開く。

石材は全て花崗岩の転石を用いる。奥壁はいわゆる鏡石状で、平坦な面を持つ石材1石よりなり、天井石との僅かな隙間は割石で詰める。右側壁は2.3×0.8mの横長石材を横位に据え、この上に1.4×0.3m、0.8×0.6mの長方形、方形石材を広口に積み、玄門袖石と目地を合わせる。上段は30°程の傾斜で方形、長方形石材を2段横積みして天井石に至る。左側壁も腰石が2石になるほかはほぼ同様である。玄門袖石、前室腰石、前門袖石および羨道の前門よりの1石は左右両壁ともに0.8～1.2m×0.6～0.8m程の柱状石材を縦位に据える。これらの上に小礫を詰めて目地を合わせ、さらに長方形石材を1段横積みする。天井石は全部で6枚を架構する。玄室に2枚、1段下がって玄門楣石を兼ねる1枚、前室1枚、僅かに下がって羨道部に2枚でうち1枚は前門楣石を兼ねる。前庭側壁は人頭大の転石を2～3段雑に積む。玄室、前室共に床面は一部攪乱されているが、10～20cmの礫を敷き詰める。玄門仕切石は無く、前門仕切石は3石よりなる。羨道床面は玄室、前室よりも一回り大きい20～30cmの礫を敷く。

閉塞施設は前門部に僅かに残存していた。人頭大の塊石を雑に積み上げていたようである。

（4）出土遺物

出土状態

前庭部と墓道から須恵器と有袋鉄斧の残欠(139) が出土している。石室内からは小破片を検出したにすぎない。また、墳丘盛土内からは遺物が全く見い出されていない。

須恵器

113～117は杯蓋、118～126は蓋。127・128は杯身、129～131は坏。

113～116・118・127・128にヘラ記号を刻む。113と127、114と118、115と128はおそらくセットで、これらには型式差が認められるが、それぞれに刻まれるヘラ記号は同じものである（図97参照)。もっとも、タッチは多少異なり、複数の工人により刻まれたことは間違いなく、ある

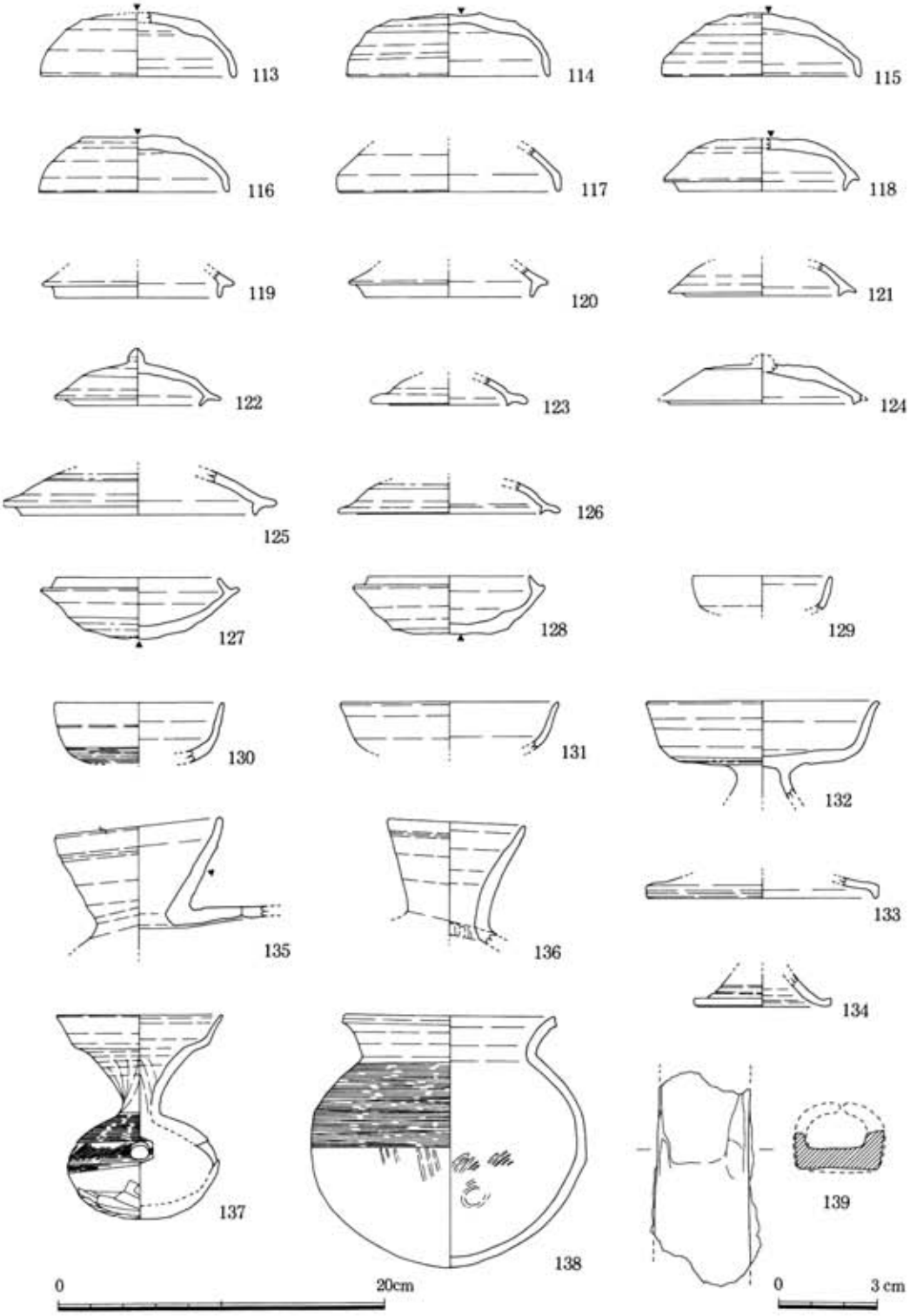


図76　5号墳出土土器（1/4）および金属製品（1/2）

いは連続して同じ窯から供給された可能性も否めないが、石室外に一度にかきだされている状況からみても、これらはおそらく蓋坏が型式変化する過渡期に同時に一つの窯で焼かれ、「消費地」であるこの古墳に供献された可能性が強い。なお、114・118がセット関係とすれば114は身となる。132～134は高坏。132は坏部、外面にヘラ記号あり。133・134は脚裾部片。135・136は平瓶の口頸部。135にヘラ記号。137は甕。穿孔部は斜め刻み目文を施し、両側を沈線で挟む。底部は不定方向のケズリ。138は小型の甕。体上部はカキ目で、下部はタタキのあとナデ。

これらはＴＫ217～ＴＫ46型式（ⅣＢ～Ⅴ期）に相当する。

４．全壊古墳

Ｃ地区丘陵東端に近い部分の南側には、古墳の石材に用いられたと考えられる花崗岩の転石が多数散乱しており、中には2～3mの巨石も数個含まれる。一帯を掘り下げたところ、主軸をN30°Ｅくらいにとる石室掘方状のくぼみを検出したが、これについては遺物が全く出土していないこともあり、断定はできないため、原位置不明の破壊古墳とした。石材の状況から主体部はおそらく１号墳や５号墳のような、前室が退化あるいは形骸化したタイプの石室であろう。また、この周辺から縄文早期の押型文土器片や黒曜石の剥片が出土している。

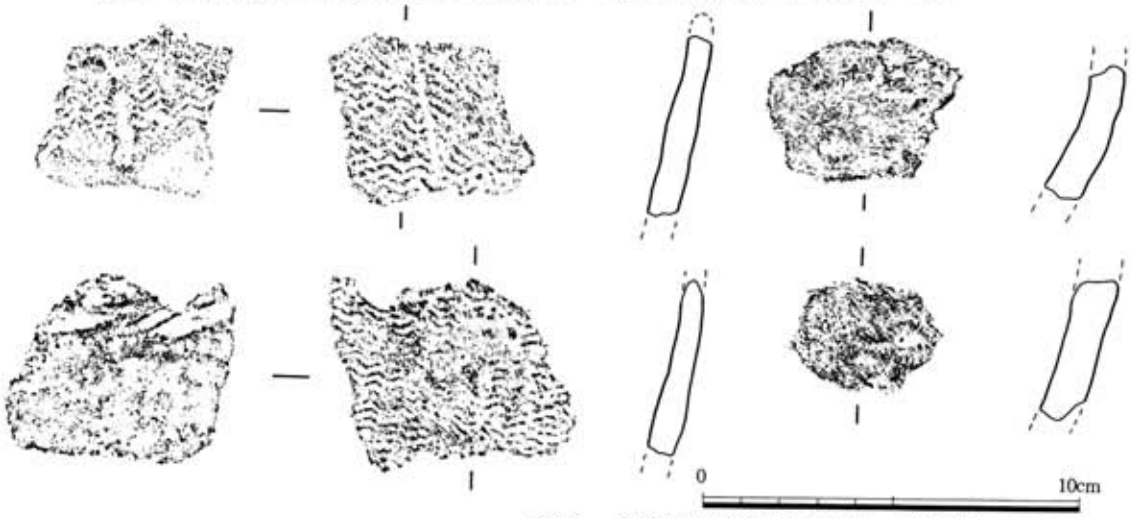


図77　Ｃ地区出土押型文土器（１/３）

Ⅴ．Ｄ地区の調査

水呑古墳群を構成する支群では最も南側の、谷入り口に近い丘陵上に位置する。この手前に、もう１ヵ所園部谷に面して東に張り出す舌状の丘陵があるが、ここからは古墳が確認されておらず、この地区が本古墳群では最も外側の立地となる。丘陵尾根東端部から本古墳群中最も築造時期の早い古墳１基と、丘陵基部南側斜面から最も造営時期の遅い小石室墳３基を検出した。

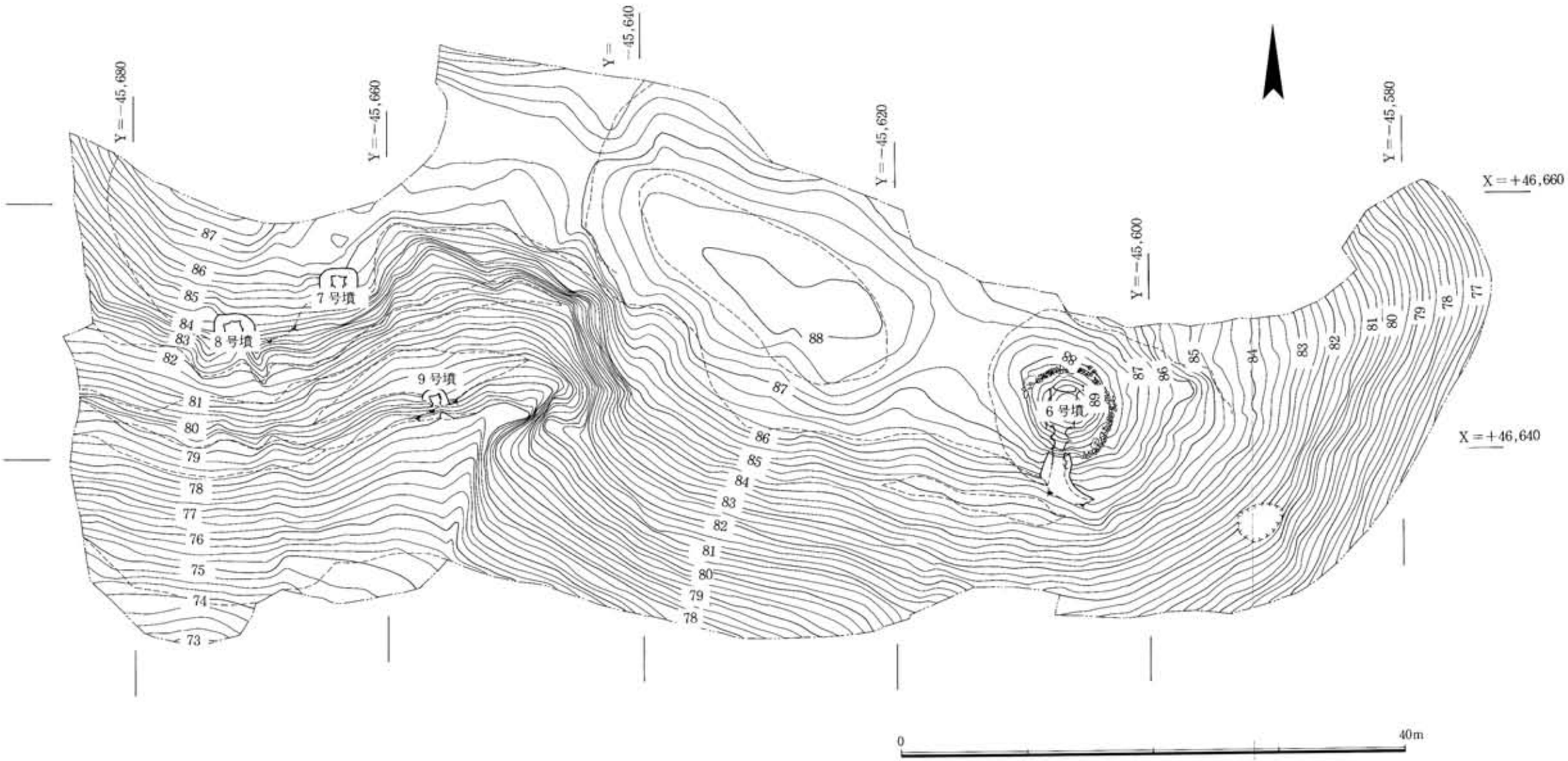


図78　D地区調査後地形図（1/400）

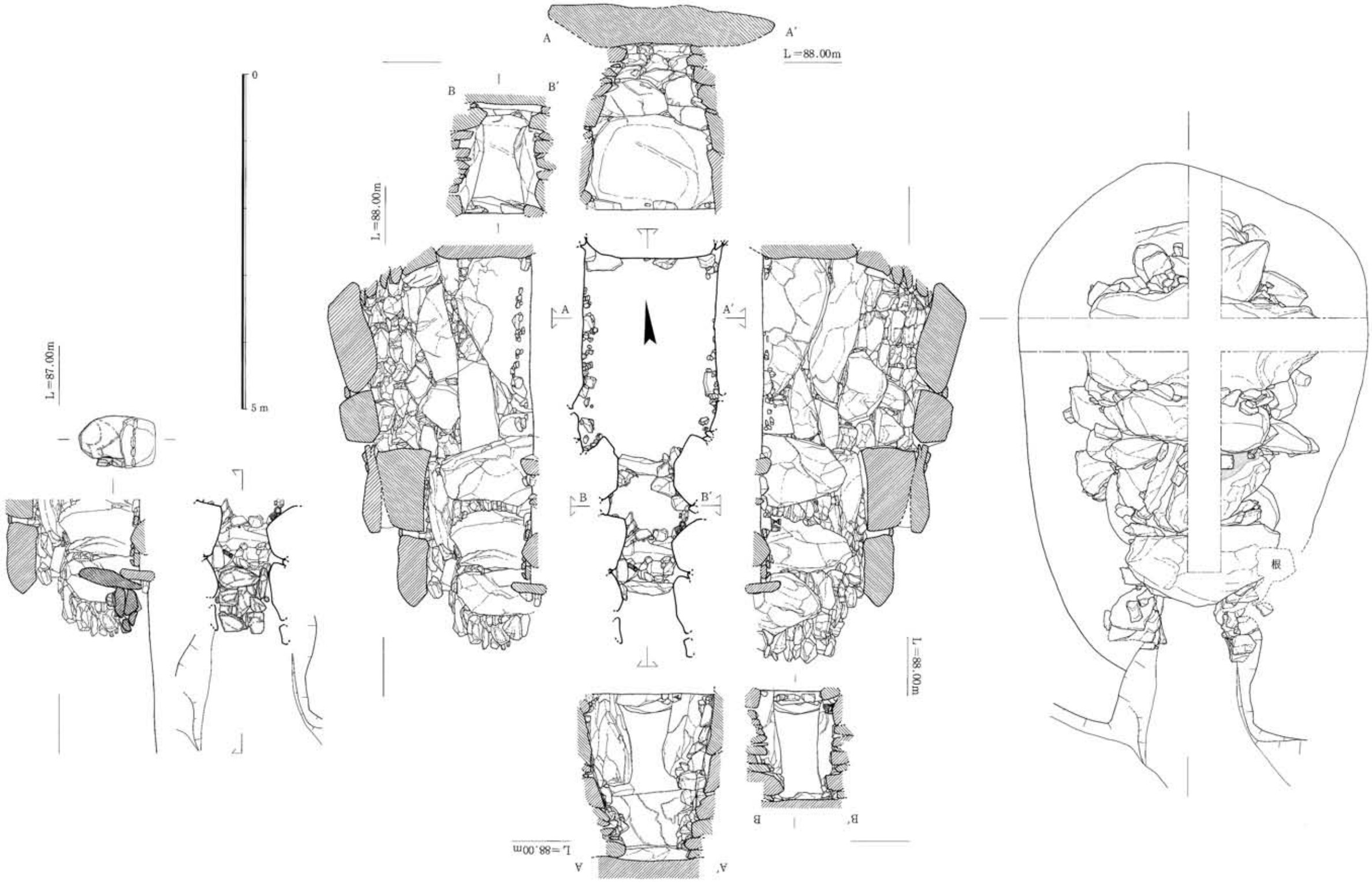


図79　6号墳石室・石室閉塞施設残存状況および石室掘方・天井石（1/60）

１．６号墳

（１）位置と現状

調査区東端に近い丘陵尾根上に築造される。玄室床面の標高は85.8mである。墳丘、石室とも遺存状態は良好で、すでに人がかろうじて出入りできる程の大きさで開口していた。

（２）墳丘・外部施設

地山整形はまず尾根をある程度平坦に整地して墳丘基底面を設定する。石室側壁の上段あたりが墳丘基底面となり、基底面端部には現状で右側手前部分を除いた墳周の約４分の３程に、人頭大の塊石を２～３段積んだ墳丘外護列石が墳丘盛土と同時に構築される。次に石室中心から半径5.5～6.5m程の範囲で、地山を70～90cm程度不整円形に丸く削り出すが、これは丘陵下から見上げた時に墳丘を大きく見せかけると共に、傾斜をより下まで付けることで排水効果を高める意図があるものとおもわれる。このためか、本墳には周溝は設けられていない。墳丘は上部が植生で土壌変質していた以外は概ね残存する。石室掘方掘削面から墳頂までは約２m、天井石からは1.1mを測る。墳丘頂部は石室中心より0.5m程左側（東）にずれる。墳丘外護列石から平面的墳丘規模を復元すると径7.5m程の不整円形となる。なお、墳丘外護列石が右側手前部分を欠失するのは後世に取り除かれたためであろうが、丘陵下からはあまり目立たない位置だけに当初から構築されなかった可能性も否定できない。

（３）埋葬施設

斜面に向かってほぼ南に開口し、主軸をＮ５°Wにとる複室両袖型の横穴式石室を内部主体とする。もっとも、前室は明確なプランを設定しなかったのか、それとも意図に合う石材が用意できなかったのか、現状の平面は玄門および前門袖石のコーナーの組み合わせによって、かろうじて羨道より幾分広がった空間を確保しているにすぎない。加えて前門楣石を設けず羨道と同じ天井高となることから、あるいは擬前室構造を持った単室両袖型とするべきかもしれない。石室は天井部まで完存するが、すでに開口しており、内部は相当荒らされていた。検出時、玄室内部は人頭大の塊石が多数散乱しており、この20～30cm下で築造当初の床面を検出した。追葬時にいわゆる“床上げ”を行っており、当初の床敷石は側壁裾に小礫が僅かに残されていただけである。玄室平面形態は長方形を意図するものの、コーナー平面が整わない玄門袖石は、前壁の面を持たずに玄室手前がややすぼまる半ば側壁状となって、幾分突き出た玄門に至るという変則的なものとなる。しかしながら可能な限りプランを左右対称に為すよう工夫した跡は窺える。規模は石室全長6.8m、玄室中央長3.5m（玄門袖石コーナーでの計測では約3m）、中央幅2.3m、天井高2.8mを測る。石室掘方は7.7×5.7m程の不整長楕円形で、切通し状の短い墓道を同時に掘り込む。墓道の先は登り道との関係上か東側に屈折する。

石材は全て花崗岩の転石を用いる。奥壁腰石は2.2×1.6m程の幅一杯の巨石を横位に据え、

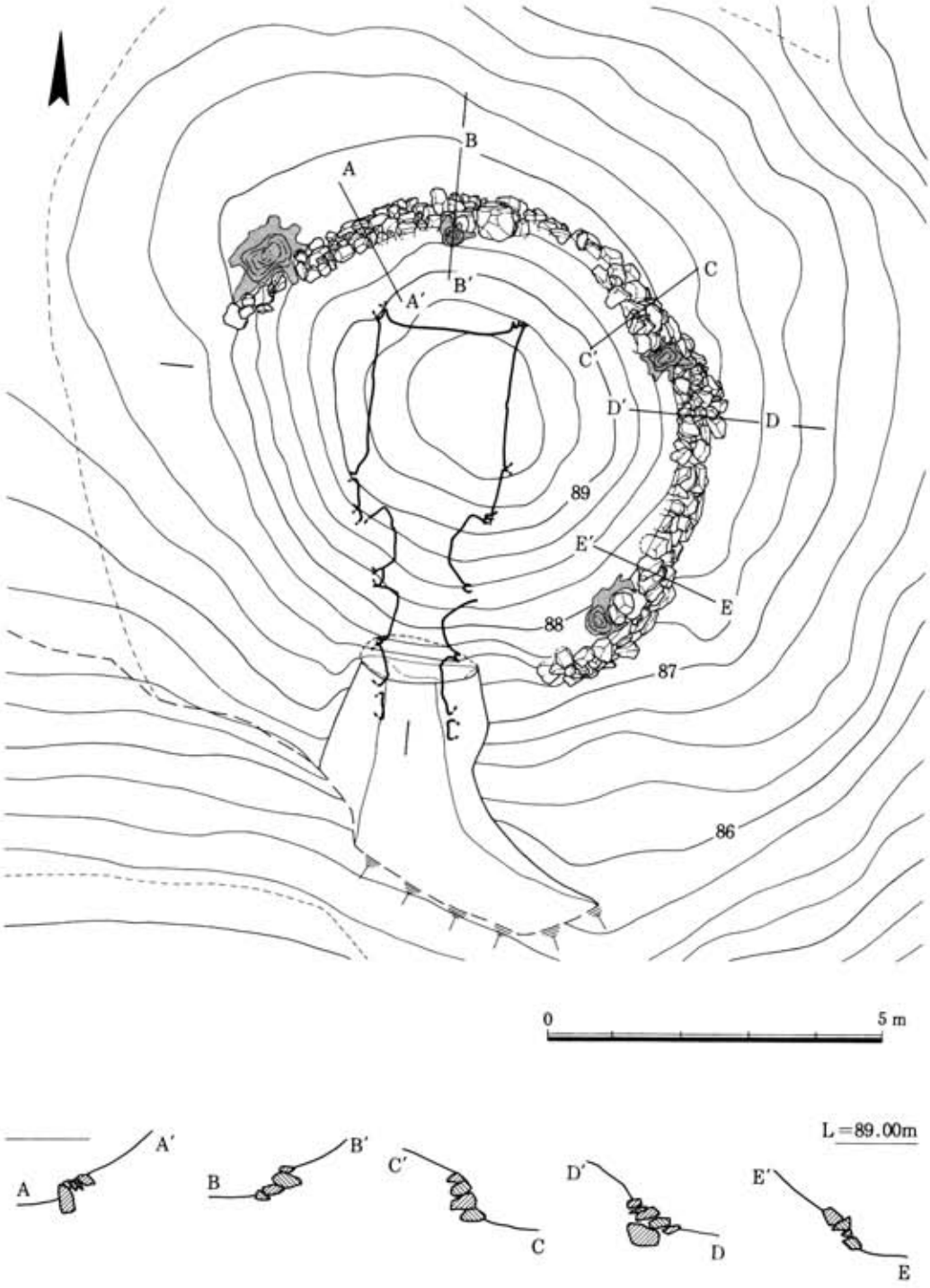


図80　6号墳墳丘および墳丘外護列石（1/100）

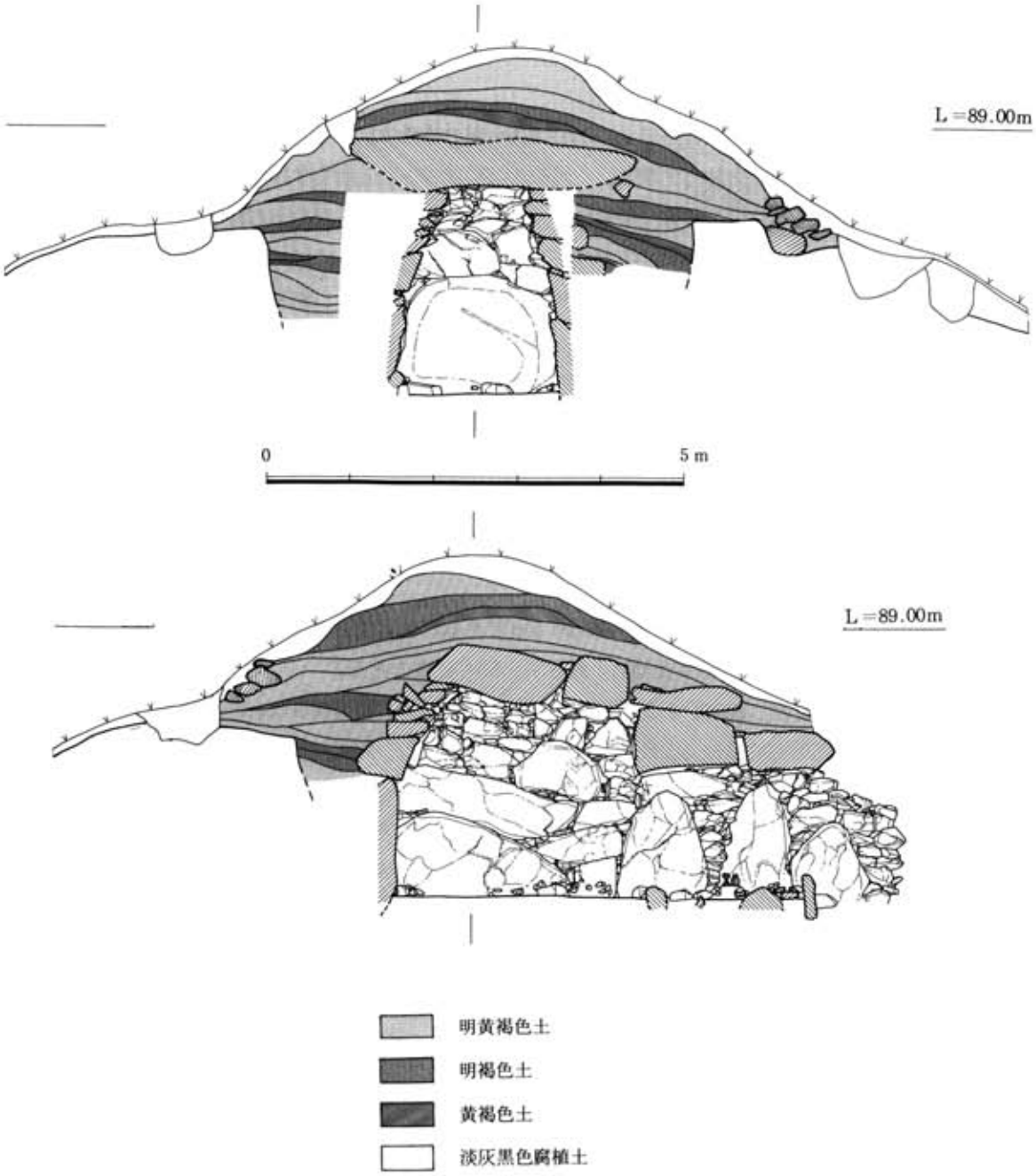


図81　6号墳墳丘土層図（1/80）

この上は右側に1.1×0.6m程の長方形石材を載せ、左側は0.7×0.3～0.6m程の石材を2段横積みにする。上段は小石材を3段小口に積み上げ、さらに割石を挟んで天井石に至る。奥壁は腰石の上から30°程の傾斜で、側壁は左右共腰石から15°程の傾斜でそれぞれ内傾するが、側壁は特に上段の石積みが粗雑な印象を受ける。共に奥壁側の腰石に2.4×1.1m程の上面が手前に傾斜する石材を据える。左側壁は玄門側に1.5×0.6m程の長方形石材を積み、隙間には小石材

を詰める。右側壁は奥壁側腰石の上に2.5×0.6m程の横長の巨石を、互いの石材にうまく嚙み合うように若干の加工を加えて載せ、玄門側の隙間は長方形石材を3段積んで補塡する。両側壁ともこの上は大ぶりの石材を一部用いるが、あとは長方形、方形の小石材を4～5段小口に積み上げて持ち送る。玄門部は左右共袖石に長さ1.1～1.2m、幅0.6～0.7m、高さ1.5m程の大型石材を縦位に据え、この上に横長石材を前門袖石上部に渡し、割石を挟んで玄門楣石を架構する。この楣石は長さ1.4m、幅1.8m、厚さ0.9m程の巨石を用い、前室部天井の大部分を兼ねる。また、右側の玄門袖石に架けた横長石材は、袖石上部に合わせて下部を窪ませた加工を施している。玄門幅は0.96mを測り、第2仕切石を置く。前門袖石は両側共に玄門袖石より一回り小規模の石材を用いる。前室左右側壁は前後の袖石に挟まれた僅かな隙間に幅を合わせた礫を積み上げる。前門幅は0.8mを測る。羨門は右側に1.3×0.7m、右側に1.2×1.1m程の石材をそれぞれ立て、この上は前庭側壁共々礫を雑に積み上げる。前門には第1仕切石を置くが、この手前、羨門にはさらに跨ぎ石を配している。これは0.7×0.5mの板石を床面から30cm程出して横位に立てている。羨門幅は0.9mである。前室床面は大部分が欠失するが、20～40cmの偏平な礫を敷く。第1仕切石と跨ぎ石の間も同様である。

天井石は玄室2枚、前室、羨道2枚の4枚を架構する。玄室奥部分は4.5×1.9mという巨石を用いる。前門楣石を兼ねる1枚の上にはもう1枚偏平だが同規模の石材を重ねている。石材の裏側は水漏れを防ぐためところどころ青灰色の粘土を詰める。

羨門部に閉塞施設が残存する。1×0.6m程の板石を跨ぎ石の手前から立てかけ、右側の隙間には小礫を2個詰めて安定させ、手前に20～40cmの礫を2段積む。閉塞施設の底面は当初の前庭面より20～30cm上にあり、追葬時に再構築したようである。

（4）出土遺物

出土状態

前室の右側壁前門よりから高坏と提瓶（149・150）が原位置のまま出土したが、あとは石室や古墳の周辺で僅かに見い出だしたのみである。出土遺物で古墳の築造時期に伴うものは見当たらない。墓道からは土器片すら出土しなかったがおそらく最終追葬時までに取り片付けをおこなったのであろう。墳丘盛土中からも遺物は全く出土しなかった。

須恵器

140は杯蓋。口縁端部を屈曲させる。141～145は蓋。141・142は完形で墳丘左手前の斜面から重なって出土した。146～148は坏。148はおそらく最終追葬に伴うものであろう。149は高坏。坏部に段の痕跡を残し、脚部はカキ目調整で仕上げる。150は小型の提瓶。胴部が角張った造りである。151はいわゆる赤焼きの椀。152は長頸壺の口頸部。153は甕の口頸部片。櫛描波状文を施す。これらはＴＫ217型式～平城Ｉ式（ⅣＢ～Ⅶ期）に相当する。

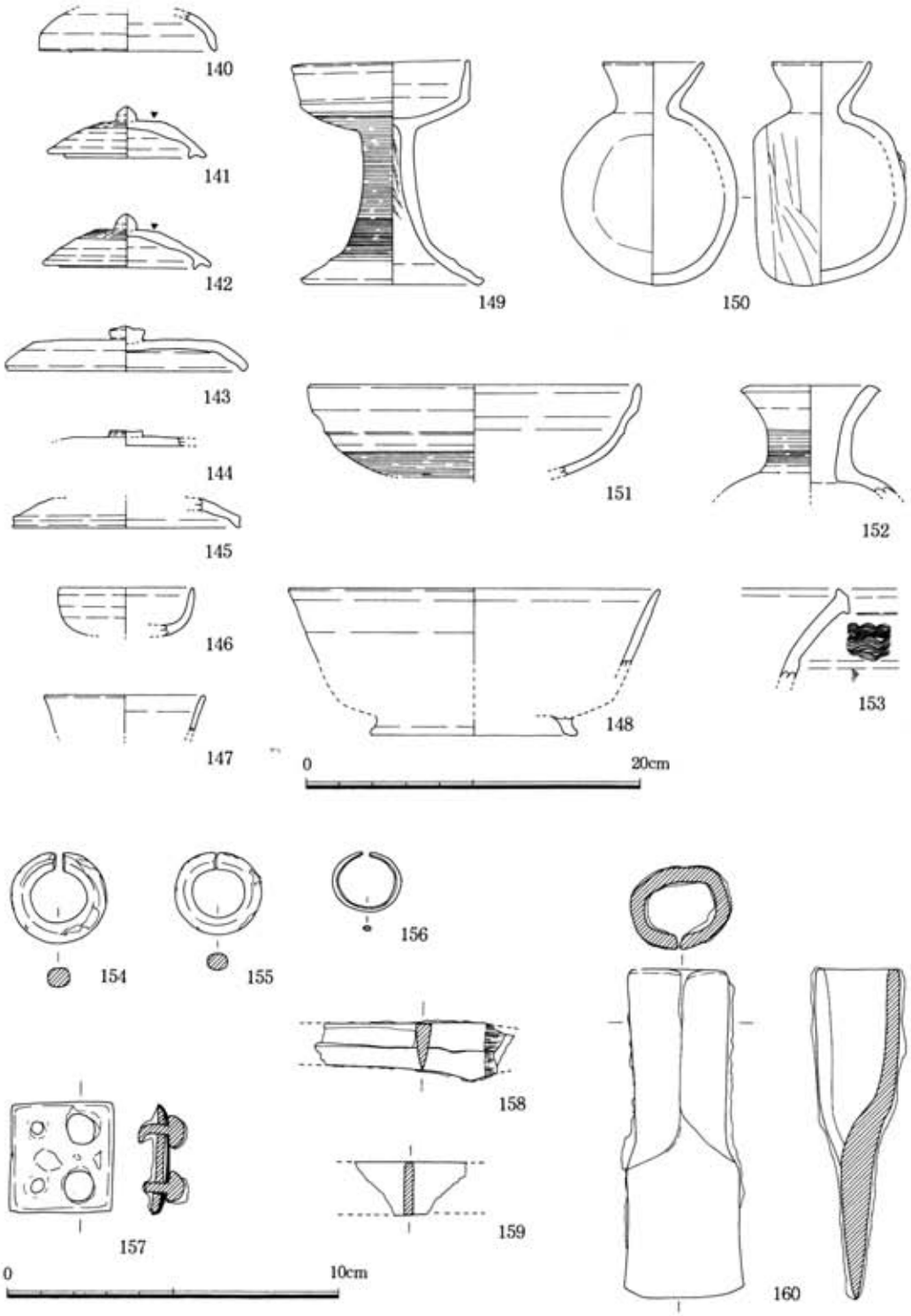


図82　6号墳出土土器（1/4）および装身具・金属製品（1/2）

装身具・金属製品

すべて玄室からの出土である。154～156は耳環。いずれも鉄芯金銅張り。157は馬具の留金具。ほぼ正方形、鉄地金銅張りで鋲４本のうち２本が残存。158は刀子。刃部先端と茎を欠失する。159は不明鉄製品。160は有袋鉄斧。僅かに肩部が張り出す。全長9.9cm、刃部幅3.5cm。袋部は内径2.2×1.7cmの楕円形で長さは4.2cm。左側壁の玄門袖石裾側から出土。

２．７号墳

（１）位置と現状

調査区の丘陵西側基部の南斜面に３基ある小石室墳のうち、最も高所に位置する。石室床面

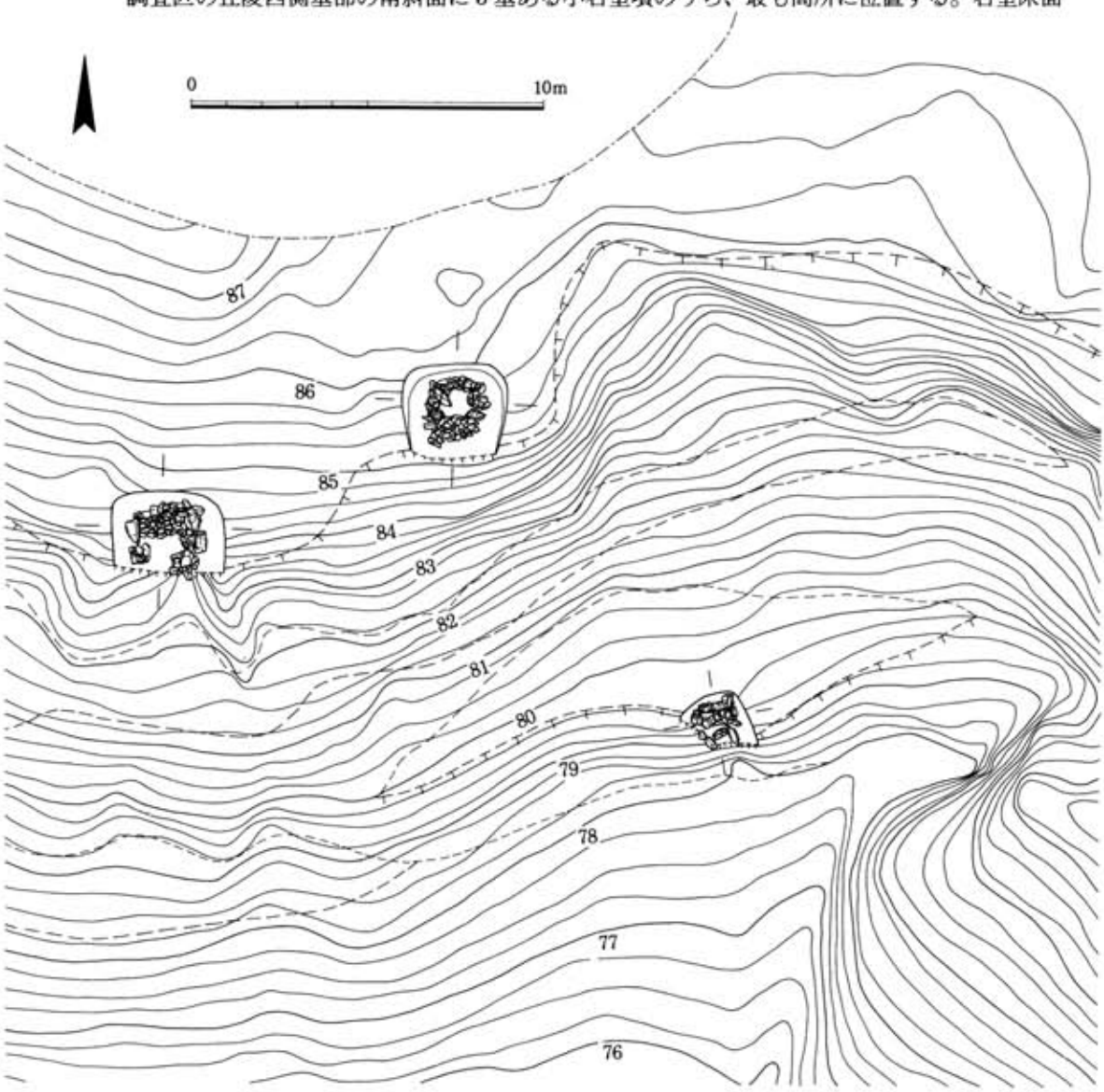


図83　７・８・９号墳位置図（１/200）

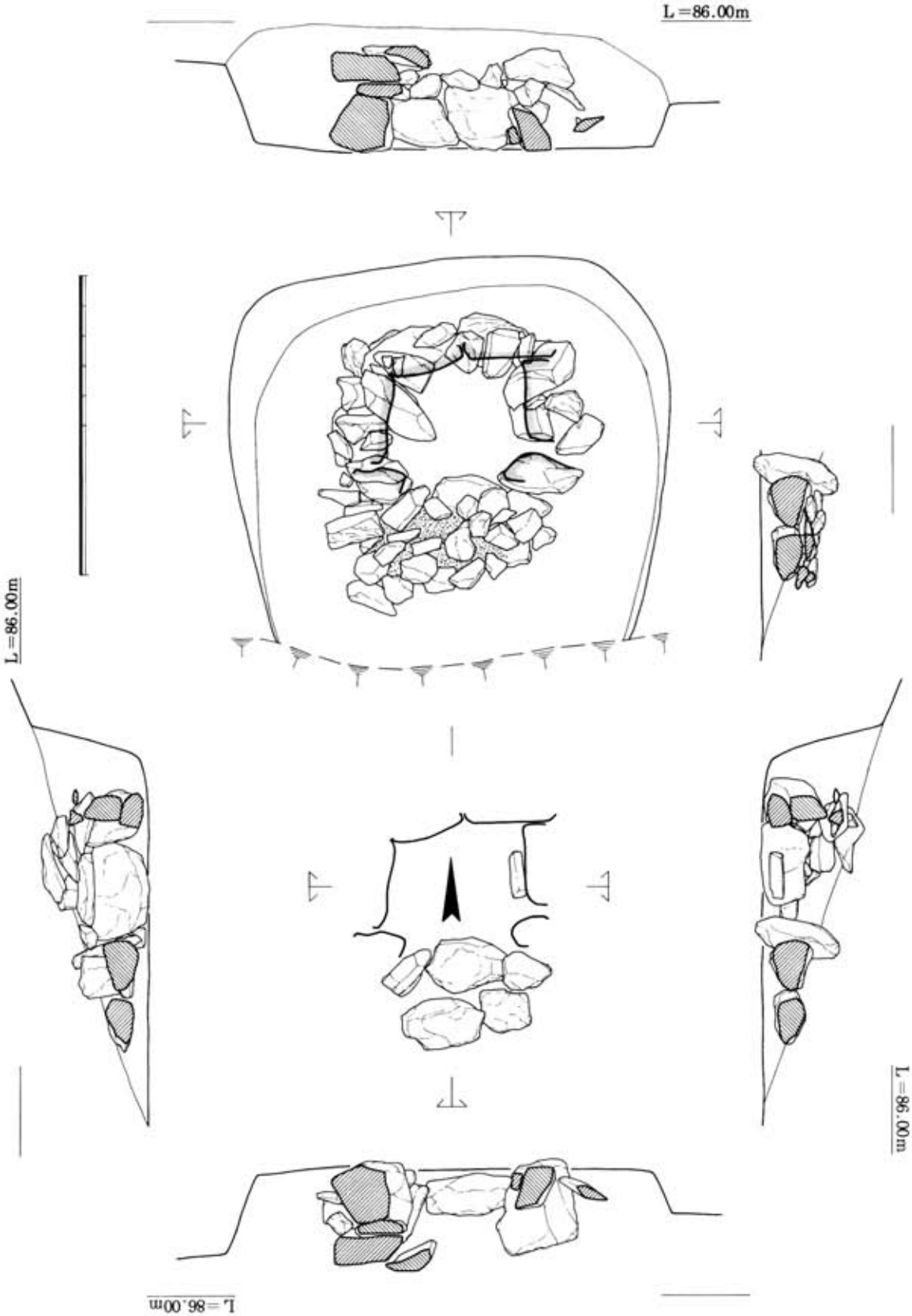


図84　7号墳石室（1/40）

の標高は85.2mである。調査前、一帯は斜面を棚田状に削り出し、段を設けて茶やみかんを栽培しており、このため各小石室墳とも手前が削平されている。また、周辺には完全に破壊されて跡形もなくなった小石室墳が数基存在したものとおもわれる。

（2）埋葬施設

斜面に向かってほぼ南に開口し、主軸をＮ１°Ｅにとる横口の小石室である。単室両袖となり羨道は付かない。墳丘は完全に削平されて痕跡も残さず、玄門の手前も削られて段となる。石室は腰石と部分的に腰石の上部１～２段のみ残存する。状況から内部は荒らされていないようだが、埋葬の痕跡は遺物も含めて、全く検出できなかった。周辺からも遺物は全く出土していない。石室掘方は3.0×2.7m程の奥がやや広がる隅丸方形で、斜面に沿って掘削する。

玄室平面は正方形を意図しており、規模は中央長0.8m、中央幅0.9mを測る。石材は花崗岩の転石を用いる。奥壁腰石は0.7×0.4m程の小石材２石よりなり、側壁の腰石は左右とも0.6×0.3m程の小石材を横に配する。腰石から上は奥壁と左側壁部分が僅かに残存するのみであるが、偏平な小石材や礫を小口に積み上げて持ち送っており、天井高は0.6m前後と推定できる。玄門袖石は左右に0.5×0.3m、0.6×0.6mm程の小石材をそれぞれ立てる。玄門幅は0.65mである。玄室床面は敷石を持たない。ただどういう意味か、玄室右側壁裾に添えるように30×10cmの石が置かれている。閉塞施設は底面に30～40cmの石を敷き、この上は礫を雑に積み上げて構築する。

３．８号墳

（1）位置と現状

調査区南西の斜面、７号墳の西側約６ｍに位置する。この２基の小石室墳は並んだ格好となるが、石室床面の標高は84mで、立地は７号墳より1.2m程低い。墳丘は完全に削平され、石室も腰石と玄門袖石部分の根石を残すのみである。手前部分は削られて段となる。

（2）埋葬施設

斜面に向かってほぼ南に開口し、主軸をＮ２°Ｅにとる横口の小石室である。単室両袖で羨道を付けず、閉塞施設は残存しないが玄門閉塞で間違いない。玄門は右側の袖石が袖石幅の分だけ手前に出ている。もっとも、玄室だけで計測した主軸はN13°Ｅとなり、この場合玄門部は石室主軸に対し35°程左側（西）に屈折することになる。石室掘方は3.2×2.3m程の隅丸方形で、斜面に沿って掘削する。石室床面は掘方底面より20～25cm上に設定している。

玄室平面形態は横長の長方形である。規模は中央長1.1m、中央幅1.5mを測る。石材は花崗岩の転石を用いる。奥壁は腰石に0.7×0.5m程の小石材２石を配し、裾には根石に30～40cmの偏平な礫を４石添える。左側壁は腰石に0.7×0.5m程の小石材１石を横位に置く。右側壁腰

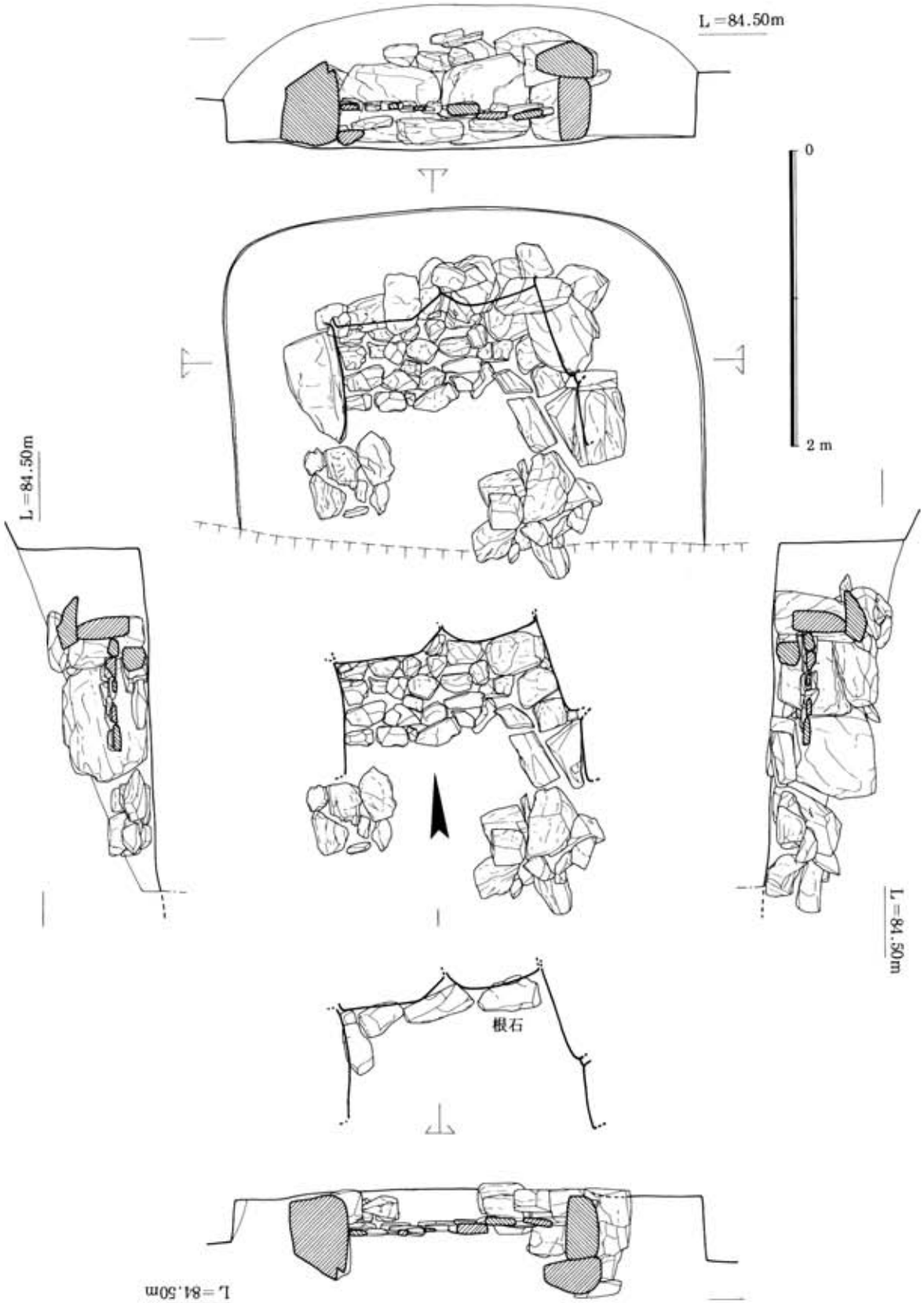


図85　8号墳石室（1/40）

石は0.5×0.3m、0.6×0.7m程の小石材２石を配し、奥の腰石は小石材をもう１段積んで腰石全体の目地を合わせる。腰石から上の段は奥壁部分に僅かに残されものから推定すると、小石材や礫を雑に小口で積み上げていたようである。玄門袖石部分に残存する根石は、20～40cm程の礫を環状に配している。玄門幅は0.8～１m程であろう。

玄室床面は奥壁から３分の２程を10～40cmの偏平な礫を敷き詰めた屍床とする。さらに右側壁よりに偏平な礫を２枚敷くが、これはＢ地区２号墳の状況から、供献土器類を並べるスペースと考えていいだろう。つまり頭位は２号墳と同様、東側ということになる。もっとも、屍床の横幅はせいぜい1.5m（２号墳は1.6m）にすぎず、はたして被葬者を「遺体」のまま横臥させていたかどうかについては、９号墳の例もあり、終末期古墳の石室形態の変化、すなわち主として石室規模縮小化の傾向を含めて、検討を要する。

出土遺物は周辺も含めて全くなかった。

４．９号墳

（１）位置と現状

調査区の丘陵西側基部の南斜面に位置するが、東側はこの丘陵を小規模に開析した地形となっており、立地的に陰になる場所に造られている。石室床面の標高は79.3mで、３基の小石室墳の中では最も低い位置になる。墳丘は石室上部ともども完全に削平され、手前は削られて段となり、石室前部も原形をとどめない。石室後半部の腰石以下が僅かに残存するのみであるが、床面は幸いにも埋葬時の状況のまま残されていた。

（２）埋葬施設

斜面に向かってほぼ南に開口し、主軸をＮ９°Ｅにとる横口の小石室である。単室両袖で羨道は付かず、玄門閉塞となる。玄室平面は横長の長方形で、規模は玄室中央幅1.4mを測り、中央長は0.6m程に復元できる。石室掘方は前部が削平されるが、斜面に沿って２m程の隅丸方形に掘削したようである。石室床面は掘方底面よりも15～20cm上に設定し、玄門部分は袖石の長さに合わせて床部よりも１段掘り下げる。もっとも、玄門の状況からは、もともと敷石面と開口部に20cm程の段をつけていた可能性をも考え得る。

石材は花崗岩の転石を用いる。奥壁は腰石に0.4×0.6m、0.6×0.6mの小石材２石を配し、左右側壁の腰石は各側とも奥壁よりの１石のみ残存するが、0.4×0.3m程の小石材を２石づつ並べたようである。腰石は玄門袖石も含めて大体の目地が通るようにしており、この上は小石材や礫を雑に積み上げたのであろう。玄門は破壊されて両袖石が手前に倒れているが、左右に0.4m×0.3m、0.6m×0.3mの偏平小石材をそれぞれ立てたことがわかる。玄門部に偏平な礫を仕切石状に配したようにみえるが、これはおそらく意識したものではなく、閉塞施設の一部

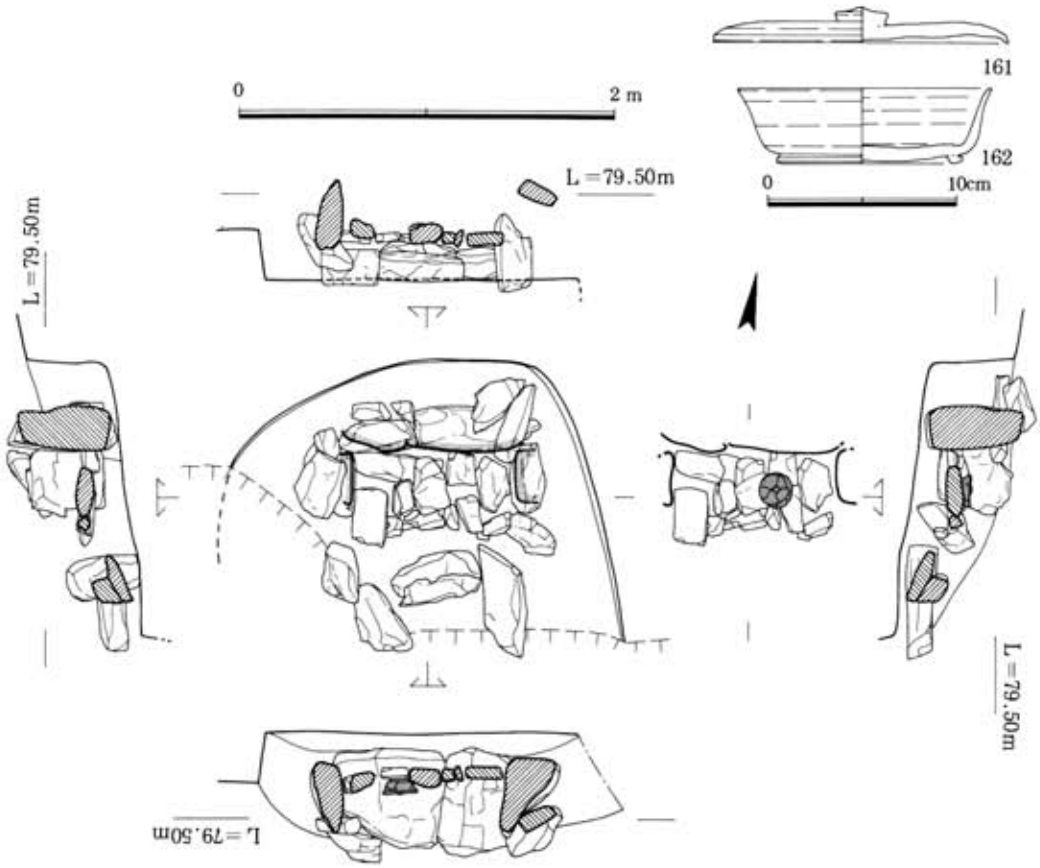


図86　9号墳石室（1/40）および出土土器（1/4）

であろう。玄室床面は奥壁から3分の2程に10～30cmの偏平な礫を敷き詰める。屍床状となるが、蓋坏が置かれていた以外、埋葬の状況を示す痕跡は全く残されていなかった。

（3）出土遺物

玄室敷石上から蓋坏の完形セットが原位置のまま蓋を被せた状態で出土した。骨蔵器に転用したものとも考えられるが、中には粒状の鉄片が入っており、灰も含めて人骨のようなものは確認できなかった。この蓋坏は中央よりもやや右よりに置かれており、あるいは左側に木や布等の有機物で造られた骨蔵器のようなものがあった可能性も否定できない。

蓋（161)は坏とセットになっていたが、蓋の口径が一回り大きく本来は別々のものであろう。偏平なつまみを付すが、皿に転用できるようにやや陥没させている。端部を屈曲させて外面に平坦な面を持たせる。天井部回転ヘラケズリ。坏(162)は口縁をゆるやかにS字状に外反させ、短い高台は内端面が接地する。底部回転ヘラ切りあとナデ。いずれも平城Ⅲ式に相当する。

第５章　浦田遺跡の調査

Ⅰ．遺跡の概要

浦田遺跡は佐賀県三養基郡基山町大字園部字浦田および長浦に所在する。遺跡は秋光川にそそぎこむ小流によって形成された小規模な扇状地状の地形をなす堆積地上に立地し、この小流は東西にそれぞれ黒谷古墳群と水呑古墳群が位置する丘陵部に形成される開折谷を流下する。従来この一帯は縄文～中世の遺物散布地として周知化されていたが、古代の布目瓦片など特殊な遺物もみられることから、確認調査で特に遺物を多く包含していた地区を１区（2.300m²）、また、土層断面を見る限りでは版築のようにもみえる規則的な堆積がみられた小台地状の高まり部分を２区（2.200m²）に、それぞれ調査地区を設定して調査を実施した。

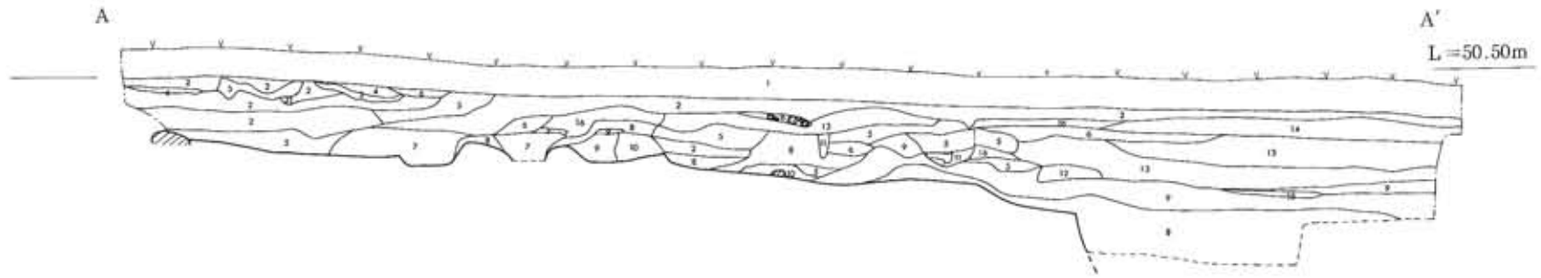
調査の結果、１区は調査区全体が流れ込みに伴う遺物の包含・堆積地であることを再確認したにとどまった。遺物は縄文晩期から平安時代後期までの土器類が多数出土したが、これらに伴う遺構は全く検出されなかった。一方２区の高まりは、水田の耕作面と考えられる層と洪水等による砂層が交互に短期間に堆積したものと判明した。最上面からは平安後期～鎌倉期にかけての石鍋と瓦質土器を共伴する土坑が１基検出されており、この時期にはすでに小台地状に形成されたようである。ただし、これ以外の遺構は検出されなかった。

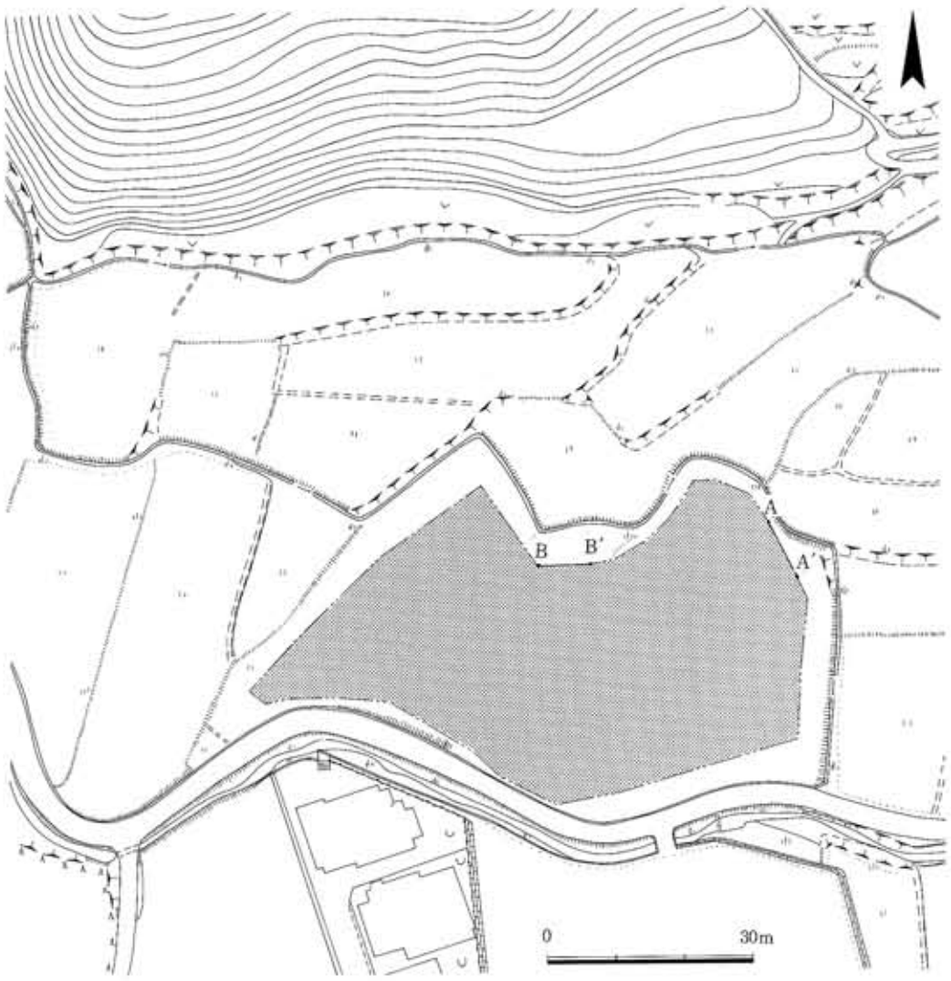
１区、２区ともに顕著な遺構を検出することはなかったが、縄文晩期～中世初頭期にかけての各時代の豊富な遺物が流れ込んでいることから、本遺跡内を流れる小河川の上流にあたる水呑古墳群を構成する谷が、古墳群形成期以前より生活領域として利用されてきたことがわかった。また、古代の布目瓦が出土したことは、この一帯が他の一般集落とは性格を異にする可能性がうかがえ、同時に、基肄城ならびに関谷土塁、とうれぎ土塁あるいは古代の瓦窯跡など、周辺の遺跡との関連も充分想定し得る。

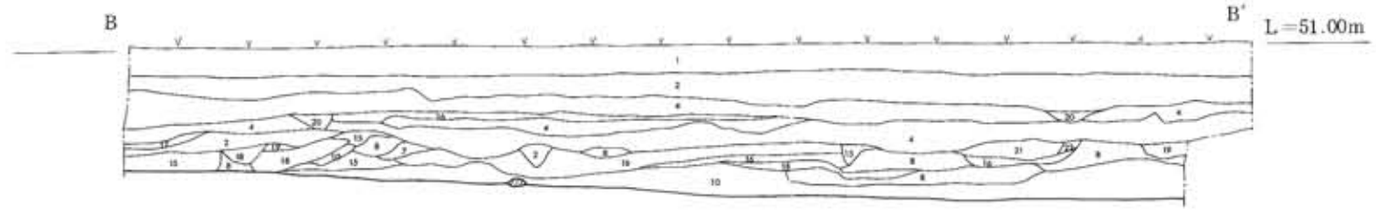
Ⅱ．１区の調査

本調査区は黒谷古墳群Ａ地区の丘陵の南側に位置する。一帯の地形は水呑古墳群を構成する数ヵ所の開折谷から合流してきた小流（この川は秋光川にそそぐ）によって形成された小規模な扇状地状の堆積地となるが、本調査区はこの川の左岸に接し、地形的には最も低い地帯に立地する。標高は水田面で49～50mである。調査前は緩やかな傾斜となった堆積地を幾段もの棚田に区画して利用されていたが、一帯は湧水が顕著で湿地帯のようになっていた。

調査地区の基本土層は２か所で観察したが、いずれも青灰色粘土がベースとなっており、この上に粘質土や砂質土が層状あるいはブロック状で50～80cm程堆積していた。これらは上か

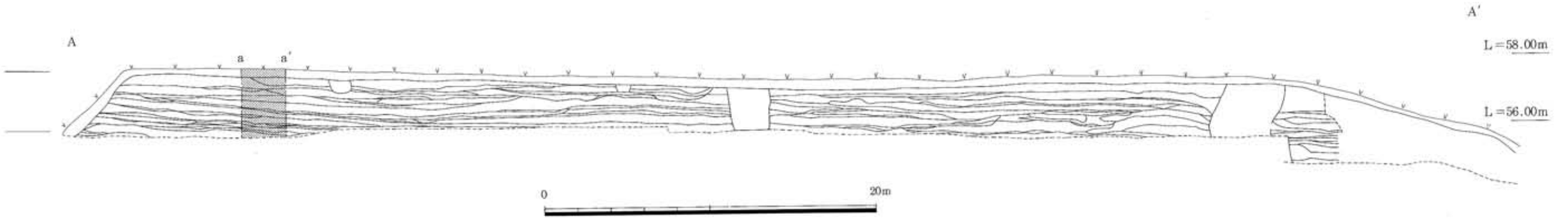


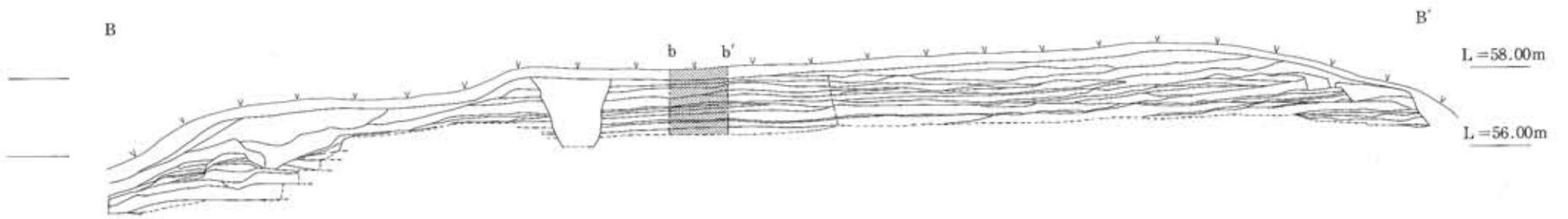


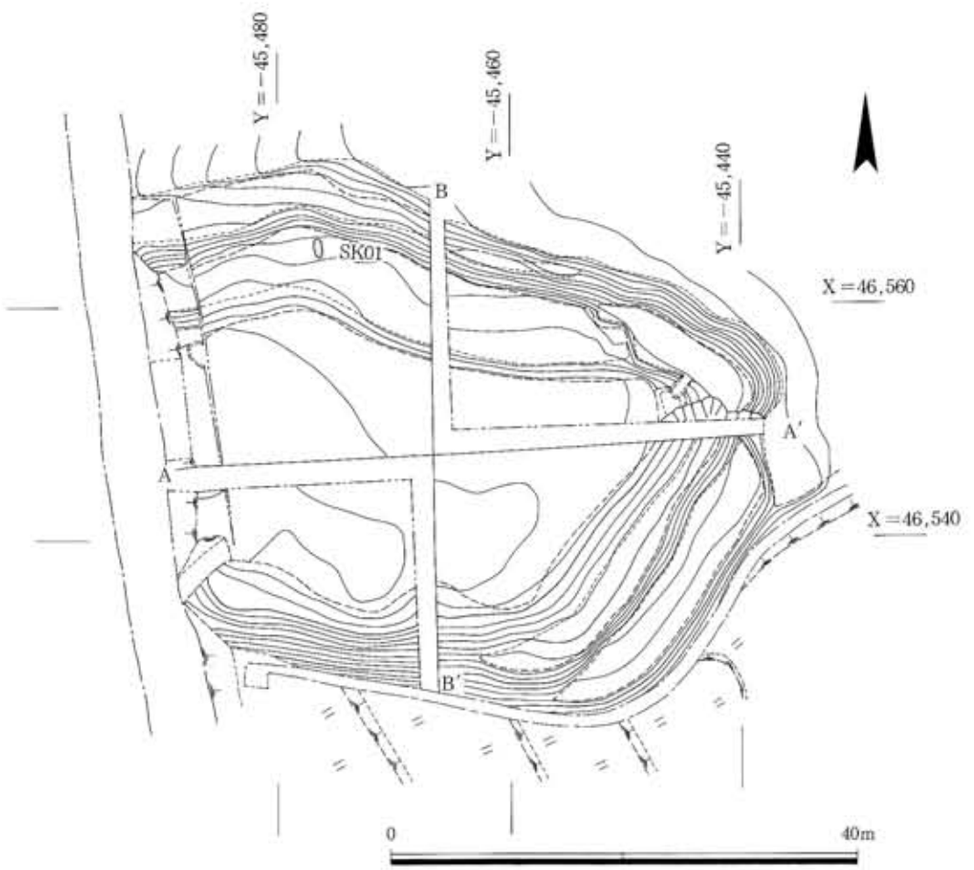


1．淡灰黒色粘質土（耕作土）
2．暗緑灰色土（耕作床土）
3．淡黄色土
4．暗灰色土＋暗緑灰色土
5．暗青灰色土
6．暗茶褐色土
7．暗灰色土
8．暗灰色土＋青灰色粘土
9．青灰色粘砂
10．灰色粗砂
11．褐色土（根）
12．灰黄色粗砂
13．暗青灰色＋暗茶褐色ブロック
14．明黄褐色土
15．赤褐色粗砂
16．暗青灰色砂質土
17．暗緑灰色粗砂
18．暗緑灰色粘質土
19．淡灰色砂
20．淡灰色砂質土
21．灰黄色粗砂
22．淡黒灰色粘土

図87　1区調査位置（1/1,000）および基本土層図（1/50）







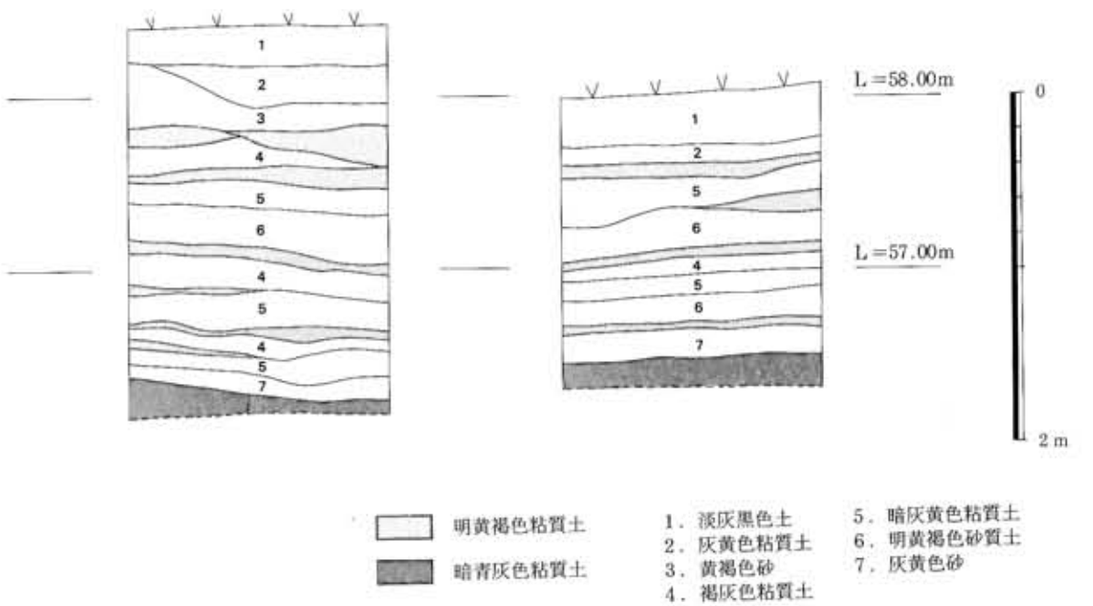


図88　2区調査後地形図（1/600）および土層図（1/150・部分1/40）

らの流れ込みによる堆積の状況を示しており、出土遺物はほとんどが砂質土の中に包含されていた。遺物は縄文晩期から平安時代後期にかけての幅広い時期の土器類がコンテナで2箱ほど出土したが、遺構に伴うものはなく、すべて流れ込み状の包含層から検出された。遺物の包含状況は層位的なそれではなく、流れ込んできた段階ですでに混在していることを示している。なお、出土した古墳時代の須恵器については、水呑古墳群の谷部の破壊古墳から流されてきたものである可能性が強い。

Ⅲ．2区の調査

本調査区は当初、立地を水呑古墳群D地区の丘陵からさらに東に伸びてきた先端部上に載るものと考えていたが、土層断面を詳細に観察した結果、この比高差約3mの小丘陵状の高まりは、もともとの丘陵ではなく、全てが堆積によって形成されていることが明らかになった。

土層は暗青灰色粘土をベースに厚さ10～30cmの灰黄色砂質土と厚さ2～15cmの明黄褐色粘

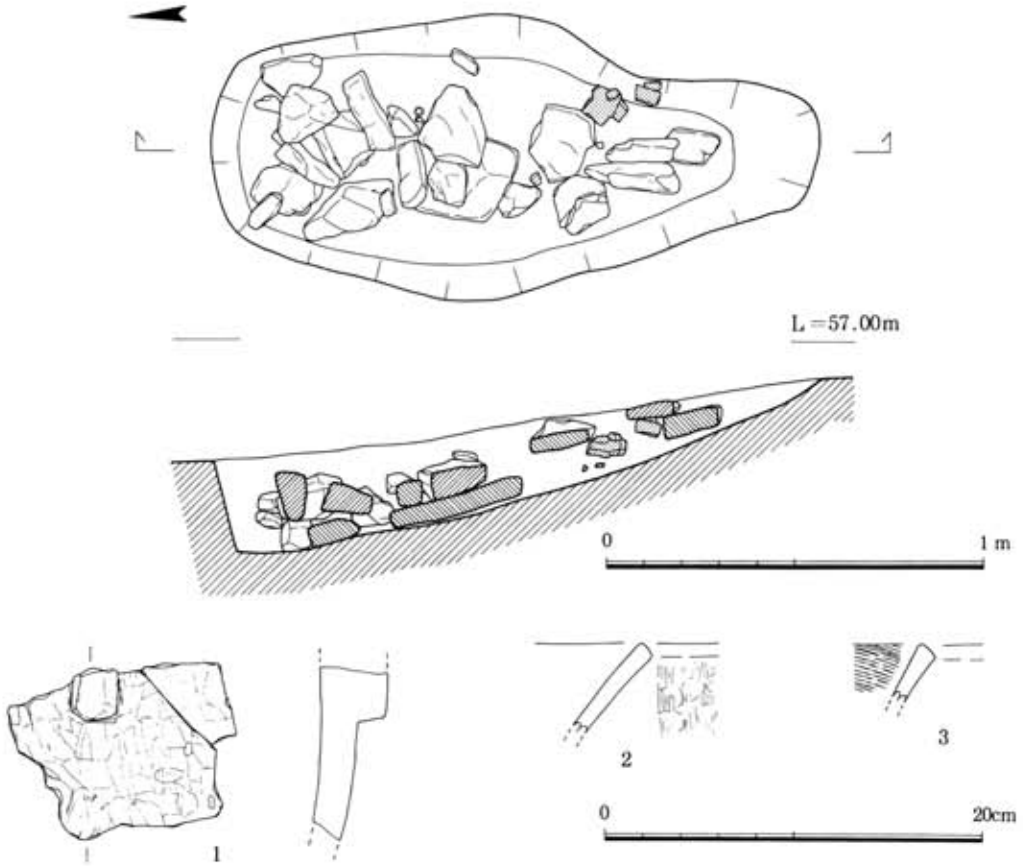


図89　2区SK01土坑（1/20）および出土遺物（1/4）

質土が交互に８～12層、表土の下１～1.5mの厚さで規則的に堆積している。一見版築状にみえなくもないが、これはどうやら灰黄色砂質土が水田のうわ土で、明黄褐色粘質土が床土と考えられ、灰黄色砂質土の層はよく観察すると畦畔の断面とおもわれる凸部が所々認められた。つまり、比較的短期間に水田の耕作と上からの流れ込みによる堆積が最低６回は繰り返されたと判断し得る状況である。もっとも、面としての水田遺構の検出はできなかった。

遺構は上面北側で土坑を１基検出したのみである。土坑（ＳＫ01）は、検出面で長軸1.6m、短軸0.75mを測る不整長楕円形で、長軸がほぼ南北となる。上部は削平されているようだが、底面は北に傾斜し、最も深い北端で深さは25cmである。埋土は淡灰黒色土である。底面一杯に10～40cmの偏平な礫があり、中には焼けたものがあった。南側の礫は底面から少し浮くが、これに混じって平安後期～鎌倉期の石鍋や瓦器片が出土した。遺物はあと最上部の包含層から弥生時代中期の丹塗りの筒型器台や壺などの祭祀土器片や石鏃、古墳時代後期の土師器の甕片などが出土している。これ以外に土層内を含め、遺構・遺物は全く検出されていない。

以上のことから本調査区は少なくとも鎌倉期には現状のような小丘陵状の高まりに堆積していたようである。当時はこの部分だけでなく、周囲全体がこの高さまで堆積しており、その後谷部にあたるところは流され、舌状丘陵の先端に付いた格好の本調査区部分のみが残って高まりとなったと考えられる。また、出土遺物に弥生時代の祭祀土器がみられたが、付近（とくに上流）にこの時期の墳墓遺跡の存在を想定できよう。

Ⅳ．出土遺物

（１）１区

すべて流れ込み状の包含層からの出土である。４は縄文晩期の深鉢底部。５は弥生中期の壺底部。６～16は須恵器。６．７は坏身、８は椀、９～11は高台付きの坏、12～16は甕の口頸部。14にはヘラ記号が付く。17～23は土師器の甕か甑。23は甑の把手部分。10.11と15.16の須恵器と19～23の土師器は奈良～平安期のものである。24は土師器の高台椀。体部ヨコナデで、内面ヘラミガキ。時期は10世紀後半～11世紀初め。25～30は布目瓦片。いずれも平瓦で、桶巻造りである。27．29を除いて布目痕の大部分をナデ消す。また29以外はすべて凸面に縄叩き目が残る。27は軟質で土師質、29は硬質で須恵質で、あとは焼成差はあるがいわゆる瓦質である。時期は桶巻造りで縄目を持つことから、おそらく８世紀をそれほど下らないものであろう。なお、基肄城の麓には丸林、仁谷寺、こうらざきの古代瓦窯跡が３ヵ所確認されているが、あるいはこの付近にも瓦窯のあった可能性がある。

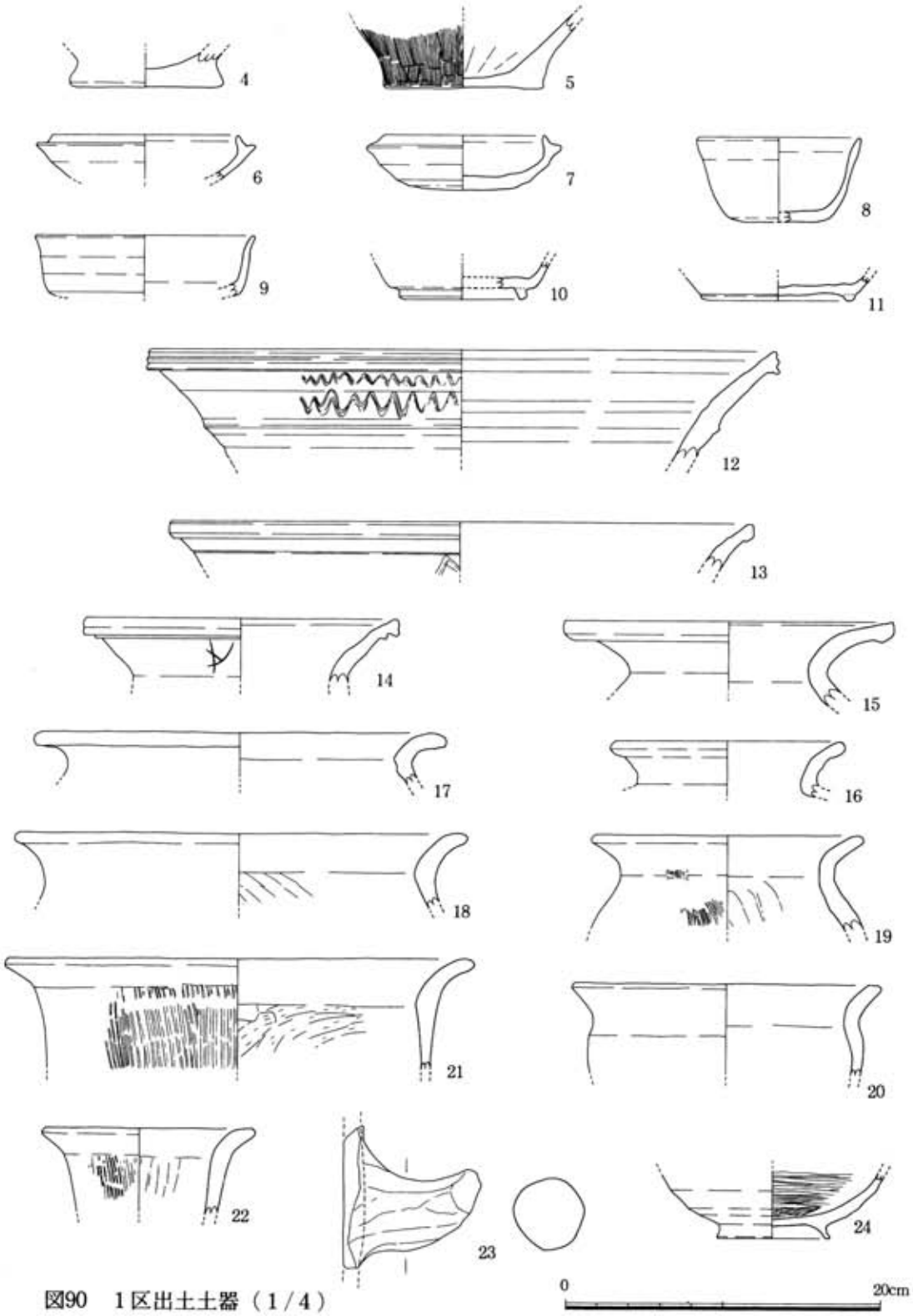


図90　1区出土土器（1/4）

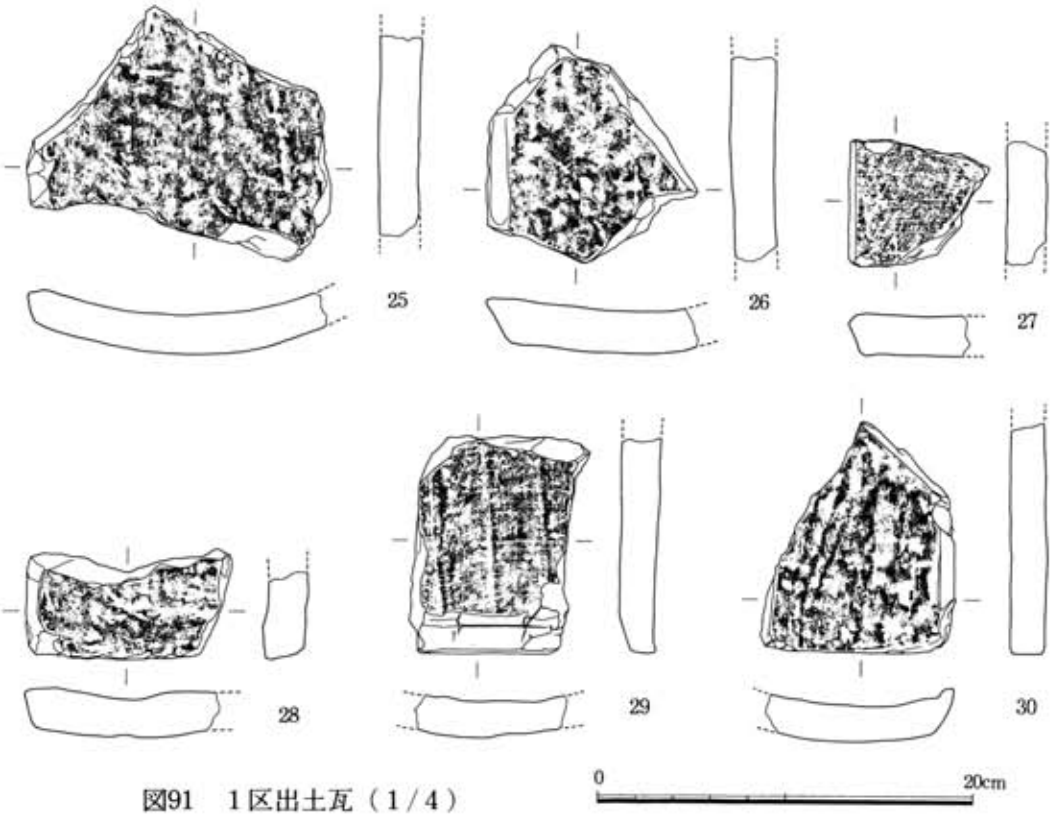


図91　１区出土瓦（１/４）

（２）２区

ＳＫ01土坑出土

１は滑石製石鍋。森田勉分類のＡ群。胴中部片で、削り出した方形の耳の下端部が残る。内面は丁寧に研磨するが、外面はノミ痕を残す。耳下端の復元胴外径は13～14cm程である。２．３は瓦器。いわゆる瓦質土器の口縁端部片のみで、磨耗も著しく、捏鉢か擂鉢かは断定できない。また、口縁端部の形態が若干異なるものの同一固体である可能性もある。２は外面タテハケ、指頭痕が残る。３は内面に斜め方向のハケ調整を施す。

包含層出土

31～37は弥生中期の祭祀土器片。いずれも外面に丹塗りの痕跡がある。31～34は筒型器台で、31は鍔部、32は脚部、33．34は脚裾部である。35は甕胴部、36．37は壺底部。38．39は甕。38は弥生中期の甕底部、39の口縁部片は奈良時代のものである。40は縄文時代の石匙。サヌカイトの打製。41は弥生時代の打製石鏃。無茎式でサヌカイト製である。

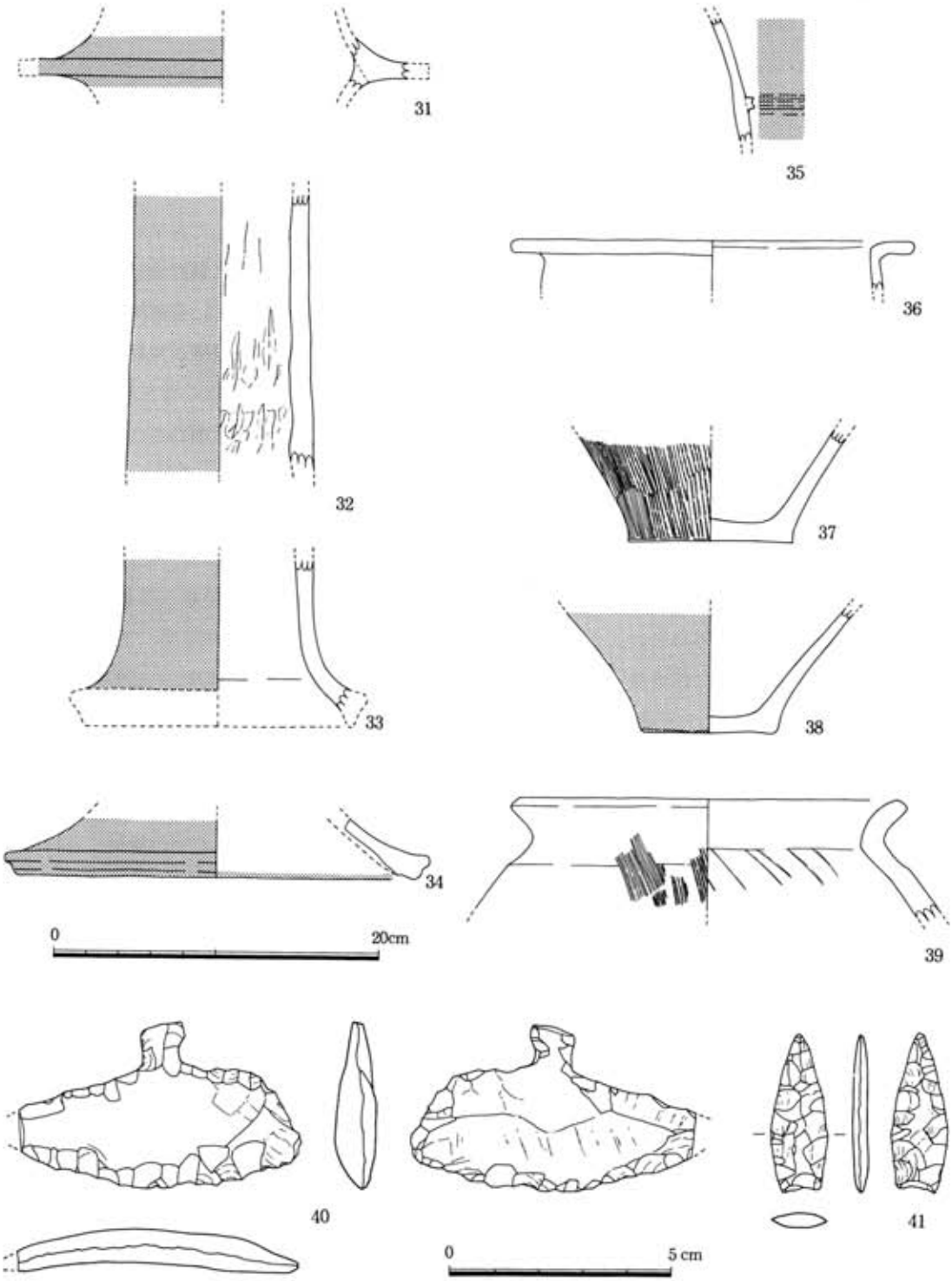


図92　2区出土土器（1/4）および石器（2/3）

第6章　ま　と　め

今回の本調査では、黒谷古墳群で９基、水呑古墳群で９基の計18基の古墳を対象とした。黒谷・水呑両古墳群ともに、その所属する古墳の大部分を今回発掘したことになる。

すでに述べてきたように、調査した古墳は丘陵尾根上、あるいは谷部の限定された範囲に築造されているが、黒谷古墳群は見晴らしのよい丘陵尾根上にほぼ南に開口して古墳を造営するのに対して、水呑古墳群は６号墳を除いては丘陵背後斜面の「影」の位置に築造するなど、この２つの古墳群は隣接するものの、立地の条件は微妙に異なっている。また、造営時期については、当然ながら追葬期間に重複がみられるものの、全体としては黒谷古墳群が水呑古墳群に先行している。

この地域の後期群集墳の一相に触れるべく、今回調査した古墳の特徴を各項目ごとに整理・総括して提示することで、まとめとしたい。

Ⅰ．墳丘と外部施設

１．墳丘・周溝

黒谷４号墳、５号墳、７号墳および水呑３号墳、４号墳、５号墳、６号墳で墳丘盛土が比較的残存していたが、これらも盛土の流失・削平、あるいは植生等による土壌変質により、築造時そのままの状態を保っているものはない。墳丘構築の方法としては、水呑６号墳が石室上部に小山状に盛り土する以外は、すべて地山整形で石室構築部分を削り取り、石室の構築に合わせて質の違う土を交互に覆土して墳丘を構築している。したがって、平面的墳丘形態としては円形あるいは隅丸の方形のほぼ左右対称となるが、丘陵斜面に覆土して墳丘を形成する構造上、開口部からみた立面形態は、下方（斜面側）により大きく覆土した状態となり、石室天井石上も覆土が厚く載ることはない。

なお、墳丘築造に際して、ある段階で甕を破砕したり、杯蓋などを埋納したりする祭祠行為の事例が報告されているが、今回の調査でも黒谷４号墳、５号墳の墳丘埋土より須恵器が出土しており、築造時に祭祠行為がおこなわれていた可能性を指摘できる。いずれも墳丘埋土除去中のため、面的な検出に失敗し、正確な位置および図面・写真等の記録を残せなかったが、とりわけ４号墳では完形の杯蓋のセットが出土している。

周溝は、黒谷４号墳、５号墳、６号墳、７号墳および水呑３号墳、４号墳、５号墳で確認された。これらは上方からの排水を意図して掘削されたものとおもわれる。黒谷４号墳、５号墳、６号墳、７号墳の周溝は、半円形に巡るいわゆる馬蹄形溝で、いずれも丘陵尾根斜面に直交し

て築造される古墳の上方に位置している。水呑３号墳、４号墳、５号墳の周溝は、斜面に平行して古墳が構築されるため、３、４号墳では上方からの排水をカバーするため、後ろ側および左側まで周溝が巡らせている。

２．地山整形

今回の調査では、基本的にすべての古墳に対して、地山整形の状況を確認することができた。地山を削って墳丘基底となる平坦面を確保し、さらに石室掘方を掘削し、石室を構築しながら墳丘盛土を行う、という一般的な方法をとるが、築造場所の設置意図によって変化がみられる。尾根上に築造する黒谷古墳群では、尾根に直交して地山を削り出して平坦面を作出するのに対して、水呑古墳群では、Ｃ地区３、４号墳が丘陵斜面に平行して平坦面を削り出して地山整形を行っている。両古墳群ともに、石室主軸方向が丘陵斜面のコンターに合致する古墳がないため、地山を大きく馬蹄形に掘削したようなものはみられなかった。石室堀方は、ほとんどの場合が比較的狭い墓道と一体で掘削されている。

なお、黒谷４号墳、５号墳、７号墳などでは、さらに手前部分（東側裾部）の地山を大きく削り出して、視覚的に墳丘を実際の盛土以上に大きく見せる工夫が施されている。同様に水呑２号墳も墳丘は残存していなかったが、これも下から見上げた場合の「見せかけ」の大きさを意図した痕跡が窺える。

３．墳丘列石

水呑３号墳、６号墳の２基に墳丘列石がみられた。いずれも外護列石で、墳丘盛土の流失を防ぐことを目的とするとともに、墳丘裾部を整える役割をも果たしている。６号墳が地山を削り出して石を積み上げているのに対して、３号墳は、周溝とともに盛り土の上から構築している。水呑３号墳は、隅丸方形の墳丘平面形態の開口部右側手前部分に周溝に対角して前辺右側、および右辺の前半分、すなわち石室長部分まで40～90cmの転石を一段のみ据えて構築する。列石がこの部分のみしか配置されないのは、この部分が最も墳丘盛り土が流出しやすいからであろう。水呑６号墳では、石室中心から４ｍ程のところに人頭大の塊石を２～３段積んで、開口部左側を除いた、約４分の３程を巡る墳丘外護列石を構築している。地山を不整円形に削り出した範囲が5.5～6.5mほどであるから、平面的墳丘規模としてはかなり墳丘基底面の内側に列石を巡らしている。

II．埋葬施設

1．石室形態

黒谷・水呑両古墳群の18基の古墳は、いずれも横穴式石室を内部主体とする。単室両袖型が8基、複室両袖型が6基、横口式の小石室が4基で、ほかに不明のものが2基ある（図93参照）。横口小石室を除き、今回調査したこれらの横穴式石室は、石室平面形態から以下の3つのタイプに分類することができる。

a．玄室プランが長方形の複室両袖型　黒谷5号墳、9号墳および水呑1号墳、4号墳、5号墳、6号墳。黒谷9号墳については石室堀方と残存腰石の状況からの推定。水呑1号墳、5号墳は、玄室幅と前室幅が同じで、小規模な仕切り石と袖石のみで区画し、壁面は大型の石材を縦にして構築している。水呑6号墳は不整形な袖石を用いるために、前室プランが不明瞭。

b．玄室平面プランが長方形の単室両袖型　黒谷7号墳

c．玄室プランがほぼ方形の単室両袖型　黒谷2号墳、4号墳、6号墳および水呑2号墳、3号墳。水呑2号墳は羨道を連接しない。3号墳は玄室幅と羨道幅がほとんど変わらず、玄門袖石が不明瞭。

黒谷2号墳、4号墳、6号墳、7号墳の単室両袖型石室について、今回の報告ではとくに「羨道玄室よりに擬前室構造をもつ単室両袖型横穴式石室」とした。これは、この敷石をもつ部分を、そもそも石室平面形態のみで単純に羨道前半部あるいは羨道後半部として羨道の一部と理解するのは不十分であり、単なる通路とは画した供献の空間として意識されていたはずであり、さらには明確な副室構造をもつ石室に至る過渡期のものと考えるからである。ここで、いわゆる副室（前室）の条件として、(1) 敷石、仕切り石および袖石により構造的に単純な羨道とは区別できる。(2)平面的にも羨道とはあきらかに横幅の広がる空間を有する。(3)天井部においては前後に楣石を架構することにより羨道とは一段高くなる。とした場合、擬前室構造は(1)の条件を十分に満たしている。黒谷古墳群にみられるこうした擬前室構造をもつ単室両袖型横穴式石室は、いわゆる複室両袖型横穴式石室盛行の初期における、石室構築集団の地域的特徴あるいは石材の有効的利用（あるいは手抜き？）等による複室両袖型横穴式石室の一亜流と考えることができる。もっとも、「擬前室」として意識されていたのは、築造一初葬当時だけで、追葬時にはそれらは埋もれてしまって本来の機能を果たさず、単に羨道としてのみ利用されており、「前室」の存在意味が最終追葬の頃には失われてしまっている。

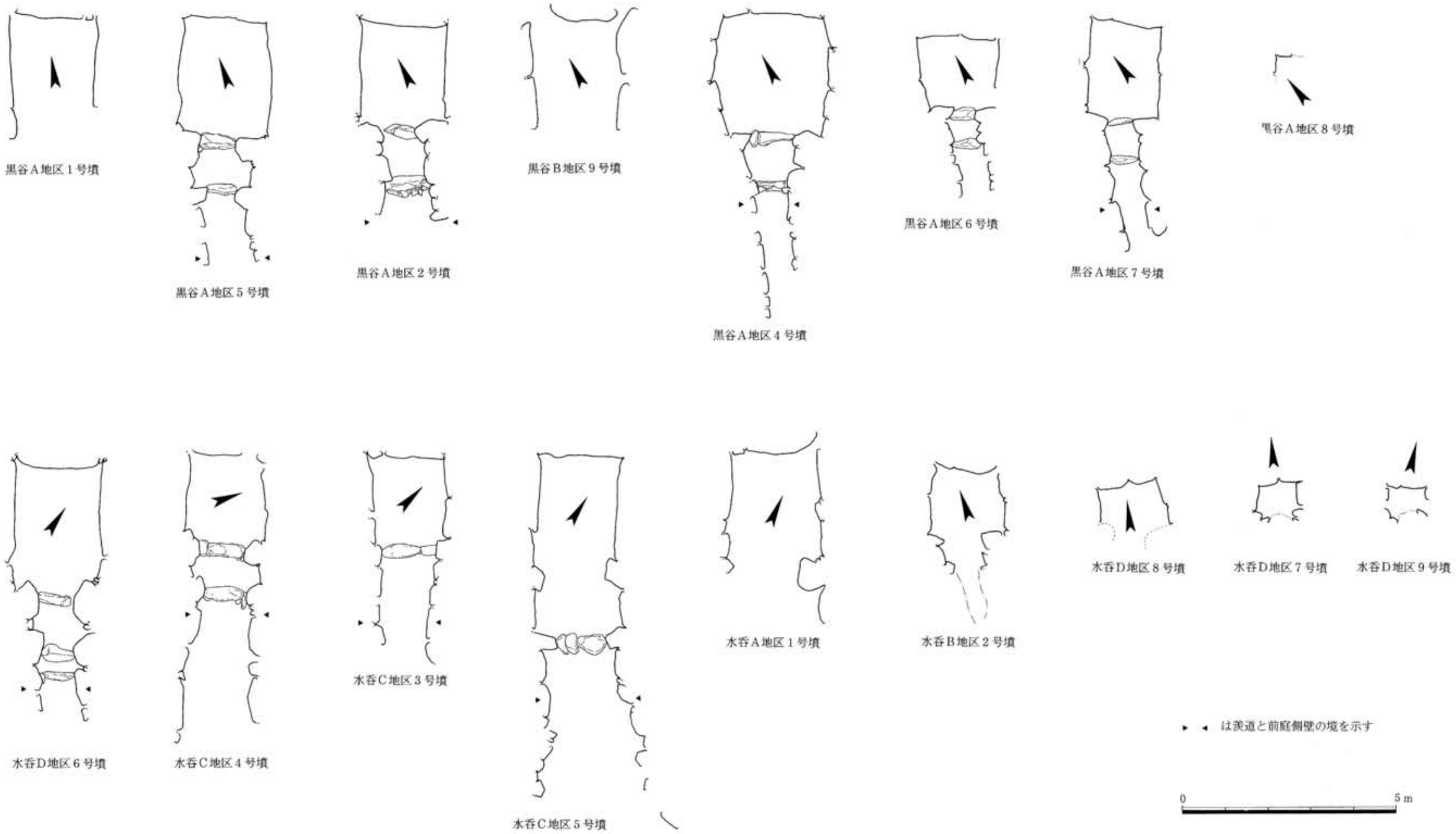


図93　各古墳石室平面図（1/100）

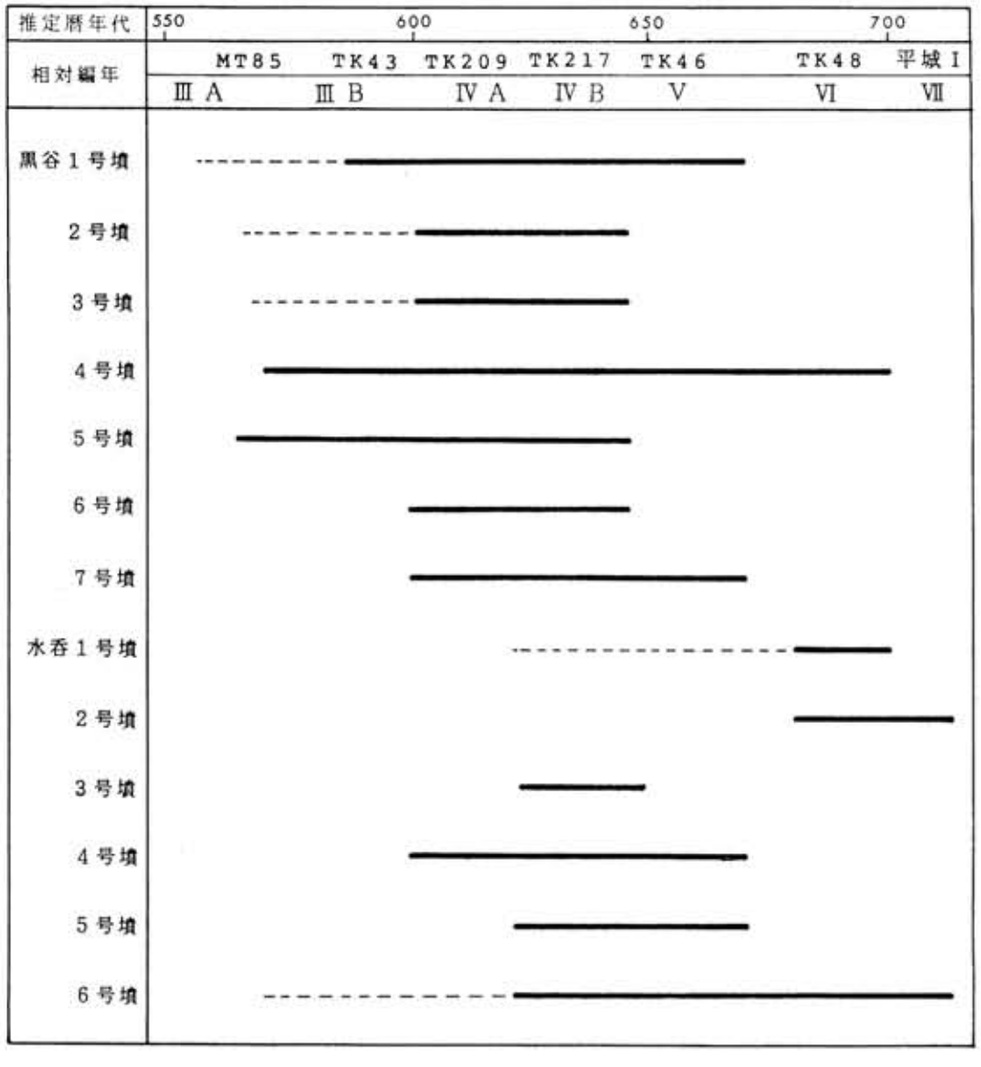


図94　各古墳の築造時期と追葬期間

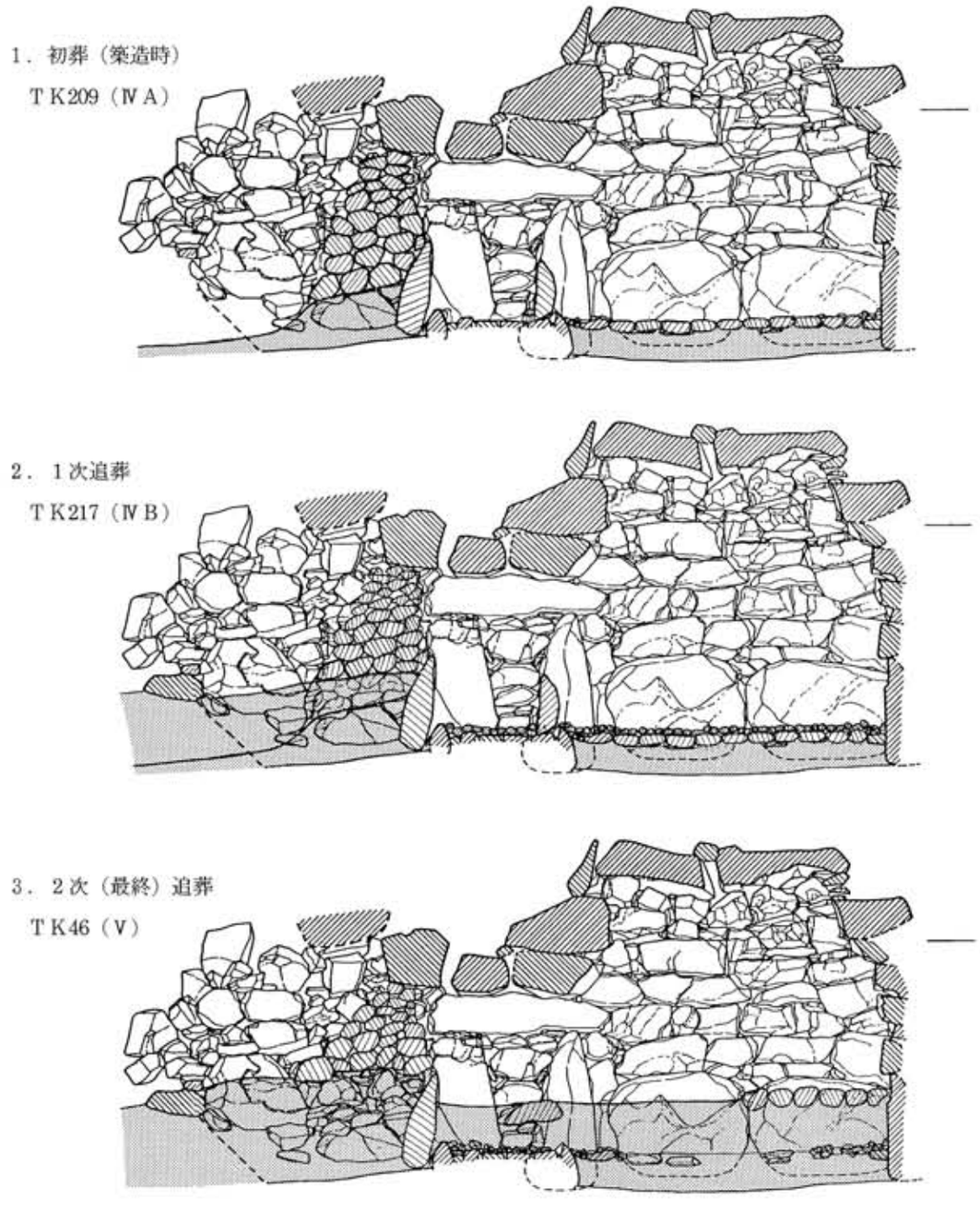


図95　追葬と“床上げ”状況模式図

2．閉塞施設

黒谷２号墳、４号墳、５号墳、６号墳、７号墳および水呑２号墳、３号墳、４号墳、５号墳、６号墳で閉塞施設が残存していた。

閉塞施設は２つのタイプに分けられる。一つは、羨門部に板石を立てかけ、その手前に20～40cmの礫を積み上げるもので、黒谷２号墳、５号墳、６号墳、７号墳および水呑６号墳がこのタイプである。これらは、いずれも最終追葬時の状態で検出しているため、墓道床面が高くなっており、それにつれて手前に積み上げられる礫も、墓道底面よりかなり浮いた状態となっている。なお、黒谷５号墳および７号墳では、玄門部だけでなく、(擬)前門部にも板石を立てた痕跡が確認された。「同時閉塞」の可能性を強く残す特異な状況として、今後の類例の増加を待ちたい。

もう一つは、羨道部一杯あるいは大部分に礫を充塡するタイプで、水呑２号墳、３号墳、４号墳、５号墳がこれにあたる。こうしてみると、この２つの閉塞方法の違いは、あきらかに古墳築造時期によるものであることがわかる。

3．追葬と“床上げ”

黒谷２号墳、５号墳、７号墳および水呑６号墳の玄室において、追葬時に“床上げ”がおこなわれた痕跡を確認した。いずれもかなり撹乱された状態で、層位的な記録を残せない調査方法を取らざるを得なかったが、とりわけ黒谷７号墳では、検出時石室内部は相当に荒らされていたものの、石室内の堆積の状況と、墓道にかきだされた遺物のレベルとがほぼ一致したため、図95で追葬過程と“床あげ”の状況を復元する試みを行った。以下、その説明を行う。

まず、初葬時（ＴＫ209）には、玄室、擬前室部ともに床面には偏平な礫を均等に敷き詰めている。次に、１次追葬時（ＴＫ217）には、初葬時の副葬品等を墓道にかきだした後、玉砂利を新たに持ち込んで、玄室、擬前室部ともに、初葬時床面の上に敷き詰める。なお、黒谷２号墳でも追葬時に同様の玉砂利を使用しているが、出土土器からもこの追葬が７号墳とほぼ同時期であることがわかる。そして最終追葬時（ＴＫ46）には、玄室部分の初葬、１次追葬時の偏平礫、玉砂利の２種類の敷石を１次追葬時の副葬品等とともに外にかきだす。擬前室部についてはそのまま残している。つぎに、玄門部に立てていたとおもわれる板石を手前に倒し、その板石の倒れ込んだレベルまで玄室、擬前室部ともに新たに土を持ち込んで“床上げ”を行う。なお、調査中に大雨が何日も続いた後は清掃した床面上が数cm堆積していたことがあったが、こうしたことから、“床上げ”に用いられた土は、新たに運び込んだもの以外、自然に堆積したものも相当数含まれるものと考えられる。

ここで問題となるのは、“床上げ”後の玄室床面の処理をどうしたかということである。黒谷７号墳の調査時、玄室内から多数検出された人頭大の塊石は、量的には玄室全体の敷石とするには数が少なかった。したがって、おそらく追葬時に新たに持ち込まれたこれらの石は、玄室床面全体に敷き詰めたものではなく、遺体を安置する部分、すなわち奥壁より1／2～1／3程の部分のみ敷いて「屍床」をしつらえていたものと考えられる。玄室後半部のみに敷石を用いるのは、この時期の小石室の構造一般と同じで、７世紀中頃以降に築造される石室は、水呑２号墳、８号墳、９号墳のように床面全部に敷石を敷かない例が多く、黒谷７号墳の最終追葬時における石室床面の改修も、こうしたことと軌を一にしているのかもしれない。なお、鳥栖市の東十郎古墳群特別区イ号墳の玄室床面にこの形態を示すものがあり、おそらく同時期に石室床面の“床上げ”による改修が行われているものとおもわれる。

黒谷２号墳、５号墳、７号墳および水呑６号墳では、追葬のある時点で、こうした石室床面の「大がかりな」改修を行うが、他の古墳群では、副葬品、敷石等をわざわざ外にかきだすようなことはせずに、追葬時にそれらを封じ込めるように、敷石を重ねることによって“床上げ”を行う例が多く、黒谷・水呑古墳群におけるこのような「風習」は特異な例といえる。むしろ、石室の「再利用」という観点からとらえたほうがいいかもしれない。

なお、黒谷・水呑古墳群では、釘は残片すら全く出土しなかった。羨道の幅なども考えると、木棺は使用していないものとおもわれる。

Ⅲ．副葬品

副葬品は、石室内、墓道、あるいは墳丘より、土器（須恵器、土師器）、金属製品（鉄製武器、鉄製工具、馬具の残欠）、装身具類（耳環、玉類）が出土した。すでに述べているように、追葬時における「かきだし」および盗掘等により、かなりの部分が失われているようである。遺物の量がとくに多かったのは、黒谷４号墳、５号墳で、墓道から多量の土器類が堆積した状態で出土している。

１．土器

黒谷・水呑両古墳群の各古墳より出土した須恵器の年代幅は次の通りである。

黒谷１号墳　ＴＫ43～ＴＫ46型式（ⅢＢ新～Ⅴ期）

黒谷２号墳　ＴＫ209～ＴＫ217型式（Ⅳ期）

黒谷３号墳　ＴＫ209～ＴＫ217型式（Ⅳ期）

黒谷４号墳　ＭＴ85～ＴＫ48型式（ⅢＡ新～Ⅵ期）

黒谷５号墳　ＭＴ85～ＴＫ217型式（ⅢＡ新～Ⅳ期）
黒谷６号墳　ＴＫ209～ＴＫ217型式（Ⅳ期）
黒谷７号墳　ＴＫ209～ＴＫ46型式（Ⅳ～Ⅴ期）
黒谷８号墳　遺物まったく出土せず。
黒谷９号墳　遺物まったく出土せず。
水呑１号墳　ＴＫ48型式（Ⅵ期）
水呑２号墳　ＴＫ48～平城Ⅰ式（Ⅵ～Ⅶ期）
水呑３号墳　ＴＫ217型式（ⅣＢ期）
水呑４号墳　ＴＫ209～ＴＫ46型式（Ⅳ～Ⅴ期）
水呑５号墳　ＴＫ217～ＴＫ46型式（ⅣＢ～Ⅴ期）
水呑６号墳　ＴＫ217～平城Ⅰ式（ⅣＢ～Ⅶ期）
水呑７号墳　遺物まったく出土せず。
水呑８号墳　遺物まったく出土せず。
水呑９号墳　平城Ⅲ式

水呑２号墳や３号墳からは、未盗掘の状態で土器のセットが供献時そのままの状態で出土しており、この時期の供献、あるいは食前の実態を知る上で興味深い資料となる。同じく水呑３号墳の未盗掘石室内部から出土したＴＫ217型式（ⅣＢ期）の土器群（図63）は、蓋坏が逆転する時期のもので、従来単体で出土したら間違いなく坏と認定すべきものが蓋として使用された状態で出土しており、須恵器の型式移行期の消費地における使用の実態を知る貴重な例となった。また、水呑５号墳の墓道から出土した同一のヘラ記号を施した一群の須恵器の蓋と坏のセット（図96－113と127、114と118、115と128）は、それぞれＴＫ217～ＴＫ46型式（ⅣＢ～Ⅴ期）と形態差があるものの、石室外に一度にかきだされた出土状態から、おそらく、蓋坏が形式変化する（いわゆる「逆転」も含めて）過渡期に作られたものが、同時に一つの窯で焼かれて、この古墳に供献されるに至ったものとおもわれ、これも興味深い。石室内より遺物が埋葬時のままの状態で出土する例は、未盗掘墳以外では、黒谷２号墳、４号墳、５号墳、７号墳および水呑６号墳の前室あるいは擬前室部の隅から無頸壺や小型提瓶が出土している。あと固体的には、黒谷５号墳出土の頸部の広い　（図32－309）や、肩部に綾杉文を施した直口壺状の平瓶が、いかにも地方窯製らしいめずらしい形態の須恵器である。なお、土師器は須恵器と比較してかなり少量しか出土していない。

２．金属製品・装身具

黒谷１号墳出土の鉄鑿は、鉄製工具類の中でもめずらしいものである。また、石室床面の最

も低いところから、「かきだし」漏れで１点のみ出土した黒谷２号墳出土の金銅製鈴は、馬具の飾りとおもわれるが、比較的小型の造りであるため別の用途も考えられる。黒谷４号墳からは、残欠ばかりだが、鉄刀、金銅装の馬具類、刀子金具など（図21.22.23）、両古墳群から出土した金属製品の中では出色したものが多く出土しており、被葬者層の他との階層差を感じさせる。あと、黒谷６号墳出土の鉄鏃（図38－358）は平根式椿葉型でめずらしい。

装身具類では耳環が多く出土している。金銅、鉄地金銅張り製などが大半だが、やはり黒谷４号墳出土のものが目を引き、垂飾が付いていたとも考えられる純金製のものや、中空の銅版金張り製のものなどがある。

３．ヘラ記号について

黒谷・水呑両古墳群の各古墳より出土した須恵器から19種類115例のヘラ記号を確認している。これらについては図96～98に今回出土したすべてを掲載し、今後の分析に対する資料を提示するに止めて、今後の研究に供したい。

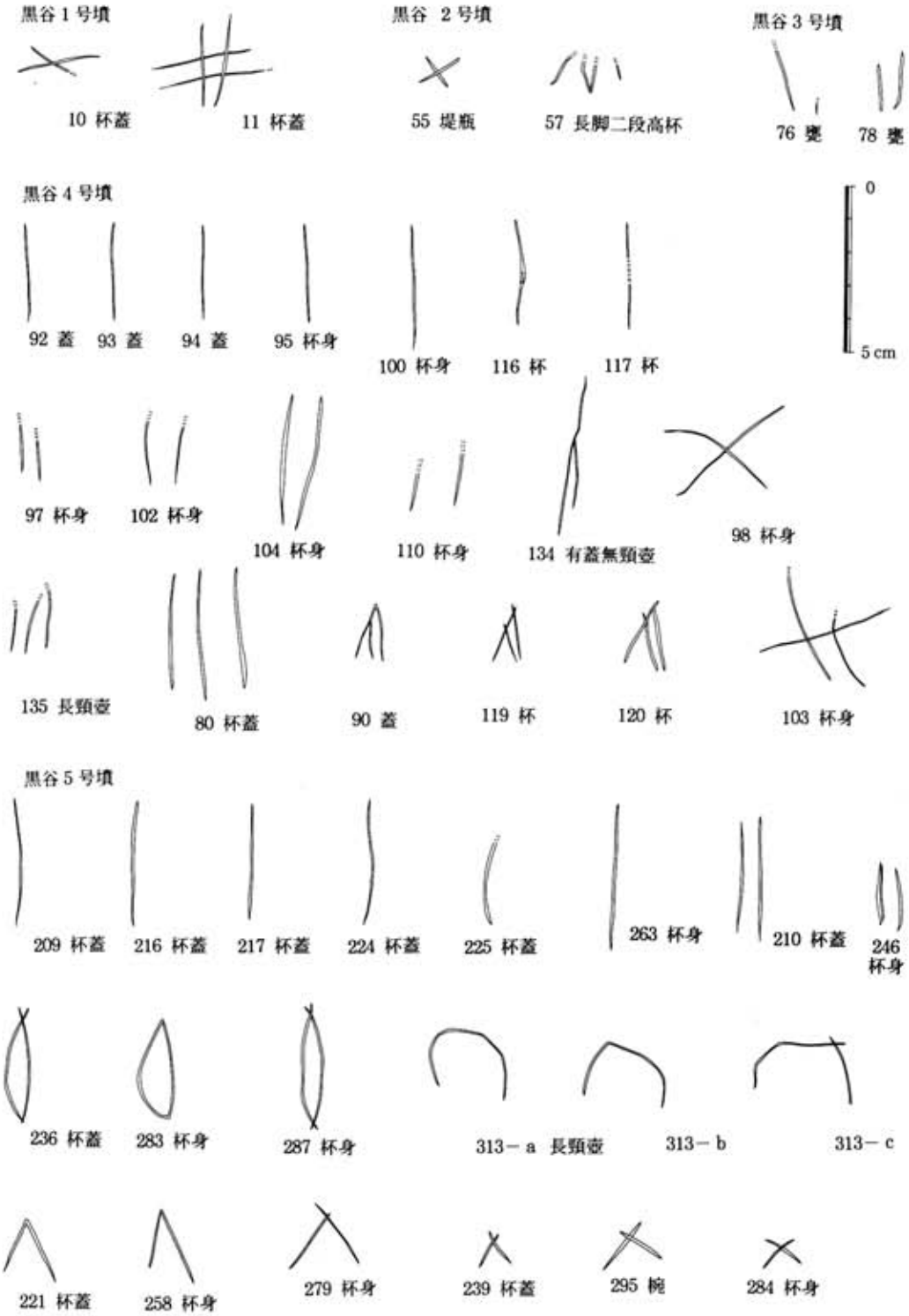

黒谷1号墳
10 杯蓋
11 杯蓋
黒谷 2号墳
55 堤瓶
57 長脚二段高杯
黒谷3号墳
76 甕
78 甕
黒谷4号墳
0
5cm
92 蓋
93 蓋
94 蓋
95 杯身
100 杯身
116 杯
117 杯
97 杯身
102 杯身
104 杯身
110 杯身
134 有蓋無頸壺
98 杯身
135 長頸壺
80 杯蓋
90 蓋
119 杯
120 杯
103 杯身
黒谷5号墳
209 杯蓋
216 杯蓋
217 杯蓋
224 杯蓋
225 杯蓋
263 杯身
210 杯蓋
246 杯身
236 杯蓋
283 杯身
287 杯身
313－a 長頸壺
313－b
313－c
221 杯蓋
258 杯身
279 杯身
239 杯蓋
295 椀
284 杯身

図96　ヘラ記号1（1/4）

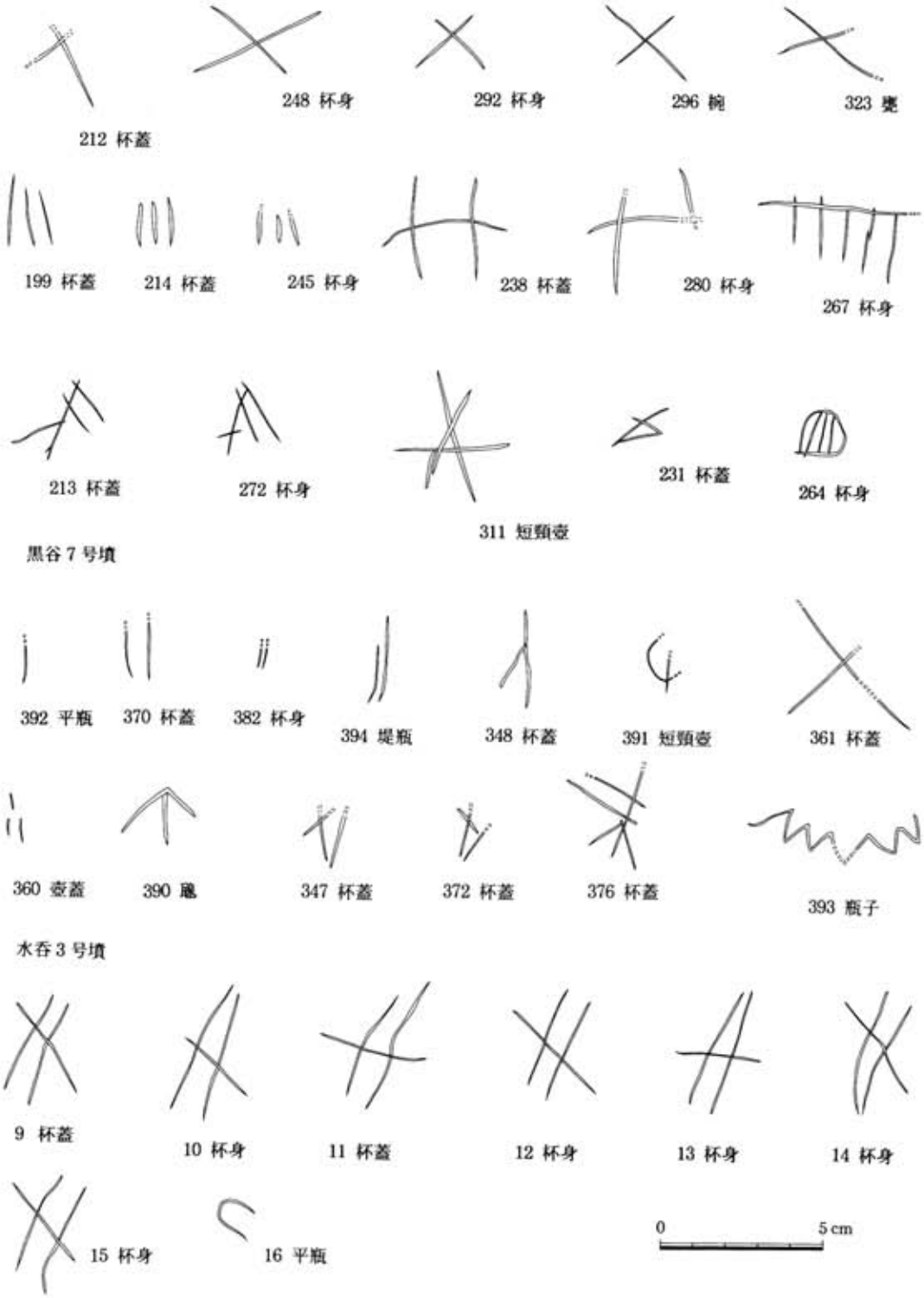

212 杯蓋
248 杯身
292 杯身
296 椀
323 甕
199 杯蓋
214 杯蓋
245 杯身
238 杯蓋
280 杯身
267 杯身
213 杯蓋
272 杯身
311 短頸壺
231 杯蓋
264 杯身
黒谷7号墳
392 平瓶
370 杯蓋
382 杯身
394 堤瓶
348 杯蓋
391 短頸壺
361 杯蓋
360 壺蓋
390 鼎
347 杯蓋
372 杯蓋
376 杯蓋
393 瓶子
水呑3号墳
9 杯蓋
10 杯身
11 杯蓋
12 杯身
13 杯身
14 杯身
15 杯身
16 平瓶
0
5 cm

図97　ヘラ記号2（1/4）

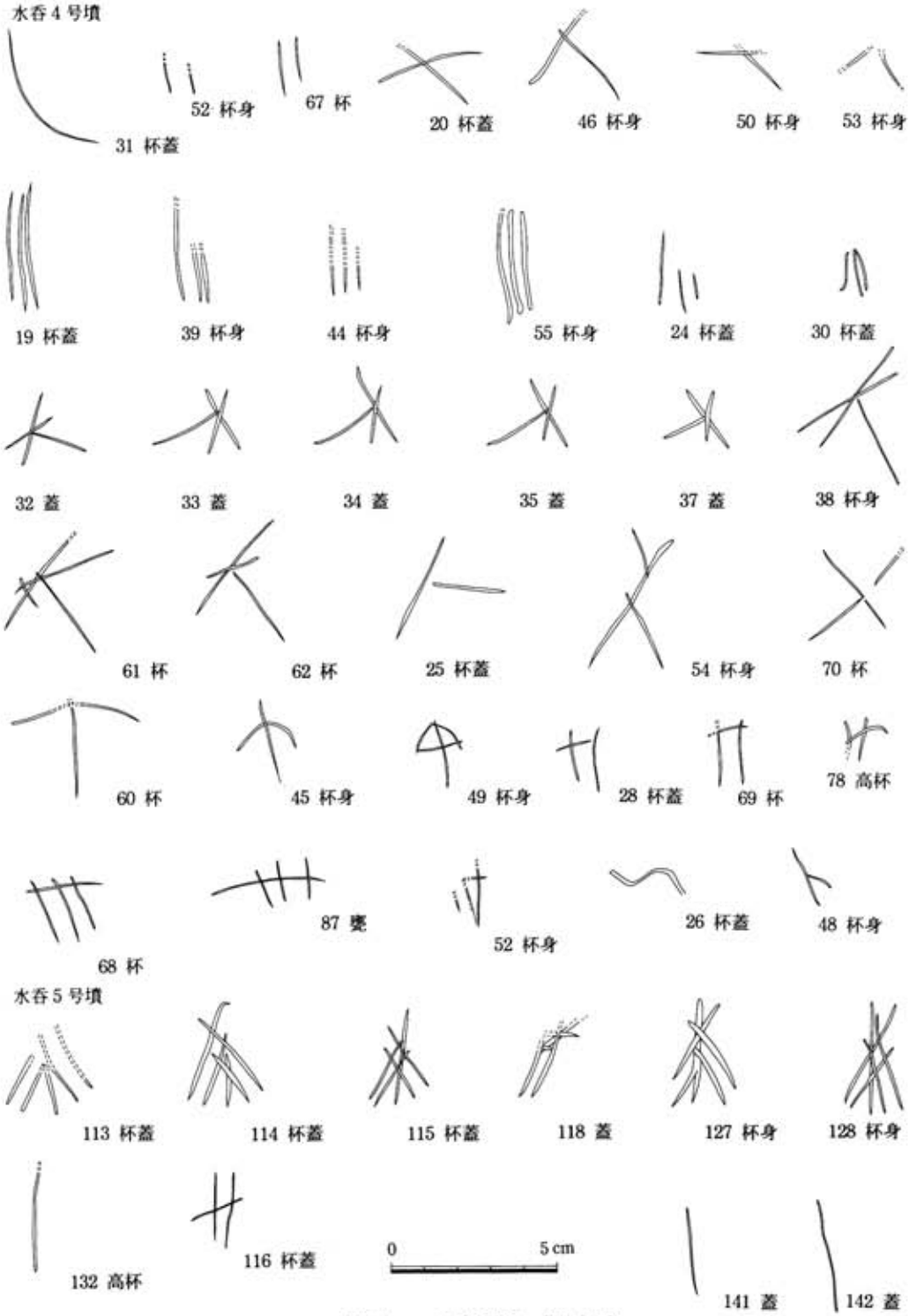

水呑4号墳
31 杯蓋
52 杯身
67 杯
20 杯蓋
46 杯身
50 杯身
53 杯身
19 杯蓋
39 杯身
44 杯身
55 杯身
24 杯蓋
30 杯蓋
32 蓋
33 蓋
34 蓋
35 蓋
37 蓋
38 杯身
61 杯
62 杯
25 杯蓋
54 杯身
70 杯
60 杯
45 杯身
49 杯身
28 杯蓋
69 杯
78 高杯
68 杯
87 甕
52 杯身
26 杯蓋
48 杯身
水呑5号墳
113 杯蓋
114 杯蓋
115 杯蓋
118 蓋
127 杯身
128 杯身
132 高杯
116 杯蓋
0
5 cm
141 蓋
142 蓋

図98　ヘラ記号3（1/4）

Ⅳ．黒谷２号墳の同心円文様について

黒谷２号墳は、佐賀県内で現在確認されている装飾古墳としては、自由画風の雑線刻文をもつ例まで含めると、23例目になる。この古墳は６世紀第４四半期の直前頃、黒谷古墳群では３番目に築造されたと考えられる。詳細については本文中で述べた通りである。

同心円文様が描かれている玄室奥壁は、幅一杯の腰石を広口に据え、中段をやはり幅一杯の横長石材を積んだ上に山形面（横長の５角形）の石材をさらに載せ、上段は小石材を小口積みで天井に持ち送って構築しているが、同心円文はこの山形面の横長石材の中央に刻まれており、羨道から見ると、ちょうど真正面でかつほぼ目の高さにあたる位置にある。２重よりなる同心円で、大きさは外側円径が約25cm、内側円径が約11cmを測る。幅は外側円が1.8～2.7cm、内側円が1.5～2.6cmと一定ではないが、全体としてはバランスを保つ。おそらく紐状のものでコンパスのようにして面取りをしているようである。

「装飾古墳」として黒谷２号墳の特徴となるところを挙げると、まず第一に、この同心円文は石室内において単独で存在し、これ以外は一切石室内外ともに装飾的要素が全くみられないということである。これは、見方を変えるならば、古墳の規模等はさて置き、他の装飾古墳のそれと比較して、複数の同心円文、あるいはその他の文様（絵柄）を（それにいかなる意味が込められるにせよ）、複雑・雑多に描き込むよりも、最も重要な一つのものに絞り込んだほうが、

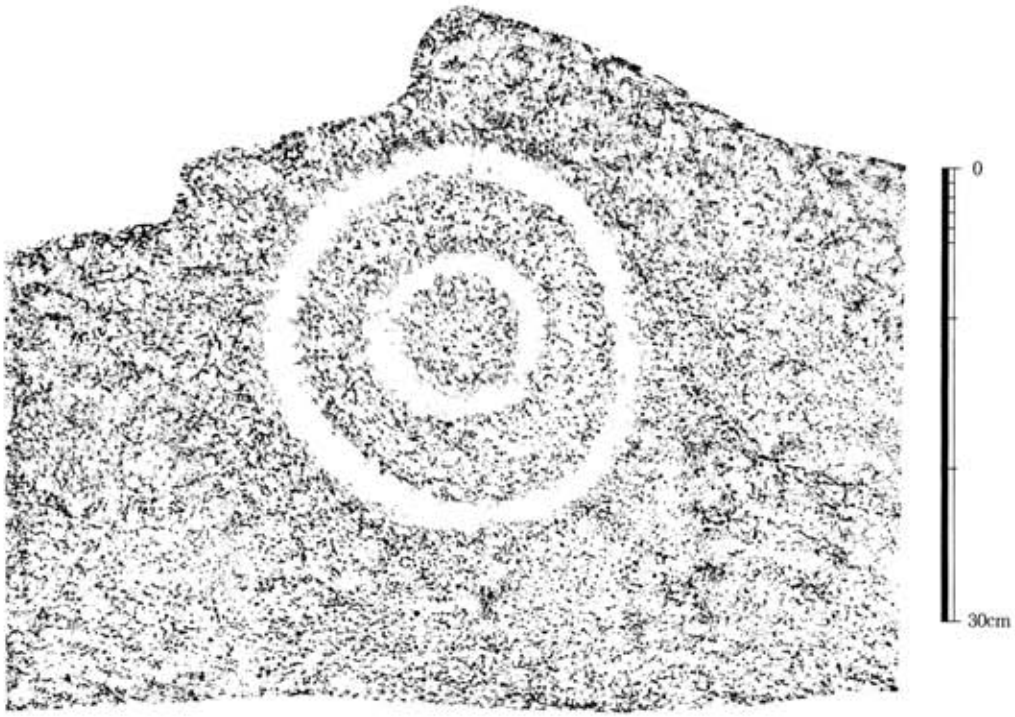


図99　黒谷２号墳同心円文様拓影（１/５）

手法としてはより洗練されているといえなくもない。つまり、この「単独で存在」も、モチーフとして同心円文を中心に据える、という意味で理解するならば、筑後川中・上流域に分布する装飾古墳にみられる特徴的な傾向と軌を一にするものと考えられる。

次に技法的な面からみると、この同心円文は特に顔料等を使用せず、黄橙色に風化した壁石の表面を鈍器状のもので敲打し、窪められた花崗岩の灰白色の地を浮き出させることで図柄を表現するという極めて特異な技法で描いている。ただ、敲打そのものが非常に浅く、指でたどってみても輪郭を明瞭にとらえにくく、明るいところで真正面に光を当てるとほとんどわからなくなるほど微かな窪みである（しかし、これが薄暗い石室内では、不思議なくらいはっきりと浮かび上がる）。従来このようなものは、石室装飾の技法として特に認識されていなかったものであるが、類似した技法が認められる装飾古墳として、現在のところ福岡県浮羽町楯古墳と大分県日田市穴観音古墳および福岡県大牟田市倉永古墳の３例が確認されている。

福岡県楯古墳の同心円文は外側径が約21cmで、大きさ、技法とも黒谷２号墳例に酷似している。特に技法的には、①輪郭線を明確に面取りせず、また比較的粗雑に叩き窪めている。②幾分風化した花崗岩の石材の一部を叩き窪めて白っぽい地を浮き出させることで図柄を表現する。という点で全く同一のものとみていい。単独で存在するという点でも同じだが、ただ、施文位置が奥壁よりの右側壁で―あるいは死者の頭部の位置を意識したとも理解しえるが―外部からの視線を意識したとおもわれる、羨門からみて真正面の位置に施文する黒谷２号墳とは、同心円文そのものの意味も含めて、違った制作意図を持つものといえよう。

彩色壁画系の装飾古墳として有名な日田市穴観音古墳の、前室右側壁の花崗岩の腰石部分に確認できる外側径約35cmの同心円文は、鈍器状のもので叩き窪めるという技法的な点では、やはり黒谷２号墳のものに似通う点がある。ただ、その文様の輪郭線は、不鮮明とはいえ他の３例と比較すると多少の面取りのあとが窺えるし、より深く敲打している。そして、彩色によって縁取りした部分が２重の円文となる点が決定的に他の例とは手法的な相違点となっている。

大牟田市倉永古墳例は、破壊された古墳石材の残欠であるため、石室のどの部分か、あるいは他の壁画の有無についてすらも不明である。同心円文については本例も花崗岩の白っぽい地を浮き出させる技法で表現しており、手法的にも他の３例と同様である。また、同心円文の周囲にはゴンドラや人物、鳥などが非常に浅く荒い線刻（雑線刻文）で表現されているが、これらは同心円文の中心から放射状に配列されており、あきらかに同心円文を中心に据えたモチーフであることがわかる。

楯古墳、穴観音古墳、倉永古墳はいずれも黒谷２号墳より築造時期が遅れる（６世紀末）ことを考慮にいれる必要があり、技法そのものの伝播等についてもまだまだ検討の余地を多く残している。なお、毛彫りによる自由画風の雑線刻文の中にも、一部に広い意味で同様の技法といえなくもないものがあるが、（ある程度の幅をもつ）明瞭な線によるものでないこと、石室

内において（「外」を意識した）施文位置を特に意図していないという点でかなり相違するし、そもそもこの種の古墳では同心円文を描くことがなく、全く別種と考えていいだろう。

これら4例および筑後川中・上流域の装飾古墳にみられる同心円文に、モチーフとして一定の重みがある点では共通するが、この同心円文の意味するところについては、「太陽」「鏡」「弓の的」「魔除け」等、諸説あり、そのいずれの説も古墳個々のケースでは当てはまる場合もあることから、必ずしも共通の認識に基づいているものだとは言い難い。黒谷2号墳の場合、玄室奥壁の中央位置に同心円文を施した山形面の横長石材を用いているところから、あきらかに石室構築当初から施文の意図があったものとおもわれ、これは施文する目的（対象）が被葬者のためか、あるいは「外からの視線」を意識、あるいは対象としたものかはわからないけれども、古墳の被葬者（あるいは被葬者に近い者）の意思に基づいたものであることは間違いない。その施文位置、あるいはこれ一点のみを象徴的に施文していることなどを考えると、邪を秡う「目」として象徴化したと考えるのがもっとも適当であろう。

同心円文の存在を除くと、この古墳は、墳丘・石室の規模および構造において（おそらくは副葬品の内容においても）古墳群中のほかの古墳あるいは一般的に群集墳として比較しても、他と際立ったものでは全くなく、まして、直線距離で北東へ4.6kmの位置にある、径約32m石室全長約11mの五郎山古墳（福岡県筑紫野市原田）や、同じく直線距離で南に3.1kmの位置にある、径約36m石室全長約8mの田代太田古墳（鳥栖市）の6世紀後半の築造の2基の彩色壁画系「正統派」の装飾古墳とは、径約15m前後、石室全長4.56mの黒谷2号墳とはその規模（被葬者階層）を比べるべくもないとはいうまでもないが、黒谷2号墳の造墓を企画した人物（被葬者？）が、こうした筑後川上・中流域における装飾古墳、同心円文の流行を自らの墓にとりいれているというところに興味が尽きない。

参考文献

日下八光　「装飾古墳の秘密　一壁画文様の謎を解く一」　講談社　1978

乙益重隆　「装飾古墳壁画の一解釈一楯と靭と同心円文一」『神道史論叢・瀧川政次郎先生米寿記念論文集』　1984

玉利　勲　「装飾古墳の謎」　大和書房　1987

渡辺正気　「装飾古墳の流行」『日本の古代遺跡・福岡県』　保育社　1987

石山　勲　「鎮魂の芸術」『古代史復元7・古墳時代の工芸』　講談社　1990

表3　佐賀県内の装飾古墳一覧表

	古墳名	所在地	墳形	施文場所	施文手法	図文の種類
1	黒谷2号墳	三養基郡基山町園部	円墳	石室壁面	敲打	同心円文
2	田代太田古墳（国史跡）	鳥栖市田代本町字太田	円墳	石室壁面	彩色	人物・騎馬人物・楯・蕨手文同心円文・三角文・船・花文
3	伊勢塚古墳（県史跡）	神埼郡神埼町字志波屋	前方後円墳	石室壁面	彩色	円文
4	西隈古墳（国史跡）	佐賀市金立町金立	円墳	横口石棺	線刻彩色	円文・並列三角文
5	西原古墳	佐賀市久保泉町川久保	前方後円墳	横口石棺	線刻彩色	円文・三角文・平行直線
6	米ノ隈古墳	小城郡小城町米ノ隈	円墳	石室壁面	自由画風線刻	雑格子文・人物
7	弁財天古墳	小城郡小城町栗原	円墳	石室壁面	自由画風線刻	雑格子文
8	坂井山1号墳	小城郡小城町栗原	円墳	石室壁面	自由画風線刻	雑格子文
9	深底篭古墳	小城郡小城町池上	円墳	石室壁面	自由画風線刻	雑格子文
10	姫御前古墳	小城郡小城町池上	円墳	石室壁面	自由画風線刻	雑格子文
11	古賀山1号墳	多久市東多久町別府	円墳	石室壁面	自由画風線刻	雑格子文
12	山の上14号墳	多久市東多久町別府	円墳	石室壁面	自由画風線刻	雑格子文
13	北の森古墳	多久市東多久町納所	円墳	石室壁面	自由画風線刻	雑格子文・鳥・船
14	穴大師古墳	多久市東多久町納所	円墳	石室壁面	自由画風線刻	雑格子文・円文・船・魚
15	湯崎2号墳	杵島郡白石町湯崎	円墳	石室壁面	自由画風線刻	雑格子文・船
16	永池古墳	杵島郡北方町芦原	円墳	石室壁面	自由画風線刻	人物・翳をもつ人物・馬
17	勇猛山4号墳	杵島郡北方町芦原	円墳	石室壁面	自由画風線刻	雑格子文
18	勇猛山5号墳	杵島郡北方町芦原	円墳	石室壁面	自由画風線刻	雑格子文
19	勇猛寺古墳	杵島郡北方町芦原	前方後円墳？	石室壁面	自由画風線刻	雑格子文・人物・船・家屋
20	簑具崎2号墳	杵島郡北方町大渡	円墳	石室壁面	自由画風線刻	雑格子文
21	簑具崎3号墳	杵島郡北方町大渡	円墳	石室壁面	自由画風線刻	雑格子文
22	簑具崎4号墳	杵島郡北方町大渡	前方後円墳	石室壁面	自由画風線刻	雑格子文
23	竜王崎6号墳（県史跡）	杵島郡有明町深浦	円墳	石室壁面	自由画風線刻	雑格子文・家屋

表4　叩き窪めの手法による同心円文様をもつ装飾古墳一覧表

	古墳名	所在地	施文場所・位置	数	他の装飾文様
1	黒谷2号墳	佐賀県三養基郡基山町園部	玄室奥壁中段	1	なし
2	楯古墳	福岡県浮羽郡浮羽町	玄室奥壁寄り右側壁中段	1	なし
3	倉永古墳（県指定有形文化財）	福岡県大牟田市倉永字甘木山	不明	不明	同心円文をとりまくように人物・船・鳥などを雑線刻
4	穴観音古墳（国史跡）	大分県日田市内河町字倉園	前室右側壁腰石	3	後室と前室に彩色で人物・船・鳥・同心円文・円文・三角文など

Ⅴ．黒谷・水呑古墳群の形成

黒谷・水呑古墳群は、園部谷周辺の山麓部に分布する古墳群の一つである。園部谷周辺には、黒谷・水呑古墳群と同じ北側山麓部に東から一井木古墳群、黒岩古墳群が、園部谷を挟んで南側山麓には東から仁王寺古墳群、馬場古墳群、鎌浦古墳群、皮篭石古墳群、塚ン峠古墳群、一の坂古墳群、小林古墳群がベルト状に連なり、丘陵尾根のほとんどを占めるような古墳群の密集地帯となっている。古墳の総数はおそらく200基程度は存在するものとみられるが、これらの古墳群に対する詳細な分布調査も不十分な現状で、このうち現在までに調査が行われているのは鎌浦古墳群の一部のみである。したがって、ここでは幸い独立・完結した古墳群として、ほぼその全容を捉らえることができた黒谷・水呑古墳群のみの形成の状況を推察するにとどめ、園部谷周辺の古墳群の中での、あるいは基肄郡におけるその占めうる位置も含め、周囲の状況をふまえた考察は今後の課題としたい。

黒谷・水呑両古墳群における古墳の築造順は、各々調査の概要の項で述べているが、本文中でも繰り返し述べてきたように、追葬時の副葬遺物のかき出し行為、あるいはその後の長い期間にわたる盗掘その他の攪乱等により、ほとんどのケースで築造当時の遺物が一部を除いて失われてしまっている現状から、出土遺物（須恵器の蓋坏）の示す時間幅からのみで造墓～追葬時期を考えることには無理があり、各古墳の石室形態および支群内における立地状況から総合的に判断し、各古墳の築造時期と追葬期間を推定してみた（図94）。以下で、黒谷・水呑両古墳群の形成過程を５期に区分し、各時期における状況を段階を追って説明する。

第１期　ＭＴ85～ＴＫ43形式（ⅢＡ新～ⅥＢ期）

黒谷古墳群ではまず最初に１号墳が築造され、続いてさほど時を経ずに、１号墳と墳丘背後が接するようにして５号墳が造られる。黒谷古墳群ではこのあと装飾文様をもつ２号墳が、そして３号墳、背後の丘陵尾根上（Ｂ地区）には９号墳が、さらに４号墳ときわめて短期間のうちに次々と造営がおこなわれる。そして同じ頃、水呑古墳群では最も手前の丘陵尾根上（Ｄ地区）に６号墳が築造されるが、当初はこの背後に黒谷古墳群とは別グループとなる群集墳を造営していく意図がなかったのかもしれない。なお、具体的な根拠に乏しいが、黒谷３号墳、９号墳と水呑６号墳の築造時期はほぼ同時期とおもわれる。黒谷２号墳は当初から施文を意図して石室を構築しており、極めてめずらしい例であるが、黒谷４号墳の石室形態が両古墳群を通じて唯一石室形態の系統を異にする点が注目される。

第２期　ＴＫ209～ＴＫ217型式（Ⅳ期）

第一段階における「築造ラッシュ」から、すこし間をおいて、黒谷古墳群では６号墳、７号

墳が前後して築造される。いずれも石室構造は羨道玄室よりに擬前室構造をもつ単室両袖型で、石室閉塞位置（最終追葬時）も羨道内（擬前門手前）の板石閉塞と同様であるが、玄室平面形が６号墳が方形、７号墳が長方形とタイプを異にしている。この２基はほぼ同時期の造営とみられるだけに、この相違は玄室プランの形式変化ととらえるより、むしろこの古墳群内における、同じ石室に埋葬されるべき、被葬者集団内における一族、あるいは家族関係の中での差が築造時に考慮されていたものとおもわれる。小石室墳を除き、黒谷古墳群ではこの２基以降は新たな古墳の造営は行われない。なお、この段階まではすべての古墳で追葬が行われている。

一方、水呑古墳群では、この段階以降、墓域の設定の上で、黒谷古墳群のそれとはあきらかな相違をみせ始める。この時期、外部とは「影」の位置になる丘陵背後の斜面（Ｃ地区）に４号墳がまず築造され、しばらくして（須恵器の１型式分遅れて）３号墳、５号墳、谷部中央の湿地上（Ａ地区）に１号墳が造営される。破壊されたものも含め、未調査古墳のほとんどはこの時期のものであろう。なお、３号墳は単一期葬で、以後の追葬がおこなわれていない。

第３期　ＴＫ46型式（Ⅴ期）

両古墳群とも、この時期に新たに築造される古墳はない。黒谷古墳群では前段階で２号墳、３号墳、５号墳、６号墳が追葬を停止し、１号墳、４号墳、７号墳のみ追葬が続くが、この段階で１号墳、７号墳での追葬が終息し、以降も追葬が継続されるのは４号墳のみとなる（９号墳については不明）。水呑古墳群では４号墳、５号墳がこの時期で追葬を終え、Ｃ地区の支群は機能を停止する。一方１号墳や６号墳では追葬が継続されていく。

第４期　ＴＫ48～平城Ⅰ式（Ⅳ～Ⅶ期）

水呑古墳群では新たにＢ地区で２号墳が築造される（あるいは調査区域外もしくは破壊古墳の中で同時期のものが数基あるかもしれない）。黒谷４号墳、水呑１号墳はこの時期の前半（ＴＫ48）で追葬が終り、おくれて、６号墳と２号墳の追葬が行われるのを最後に、黒谷・水呑両古墳群における横穴式石室墳での造営活動は停止する。

第５期　平城Ⅱ～Ⅲ式

Ａ地区および水呑古墳群Ｄ地区の奥まった斜面に横口の小石室墳が営まれる。黒谷古墳群では１基（８号墳）、水呑古墳群では３基（７、８、９号墳）を検出しているが、これらは追葬の行われない単一期葬墳で、石室構造はそれぞれ異なっており、築造順は水呑８号墳、７号墳、９号墳、黒谷８号墳の順である。両古墳群ともほかにも同様な横口小石室墳が相当数存在していたものとおもわれる。この第５期をもって黒谷・水呑両古墳群の形成は完全に終息する。

＜付表＞出土遺物一覧表

凡　例

1．法量の単位はcm。（　）は復元径、＜　＞は残存高。口径はすべて口縁端部の内法（内口径）の計測値で、脚部、底部片等は底径を記す。「底」は底部径、「胴」は最大胴部径（提瓶は胴部厚）。

2．焼成は、「良好」（とくに堅緻な須恵器の場合）＞「普通」（標準的なもの）＞「やや不良」（ややあまいもの）＞「不良（軟質）」（かなりあまいもの）の４段階で記す。

3．色調は、『新版標準土色帖（1991年度版）』記載の財団法人日本色彩研究所監修の色票に拠った。（　）は内面の色調。「～色」は省略している。

4．破片等でヘラ記号の有無が不明のものは「－」とした。

黒谷１号墳

須恵器

番号	器種	残存状態	出土地点	法量（口径×器高）	色調	焼成	天井、底部調整	ヘラ記号
1	杯蓋	口縁周辺約 1/10	墓道	(13.7) ×＜3.0＞	赤黒(赤灰)	普通	――	－
2	杯蓋	口縁周辺約 1/12	墳丘Ⅳ区外	(12.9) ×＜2.9＞	にぶい橙	やや不良	――	－
3	杯蓋	口縁周辺約 1/12	墳丘Ⅳ区外	(11.9) ×＜2.3＞	青灰	普通	――	－
4	杯蓋	口縁周辺約 1/4	墳丘Ⅳ区外	(14.1) ×＜2.0＞	灰黄	不良(軟質)	――	－
5	杯蓋	口縁周辺約 1/12	墳丘Ⅳ区外	(13.4) ×＜2.5＞	オリーブ灰	普通	――	－
6	杯蓋	口縁周辺約 1/15	墳丘Ⅳ区外	(11.2) ×＜2.3＞	青灰	普通	――	－
7	杯蓋	口縁周辺約 1/7	墳丘Ⅳ区外	(12.0) ×＜2.5＞	オリーブ灰	普通	回転ヘラケズリ	－
8	杯蓋	口縁周辺約 1/6	墳丘Ⅳ区外	(11.6) ×＜2.6＞	灰	普通	――	－
9	杯蓋	口縁周辺約 1/12	墳丘Ⅳ区外	(12.7) ×＜1.9＞	褐灰	やや不良	――	－
10	杯蓋	2/5程度	墓道	(11.5) ×＜4.1＞	橙	普通	ヘラ切り後ナデ(赤焼き)	○
11	杯蓋	口縁 1/2を欠く	墓道	11.1 × 3.0	暗青灰	普通	ヘラ切り後ナデ	○
12	杯蓋	口縁周辺約 1/6	墳丘Ⅳ区外	(8.5) ×＜1.6＞	灰オリーブ	普通	――	－
13	杯蓋	口縁周辺約 1/4	墓道	(14.0) ×＜2.0＞	灰黄	不良(軟質)	――	－
14	杯蓋	口縁周辺約 1/12	墳丘Ⅳ区外	(11.8) ×＜1.6＞	にぶい橙	不良(軟質)	――	－
15	杯身	1/5程度	墓道	(13.8) ×＜3.8＞	灰	普通	ヘラによる強い回転ナデ	－
16	杯身	2/5程度	墓道	(12.9) ×＜4.0＞	灰	普通	回転ヘラケズリ	－
17	杯身	1/5程度	墳丘Ⅳ区外	(14.0) ×＜4.0＞	青灰	普通	回転ヘラケズリ	－
18	杯身	口縁周辺約 1/15	墳丘Ⅳ区外	(11.2) ×＜2.6＞	灰	普通	――	－
19	杯身	口縁周辺約 1/10	墳丘Ⅳ区外	(11.8) ×＜3.2＞	青灰	普通	――	－
20	杯身	口縁周辺約 1/16	墳丘Ⅳ区外	(10.2) ×＜2.0＞	にぶい黄橙	やや不良	――	－
21	杯身	口縁周辺約 1/6	墳丘Ⅳ区外	(10.5) ×＜2.5＞	暗青	普通	回転ヘラケズリ	－
22	杯身	口縁周辺約 1/5	墳丘Ⅳ区外	(10.4) ×＜3.0＞	灰	普通	――	－
23	杯	口縁周辺約 1/10	墳丘Ⅳ区外	(14.4) ×＜2.3＞	浅黄	不良(軟質)	――	－
24	杯	口縁約 1/4	墳丘Ⅳ区外	(11.6) ×＜2.1＞	灰	普通	――	－
25	高杯	杯口縁約 1/14	墳丘Ⅳ区外	(11.0) ×＜2.6＞	灰黄	やや不良	――	－
26	杯	口縁周辺約 1/12	墳丘Ⅳ区外	(8.8) ×＜2.3＞	暗青灰	普通	――	－
27	高杯	杯口縁約 1/12	墳丘Ⅳ区外	(12.5) ×＜2.9＞	オリーブ灰	普通	――	－
28	長脚二高杯	脚上部約 1/3	墳丘Ⅳ区外	＜8.2＞	オリーブ灰	普通	――	－
29	高杯	脚端部約 1/6	墳丘Ⅳ区外	(14.6) ×＜7.7＞	灰白	普通	――	－
30	高杯	脚端部約 1/1	墳丘Ⅳ区外	(11.4) ×＜1.9＞	灰オリーブ	普通	――	－
31	高杯	脚端部約 1/1	墳丘Ⅳ区外	(9.0) ×＜2.4＞	灰白(灰)	普通	――	－
32	高杯	脚端部約 1/6	墳丘Ⅳ区外	＜1.8＞	黒灰	普通	――	－
33	高杯	脚端部約 1/5	墳丘Ⅳ区外	(11.0) ×＜1.0＞	灰オリーブ	普通	――	－
34	高杯	脚端部約 1/9	墳丘Ⅳ区外	(11.1) ×＜1.2＞	黒褐(褐)	普通	――	－
35	提瓶	口頸部約 1/3	玄室	(5.7) ×＜4.8＞	灰オリーブ	やや不良	――	－
36	平瓶	口頸部約 4/5	墓道	(5.3) ×＜3.1＞	明青灰	普通	――	－
37	平瓶	体部約 2/3	墓道	胴 (22.0) × 16.8	明青灰	普通	――	－
38	長頸壺	口縁部約 1/3	玄室	(10.6) ×＜3.2＞	灰・一部黒	普通	――	－
39	脚付壺	脚裾部約 1/3	玄室	(13.8) ×＜3.9＞	黒褐	普通	――	－
40	壺蓋	口縁約 1/7	墳丘Ⅳ区外	(9.2) ×＜1.9＞	青灰	普通	――	－
41	器蓋	脚裾部約 1/6	墓道	(23.8) ×＜9.8＞	黒	普通	――	－

土師器

42	杯	口縁周辺約 1/5	墳丘Ⅳ区外	(10.0) ×＜3.5＞	明褐（橙）	普通	――	－
43	高杯	脚部（脚端部欠く）	墳丘Ⅳ区外	＜3.8＞	明黄	普通	――	－

黒谷２号墳

須恵器

番号	器種	残存状態	出土地点	法量（口径×器高）	色調	焼成	天井、底部調整	ヘラ記号
53	杯	口縁周辺約 1/12	墓道	(11.9)×<2.6>	緑灰	良好	回転ヘラケズリ	—
54	杯身	1/5程度	墓道	(11.1)×<4.2>	暗緑灰	普通	回転ヘラケズリ	—
55	提瓶	完形	墓道	5.8 × 11.3	褐灰	普通	回転ヘラケズリ後ナデ	○
56	長脚二段高杯	口縁約 1/12	墓道	(11.2)×<2.8>	灰オーブン	普通	――	○
57	長脚二脚高杯	脚裾部約 1/2	墓道	(10.8)×<3.6>	灰オーブン	普通	――	—

土師器

58	高杯	杯底～脚部	墓道	8.8 ×<7.9>	明赤褐	普通	――	—

黒谷３号墳

須恵器

70	杯蓋	口縁周辺約 1/5	崩壊土中	(13.1)×<3.7>	暗青灰	普通	回転ヘラケズリ後ナデ	—
71	杯杯	口縁約 1/2を欠く	崩壊土中	13.0 × 3.8	灰黄褐	普通	回転ヘラケズリ	—
72	椀	口縁約 1/12	崩壊土中	<3.1>	暗青灰	普通	――	—
73	長脚二段高杯	脚裾約 1/5	崩壊土中	(11.1) ×<5.8>	暗青灰	普通	――	—
74	高杯	脚上部のみ	崩壊土中	(5.7) ×<3.6>	暗青灰	普通	――	—
75	甕	口頸部約 1/10	崩壊土中	(21.1) ×<6.4>	暗青灰	普通	――	—
76	甕	口頸部約 1/15	崩壊土中	(18.1) ×<4.9>	暗青灰	普通	――	—
77	甕	口頸部約 1/5	崩壊土中	(32.5)×<11.5>	暗青灰	普通	――	—
78	甕	口頸・肩部約 1/5	崩壊土中	(25.3) ×<8.0>	暗青灰	普通	――	—

黒谷４号墳

須恵器

79	杯蓋	口縁約 1/4を欠く	墳IV区整形面	13.8 × 4.0	灰	やや不良	回転ヘラケズリ	—
80	杯蓋	完形	墓道	12.2 ×<3.9>	褐（暗灰）	普通	回転ヘラケズリ	
81	杯蓋	口縁周辺約 1/5	墓道	(14.2) ×<2.6>	暗青灰	普通	――	—
82	杯蓋	口縁周辺約 1/4	墓道	10.2 ×<2.8>	暗紫	普通	――	—
83	杯蓋	口縁約 1/8	墓道	(11.5) ×<1.9>	青灰	普通	――	—
84	杯蓋	口縁周辺約 1/7	墓道	(12.3) ×<3.0>	白灰	普通	――	—
85	蓋	口縁約 1/12	墓道	(9.8) ×<1.6>	橙	普通	――	—
86	蓋	1/8程度	墓道	(9.3) ×<2.0>	黒・一部灰	普通	ヘラケズリ後ナデ	—
87	蓋	1/10程度	墓道	(10.2) ×<2.2>	橙	普通	――（赤焼き）	—
88	蓋	1/6程度	墓道	(12.2) ×<2.4>	橙	普通	――	—
89	蓋	口縁約 1/7	墓道	(11.5) ×<1.8>	黒・一部灰	普通	――	—
90	蓋	3/4程度	墓道	(10.0) ×<2.9>	オリーブ黒	普通	回転ヘラケズリ後ナデ	
91	蓋	1/2程度	墓道	12.4 × 2.8	灰黄	良好	ヘラケズリ後ナデ	
92	蓋	完形	墓道	12.2 × 3.1	オリーブ黒	普通	回転ヘラケズリ	○
93	蓋	完形	墓道	12.6 × 3.4	にぶい黄	普通	回転ヘラケズリ	○
94	蓋	3/4程度	墓道	12.7 × 3.8	灰オリーブ	やや不良	回転ヘラケズリ後ナデ	○
95	杯身	完形	墳IV区整形面	11.4 × 4.3	灰	普通	ヘラケズリ	○
96	杯身	口縁周辺約 1/5	墓道	(11.5) ×<3.2>	黒・一部灰	普通	――	—
97	杯身	1/2程度	墓道	11.4 × 4.3	暗オリーブ	普通	回転ヘラケズリ後ナデ	○
98	杯身	4/5程度	墓道	(11.4) ×<4.1>	オリーブ黄	普通	回転ヘラケズリ	○
99	杯身	3/5程度	墓道	(12.9) ×<3.7>	青黒	普通	ヘラケズリ	
100	杯身	3/4程度	墓道	11.1 × 4.4	にぶい赤褐	普通	回転ヘラケズリ後ナデ	○
101	杯身	口縁周辺約 1/5	墓道	(10.1) ×<2.4>	オリーブ黒	普通	――	—
102	杯身	1/2程度	墓道	(9.7) ×<3.5>	灰	普通	回転ヘラケズリ	○
103	杯身	4/5程度	墓道	11.4 × 4.2	灰・一部黒	普通	回転ヘラケズリ	○
104	杯身	ほぼ完形	墓道	10.6 × 3.5	灰	普通	回転ヘラケズリ後ナデ	○
105	杯身	口縁周辺約 1/8	墓道	(9.8) ×<3.0>	白灰	普通	――	—
106	杯身	口縁周辺約 1/20	墓道	<1.0>	白灰	普通	――	—
107	杯身	口縁周辺約 1/20	墓道	<1.2>	暗青灰	普通	――	—
108	杯身	口縁周辺約 1/12	墓道	(9.8) ×<2.3>	灰	普通	――	—
109	杯身	口縁周辺約 1/5	墓道	(12.0) ×<2.4>	灰	普通	――	—
110	杯身	1/2程度	墓道	(9.7) ×<3.0>	灰	普通	ヘラによる強い回転ナデ	○
111	杯身	口縁周辺約 1/7	墓道	(10.9) ×<2.2>	灰	普通	――	—
112	杯身	口縁周辺約 1/6	墓道	(9.8) ×<3.4>	灰黄	普通	――	—

番号	器種	残存状態	出土地点	法量（口径×器高）	色調	焼成	天井、底部調整	ヘラ記号
113	杯身	口縁周辺約 1/3	墓道	(10.0) ×<2.8>	橙	普通	――	―
114	杯身	口縁周辺約 1/9	墓道	(10.2) ×<2.1>	白灰	普通	――	―
115	杯身	口縁周辺約 1/15	墓道	(9.8) ×<2.0>	青灰	普通	――	―
116	杯	ほぼ完形	墓道	13.1 × 3.7	灰	普通	回転ヘラケズリ	―
117	杯	口縁約 1/2欠く	墓道	13.2 × 4.0	灰オリーブ	普通	回転ヘラケズリ後ナデ	―
118	杯	口縁周辺約 1/6	墓道	(14.0) ×<3.1>	オリーブ灰	普通	――	―
119	杯	ほぼ完形	墓道	12.3 × 3.8	オリーブ灰	普通	回転ヘラケズリ	○
120	杯	口縁約 1/2欠く	墓道	12.2 × 3.8	灰	普通	回転ヘラケズリ後ナデ	―
121	杯	1/3程度（高台欠）	墓道	(13.0) ×<4.1>	灰黄	普通	回転ナデ	―
122	杯	1/3程度（高台欠）	墓道	(14.0) ×<4.0>	灰黄	普通	回転ナデ	―
123	杯	ほぼ完形	墓道	13.6 × 4.5	灰オリーブ	良好	回転ヘラケズリ後ナデ	―
124	杯	1/3程度	墓道	(13.1) ×<4.8>	青灰	普通	回転ヘラケズリ後ナデ	―
125	長脚二段高杯	杯部1/3・脚裾1/5	墓道	杯 (12.2)×<4.5> 脚 (12.6)×<6.4>	オリーブ灰	普通	――	○
126	長脚二段高杯	4/5程度1/4程度	墓道	11.8 × 15.1	灰	普通	――	―
127	長脚二段高杯	杯部1/3程度	墓道	(12.1)×<13.6>	灰オリーブ	普通	――	―
128	長脚二段高杯	口縁周辺約 1/5	墓道	(12.0) ×<9.3>	暗灰（灰）	普通	――	―
129	高杯	杯口縁周辺約 1/5	墓道	<2.2>	灰	普通	――	―
130	長脚二段高杯	脚端部約 1/10	墓道	<5.6>	赤灰	普通	――	―
131	高杯	脚裾部約 1/4	墓道	(9.4) ×<1.5>	オリーブ灰	普通	――	―
132	高杯	1/2程度	玄室	(14.1) ×<2.2>	暗オリーブ	普通	――	―
133	鉢	1/2程度	墓道	(15.1) ×<17.8>	浅黄	不良（軟質）	回転ヘラケズリ後ナデ	○
134	有蓋無頸壺	完形	羨道室部床面	8.0 ×<7.5>	灰	普通	回転ヘラケズリ後ナデ	○
135	長頸壺	体・底部約 1/3	墓道	胴(12.2)×<6.6>	灰白	普通	回転ヘラケズリ後ナデ	○

土師器

番号	器種	残存状態	出土地点	法量（口径×器高）	色調	焼成	天井、底部調整	ヘラ記号
136	蓋	天井部のみ	墓道	<2.5>	赤褐	普通	回転ナデ	・
137	鉢	口縁周辺約 1/6	墓道	(10.0) ×<2.7>	橙	普通	――	―
138	鉢	口縁周辺約 1/12	墓道	(9.4) ×<3.4>	浅黄橙	普通	――	―
139	鉢	口縁周辺約 1/6	墓道	(10.1) ×<3.5>	橙	普通	――	―
140	鉢	口縁周辺約 1/6	墓道	(12.5) ×<4.4>	赤褐	普通	――	―
141	皿	杯部1/3程度	墓道	(14.4) ×<2.6>	赤褐	普通	――	―
142	椀	口縁周辺約 1/3	墓道	(14.5) ×<4.1>	赤褐	普通	――	―
143	高杯	杯部1/2・脚端1/2	墓道	(13.0)×<10.9>	橙	普通	――	―
144	高杯	脚・杯上部1/6	墓道	(13.2)×<11.6>	橙	普通	――	―
145	高杯	杯上部・脚裾欠く	墓道	<8.5>	橙	普通	――	―
146	高杯	杯下部および脚部	墓道	(6.7) ×<7.8>	明褐	普通	――	―
147	甕	把手部分のみ	墓道	――	にぶい黄橙	普通	――	―

黒谷5号墳

須恵器

番号	器種	残存状態	出土地点	法量（口径×器高）	色調	焼成	天井、底部調整	ヘラ記号
199	杯蓋	1/2程度	墓道	(14.0) ×<3.5>	青灰（灰）	良好	回転ヘラケズリ	○
200	杯蓋	口縁1/12程度	墳丘Ⅰ区	(13.8) ×<2.2>	明青灰（灰）	普通	――	―
201	杯蓋	口縁周辺約 1/12	墓道	(14.0) ×<2.5>	暗青灰	普通	――	―
202	杯蓋	1/2程度	墓道	13.6 × 3.0	にぶい橙	普通	回転ヘラケズリ	―
203	杯蓋	口縁周辺約 1/5	墓道	(15.0) ×<3.1>	黄灰	良好	回転ヘラケズリ	―
204	杯蓋	口縁周辺約 1/10	墓道	(16.0) ×<2.2>	灰	良好	――	―
205	杯蓋	口縁周辺約 1/9	墓道	(14.0) ×<2.6>	灰	良好	――	―
206	杯蓋	1/2程度	墓道	(13.3) ×<4.8>	灰	良好	回転ヘラケズリ	―
207	杯蓋	2/3程度	墓道	13.7 × 3.8	灰	良好	回転ヘラケズリ	
208	杯蓋	3/4程度	墳丘Ⅰ区	13.2 × 4.7	灰	普通	回転ヘラケズリ	
209	杯蓋	3/5程度	墓道	(12.7) ×<3.6>	灰	良好	回転ヘラケズリ	○
210	杯蓋	口縁約 1/4欠く	墓道	12.6 × 4.3	青灰	良好	回転ヘラケズリ後ナデ	○
211	杯蓋	口縁約 1/13	墳丘Ⅰ区	(13.4) ×<1.6>	暗緑灰	普通	――	―
212	杯蓋	1/5程度	墓道	(14.0) ×<3.6>	青灰	良好	回転ヘラケズリ後ナデ	○
213	杯蓋	完形	墓道	11.7 × 4.3	灰白	不良（軟質）	回転ヘラケズリ後ナデ	○
214	杯蓋	口縁約 1/2を欠く	墓道	12.8 × 4.0	灰	良好	回転ヘラケズリ後ナデ	○
215	杯蓋	口縁約 1/13	墳丘Ⅰ区	(13.6) ×<1.8>	灰	普通	――	―
216	杯蓋	口縁約 1/4を欠く	墓道	12.6 × 3.7	灰白	良好	回転ヘラケズリ	○

番号	器種	残存状態	出土地点	法量（口径×器高）	色調	焼成	天井、底部調整	ヘラ記号
217	杯蓋	4/5程度	墓道	12.0 × 3.7	青灰（灰）	良好	回転ヘラケズリ後ナデ	○
218	杯蓋	口縁周辺約 1/7	墓道	(12.8) ×<4.0>	青灰	良好	回転ヘラケズリ後ナデ	—
219	杯蓋	3/4程度	墓道	12.0 × 4.0	暗灰	やや不良	回転ヘラケズリ後ナデ	
220	杯蓋	口縁部約 1/6	墳丘Ⅰ区	(13.0) ×<2.5>	緑灰	普通	———	—
221	杯蓋	口縁1/2を欠く	墓道	12.5 × 3.7	暗灰（灰）	良好	回転ヘラケズリ後ナデ	○
222	杯蓋	1/5程度	墓道	(11.4) ×<2.7>	灰	良好	———	—
223	杯蓋	1/6程度	墳丘Ⅰ区	(12.6) ×<3.2>	灰	良好	回転ヘラケズリ後ナデ	—
224	杯蓋	口縁約 1/2を欠く	墓道	12.7 × 3.3	灰・黄褐	普通	回転ヘラケズリ後ナデ	○
225	杯蓋	3/5程度	墳丘Ⅰ区	(13.4) ×<3.6>	灰	普通	回転ヘラケズリ後ナデ	○
226	杯蓋	3/4程度	墳丘Ⅰ区	13.3 × 3.8	浅黄橙	やや不良	回転ヘラケズリ	
227	杯蓋	口縁周辺約 1/10	墳丘Ⅰ区	(13.4) ×<2.5>	灰	普通	———	—
228	杯蓋	口縁周辺約 1/10	墳丘Ⅰ区	(13.2) ×<2.6>	暗青灰	普通	———	—
229	杯蓋	口縁約 1/14	墳丘Ⅰ区	(12.4) ×<2.0>	青灰	普通	———	—
230	杯蓋	口縁周辺約 1/20	道	(12.0) ×<2.3>	暗青灰	普通	———	—
231	杯蓋	2/3程度	墓道	12.0 × 4.0	灰	良好	回転ヘラケズリ後ナデ	○
232	杯蓋	口縁部約 1/12	墓道	(11.4) ×<2.6>	灰（灰白）	良好	———	—
233	杯蓋	2/5程度	墓道	(11.5) ×<4.0>	にぶい黄橙	普通	回転ヘラケズリ後ナデ	—
234	杯蓋	口縁周辺約 1/15	墳丘Ⅰ区	(12.0) ×<3.0>	褐灰	普通	———	—
235	杯蓋	ほぼ完形	墓道	11.0 × 3.5	暗灰（灰）	良好	回転ヘラケズリ後ナデ	
236	杯蓋	口縁約 1/2を欠	墓道	11.5 × 3.7	青灰（灰白）	良好	回転ヘラケズリ	○
237	杯蓋	完形	墓道	12.2 × 3.4	にぶい赤褐	良好	ヘラ切り後回転ナデ消し	—
238	杯蓋	口縁約 1/2を欠く	墓道	11.2 × 2.9	灰	不良（軟質）	ヘラ切り後回転ナデ消し	○
239	杯蓋	ほぼ完形	墓道	11.2 × 3.3	灰黄	やや不良	回転ヘラケズリ	○
240	杯身	口縁周辺約 1/4	墳丘Ⅰ区	(11.2) ×<3.8>	暗青灰（灰）	普通	回転ヘラケズリ	—
241	杯身	4/5程度	墓道	(11.5) ×<4.5>	灰	良好	回転ヘラケズリ	—
242	杯身	1/2程度	墓道	12.6 × 3.6	灰	良好	回転ヘラケズリ	
243	杯身	1/5程度	墳墳丘Ⅳ区	(11.6) ×<3.2>	暗青灰	やや不良	回転ヘラケズリ	—
244	杯身	1/5程度	墳墳丘Ⅰ区	(12.0) ×<3.5>	灰	良好	回転ヘラケズリ後ナデ	—
245	杯身	2/3程度	墓道	11.4 × 4.0	灰	良好	回転ヘラケズリ後ナデ	○

番号	器種	残存状態	出土地点	法量（口径×器高）	色調	焼成	天井、底部調整	ヘラ記号
246	杯身	2/3程度	墓道	10.8 × 5.0	暗灰（灰）	良好	回転ヘラケズリ後ナデ	○
247	杯身	ほぼ完形	墓道	11.5 × 4.7	灰（灰白）	不良（軟質）	回転ヘラケズリ	—
248	杯身	1/4程度	墓道	(10.8)× 4.2	浅黄橙	普通	回転ヘラケズリ	○
249	杯身	1/4程度	墓道	(12.0) ×<3.4>	明赤褐（灰）	不良	回転ヘラケズリ	—
250	杯身	1/2程度	墓道	(12.1) ×<3.3>	にぶい橙	普通	回転ヘラケズリ	
251	杯身	口縁周辺約 1/2	墓道	(12.2) ×<2.9>	灰白	良好	———	—
252	杯身	1/6程度	墓道	(11.6) ×<3.6>	暗青灰（灰）	普通	回転ヘラケズリ	—
253	杯身	口縁周辺1/3程度	墳丘Ⅰ区	(12.2) ×<3.5>	暗灰黄（褐灰）	やや不良	———	—
254	杯身	口縁周辺1/3程度	墳丘Ⅰ区	(11.8) ×<2.7>	褐灰	やや不良	———	—
255	杯身	3/4程度	墳丘Ⅰ区	(12.0) ×<4.0>	浅黄橙	やや不良	回転ヘラケズリ	
256	杯身	4/5程度	墳丘Ⅰ区	11.9 × 4.1	灰	普通	回転ヘラケズリ	
257	杯身	口縁周辺約 1/8	墓道	(11.0) ×<3.1>	橙（灰）	不良（軟質）	———	—
258	杯身	1/2程度	墓道	11.0 × 4.0	灰	良好	回転ヘラケズリ後ナデ	○
259	杯身	1/10程度	墓道	(10.8) ×<4.4>	オリーブ灰	普通	回転ヘラケズリ	—
260	杯身	口縁周辺約 1/6	墳丘Ⅰ区	(12.8) ×<2.5>	灰褐（灰）	普通	———	—
261	杯身	口縁周辺1/3程度	墳丘Ⅰ区	(11.2) ×<2.8>	灰黄（灰）	普通	———	—
262	杯身	3/4程度	墓道	11.1 × 3.5	灰	普通	回転ヘラケズリ後ナデ	—
263	杯身	ほぼ完形	墓道	(10.4) ×<3.9>	灰白（灰）	良好	回転ヘラケズリ後ナデ	—
264	杯身	口縁約 1/4を欠く	墓道	11.5 × 3.6	灰白（灰黄）	良好	回転ヘラケズリ後ナデ	○
265	杯身	口縁周辺約 1/10	墓道	(10.4) ×<1.9>	にぶい黄褐	やや不良	———	—
266	杯身	口縁周辺約 1/16	墳丘Ⅰ区	(11.4) ×<2.4>	暗緑灰	普通	———	—
267	杯身	口縁約 1/4を欠く	墓道	11.0 × 3.7	灰	不良（軟質）	回転ヘラケズリ	○
268	杯身	口縁周辺約.1/8	墓道	(12.6) ×<1.8>	灰	良好	———	—
269	杯身	口縁周辺約 1/16	墳丘Ⅰ区	(10.2) ×<2.0>	灰	普通	———	—
270	杯身	口縁周辺約 1/8	墓道	(11.2) ×<2.9>	灰	良好	———	—
271	杯身	ほぼ完形	墓道	11.2 × 3.8	灰白（灰黄）	オリーブ黒	回転ヘラケズリ後ナデ	
272	杯身	墓道	墓道	11.0 × 3.8	明黄褐	やや不良	回転ヘラ切り後ナデ	○
273	杯身	口縁周辺約 1/7程度	墳丘Ⅰ区	(10.2) ×<1.9>	灰白	やや不良	———	—
274	杯身	完形	墓道	9.6 × 3.2	灰	普通	回転ヘラケズリ後ナデ	

番号	器種	残存状態	出土地点	法量（口径×器高）	色調	焼成	天井、底部調整	ヘラ記号
275	杯身	口縁周辺約 1/6	墓道	(12.9) ×<2.7>	褐灰	普通	――	―
276	杯身	口縁周辺約 1/4	墓道	(10.0) ×<2.3>	灰	普通	――	―
270	杯身	口縁周辺約 1/16	墳丘Ⅰ区	(11.6) ×<2.2>	灰	普通	――	―
278	杯身	口縁周辺約 1/10	墳丘Ⅰ区	(11.6) ×<1.9>	灰	普通	――	―
269	杯身	ほぼ完形	墓道	10.4 × 4.0	灰白	やや不良	回転ヘラケズリ	○
280	杯身	1/3程度	墓道	11.0 × 3.5	灰	良好	回転ヘラケズリ後ナデ	○
281	杯身	2/3程度	墓道	(10.6) ×<2.9>	灰（明黄褐）	普通	回転ヘラケズリ後ナデ	
282	杯身	完形	墓道	11.2 × 4.2	青灰	良好	回転ヘラケズリ	
283	杯身	ほぼ完形	墓道	10.1 × 3.2	黄灰	普通	回転ヘラケズリ	○
284	杯身	ほぼ完形	墓道	9.5 × 3.9	灰	やや不良	回転ヘラケズリ	○
285	杯身	口縁約 1/3を欠く	墓道	9.7 × 4.0	灰黄	不良（軟質）	回転ヘラケズリ	
286	杯身	ほぼ完形	前室	10.2 × 3.7	灰黄	不良（軟質）	回転ヘラケズリ	○
287	杯身	口縁約 1/6を欠く	墓道	9.3 × 3.3	灰オリーブ	良好	回転ヘラケズリ	○
288	杯身	2/5程度	墓道	(10.6) ×<3.2>	灰	良好	回転ヘラケズリ	―
289	杯身	口縁周辺 1/3程度	墳丘Ⅰ区	(11.6) ×<2.7>	灰	普通	――	―
290	杯身	口縁周辺約 1/4	墓道	(10.6) ×<2.6>	青灰（褐灰）	やや不良	――	―
291	杯身	口縁周辺約 1/8	墓道	(11.8) ×<2.5>	にぶい橙	普通	――	―
292	杯身	ほぼ完形	墓道	9.8 ×<2.9>	にぶい灰	普通	回転ヘラケズリ後ナデ	○
293	杯身	口縁周辺約 1/14	墓道	(12.4) ×<1.9>	灰	普通	――	―
294	碗	3/5程度	墓道	10.9 × 9.0	緑黒	良好	回転ヘラケズリ	―
295	碗	体部かすかに欠く	墓道	9.8 × 6.4	褐灰	良好	回転ヘラケズリ	○
296	碗	3/5程度	墓道	(11.7) ×<5.1>	灰赤	良好	回転ヘラケズリ	○
297	長脚二段高杯	杯部約 1/2欠く	墓道	(10.2) × 16.4	灰白	普通	――	―
298	長脚二段高杯	3/5程度	墓道	(13.1) ×<12.6>	灰白	普通	――	―
299	高杯	脚部約 2/5を欠く	墓道	11.1 × 12.0	灰白	普通	――	―
300	高杯	杯部 1/3程度	墳丘Ⅳ区	(8.6) × <3.3>	灰オリーブ	普通	――	―
301	長脚二段高杯	脚裾部 1/4程度	墓道	(9.4) × <7.2>	灰	普通	――	―
302	長脚二段高杯	脚裾部 1/4程度	墳丘Ⅳ区	(11.2) ×<6.1>	灰と明黄褐	普通	――	―
303	高杯	裾端部 1/4程度	墳丘Ⅳ区	(10.6) ×<1.2>	灰褐	普通	――	―

番号	器種	残存状態	出土地点	法量（口径×器高）	色調	焼成	天井、底部調整	ヘラ記号
304	高坏	裾端部 1/8程度	墳丘Ⅳ区	(13.3) ×<2.2>	灰オリーブ	普通	――	―
305	壺蓋	完形	墳丘Ⅰ区	7.7 × 3.1	黒（灰）	普通	ヘラ切り未調整	―
306	有蓋短頸壺	完形	前室	7.6 × 9.2	灰黄	普通	回転ヘラケズリ	―
307	有蓋短頸壺	底・体部 1/4程度	墳丘Ⅰ区	(4.9) × <6.3>	オリーブ灰	普通	回転ナデ	―
308	有形短頸壺	口頸部 1/6程度	墳丘Ⅰ区	(7.1) × <1.1>	暗青灰	普通	――	―
309	甕	完形	墓道	(9.8) ×<11.3>	青灰	良好	回転ヘラケズリ	―
310	甕	頸部1/4程度	墳丘Ⅰ区	(12.3) × <8.6>	暗青灰	普通	――	―
311	短頸壺	体部約 1/4欠く	墳道	8.5 × 11.9	灰	普通	回転ヘラケズリ	―
312	台付長頸壺	体部 1/2程度	墳丘Ⅰ区	<6.9>	暗青灰	普通	――	―
313	長頸壺	ほぼ完形	墓道	7.1 × 14.2	黒	普通	回転ヘラケズリ	○
314	台付長頸壺	ほぼ完形	玄室	8.6 × 25.5	灰	良好	――	―
315	脚付壺	脚裾部約 1/7	墳丘Ⅰ区	(14.3) ×<2.4>	暗青灰	普通	――	―
316	細頸壺	ほぼ完形	玄室	6.1 × 9.6	灰	良好	ナデ	―
317	平瓶	口頸部約 1/2程度	墳丘Ⅳ区	(8.2) × <4.6>	オリーブ灰	普通	――	―
318	平瓶	体部 1/3程度	墓道	胴(19.1) ×<12.1>	暗緑灰	普通	回転ヘラケズリ	―
319	平瓶	ほぼ完形	玄室	5.8 × 14.6	灰白	良好	不定方向ナデ	―
320	堤瓶	頸部を欠く	玄室	胴(18.5) ×<19.2>	暗灰	良好	――	―
321	甕	口頸部 1/8程度	墳丘Ⅳ区	(22.2) × <4.5>	灰オリーブ	普通	――	―
322	甕	口頸部 1/4程度	墳丘Ⅳ区	(22.5) × <5.1>	暗灰（浅黄）	普通	――	―
323	甕	口頸部 1/4程度	墳丘Ⅳ区	(20.9) × <4.7>	灰	普通	――	○
324	甕	口頸部のみ完存	墳丘Ⅳ区	(17.8) × <7.9>	灰白	普通	――	―
325	甕	口縁部・胴上部	墓道	(45.0) ×<46.7>	灰白	普通	――	―
326	甕	約 3/5・底部を欠く	墓道	(31.8) ×<65.5>	浅黄	普通	――	―

土師器

327	高杯	杯部 1/2・脚端 1/4	墓道	(14.7) ×<12.5>	にぶい橙	普通	――	―
328	高杯	杯底部～脚部	墓道	< 9.5>	橙	普通	――	―
329	高杯	杯底部～脚上部	墓道	< 7.3>	橙	普通	――	―
330	高杯	杯底部～脚上部	墓道	< 5.6>	淡い黄	普通	――	―

番号	器種	残存状態	出土地点	法量（口径×器高）	色調	焼成	天井、底部調整	ヘラ記号
331	高杯	脚部	墓道	(9.0) × < 5.1>	橙	普通	――	－
332	短頸壺	口縁約 1/8～肩部	前室	(12.8) × < 6.0>	浅黄橙	普通	――	－
333	椀	3/4程度	墓道	(10.6) × 4.4	橙	普通	ナデ仕上げ	－
334	椀	1/3程度	墳丘Ⅰ区	< 6.0>	黄褐	普通	ナデ仕上げ	－
335	土師皿	1/2程度	玄室	(11.8) × 2.8	にぶい黄橙	普通	静止糸切り	－

黒谷6号墳

須恵器

344	杯蓋	1/3程度	墓道	(13.0) × < 4.2>	暗青灰	普通	回転ヘラケズリ	－
345	杯蓋	口縁周辺約 1/6	墓道	(13.1) × < 2.0>	灰	普通	――	－
346	杯蓋	1/5程度	墓道	(12.5) × < 3.8>	淡黄	やや不良	回転ヘラケズリ	－
347	杯蓋	1/5程度	墓道	(11.8) × < 3.5>	明赤灰	普通	回転ヘラケズリ	○
348	杯蓋	完形	表土中	10.8 × 3.6	灰	普通	回転ヘラケズリ	○
349	杯蓋	口縁周辺約 1/12	墓道	(10.6) × < 3.0>	赤褐	普通	――	－
350	壺蓋	口縁1/7程度	墓道	(9.0) × < 1.8>	青黒	普通	――	－
351	杯身	口縁周辺約 1/2	墓道	(12.2) × < 2.8>	にぶい黄褐	やや不良	ヘラケズリ	－
352	杯身	口縁周辺約 1/10	墓道	(11.7) × < 2.8>	灰	普通	回転ヘラケズ	－
353	杯身	1/5程度	墓道	(11.0) × < 2.8>	暗青灰	普通	――	－
354	杯身	ほぼ完形	墓道	9.8 × 3.5	灰	普通	回転ヘラ切り	－
355	提瓶	体部 4/5程度	墓道	胴17.6 × <21.8>	暗緑灰	不良(軟質)	カキ目	－
356	平瓶	ほぼ完形	墓道	8.7 × 21.4 胴26.6	灰	不良(軟質)	カキ目後ナデ	－
357	甕	頸基部約 1/5	墓道	<10.3>	黒灰(灰)	普通	――	

黒谷7号墳

須恵器

360	壺蓋	完形	墓道	12.1 × 3.9	青灰	普通	ヘラケズリ	○
361	杯蓋	1/2程度	墓道	(12.7) ×< 3.9>	緑灰	普通	回転ヘラケズリ	○
362	杯蓋	1/5程度	墓道	13.0) ×< 4.0>	にぶい黄	普通	回転ヘラケズリ	－
363	杯蓋	口縁 1/8・天井 1/3	墳丘Ⅰ区	13.8) ×< 4.0>	緑灰	普通	回転ヘラケズリ	－
364	杯蓋	口縁約 1/3	墳丘Ⅰ区	(14.2) × < 2.7>	緑灰	普通	――	－
365	杯蓋	口縁周辺約 1/6	墳丘Ⅰ区	(13.8) × < 2.5>	黄灰	普通	――	－
366	杯蓋	口縁周辺約 1/16	墳丘Ⅰ区	(14.6) × < 2.4>	暗緑灰	普通	――	－
367	杯蓋	口縁周辺約 1/5	墳丘Ⅰ区	(12.0) × < 3.2>	にぶい黄	不良（軟質）	回転ヘラケズリ	－
368	杯蓋	口縁約 1/22	墳丘Ⅰ区	(11.8) × < 2.5>	緑灰	普通	――	－
369	杯蓋	口縁約 1/22	墳丘Ⅰ区	(10.4) × < 2.1>	オリーブ灰	普通	――	－
370	杯蓋	1/4程度	墓道	(10.6) × < 2.4>	暗灰	やや不良	回転ヘラケズリ	－
371	杯身	1/4程度	墓道	(10.0) × < 2.3>	灰	普通	回転ヘラ切り後ナデ	－
372	杯蓋	1/5程度	墓道	(10.0) × < 2.3>	灰	やや不良	回転ヘラ切り後部分ナデ	－
373	杯蓋	2/3程度	墓道	(8.9) × < 2.1>	暗青灰	普通	回転ヘラ切り後ナデ	
374	杯蓋	4/5程度	墓道	7.5 × 1.9	灰（暗緑灰）	普通	回転ヘラケズリ後ナデ	
375	杯身	口縁周辺約 1/8	墳丘Ⅰ区	(12.0) × < 3.8>	暗灰黄	普通	回転ヘラケズリ	－
376	杯身	2/3程度	墓道	(11.0) × < 4.4>	緑灰(灰)	普通	回転ヘラケズリ	－
377	杯身	口縁周辺約 1/5	墓道	(11.8) × < 2.5>	暗緑灰	普通	――	－
378	杯身	口縁周辺約 1/6	墓道	(11.8) × < 2.3>	灰	普通	――	－
379	杯身	口縁周辺約 1/2	墓道	(10.6) × < 3.8>	暗青灰	やや不良	回転ヘラケズリ後ナデ	－
380	杯身	口縁周辺約 1/6	墓道	(11.8) × < 3.5>	暗緑灰	普通	――	－
381	杯身	口縁周辺約 1/4	墳丘Ⅰ区	(12.8) × < 3.5>	暗緑灰	普通	回転ヘラケズリ	－
382	杯身	1/5程度	墳丘Ⅰ区	(11.0) × < 4.1>	暗緑灰	普通	回転ヘラケズリ	－
383	杯身	口縁周辺約 1/20	墓道	(10.5) × < 2.5>	オリーブ黄	普通	――	－
384	杯身	口縁周辺約 1/10	墓道	(9.8) × < 3.0>	灰	普通	――	－
385	杯身	口縁周辺約 1/7	墓道	(8.8) × < 2.2>	灰	普通	――	－
386	杯	完形	墓道	9.2 × 3.6	明青灰	普通	ヘラ切り後ナデ	
387	高杯	杯部1/5程度	墳丘Ⅰ区	(13.7) × < 4.4>	オリーブ灰	普通	回転ヘラケズリ	－
388	高杯	杯部1/3程度	墓道	(12.2) × < 3.8>	黒褐	普通	カキ目	－
389	長脚二段高杯	脚部約 1/3	墳丘Ⅰ区	<10.3>	青灰	普通	――	－
390	甕	口頸部を欠く	墓道	胴 8.9 × < 7.0>	灰	普通	回転ヘラケズリ	－
391	短頸壺	1/7程度	墳丘Ⅱ区	8.3 × < 5.5>	灰黄	普通	――	－
392	平瓶	口頸部約 4/5	墓道	7.9 × < 4.5>	灰	普通	――	－

番号	器種	残存状態	出土地点	法量（口径×器高）	色調	焼成	天井、底部調整	ヘラ記号
393	瓶子	ほぼ完形	墓道	9.7 × 17.8	灰	普通	回転ヘラケズリ後ナデ	－
394	提瓶	口頸部約 1/2欠く	墓道	6.2 × 13.2 胴15.4	灰	普通	回転ヘラケズリ後ナデ	○
395	甕	口頸～肩部約 1/2	墓道	(12.5) × < 5.6>	オリー灰	普通	――	－
396	甕	口縁部 1/5程度	墳丘Ⅰ区	(20.3) × < 3.9>	暗緑灰	普通	――	－

土師器

397	杯	口縁周辺約 1/5	墓道	(9.6) × < 4.2>	浅黄橙	普通	――	－
398	高杯	杯部1/4・脚部 3/4	墳丘Ⅳ区	(12.8) × 10.3	橙	普通	――	－
399	高杯	杯底部	墓道	<5.6>	にぶい黄橙	普通	――	－
400	高杯	3/4程度	墓道	(16.2) × <10.6>	明赤褐	普通	――	－
401	皿	1/8程度	墳丘Ⅳ区	(24.4) × < 3.2>	橙	普通	――	－

A区南裾平坦面

408	甕（土師器）	口縁部約 1/9	SKO1	(24.3) × < 4.3>	明赤褐	普通	――	－
409	甕（土師器）	口縁部約 1/10	SKO1	(16.4) × < 4.2>	橙	普通	――	－
410	甕（土師器）	口縁部約 1/10	SKO1	(24.8) × < 8.1>	橙	普通	――	－
411	甕（土師器）	口縁約 1/6	SKO1	(19.8) × < 3.7>	橙	普通	――	－
412	甕（土師器）	口縁約 1/8	P－1	(25.1) × < 3.8>	黄褐	普通	――	－
413	甕（土師器）	口縁部約 1/2	P－2	(19.3) × < 5.3>	橙	普通	――	－
414	甕（土師器）	口縁部小片	SKO1	< 4.6>	橙	普通	――	－
415	瓶（土師器）	把手部分のみ	SKO1	< 8.5>	橙	普通	――	－
416	蓋（須恵器）	天井部つまみ周辺	SKO1	< 1.4>	灰白	普通	――	－

水呑1号墳

須恵器

1	蓋	天井部1/4程度	石室攪乱土中	< 0.7>	灰白	やや不良	――	－
2	杯	1/5程度	石室攪乱土中	(12.4) × (3.9)	黄灰	やや不良	ヘラ切り後ナデ	－

水呑2号墳

須恵器

番号	器類	残存状態	出土地点	法量（口径×器高）	色調	焼成	天井、底部調整	ヘラ記号
3	杯	口縁部約 1/5	前庭部	(11.9) × < 3.6>	灰	普通	――	
4	蓋	完形	玄室	15.3 × 3.5	灰 赤	やや不良	回転ヘラケズリ	
5	杯	完形	玄室	14.6 × 6.8	灰(橙)	やや不不良	ヘラ切り後ナデ消し	
6	蓋	完形	玄室	15.4 × 3.6	灰(橙)	不良（軟質）	回転ヘラケズリ	
7	杯	完形	玄室	14.8 × 6.8	灰	やや不良	ヘラ切り後ナデ消し	
8	皿	完形	玄室	10.7 × 2.1	灰	普通	ヘラ切り後ナデ	－

水呑3号墳

須恵器

9	杯蓋	完形	玄室	9.4 × 3.3	灰（暗灰）	普通	回転ヘラケズリ	－
10	杯身	完形	玄室	10.7 × 2.8	灰（暗灰）	普通	回転ヘラケズリ	－
11	杯蓋	完形	玄室	9.4 × 3.0	灰	普通	回転ヘラケズリ	－
12	杯身	完形	玄室	10.8 × 3.0	黒・暗灰	普通	回転ヘラケズリ	－
13	杯蓋	完形	玄室	11.3 × 3.0	灰	良好	回転ヘラケズリ	－
14	杯蓋	完形	玄室	11.1 × 3.4	灰	良好	回転ヘラケズリ	－
15	杯身	完形	玄室	9.4 × 3.0	灰	良好	回転ヘラケズリ	－
16	平瓶	ほぼ完形	玄室	6.3 × 9.5	灰	普通	回転ヘラケズリ	－

土師器

17	長頸壺	完形	玄室	6.8 × 19.4	橙	やや不良	―― （丹塗り）	

水呑4号墳

須恵器

18	杯蓋	3/4程度	墓道	12.2 × 3.7	浅黄	やや不不良	ヘラ切り後ナデ	－
19	杯蓋	口縁部1/4を欠く	羨前室部	11.4 × 3.8	灰	良好	回転ヘラケズリ	－
20	杯蓋	3/4程度	墓道	11.6 × 3.5	灰 赤	普通	回転ヘラケズリ（赤焼き）	－
21	杯蓋	口縁周辺約 1/6	墓道	(14.3) × < 2.9>	橙	普通	―― （赤焼き）	－
22	杯蓋	口縁周辺約 1/12	墓道	(14.2) × < 1.9>	灰	普通	――	－

番号	器種	残存状態	出土地点	法量（口径×器高）	色調	焼成	天井、底部調整	ヘラ記号
23	蓋	約 1/3（つまみ欠）	擬前室部	(10.0) × (2.9)	褐 灰	普 通	回転ヘラケズリ	−
24	蓋	完 形	擬前室部	8.8 × 2.9	にぶい黄橙	やや不良	回転ヘラケズリ後ナデ	○
25	蓋	完 形	擬前室部	8.0 × 3.3	灰（暗赤）	やや不良	ヘラケズリ後ナデ	○
26	蓋	完 形	墓 道	7.6 × 2.9	灰	普 通	回転ヘラ切り後ナデ	○
27	蓋	1/2程度	表 道	9.7 × 2.3	灰（黒褐）	やや不良	回転ヘラ切り後ナデ	
28	蓋	□縁部1/4を欠く	擬前室部	9.6 × 2.5	灰	良 好	回転ヘラ切り後ナデ	○
29	蓋	1/2程度	擬前室部	9.4 × 2.3	灰	普 通	回転ヘラ切り後ナデ	
30	蓋	完 形	擬前室部	7.2 × 2.5	にぶい赤褐	やや不良	回転ヘラケズリ	○
31	蓋	ほぼ完形	墓 道	7.3 × 2.2	灰	普 通	回転ヘラ切り後ナデ	○
32	蓋	□縁部約 1/4欠く	墓 道	8.5 × 3.6	暗 灰	普 通	回転ヘラケズリ	○
33	蓋	完 形	墓 道	7.5 × 3.8	オリー灰	普 通	回転ヘラケズリ	○
34	蓋	ほぼ完形	墓 道	8.2 × 3.7	暗 灰	普 通	ヘラケズリ	○
35	蓋	完 形	墓 道	7.3 × 3.3	暗青灰	普 通	ヘラケズリ後ナデ	○
36	蓋	□縁周辺約 1/12	墓 道	(7.4) × (2.4)	灰（褐灰）	普 通	回転ヘラ切り後ナデ	
37	蓋	つまみを欠く	墓 道	8.0 × 2.5	オリーブ灰	普 通	回転ヘラケズリ	○
38	杯 身	2/3程度	墓 道	11.5 × 4.4	オリーブ灰	普 通	回転ヘラケズリ	○
39	杯 身	1/2程度	墓 道	10.4 × 4.0	灰 白	普 通	回転ヘラケズリ	
40	杯 身	□縁周辺約 1/14	墓 道	(12.4) × < 2.3>	にぶい黄	普 通	―――	−
41	杯 身	1/8程度（□縁欠）	墓 道	< 3.3>	赤 褐	普 通	ケズリ後ナデ（赤焼き）	−
42	杯 身	□縁周辺約 1/6	墓 道	(12.3) × < 2.5>	暗灰(灰)	普 通	―――	−
43	杯 身	完 形	墓 道	11.2 × 3.7	明褐灰	やや不良	回転ヘラケズリ	
44	杯 身	1/2程度	墓 道	10.5 × 3.5	灰 白	普 通	回転ヘラケズリ	○
45	杯 身	ほぼ完形	墓 道	11.1 × 3.6	灰	普 通	回転ヘラケズリ	○
46	杯 身	3/4程度	墓 道	10.4 × 3.5	灰 白	やや不良	回転ヘラケズリ	
47	杯 身	□縁周辺 1/5	墓 道	(10.4) × < 2.7>	赤 褐	普 通	――― （赤焼き）	○
48	杯 身	□縁部 1/6を欠く	擬前室部	9.7 × 3.9	オリーブ黒	普 通	回転ヘラケズリ後ナデ	○
49	杯 身	ほぼ完形	墓 道	11.0 × 4.0	灰 白	普 通	回転ヘラケズリ	○
50	杯 身	1/2程度	墓 道	(10.4) × (4.2)	灰 赤	普 通	回転ヘラケズリ（赤焼き）	○
51	杯 身	□縁周辺約 /13	墓 道	(11.4) × < 2.4>	暗 灰	普 通	―――	−

番号	器種	残存状態	出土地点	法量（口径×器高）	色調	焼成	天井、底部調整	ヘラ記号
52	杯 身	1/5程度	墓 道	(10.7) × (3.8)	黄 灰	普 通	回転ヘラケズリ	○
53	杯 身	1/4程度	墓 道	(10.0) × (3.7)	オリーブ灰	やや不良	回転ヘラケズリ	○
54	杯 身	ほぼ完形	墓 道	10.7 × 3.5	灰	普 通	回転ヘラケズリ	○
55	杯 身	3/4程度	墓 道	10.6 × 3.6	暗青灰	やや不良	回転ヘラ切り後ナデ	○
56	杯 身	□縁周辺約 1/10	墓 道	(11.4) × < 2.5>	にぶい赤褐	普 通	―――	−
57	杯 身	□縁周辺約 1/12	墓 道	(10.7) × < 2.6>	灰・明黄褐	普 通	―――	−
58	杯 身	□縁周辺1/12	墓 道	(10.5) × (2.7)	灰 黄	普 通	回転ヘラケズリ	−
59	杯 身	□縁周辺約 1/14	墓 道	(8.8) × (3.1)	灰	普 通	回転ヘラケズリ	
60	杯	1/2程度	墓 道	9.1 × 3.9	灰	普 通	回転ヘラケズリ	○
61	杯	3/4程度	墓 道	9.3 × 3.8	灰	やや不良	回転ヘラケズリ	○
62	杯	ほぼ完形	墓 道	10.1 × 3.9	緑 灰	普 通	回転ヘラケズリ	○
63	杯	完 形	擬前室部	9.6 × 4.3	赤 灰	やや不良	回転ヘラケズリ	
64	杯	完 形	擬前室部	9.4 × 3.1	青 黒	やや不良	回転ヘラ切り後ナデ	
65	杯	□縁周辺約 1/12	墓 道	(9.3) × < 2.8>	オリーブ黒	普 通		
66	杯	□縁周辺約 1/10	周 溝	(11.2) × < 3.1>	灰	普 通		
67	杯	ほぼ完形	擬前室部	10.6 × 3.6	灰 白	やや不良	回転ヘラ切り後ナデ	○
68	杯	1/2程度	墓 道	10.2 × 3.7	灰 褐	やや不良	回転ヘラ切り後ナデ	○
69	杯	底1/2・□縁僅か	墓 道	(9.7) × < 3.4>	灰	普 通	回転ヘラ切り後ナデ	○
70	杯	□縁約 3/4を欠く	墓 道	10.0 × 4.1	暗緑灰	良 好	回転ヘラケズリ	○
71	杯	底部1/3・□縁2/3	擬前室部	(9.6) × < 4.0>	オリーブ灰	普 通	カキ目 （赤焼き）	−
72	杯	□縁約 1/10	墓 道	(9.4) × < 2.7>	オリーブ灰	普 通	―――	−
73	杯	□縁約 3/4を欠く	墓 道	10.2 × 3.2	暗青灰	やや不良	回転ヘラケズリ後ナデ	
74	杯	□縁約 1/10	墓 道	(9.5) × < 2.3>	オリーブ黒	普 通	―――	−
75	高 杯	杯部1/2・脚端1/4	擬前室部	(9.0) × <10.2>	灰・暗褐	普 通	杯底部回転ヘラケズリ	−
76	高 杯	杯部□縁周辺1/10	墓 道	(9.9) × < 3.2>	灰オリーブ	普 通	―――	−
77	高 杯	脚端部約 1/2	墓 道	(7.1) × < 1.4>	オリーブ灰	普 通	―――	−
78	高 杯	脚裾部約 1/2	擬前室部	(4.9) × < 2.8>	暗緑灰	普 通	―――	−
79	高 杯	脚端部約 1/8	墓 道	(12.2) × < 2.6>	橙	普 通	――― （赤焼き）	−
80	甕	体部のみ	墓 道	胴 9.1 × < 5.2>	灰オリーブ	普 通	回転ヘラケズリ	

番号	器種	残存状態	出土地点	法量（口径×器高）	色調	焼成	天井、底部調整	ヘラ記号
81	高蓋	3/4程度	羨前室部	14.9 × 5.5	橙	普通	カキ目（赤焼き）	
82	壺蓋	約1/2・口縁僅か	墓道	(8.0) × 3.4	暗青灰	良好	回転ヘラケズリ	
83	有蓋短頸壺	1/4程度	墓道	(5.5) × < 6.8>	灰	普通	回転ヘラケズリ	−
84	平瓶	口頸部約1/3	羨前室部	(6.7) × < 4.6>	オリーブ灰	普通	――	−
85	平瓶	体部約1/3を欠く	墓道	4.9 × <11.1> 胴13.3	灰	普通	回転ヘラケズリ	−
86	甕	口頸～体上部	墓道	(11.9) × < 9.2>	灰白	普通	――	−
87	甕	底～胴部1/3と 口頸部1/4を欠く	墓道	(18.5) × <41.0> 胴(42.0)	暗青灰	普通	――	○
88	甕	口頸～体上部	墓道	23.4 × <30.7> 胴55.8	緑灰	普通	――	−

土師器

89	短頸壺	1/3程度	墓道	(8.0) × < 5.4>	にぶい黄橙	普通	ケズリ後ナデ	
90	短壺	2/5程度(底部欠)	墓道	(11.2) × < 4.3>	橙	普通	ナデ	
91	短頸壺	1/3程度(底部欠)	墓道	(10.3) × < 4.5>	橙	普通	ナデ	
92	椀	2/5程度(口縁欠)	墓道	(15.4) × 5.6	明赤褐	普通	カキ目	
93	椀	約2/5（口縁僅か）	墓道	(14.0) × 5.1	橙	普通	ナデ	
94	高杯	杯部1/5程度	墓道	(15.7) × < 3.5>	橙	普通	ナデ	
95	高杯	杯1/4・脚上部1/2	墓道	(12.7) × <14.1>	にぶい黄橙	普通	ナデ	
96	高杯	杯部1/4・脚上部	墓道	(11.4) × < 7.0>	明赤褐	普通	ナデ	
97	高杯	杯上部を欠く	墓道	(10.5) × < 7.6>	明赤褐	普通	カキ目	
98	高杯	脚上部のみ	墓道	< 5.5>	橙	普通	――	
99	高杯	脚部3/5程度	墓道	(11.4) × < 7.5>	橙	普通	――	
100	高杯	杯底部および脚部	墓道	(9.7) × < 6.8>	明赤褐	普通	――	
101	高杯	杯脚裾部を欠く	墓道	(7.6) × < 4.5>	明赤褐	普通	――	

水呑5号墳

須恵器

113	杯蓋	3/5程度	墓道	(11.7) × < 3.9>	黒褐	普通	回転ヘラ切り	○
114	杯蓋	3/4程度	墓道	12.1 × 3.8	褐灰	やや不良	回転ヘラケズリ	○
115	杯蓋	口縁約7/8を欠く	墓道	(11.9) × < 3.8>	赤褐	普通	回転ヘラケズリ後ナデ	○
116	杯蓋	口縁約3/4を欠く	墓道	(11.5) × < 3.3>	灰黄	やや不良	回転ヘラ切り	○

番号	器種	残存状態	出土地点	法量（口径×器高）	色調	焼成	天井、底部調整	ヘラ記号
117	杯蓋	口縁約1/4	墓道	(13.1) × < 2.8>	赤灰	普通	――	−
118	蓋	1/3程度	墓道	(10.0) × < 3.3>	赤黒（赤褐）	普通	ヘラ切り後ナデ	○
119	蓋	口縁1/12	墓道	(10.0) × < 1.6>	オリーブ灰	普通	――	−
120	蓋	口縁1/12	墓道	(10.0) × < 1.8>	黄灰（灰黄）	普通	――	−
121	蓋	口縁周辺約1/5	前室	(9.3) × < 2.0>	灰	普通	――	−
122	杯蓋	3/4程度	墓道	7.7 × 3.5	にぶい赤褐	普通	回転ヘラケズリ後ナデ	
123	蓋	口縁周辺約1/12	墓道	(7.1) × < 1.7>	灰	普通	――	−
124	蓋	口縁周辺約1/12	墓道	(11.0) × < 2.4>	黒・灰	普通	回転ヘラケズリ後ナデ	−
125	蓋	口縁周辺約1/4	墓道	(14.2) × < 2.7>	浅黄	やや不良	回転ヘラケズリ後ナデ	−
126	蓋	口縁周辺約1/10	墓道	(11.0) × < 1.9>	灰オリーブ	普通	回転ヘラケズリ	−
127	杯身	3/4程度	墓道	9.9 × 3.6	黒褐（褐灰）	普通	回転ヘラケズリ	○
128	杯身	3/4程度	墓道	9.7 × 3.5	黒褐	普通	回転ヘラ切り	○
129	蓋	口縁周辺約1/6	墓道	(8.3) × < 2.2>	青灰	普通	――	−
130	蓋	1/4程度	墓道	(10.2) × < 3.8>	黄灰	普通	カキ目	
131	蓋	1/7程度	前室	(13.1) × < 3.0>	灰オリーブ	普通	――	−
132	高杯	杯部4/5程度	墓道	(13.9) × < 5.0>	灰	普通	回転ヘラケズリ	○
133	高杯	脚端部約1/8	墓道	(13.7) × < 1.2>	青黒	やや不良	――	−
134	高杯	脚裾部約1/4	墓道	(7.7) × < 2.1>	灰褐	普通	――	−
135	平瓶	口頸部	墓道	(10.0) × < 7.5>	黒褐・灰	普通	――	○
136	平瓶	1/4口頸部約2/3	墓道	(8.1) × < 7.4>	青灰	普通	――	−
137	鼎	ほぼ完形	墓道	10.1 × 12.4	灰	普通	回転ヘラケズリ後板ナデ	
138	甕	体～底部一部欠く	墓道	12.7 × 15.4	暗青灰	普通	タタキ後ナデ	

水呑6号墳

須恵器

140	杯蓋	口縁約1/16	墳丘Ⅳ区外	(10.4) × < 2.4>	オリーブ灰	普通	――	
141	蓋	完形	墳丘Ⅰ区外	7.4 × 3.1	灰赤	普通	回転ヘラケズリ	○
142	蓋	完形	墳丘Ⅰ区外	8.1 × 3.3	灰赤	普通	回転ヘラケズリ	○
143	蓋	1/4程度	墳丘Ⅱ区外	(14.0) × (2.7)	灰	普通	ヘラケズリ後ナデ	−
147	蓋	つまみ部周辺のみ	墓道	< 7.4>	灰色	普通	回転ナデ	−

番号	器種	残存状態	出土地点	法量（口径×器高）	色調	焼成	天井、底部調整	ヘラ記号
145	蓋	口縁周辺約 1/2	墳丘Ⅱ区外	(3.5)×<1.8>	灰	普通	――	―
146	杯	口縁周辺約 1/10	墓道	(8.0)× (3.0)	灰	普通	――	―
147	杯	口縁約 1/8	墓道	(9.6)×<2.2>	黒（灰）	普通	――	―
148	杯	口縁部小片と高台	墓道・玄室	(22.0)×<4.5>	オリーブ灰	普通	――	―
149	高杯	完形	前室	10.5 × 13.4 底 10.1	黒・明黄褐	普通	カキ目	―
150	提瓶	完形	前室	5.9 × 11.3 胴 10.4 × 9.0	黒・明黄褐	普通	静止ヘラケズリ	
151	椀	1/4程度	前室	(19.4)×<5.5>	橙	普通	カキ目 （赤焼き）	
152	長頸壺	口頸部約 1/2	玄室	(5.9)×<6.5>	白灰	普通	――	―
153	甕	口頸部約 1/16	墳丘Ⅵ区外	<5.5>	暗灰	普通通	――	―

水呑９号墳

須恵器

161	蓋	ほぼ完形	石室内	15.3 × 1.9	灰	やや不良	回転ナデ	
162	杯	ほぼ完形	石室内	13.2 × 4.0	灰	やや不良	ナデ	

浦田遺跡

番号	器種	残存状態	出土地点（口径×器高）	法量	色調	焼成	その他
1	石鍋（滑石製品）	耳下部周辺のみ	2区SKO1	<9.1>	灰	――	
2	控鉢か擂鉢（瓦質土器）	口縁部小片	2区SKO1	<4.8>	灰	普通	
3	控鉢か擂鉢（瓦質土器）	口縁部小片	2区SKO1	<3.1>	灰	普通	
4	深鉢（縄文土器）	底部のみ	1区包含層	9.7 ×<2.3>	黄褐	普通	
5	壺（弥生土器）	底部のみ	1区包含層	10.1 ×<4.8>	にぶい黄橙	普通	
6	杯身（須恵器）	口縁部約 1/3	1区包含層	(11.7) ×<2.9>	灰白	普通	
7	杯身（須恵器）	約 1/2程度	1区包含層	(10.0) × 3.5	青灰	普通	
8	杯（須恵器）	口縁部約 1/10	1区包含層	(10.0) × 5.3	灰オリーブ	普通	
9	杯身（須恵器）	口縁部約 1/12	1区包含層	(12.0) ×<3.8>	明青灰	普通	
10	杯（須恵器）	底部約 1/4	1区包含層	(7.3) ×<2.5>	暗青灰	普通	高台付
11	杯（須恵器）	底部約 1/4	1区包含層	(9.7) ×<1.7>	明青灰	普通	高台付
12	甕（須恵器）	口頸部約 1/9	1区包含層	(39.5) ×<7.1>	オリーブ黒	普通	
13	甕（須恵器）	口縁部約 1/16	1区包含層	(36.3) ×<3.1>	灰白	普通	
14	甕（須恵器）	口頸部約 1/8	1区包含層	(19.4) ×<4.1>	灰（白灰）	普通	ヘラ記号あり
15	甕（須恵器）	口縁部約 1/8	1区包含層	(20.7) ×<5.4>	白灰（灰）	普通	
16	甕（須恵器）	口頸部約 1/5	1区包含層	(14.0) ×<3.5>	青灰	普通	
17	甕（土師器）	口頸部約 1/12	1区包含層	(24.3) ×<3.4>	灰オリーブ	普通	
18	甕（土師器）	口頸部約 1/7	1区包含層	(28.2) ×<4.7>	にぶい橙	普通	
19	壺（土師器）	口頸～体上部 1/10	1区包含層	(16.7) ×<6.1>	灰オリーブ	普通	
20	甕（土師器）	口頸～体上部 1/8	1区包含層	(17.8) ×<5.8>	橙（灰）	普通	
21	甕（土師器）	口頸～体上部 1/5	1区包含層	(28.4) ×<7.1>	にぶい橙	不良	
22	甕（土師器）	口頸～体上部 1/6	1区包含層	(14.3) ×<5.5>	にぶい褐	普通	
23	甑（土師器）	把手部分のみ	1区包含層	――	にぶい黄橙	普通	高台付
24	椀（土師器）	約 1/4・口縁欠く	1区包含層	7.1 ×<4.3>	灰褐	普通	
25	平瓦（布目瓦）	――	1区包含層	――	灰	普通	
26	平瓦（布目瓦）	（横端部一面残る）	1区包含層	――	灰白	やや不良	土師質
27	平瓦（布目瓦）	（横端部一面残る）	1区包含層	――	明黄褐色	普通	
28	平瓦（布目瓦）	（端部片方残る）	1区包含層	――	淡赤橙	やや不良	
29	平瓦（布目瓦）	（端部片方残る）	1区包含層	――	灰	良好	須恵質
30	平瓦（布目瓦）	（横端部二面残る）	1区包含層	――	オリーブ灰	普通	
31	筒型器台（弥生土器）	脚部片	2区包含層	<3.3>	橙	普通	外面丹塗りの痕跡
32	筒型器台（弥生土器）	脚部片	2区包含層	<16.9>	にぶい橙	普通	外面丹塗りの痕跡
33	筒型器台（弥生土器）	脚部片	2区包含層	<9.3>	にぶい黄橙	普通	外面丹塗りの痕跡
34	筒型器台（弥生土器）	脚端部片	2区包含層	(24.8) ×<3.6>	浅黄橙	普通	外面丹塗りの痕跡
35	壺（弥生土器）	胴部小片	2区包含層	――	橙	普通	外面丹塗り
36	甕（弥生土器）	口縁部約 1/10	2区包含層	(9.2) ×<3.0>	にぶい橙	普通	
37	壺（弥生土器）	底部 1/2程度	2区包含層	(10.0) ×<7.0>	明褐灰	普通	
38	壺（弥生土器）	底部約 1/2程度	2区包含層	(8.0) ×<7.7>	明赤褐	普通	外面丹塗りの痕跡
39	甕（土師器）	口頸～体上部 1/4	2区包含層	(23.0) ×<7.1>	橙	普通	

報　告　書　抄　録

ふりがな	くろたに・みずのみこふんぐん
書名	黒谷・水呑古墳群
副書名	鳥栖北部丘陵新都市関係文化財調査報告書
巻次	（1）
シリーズ名	佐賀県文化財調査報告書
シリーズ番号	第118集
編著者名	久山高史
編集機関	佐賀県教育委員会
所在地	〒840　佐賀市城内1丁目1－59　TEL：0952－25－7232
発行年月日	西暦1993年3月30日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
くろたにこふんぐん 黒谷古墳群	さがけんみやきぐんきやまちょう 佐賀県三養基郡基山町 おおあざそのべあざうらた・おおあざ 大字園部字浦田・大字 みやうらあざくろたに 宮浦字黒谷	41341	－	33° 25′ 1″	130° 30′ 4″	19911101 ～19920331	10,200m²	工場用地造成 （鳥栖北部丘陵新都市開発事業基山工区）
みずのみこふんぐん 水呑古墳群	おおあざそのべあざみずのみ 大字園部字水呑			33° 25′ 1″	130° 30′ 4″	19910703 ～19920810	8,700m²	
うらたいせき 浦田遺跡	おおあざそのべあざうらた・ながうら 大字園部字浦田・長浦			33° 25′ 1″	130° 30′ 4″	19910626 ～19910909	4,500m²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
黒谷古墳群	群集墳	古墳	横穴式石室墳　8基 横口小石室墳　1基	須恵器 土師器 金属製品 （鉄製武器、鉄製工具、馬具） 装身具（耳環、管玉）	2号墳石室内に同心円の装飾文様
水呑古墳群	群集墳	古墳	横穴式石室墳　6基 横口小石室墳　3基		2号墳、3号墳は未盗掘墳で石室内より供献土器のセットが出土
浦田遺跡	散布地	縄文～中世	多重堆積による耕作地跡 （流れ込み状の包含層）	縄文土器 弥生土器 石器 須恵器、土師器 布目瓦 石鍋	

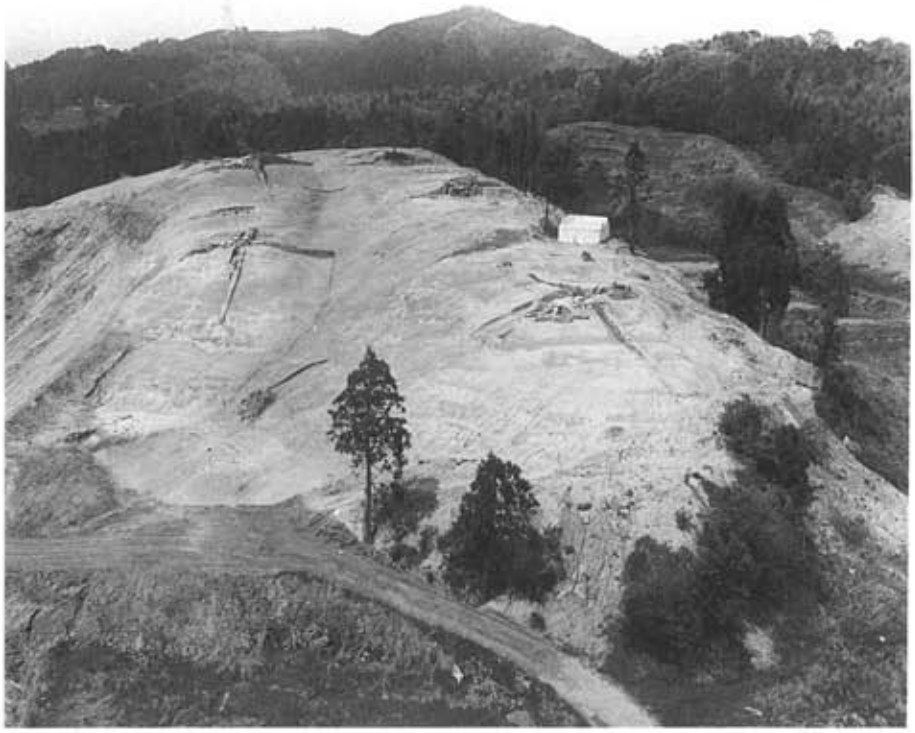
図　　版

調査地区周辺航空写真（上が北）

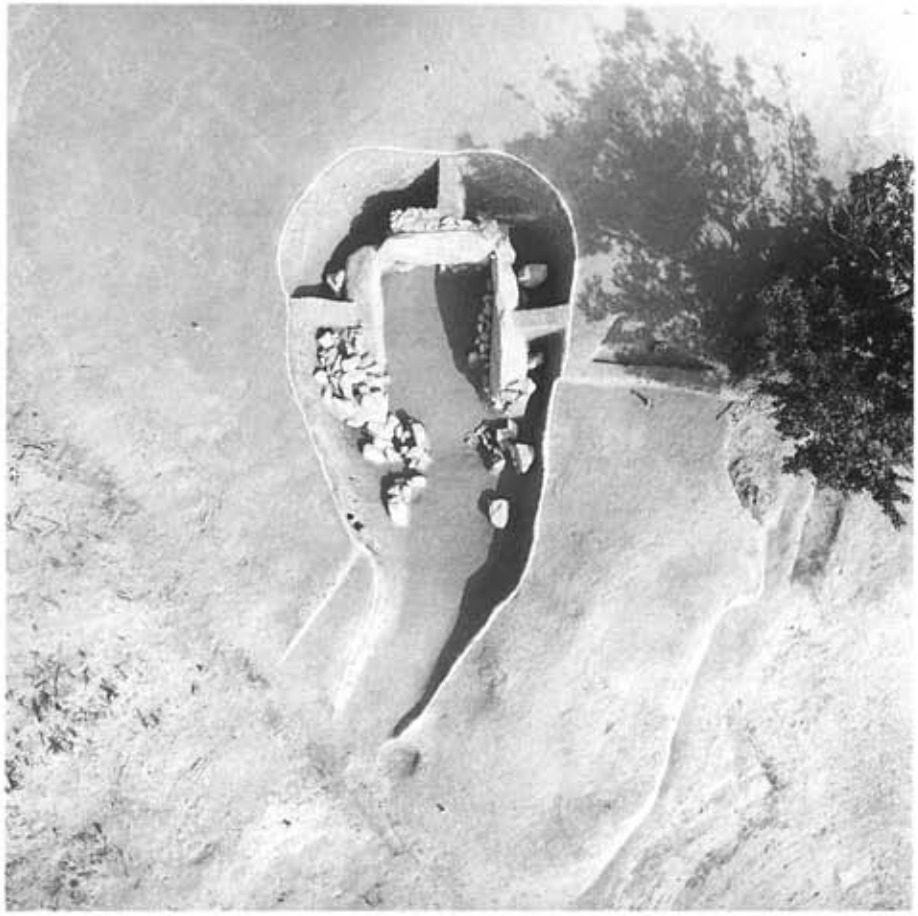
調査地区遠景（南から）

図版２

黒谷古墳群全景
（南上空から）



黒谷古墳群Ａ地区
（南上空から）



黒谷１号墳全景（上空から）

同　　上　（南から）

図版４

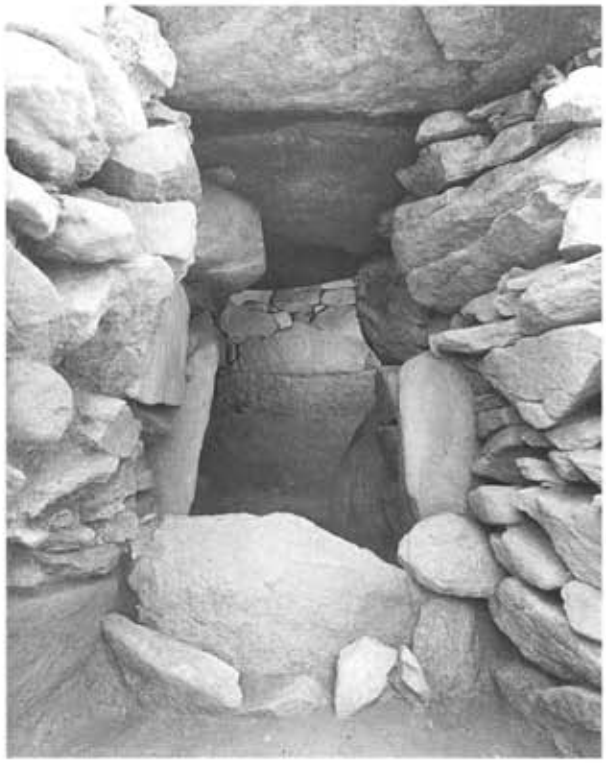
黒谷２号墳

図版４

全景（斜め上空より）
羨門閉塞状況
石室前面（閉塞施設除去後）

図版５

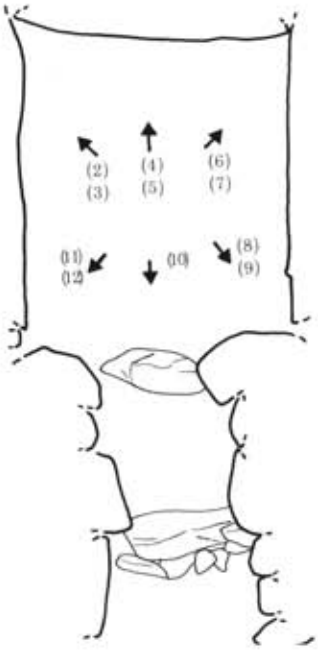
擬前室部床上面	擬前室部床下面
玄室床上面	玄室床下面
羨門より奥をみる	玄室奥壁

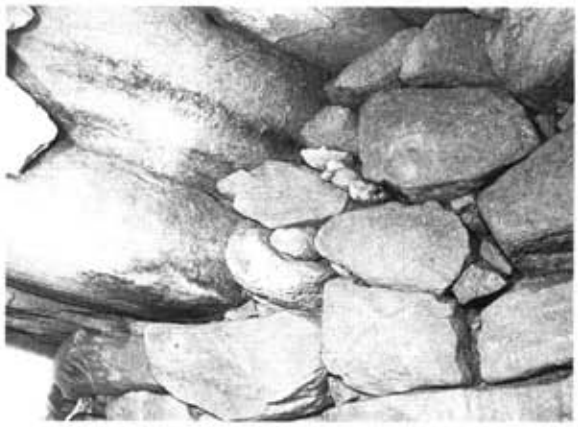


図版 6

黒谷 2 号墳石室

(1) 天井石		
(2) 左側壁（上部）	(4) 奥壁（上部）	(6) 右側壁（上部）
(3) 左側壁（下部）	(5) 奥壁（下部）	(7) 右側壁（下部）
(8) 右側壁（上部）	(10) 前壁	(11) 左側壁（上部）
(9) 右側壁（下部）		(12) 左側壁（下部）

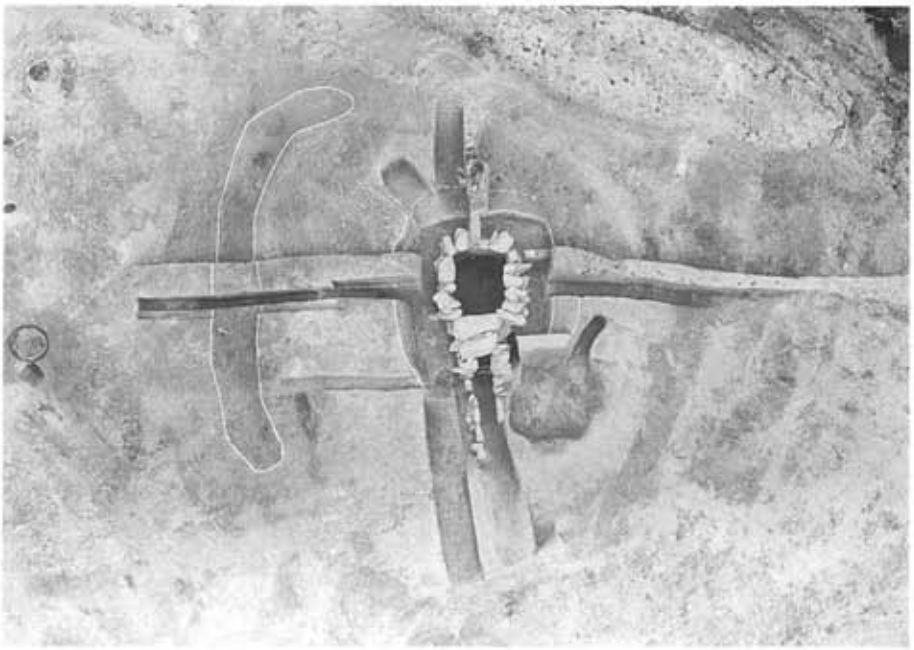


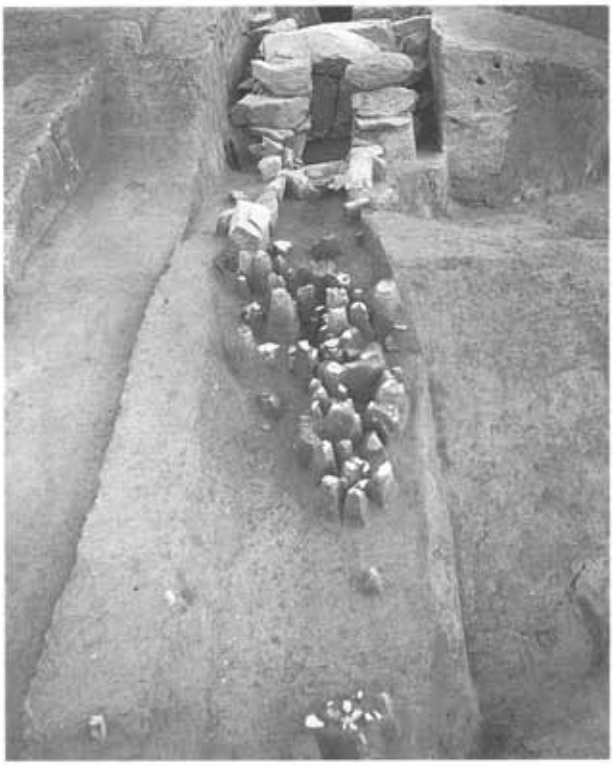


図版 8

黒谷 3 号墳

全　景（上空から）	検出状況（北から）
	検出状況（南から）





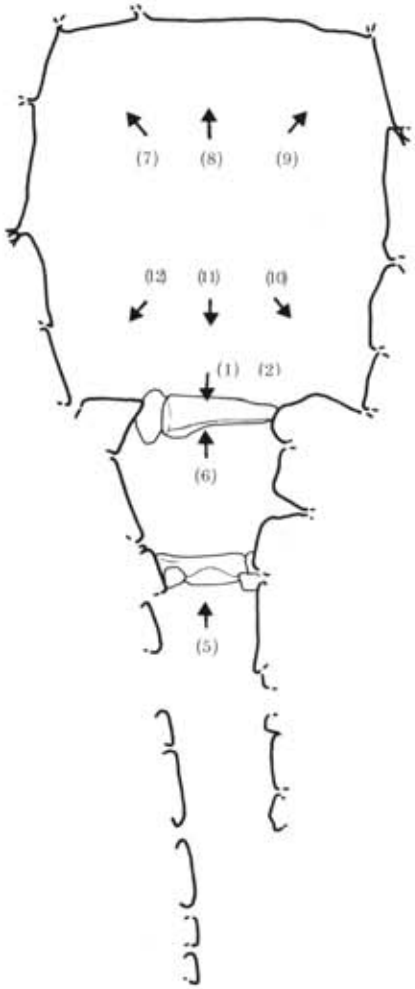
黒谷4号墳

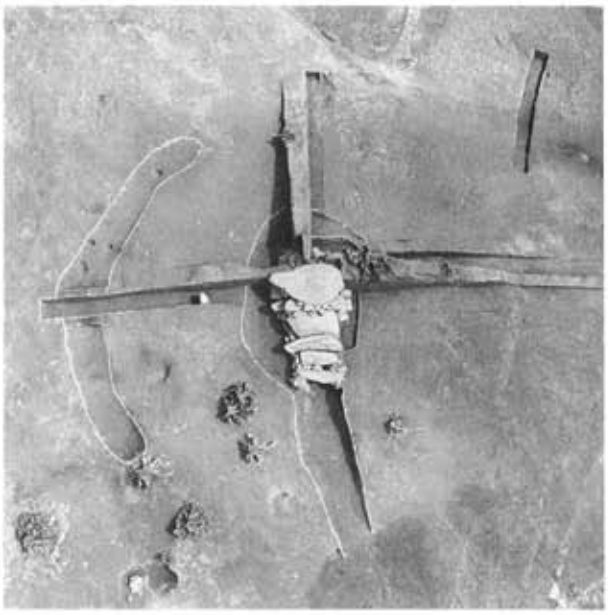
	全　景（南上空から）
	全　景（北東から）
全景（上空から）	墓道遺物出土状況（南から）

図版10

黒谷4号墳石室

(1) 擬前室部遺物出土状況（玄室から）	(2) 擬前室部（玄室から）	(5) 前門部
(3) 玄室床面検出状況	(4) 玄室床面	(6) 玄門部
(7) 玄室左側壁	(8) 玄室奥壁	(9) 玄室右側壁
(10) 玄室右側壁	(11) 玄室前壁	(12) 玄室左側壁





黒谷５号墳

全　景（上空から）	墳丘盛土除去後全景（上空から）
同　上（南上空から）	同　　上　　（南上空から）
墓道遺物出土状況（南から）	同　　上　　（東上空から）

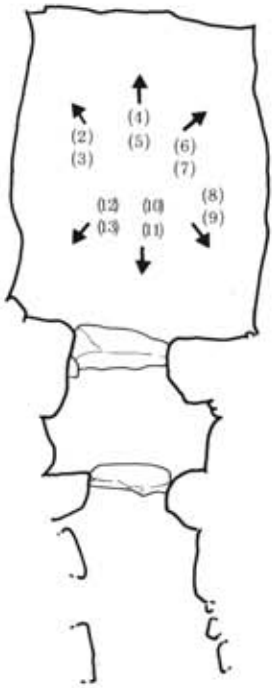
黒谷５号墳

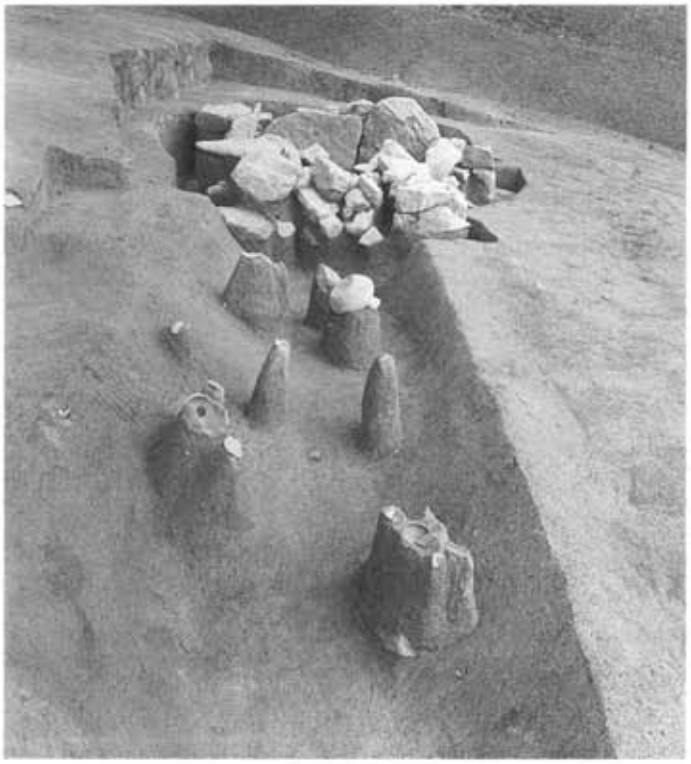
前門部閉塞状況	前門部閉塞板石
	玄門部閉塞板石残存状況
前門部	前室遺物出土状況（玄室から）
玄室床上面残存状況	玄室床下面

図版14

黒谷5号墳石室

(1) 天井石		
(2) 左側壁上段	(4) 奥壁上段	(6) 右側壁上段
(3) 左側壁下段	(5) 奥壁下段	(7) 右側壁下段
(8) 右側壁上段	(10) 前壁上段	(12) 左側壁上段
(9) 右側壁下段	(11) 前壁下段	(13) 左側壁下段





黒谷６号墳

全　景（南から）	石室（上空から）
墓道遺物出土状況（南から）	
石　室（西から）	石室閉塞状況（玄室から

黒谷７号墳

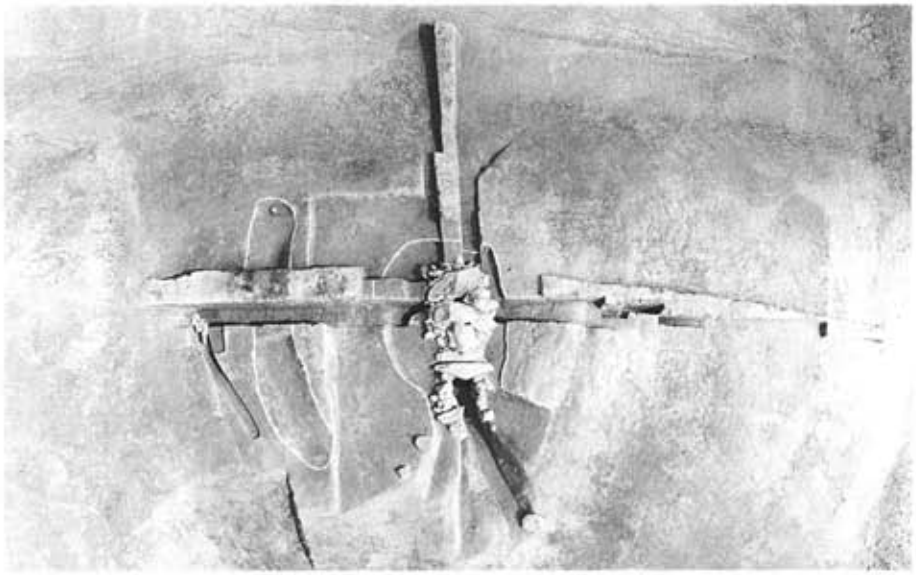
全　景（上空から）

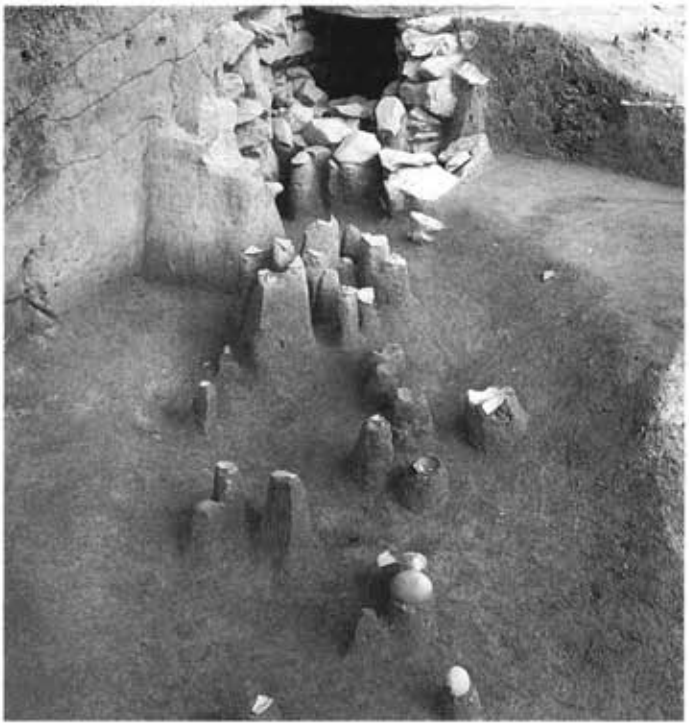
同　上（南上空から）

石室閉塞状況（南から）

同上（玄室から）

墓道遺物出土状況（南から）



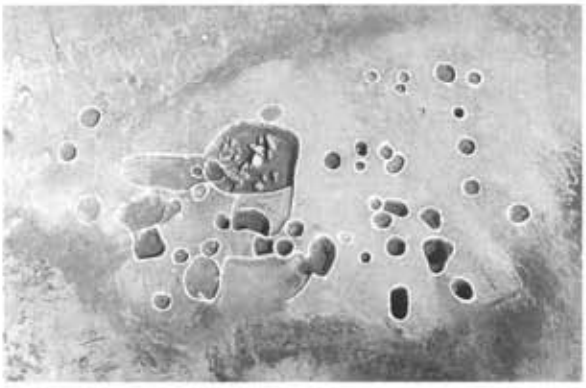


図版18

黒谷７号墳

閉塞板石据立状況	閉塞施設除去後石室前面
擬前室部床上面	擬前室部床下面
玄室床上面残存状況	玄室床下面
玄室奥壁	

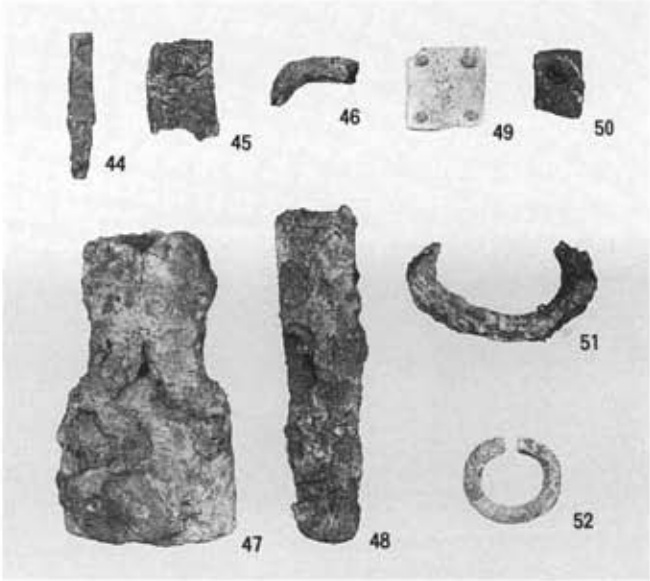
A地区竪平坦部遺構検出状況	黒谷８号墳 小石室（南から）
同　遺構集中部	ＳＫ０１廃棄土坑

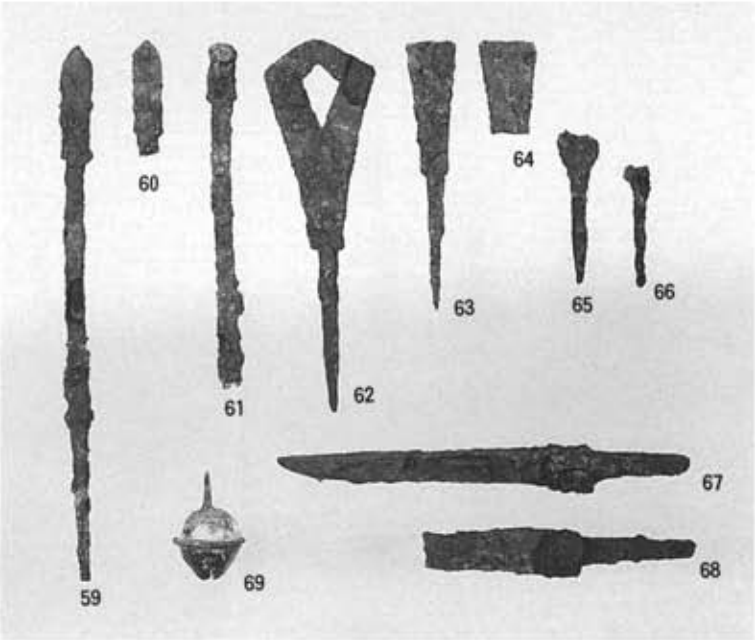


黒谷古墳群Ｂ地区全景（南から）	９号墳全景（南上空から）
９号墳石室（西上空から）	９号墳石室（南から）

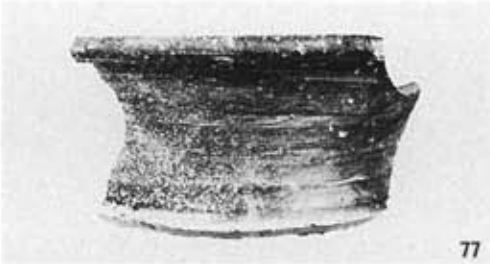
図版20

黒谷１号墳出土遺物

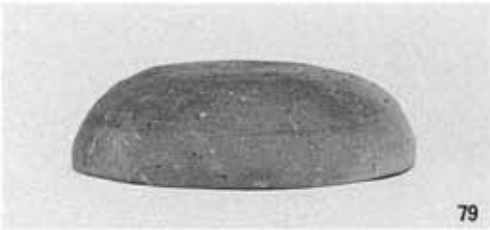




黒谷２号墳出土遺物

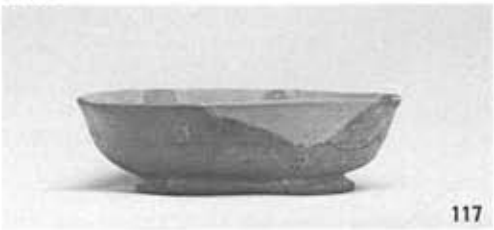


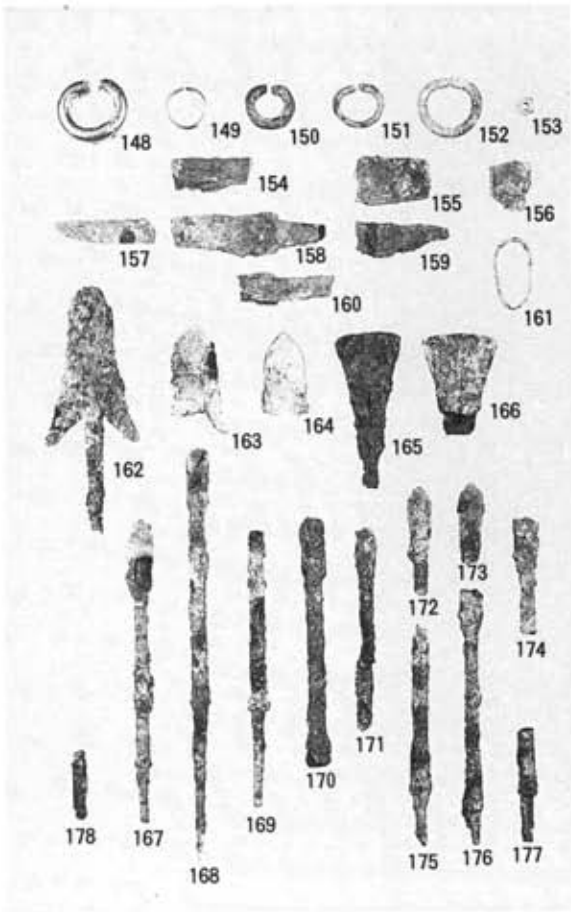
黒谷3号墳出土遺物

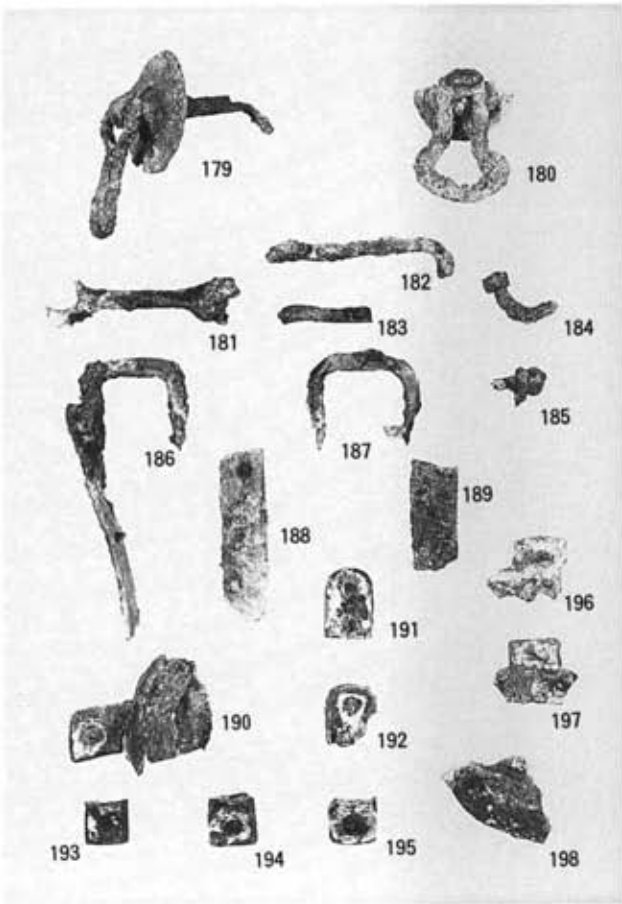


黒谷4号墳出土遺物

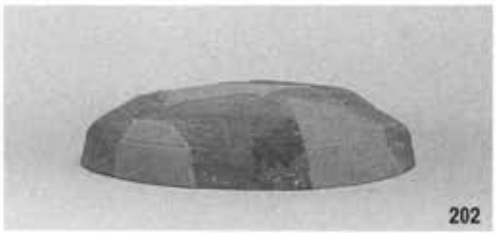
図版22

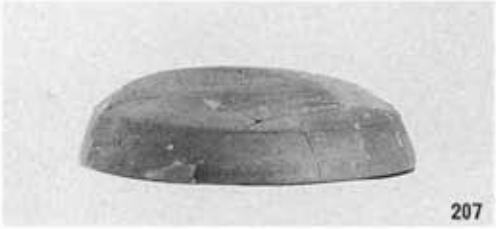






黒谷4号墳出土遺物


202


207

210

216

239

241

246

256

263

274

287

294

295

296

黒谷５号墳出土遺物

297

299

327

306

309

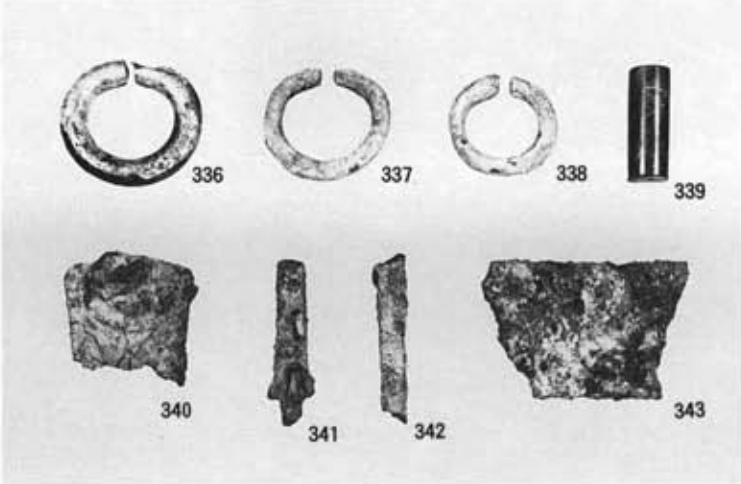
311

313

316

319

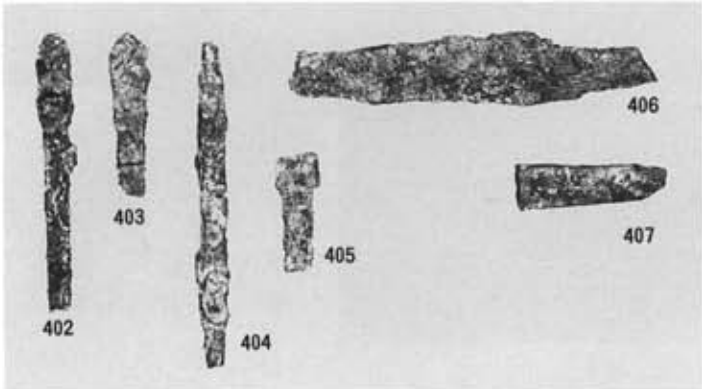
314

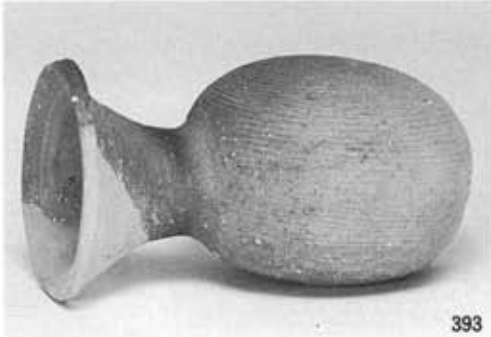


黒谷５号墳出土遺物

黒谷６号墳出土遺物

黒谷７号墳出土遺物



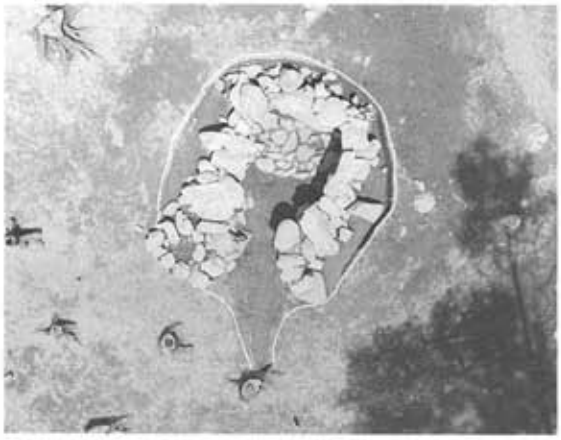


水呑古墳群全景
（南上空から）

水呑古墳群全景
B地区上空より南方向を眺める

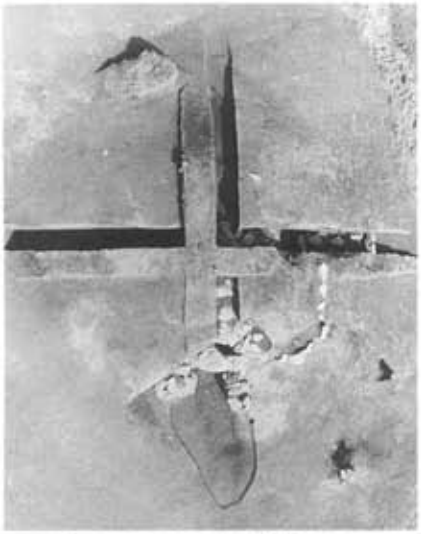
水呑古墳群A地区・水呑1号墳

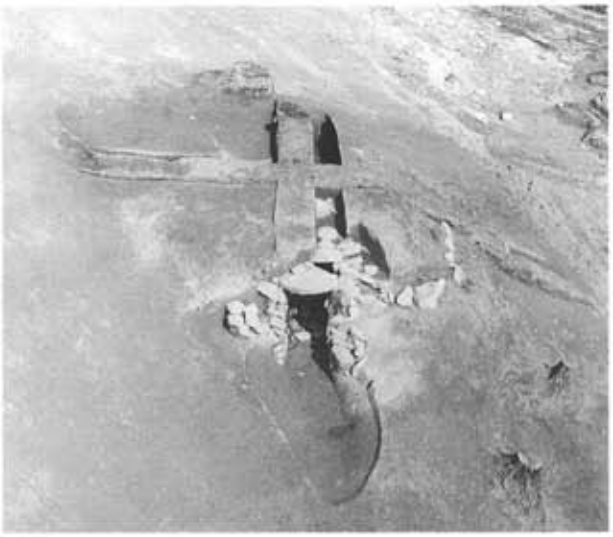
全景（北から）	全景（上空から）
玄室床面残存状況（南から）	石室（南から）
玄室床地山掘り込み面（東から）	玄室右側壁



水呑古墳群B地区
水呑2号墳

石室（南から）	同（閉塞施設除去後）
同　上	同　上
玄室（西から）	供献土器出土状況



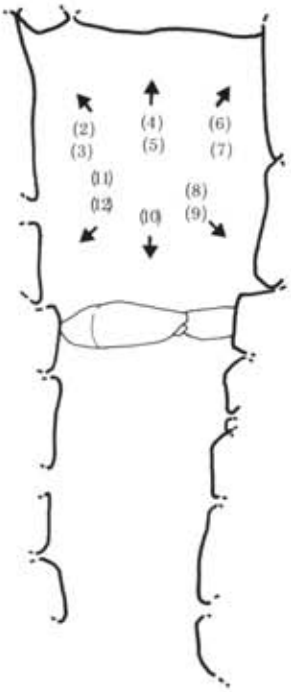


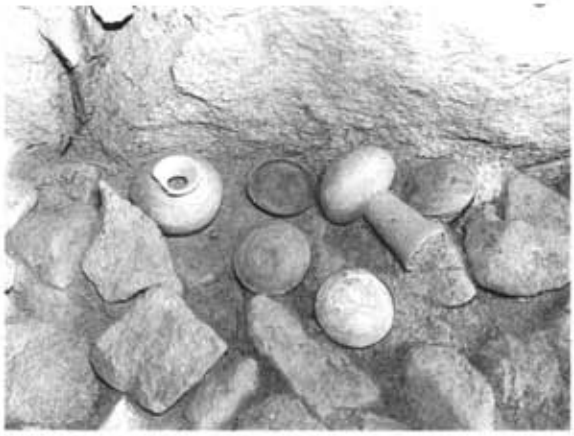
水呑古墳群C地区
水呑3号墳

水呑古墳群C地区全景（東南上空から）	C地区古墳立地状況（東南上空から）
3号墳全景（上空から）	3号墳全景（東南上空から）
石室前面（東南から）	石室前面（閉塞施設および墳丘盛土除去後）

水呑3号墳石室

(1) 天井石		
(2) 左側壁上段	(4) 奥壁上段	(6) 右側壁上段
(3) 左側壁下段	(5) 奥壁下段	(7) 右側壁下段
(8) 右側壁上段	(10) 奥壁より石室入り口をみる	(11) 左側壁上段
(9) 右側壁下段		(12) 左側壁下段



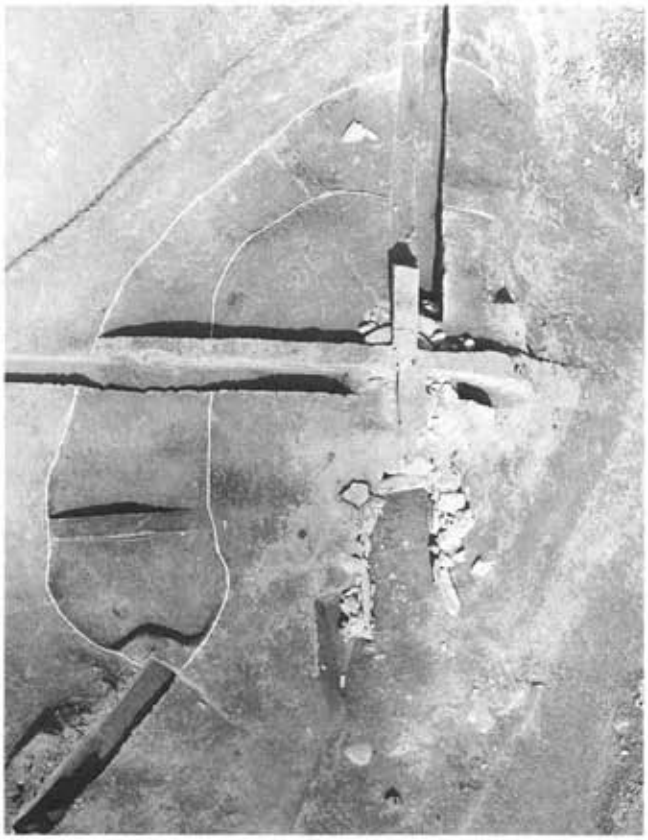


水呑3号墳

石室閉塞状況	石室閉塞状況（玄室から）
石室入り口より奥をみる	玄室床面
供献土出土状況	墳丘盛土状況（右室左側）
墳丘右側列石	

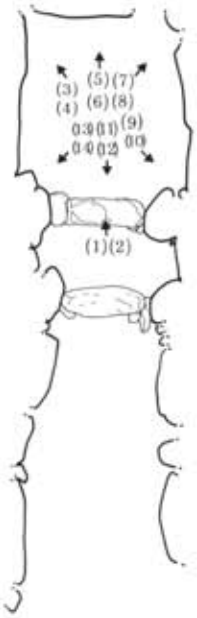
水呑4号墳

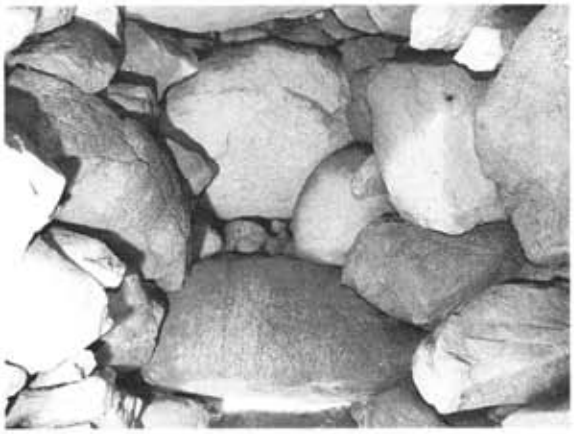
全景（上空から）	墳丘周溝（南西から）
石室閉塞状況	閉塞施設除去後石室前面
墳丘盛土状況（石室左側）	墳丘盛土状況（石室後側）

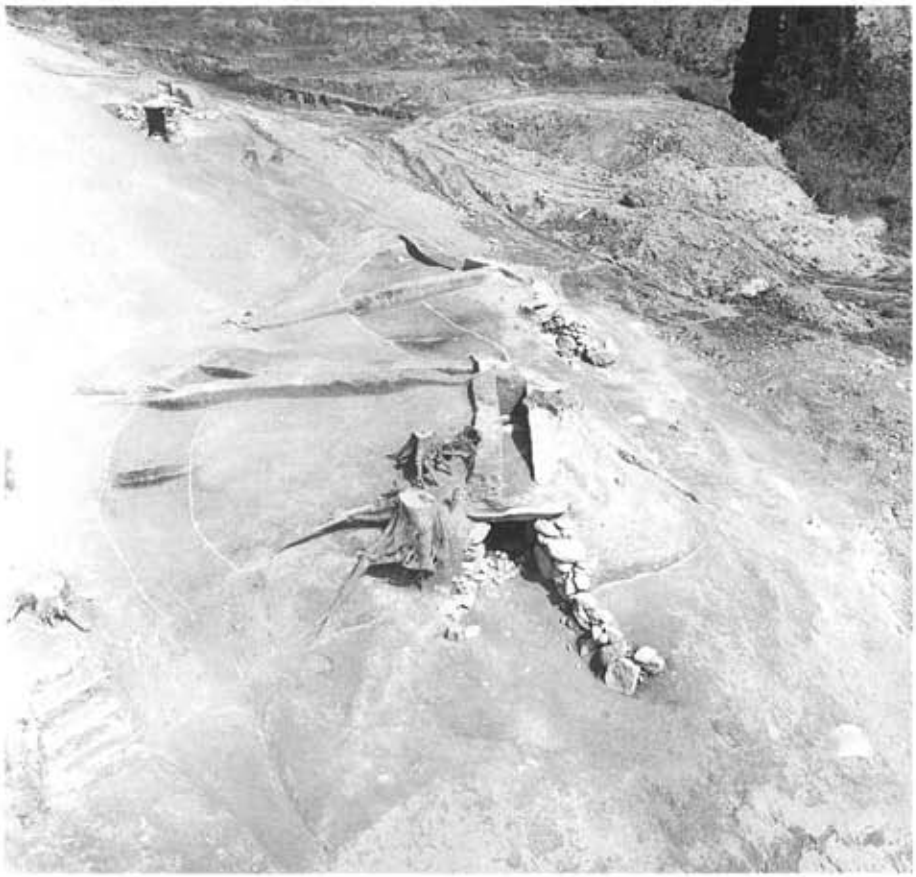


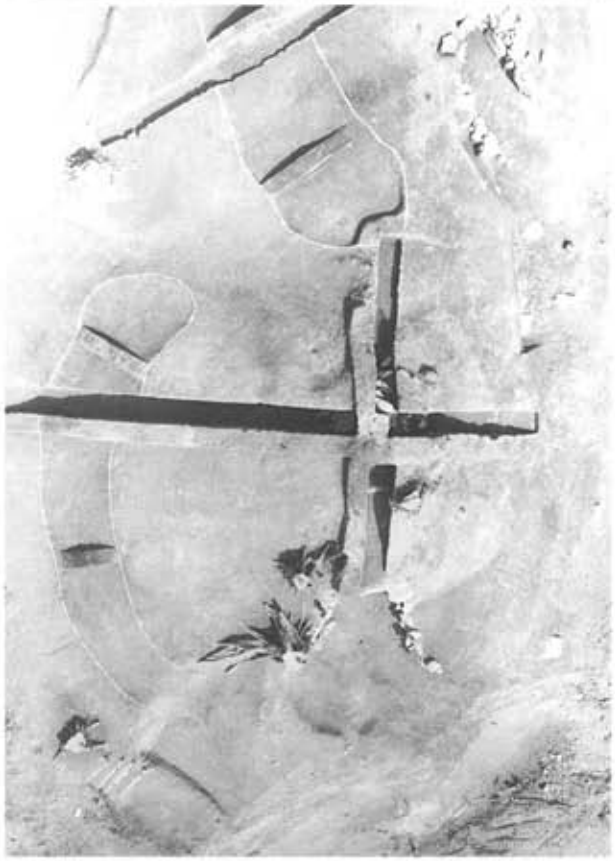
水呑4号墳石室

(1) 石室床面検出状況		
(2) 玄室床面		
(3) 左側壁上段	(5) 奥壁上段	(7) 右側壁上段
(4) 左側壁下段	(6) 奥壁下段	(8) 右側壁下段
(9) 右側壁上段	(11) 前壁上段	(13) 左側壁上段
(10) 右側壁下段	(12) 前壁下段	(14) 左側壁下段









水呑５号墳

全景（南東上空から）

全景（上空から）

墳丘周溝（南西から）

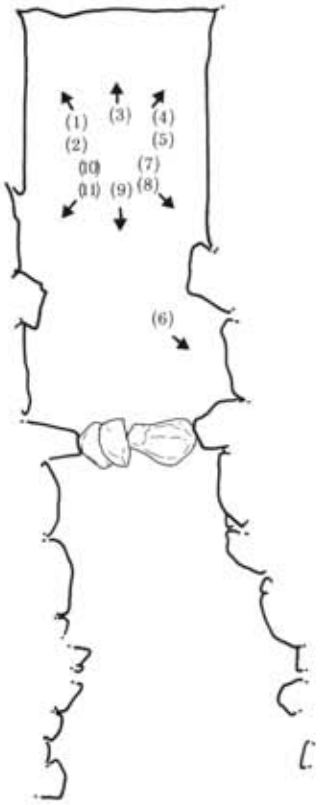
水呑５号墳

墓道検出状況	石室前面（閉塞施設除去後）
前室床面	玄室床面
墳丘盛土状況（奥側）	墳丘盛土状況（右側）
	全壊古墳痕跡（北東から）

図版38

水呑5号墳石室

(1) 左側壁上段	(3) 奥壁	(4) 右側壁上段
(2) 左側壁下段		(5) 右側壁下段
(7) 右側壁上段	(9) 奥壁より石室入り口をみる	(10) 左側壁上段
(8) 右側壁下段		(11) 左側壁下段
(6) 前室部右側壁		



水呑古墳群D地区
水呑6号墳

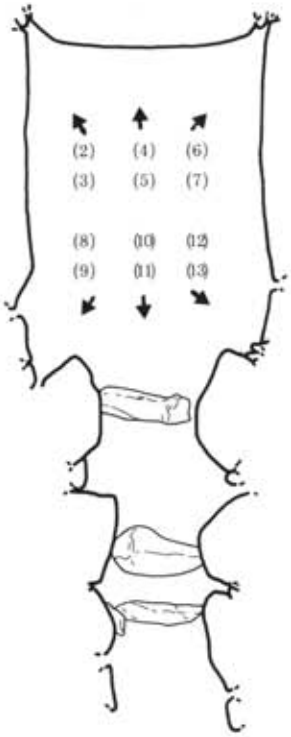
調査前の状況	D地区全景（南西上空から）
石室前面	全景（上空から）
石室前面（閉塞施設除去後）	全景（南上空から）

水呑6号墳

墳丘および列石（南東から）	墳丘および列石（右側）
墳丘盛土状況（左側）	墳丘盛土状況（後側）
玄室床面検出状況（奥壁から）	玄門より前室をみる
	前室供献土器出土状況

水呑6号墳石室

(1) 天井石		
(2) 左側壁上段	(4) 奥壁上段	(6) 右側壁上段
(3) 左側壁下段	(5) 奥壁下段	(7) 右側壁下段
(8) 右側壁上段	(10) 前壁上段	(12) 左側壁上段
(9) 右側壁下段	(11) 前壁下段	(13) 左側壁下段



図版44

水呑古墳群D地区
水呑7・8号墳

D地区小石室墳立地状況（南から）

7号墳石室（上空から）	同（南から）
8号墳石室（上空から）	同（南から）

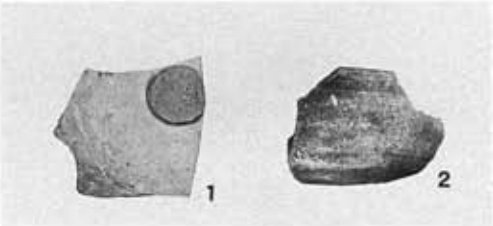
水呑９号墳

９号墳石室（上空から）	同（南から）
石室遺物出土状況	

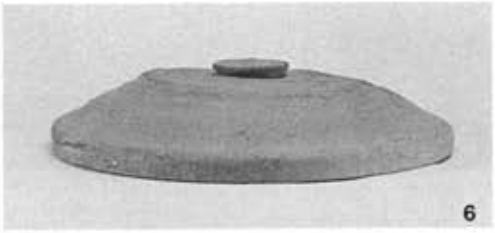
浦田遺跡

１区全景（南から）	２区全景（東から）
２区全景（上部を東から）	２区ＳＫ01土坑（西から）

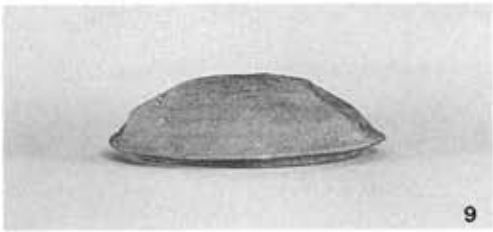
図版46

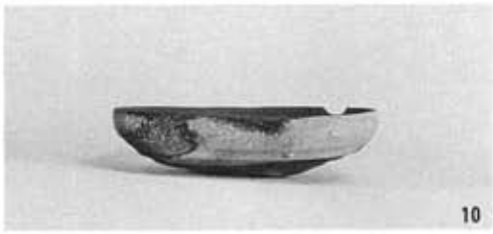


水呑１号墳出土遺物



水呑２号墳
出土遺物





水呑３号墳
出土遺物

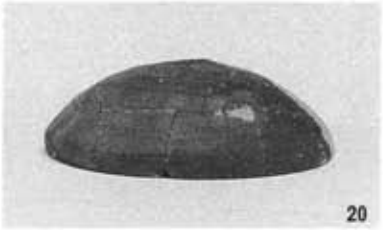
水呑３号墳出土遺物

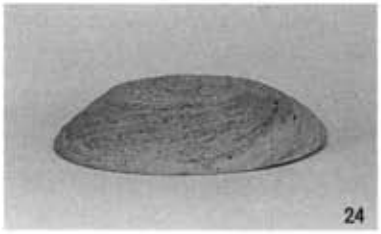
16

17

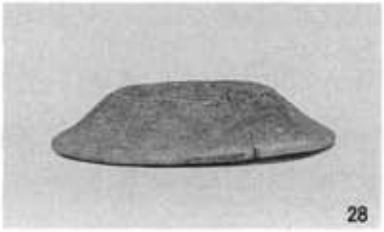
水呑４号墳出土遺物

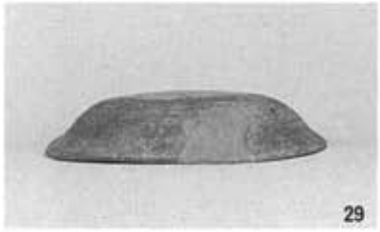
19


20

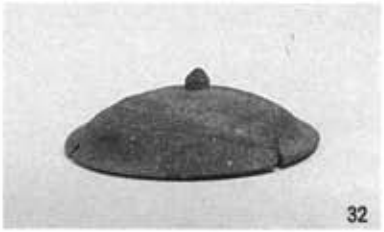

24

26


28

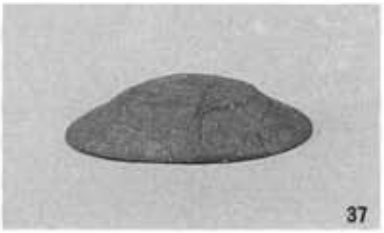

29

30


32

33

34


37

38

39

45

49

53

55

62

63

64

67

68

73

75

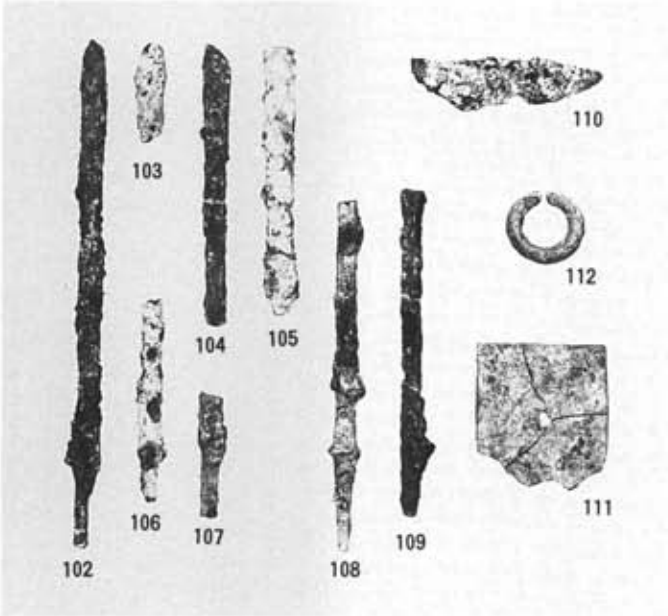
81

87

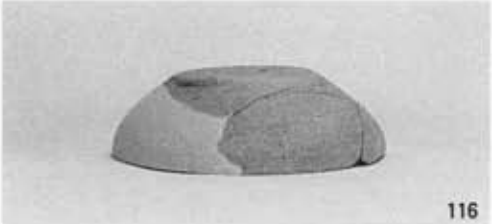
85

88

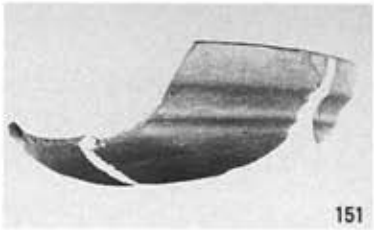
水呑４号墳出土遺物

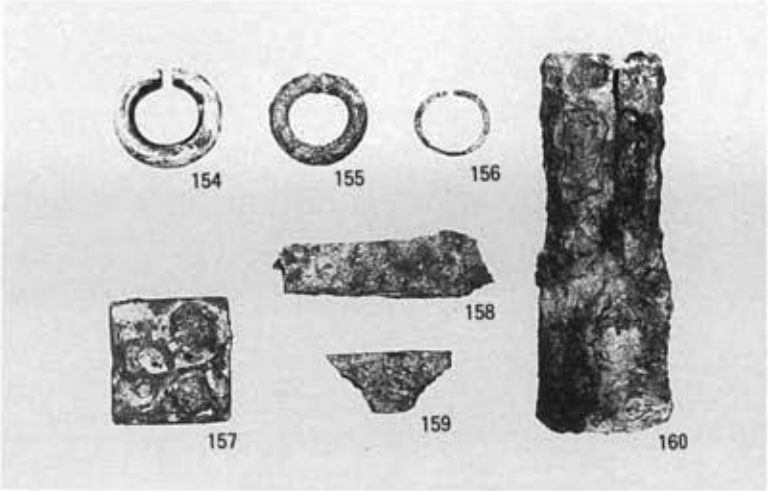


水呑4号墳出土遺物

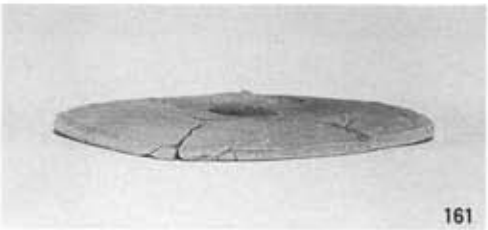


水呑5号墳出土遺物

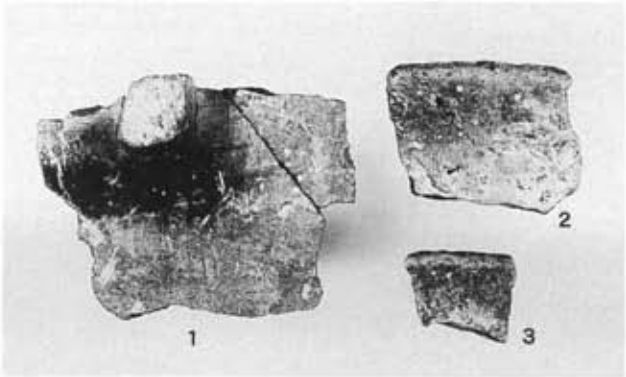




水呑６号墳出土遺物



水呑９号墳出土遺物



浦田遺跡２区ＳＫ01土坑出土遺物

叩き窪めの手法による円心円文様類例

(1) 楯古墳（福岡県浮羽町）

図版52

(2) 倉永古墳（福岡県大牟田市）

(3) 穴観音古墳
（大分県日田市）

佐賀県文化財調査報告書　第118集

黒谷・水呑古墳群

鳥栖北部丘陵新都市関係
文化財調査報告書（1）

平成5年3月28日印刷
平成5年3月30日発行

編集
発行　佐賀県教育委員会文化財課
佐賀市城内1丁目1－59

印刷　日之出印刷株式会社
佐賀市高木瀬西6丁目